

Title	財団法人前田育徳会尊経閣文庫蔵天文十五年宗訊奥書「古今和歌集聞書<古聞>」並びに校勘記：本文篇
Sub Title	
Author	平澤, 五郎(Hirasawa, Goro) 川上, 新一郎(Kawakami, Shinichiro) 石神, 秀美(Ishigami, Hidemi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1987
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.22 (1987.) ,p.264- 529
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000022-0264

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資料紹介

財団法人 前田育徳会尊経閣文庫蔵

天文十五年宗訊奥書 「古今和歌集聞書（古聞）」並びに校勘記 本文篇

目次

本文篇

凡例

底本

平澤五郎
川上新一郎
石神秀美

尊経閣文庫蔵「古今和歌集聞書」（外題） 13―35―書 天文十五年宗訊自筆加証奥書本 三冊

略称 底

(補一) 京都大学附属図書館中院文庫蔵「古聞序」(外題)

(補二) 九州大学文学部国語学国文学研究室蔵「古今和歌集聞書」付載御師説抄出

校異篇

凡例

校本

京都大学附属図書館中院文庫蔵「古聞」(外題) 中院VI 69 「近世初」写 三冊

東北大学附属図書館蔵「古今抄」(外題) 丁B 124-16 「江戸前期」写 三冊

九州大学文学部国語学国文学研究室蔵「古今和歌集聞書」 国文^置79 「江戸中期」写 三冊

国立公文書館内閣文庫蔵「古聞抄」(外題) 200-21 「江戸中期」写 三冊

国立公文書館内閣文庫蔵「延五秘抄」(外題) 200-16 「江戸後期」写 存仮名序・卷一〜十五注 三冊

国立国会図書館蔵「古聞」(外題) WA 16-131 「江戸初期」写 六冊

解題

* 校異篇は第二十三輯に掲載する。

中 九

中 東 九 古 延 国

凡例 本文篇

一、右記、底本並びに補編一・二の翻印は各原本の再現を期したが、以下に誌すごとき若干の補・改を施したところがある。

(イ) 原本に見る旧体・異体字は現通行字体を以て統一することを原則としたが、一部異体字については全巻通じて略一貫性ある使用例を見出される場合にかぎり該字体をとどめることとした。即ち、

𦵑・哥・鴈・舩・珠・厖・臈・昏

等である。

(ロ) 底本又補篇二の本文中にままた散見する見消ち補訂は兩本に於ける単純な本文誤写の訂正として、その補正するところに準拠した。

但し、補篇一については次輯解題中に述べるごとくに、前者と同一視すべき見消ちとは想定されず、本文の改削経過の一端を提示するものとして該原本のままに再現することを期し、々々を傍記した。細字双行部分には当該部末尾に(ミセケチ)と表示した。

(ハ) 底本又補篇一・二に付すところの声点は全て朱書するが、その旨は省略した。同時に、底本以下すべて転写本であり、その当該位置の確認・弁別は期しがたく、いわばその概ねを示唆すべく移点し再現したものにすぎない。

(ニ) 猶、細註部分は略原本に従い、各小字一行又双行に掲示したが、此期の聞書類に多見する助辞・活用語尾の細字表記は稍々もすれば統一を欠く処が尠くなく、従って極く一部を除き本文表記に準じた。

(ホ) 底本に見る朱墨の付訓・音は屢々本文同筆か否かの疑点が存し且つ誤読・誤訓等をも混ざる処が所見されるが、

既に識別も困難であり、繁辱な紙面となるのを惧れ其儘とした。

(ハ)特に、本書播閱の便宜をはかり、敢て本文中に読点を多く施した。且つ、改行についても編者の意図的に更改する処がある。御諒恕されたい。又、原本に纒か散見する汚損箇所、明瞭な脱字等には、その相当字数を空格□符を以て示した。

(ト)各歌頭に付したのは、本集の国歌大観番号である。

二、校異篇凡例は次輯にあらため掲げるが、本篇の本文中にその校合箇所を示す三種の簽を傍記した。

(イ)、(1)・(2)の符印は対校諸本との間に於ける文脈中の叙述次第の異同を印すものである。

(ロ)、*簽は同じく対校諸本に所見する本文異同箇所を示すものである。

(ハ)、*簽は底本本文中に存せず、他本文中に看取される補入本文箇所である。

三、以上、本文篇凡例に於ける補・改の概要であるが、その他細部に関しては適宜なる御判断を願いたい。
猶補篇一・二の併載については次輯付載の解題を参照されたい。

本書翻印に当り、貴重なる御蔵書の載録につき御清諾賜った財団前田育徳会尊経閣文庫をはじめ京都大学附属図書館・九州大学文学部国語学国文学研究室に深謝の意を表する。

古今和哥集序聞書

やまとうたは人の心をたねとしてよるつこのことの葉とそなれりける^{*1}

此一段和哥の大意也

和は此国の名也、哥は此国の風也、此国をやまと名つくる事、伊弉諾伊弉冉尊天くたり給て、山海草木人倫等を生出給し後、此国なをあらひて水土未乾しかは、人は山にのみ住て、山を道とする故に、山の迹といふ義にて号する也、やまあとのあ文字を略したる也、まの字にあのひきあり、をのつから阿の字こもるへし、よむ時も山あとと哥といふやうに心をもつへし、又山止とも書り、山にとまるる心也、山迹の義通せり、抑、山は至誠の義也、志の厚く高きを云、是一切成就の根元也、哥は志のゆく所をのふる也、よるつこのことわさの根元也

(一行空白)

又云、やまと哥といふに、大は和く義あり、大は小対する大あらす、古より今に及ふ和を大と称す、遠く及ふ心也、二神陰陽の和、今にをよほす義也、尽乾坤一切万物及和也、和哥是也、又云、大は三国及ふ大也、其故は天竺の梵字を漢字うつし、漢字を和字にてのふる也、和字の哥をもて、陀羅尼の心、漢字の詩をもしる、四十七字の和字をもて其心をのへしる事、此道の奥意也、やまとの事、山迹の義を本とす、大和の義も通すへし、当流通し用る也

人の心をたねとして^{*2}

詩^ニ在^ル心^ヲ為^シ志^ト云、心にあるとは、心にうごく也、世界^{*3}弥論したる事、心に動也、世界と我身と相對す、世界ある哥、心にうごく也、心に動く所を言いつる

を、哥といへる也、たとへは、天地の寒温を身心にうくるかことし、又云、人の心を種とするといふは、天地開したちまちに一氣起て、葦芽カキのことしといへる所也、天神七代以前をいふへし、一切万物の根元也、こゝをさして、人の心をたねとすといふ也、根本*1の一念より出来て、無始より今日ニいたり終劫に及へき也、是人の心也

よろつのことの葉とそなれりける*2

物々に託してなる心也、一二*3を生し三万物を生の心也

世中にある人、いひ出せる也 一段也

真名序、人之在世不能無為ト思慮易遷云、此心

也、無為は大道也、人の世となりて、味をなめ、黒白

分別出来より、君臣父子朋友の道まで、ことわさなら

すといふ事なし、行住坐臥みなおなしことわさあれば

心に思ふ事あり、されは見聞ニつけていひいたす也

花に鳴うくひす水にすむ蛙の、よまさりける 一段

也

物に託し、事にふれて哥を詠する事、人倫のみにあらす、花中の鶯、水底の蛙もみな此理あり

詩正義曰、哀樂之起宜於自然、喜怒哀樂之端非由人事、故燕雀表啁噍之感、鸞鳳在歌舞之容云

喜怒哀樂の性ある物はみな如此、天地の氣に応して春

花に鶯鳴、春水に蛙の声するも自然の理也、一切の禽

獸も同かるへし、又花も水も詠哥の理ありといふへ

し、花の心は色にいて、水の心はこゑにあらはるゝ

也、時に感して色を變し声をあらたむる心あり、鶯蛙

をとり分て云出事は、春色をえて其心をしる事、此二

をさきとする故也

ちからをもいれすして、なくさむるは哥也 此一段

は哥の徳也

此心に事理の両義あり、動天地事、能因法師、苗代水

にせきくたせとよみて、雨のくたりしなどは事の義

也、天は地に対してあり、地は天によてあり、人は天

地に対す同様の理也、天地我を開き、我天地をひら

く、天地人の三は別^二あらず、故^一に心に動く処、すなはち天地をうこかす也、一首の哥を詠するも、天地を胸中にうこかす也、是理也

めにみえぬ鬼神をも

鬼神とは賢聖のたましゐ也、惣ては人々のたましゐ也、神は心也、哥を詠するに、心の感動する、すなはち鬼神をあはれと思はする也、此道に入て、邪をすて正^二歸し、仁をもつはらとする所をさへて、鬼神を

感せしむるといへり、是理の義也、天照太神住吉玉津嶋等の擁護ある道なれば、感応あるへき事勿論也、両神も日神の化現にておはします也、又諸神も心の外に出へからず、畢竟一心の上をはなるへからず、伊賀国に鬼の人を損する事有し時、土も木もわか大君の国なれば、いつくか鬼のすみかなるへき、とよみて其事やみたりといへる事もあり^{※1}

おとこをんなの中をも

二神のことわざよりはしめて、其ためしおほかるへ

し、又事理の両義までもなしと云、たけきものゝふの

かつらぎの大君のいかりを、うねめの一首にてやはらけたる事などなるへし、是事也、ものゝふとは干戈を帶する者にかきらす、心の強情なるを云り、和哥は胸中のものゝふをやはらくる也、笑裏に刀をかくすといふ類、みな心のものゝふなるへし、是理也、以上哥の徳也

このうたあめつちの、いきてきにけり、一段也

言にあらはるゝ哥のおこり也、天地開闢二神の和よりはしまる事也、其哥末^二注す

あまのうきはしのしたにて

天浮橋とは道の通する処を云り、此古注^二つきて説くあり、二条家には貫之注すと用也、くはしくいはむために此注を書て、女の内侍にあたへたると云、抑六義の注、山桜あくまで色をみつる哉の哥、貫之時代相^{※2}

違すといふ説あり、此哥は平兼盛作也、後撰作者也、

然而貫之承平^{*1}まで有し人にて此哥を注せるなるへし、

此時兼盛若年なるへけれとも、道にかなふ哥なる故ニ

用之也、又云、山桜の哥清慎公の作也、古注は公任卿

筆^云、此哥は清慎公の家にて兼盛よめる也、続古今ニ

みゆ、二条家のをしへは貫之を別して仰く故ニ、公任

卿の書加といふ事をはかりて不用之也、為家卿明疑^キ

抄にも貫之古注也、山桜哥兼盛^云、此定なるへし、此

注を古注と号する事、此注よりさきに古今の注なかり

し故にやと^云、又は小注とも用る也

めかみおかみと

二神はしめてよみまします哥也

憲^{アヲウレンシエヤアヒス}哉^{ウマシオトコニ}遇^ニ可^ニ美^ニ少^ニ男^ニ焉^ニ、陽神先唱^テ曰、憲哉^ス遇^ニ可^ニ美^ニ少^ニ

女^ニ焉^ニ、^{ノニ}日本記^{ノニ}

しかあれとも世につたはることは、^ノおこりける^{*4} 一

段也

しかあれともとは、二神の御哥はあれとも、大道にし

て人の心及かたければ、下てる姫の哥をのせたる也

久かたのあめにしては

神代の事なれとも、すこしちかきをもて下照姫の哥を

出す也

したてる姫の哥、あもなるや、をと織女のうなかせ

る、玉のみすまるの、あなたまはやみ、たにふたわた

らす、あちすきたかひこね

したてるひめとは

天照御神の皇孫を下して此国の主とせんとて、天稚彦

を使として下給しに、下照姫と契をなして、天^ニ帰^ル給

はす、つゝに矢にあたりてうせ給ぬ、其後下照姫と味^{アチ}

相^{スキダカ}高^カヒコネと天稚彦の喪の時、天^ニのほりての哥也、

味^ミ相^カのかたちをほめ給也、天稚彦下照姫味^ミ相^カ、^ノみな

素^ス戔^ス烏^ウ尊^スの御孫也

をかたに、うつりて

其かたち丘谷にうつりてか、やくとは、みめかたちの

よき心也、をか谷とは高下の義也、いたらぬかたもな

き心也

えひす哥

夷曲也、ひなうたといふ心也、日神の天の宮に対すれ

は、此界はえひす^{*1}とよめる也、天上にての哥なれと

も、地祇神なれば夷曲といへり

これらはもしのかすも定らす

下照姫の哥も、猶以文字も不定哥のやうにもなしと也

あらかねのつち^{*3}にしては

地祇神の哥のはしめをいふ、八雲たつの哥の事也

ちはやふる神世には、一もしはよみける 一段也

二神詠、下照姫哥等の事也、文字のさたまらぬ事、古

注見えたりといへとも重説にはあらず、注は後に書

る故也

すなほにして、^{*4}

すくにして理あきらかならざる心也^{*1}

人の世となりて

人の世といひてすさ^{*5}ののみことと書る心は、此尊の

卅一字の詠をはしめとして、人の世の哥はこれにもと

つくといふ義也

(一行空白)

又八雲^{*6}たつの哥よりさきにも卅一字の哥ありし、とい

ふ説あり、但不分明にや

すさののみことは

このかみとは一女三男にて、すさのをは弟にてましま

せとも、男を上とする故に、系図にも女を後にする

也、古語拾貴并日本記^{*7}日神月神最後生^云素戔嗚^云

又云、素戔嗚尊つゝに天照太神にしたかひ給て後、日

神を思給ふ心このかみ心とて、兄のことくおほしめし

ける心也^{*8}云

女とすみ給はんとて

此国をたいらけて後、出雲国にして稲田姫と住給はん

とて宮つくりし給へる也、此国に鎮座有し時をいへり

時にその所に八色の雲の

此時瑞雲のたちけるを御覧しての詠也、其人に感して

瑞雲のたつ事有例、此雲は元来此国にたちたる也、さ

れは世のことわざに出雲と号たり、時に其所にといへる相違するやう也、所詮素戔嗚尊の此所に住給はんとする時も、又此瑞雲のたちけるなるへし、八色は色なる雲也^{*1}

八雲たつ

第一第二句はかさね詞也、此所のさまをおほやうにいひいたす也、つまこめは稲田姫をすへんために宮を経営の心也

やへかきつくる

ねん比にする心也

そのやへかきを

とは、又ねんころにいへる也、をろそかにすなとをしへたるやうなる心也、又、古哥には如此かへしていへるあり、さくや此花の哥、あし引の山のしづくに君まつとの哥などのことし、八色の雲は、八識にたとふる也、五句なるは五行也、八識五行成就したるは、一身をととのへ世を興隆する義也、出雲国蛇の人を損す

る事ありて、人も住かたかりしをみことたいらけ給て、人民やすき事をえたり、日本記(日本書紀)の説に、此哥に四妙をたてたり、字妙、句妙、意妙、始終妙也、字妙とは卅一字にして、末代までの哥の根元となる妙也、句妙は神代の哥ながら五句にして五行にかなへる也、意妙は上古の哥といへとも其心もあきらかなる也、始終妙は此哥を始として万代不窮に不可断絶之義也、此哥に清濁の口伝あり、はしめにある八重垣のしもしをはすみ、下句のしもしをは、二ながら濁へし、天地上下の清濁にかたとる也、素戔嗚尊は此国に配し奉り給て地神たりといへとも、日神の御弟なれば天地かけたる神にてまします也、日神と和し給て後の事なれば、よろこひの哥なるへし、卅一字を用来る事も此義也、此哥神道家に有口伝云々、京極黄門も伝受給也、此哥斗を注したるは、神世の哥は其心分かつといへる義也、かくてそ花をめて、なりける一段也、すさのをのみことの卅一字詠より、哥の道万端さま

くになれるよし也、又は天地の開しよりをいふと云々
鳥をうらみや 愛したる也

霞をあはれひ 興したる心也^{※1}

露をかなしふ 感したる也、露はことに哀なる物也

以上人の心のさま／＼なる情也^{※2}

遠き所も、^{※1}如此なるへし 一段也

千里の行も足下よりはしまり、高山も微塵よりおこ

る、哥の道最初より次第^{※4}興感のたとへ也、ちりは六

塵也、一氣をうけて人身となる心あり、ちりいんちと

よむへしと云々^{※3}

(二行空白)

難波津の哥は さくやこの花の哥の事也

おほさゝきのみかと^{※5}

仁徳御事也、さゝきとは小鳥の名也、此御門御たけち

いさくおはしましけるにやと云々

東宮をたかひにゆつりて^{※6}

応神天皇崩御の時、宇治のわかいつら^{※7}こと申込みこに御

世をゆつり給けるに、仁徳は兄にてましましければ、

それにをそれて宇治のみこ辞し給き、仁徳は又御ゆつ

りにあらねはつき給はて、三年までになりぬ、国のさ

け物もくちうせて民のうれへたり、こゝに宇治のみ

こ神変をもてかくれ給ぬ、其後仁徳猶即位なかりき、

時に王仁といふ高麗人の仁徳をいさめたてまつる哥

也、王仁は日本の文道の師のためにわたれり、応神御

時来朝せしにや、仁徳の御師たる歟^{云々}、異国の人和哥

をもていさめ申事殊勝の理也、此国にしたかひたる心

也、此国に來りときたるもの国の風にしたかふ義也、

かた岡山のこと葉も此類なるへし

いふかりおもつて 心もとなく思也、かくてはいか

などの心なるへし

この花は、

此花はといへり、木の花といふ説あり、異説也、明疑

抄にも此説あり、如何、此時の哥、難波津に、^{※8}難波

津とはよろつ^{万民}のあつまる所の心、第一第二句はまつ大

やうにいひいたす句也、此時のさま也、冬こもりとは、仁徳の難波にこもりましくて位につき給はぬ心也、冬は空劫也、宇治のみこをは冬にたとへ奉る、今は春へと、冬去て春の主となる理也、仁徳の世を知給へき時也、さくやこの花とは、世をたもち給てなみ風をおさめ百性のうれへをやめ、もえ出る春になして、民心のきさしをふくむをめぐみ給へと也

あさか山のことは、よみて、よんでとよむへし

かつらきのおほきみを、橘諸兄事也

陸奥に国司ありけれど、猶おたやかならぬ事あるゆへに、かさねておほきみをくたされけるに、国司をろそかにありければ、王のすさましく思ける時、うねめのかはらけとり銚子に水を入れて、おほきみのひさをたきて、この哥をよみてなためける也、万葉にみゆ^{*1}

あさか山かけさへみゆる

此哥をよみける也、かけさへみゆるとは、高山の影もうつる程深き水といへる也、あさき水には物の影のう

つる事なし、されはあさくは思ひたてまつらすといはむために影さへみゆるとよめる也、大かた山の井はあさき物也、此山井は深きなるへし、うちみるにあさきやうなれとも、まことは深き水なるを、国司の心にたとへてよめり、君をろそかには思たてまつらねとも、都遠きさかひのならひなれば、自然にさもやみゆらんとなためたる心也

此哥嘉禄^{冷泉家伝}本にはこゝに書入たり、貞応^{二条家}本には無之、嘉禄の本の心は、此二哥之内、難波津の哥は六義の所にみえたり、此哥あらはれさる故に注之義也、貞応本の心は、此二哥をはいつれもあらはさず、世にあまなくしれる故也、難波津の哥六義の所に出せるを、こゝに兼用む事無其理、しかればあさか山の哥はかりを書あらはすへきにあらすと也、又云、嘉禄本にもはしめはなかりしを為相卿被書加^云、或は京極黄門書入給^云、又は彼筆をにせたりともいへり

後光厳院御代、冷泉家此哥を追書入之由、為明被^{ツク}訴

申事あり云

このふた哥は、)

此哥父母と云事定れる義なき故、やうにてとかけ

也、昔は手ならひなどにも此二哥を書いてならはせける

とみゆ、哥の父母とは神代の哥などをいふへけれど

も、徳あらはれし哥をもて此兩首を出せる也、難波津

の哥は仁徳未即位天下難義なりしを、此哥にて王道を

たすけたる事、尤大徳なれば出之也、浅香山哥も此一

首にて、彼大君の心を和する徳あり、兩首徳の至りた

る哥也、男女の兩首父母といへるに縁あり、哥の父母

と云につきて、父母の子を思心の浅深に相当す、父の

思は尤ふかし、其子の身をたて家を保へき事までを思

也、母は時にあたりたる愛のみにて深く思ふやうなれ

とも、其深の理に及はず、仍王仁の詠は天下のためと

なる、采女の作はかりのいかりをやはらく、一国の事

也、以上人の心を種としてといふより、次第道ひろ

く徳のいたる事をいへる也

そも、哥のさま六也、)

品を定るは法度也、六義を出して詩を類にひける也、

天然和哥に六義の理あり、詩を借ていふにあらず、是

義勢也

そのむくさのひとつにはそへうた

そへ哥はおもてにあらはれず、風の物にふれてみゆる

ことく、物によそへてよめる心をみする也、そへうた

と声をいへり、それもよそふる心はおなしきにや

一日風也、風也教也、風以動之教以化之、詩序

曰、上以風化下、下以風刺上、注云、風化風刺

皆謂譬喻不斥言也、譬喻とは諷する事をあ

らにはいはぬ也、風化風刺共風に草木のなひくたと

へあり

おほささきの御門をそへたてまつれる哥、よそへ奉る

也

難波津にさくや此花、前に注す

此哥風によくかなへる故に、注にも子細なき也、周詩

ノ六義には種々義ありて、或は経渾*1といひ或は躰用と分*2なとせり、風にして興を具するもあり、其様すこし本朝に異あり、又義通する説あり

ふたつにはかそへうた

あり事をたゞちにかそへいふ也、たとふるにあらす、

二曰賦也、量也、称也、又は舖也、をきならへたるやうにいふ心也、量はかそへいふ心同之、称も量の心と

同にや、又云称とははかる心と云々、とちむるやう也、凡政のよきあしきをいふ也、草木禽獸の事をかそへいふ事もあり

詩第一国風詩曰、蔽芾甘棠勿剪勿伐召伯所茇ヤトツン、舎也、是風詩にして賦也

さく花におもひつく身の花と身とをかそへあけてよめる也、身にいたつきのとは、いたましき事の身にいるをもしらすと也、花に貪して時日をうつし、身にいたつかはしき事のあるをも、亡したる事をかへりみたる心也、如此事花のみに

もかきるへからす、此心称字の義也云々、此哥事をすくめにいふ所賦にあたれり、或説、つくみといふ鳥をたち入てよめると云々、六義の用にたゞさる説也

これはたゞ事にいひて、此詞はかそへ哥の様を注する也

此哥いかにいへるにか、

さく花の哥、賦に十分にあたらぬかのよし也、注者の心はかりかたし、さく花の哥も賦にあたれりとみゆと云々

いつゝにたゞこと哥といへるなむ、

雅に出せる、いつはりのなき世なりせはの哥、賦にかなふへしと也、人の事わか心をいひ人のこと詞はのいはりをかそへいふ、量字の心也、いかはかり人のことのはうれしからましといへるもはかる心、称字の義に

や、此兩首を相ならふるに、哥のさまにおひては、さく花の哥句ひありて、偽の哥よりはまさるへしとそみつにはなすらへ哥

比也、彼物をもて此物にたとふる也、あやまりをさしていはすして比類をとりていふ也、比は方也、并也、類也、類を取て失を言、似有^レ所^レ懼^ル、云々、君にけさ朝の霜の

霜のをくと起るとをなすらへて、消やわたらんといふ詞も相兼たり、霜のきゆる事に我心を比したる也、比のおもむきさま／＼なるへし、此哥取^レ類言^レ失之心にはあたらす、ならふる心は相当すへし

これは物にもなすらへて、

比の哥の注也、此注の詞を物にもなすらへすしての心に用て、君にけさの哥の心を注したるといふ説あり、此哥取^レ類言^レ失^レいふ心になはさる故、此義をいへるにや、当流不用之、所詮物にもなすらへてそれかやうにあるとやうにいふ也とは、比の哥のおもむきを注する詞也、さるにとりて物にもなすらへたとある、もの字、心えかたきやう也、それは前の賦の哥の注に物にたとへなともせぬ物也、とかきたるをうけて、物にも

なすらへてとかける也、これはとある詞五段にあり、いづれも賦比興等の注也、哥を批判したる所なしこの哥よくなへりともみえず

たらちめのおやのかふこの

此哥取類によくあたれり、たらちめのおやはかふこといはんため也、かひこのまゆにこもりたるさまは、中のゆかしくおほつかなき心あり、そのことくいもにあはすしておほつかなきよし也、又は養在深窓などいへる人を思ふ心にたとへよめると云々、君にけさの哥も

比にはあたれる也

詩第三碩人段曰、碩人其傾、手如柔茅、膚如凝脂、領如蝤蛸、齒如瓠、犀、螾、首蛾眉、是風にして比也

よつにはたとへ哥

興也、比はあらはに、興はかくるとなり、みるところの興をおもてにいひ出して懐はかくれたる也、ほむへき事などをあらはにいはずして、たとへをとりていふ

也、嫌キラハシニ於媚諛コヒヘツラヘル一也云々、人を直ニほむる事へつらへ

るににたるをはゝかる心也、漢の先儒シユはみな興字を側ソツ声シヤツとす、たとふる心也、宋儒は平声ウツとす、起ルと用也、

所詮心をおこすといふも、たとふる心あるよりの事な
れは畢竟同意也、抑興は風に似たり、然而風は風化風

刺するをもつはらとす、興には其心なし、又興詩にも
政をほめそしる心もあるへけれとも、まつおもてにた

てたる所差別ありと云々、興と風と相似たりといへど
も、風はふかくかくれ、興ハすこしかくるゝ也、風比

興の三は皆物に託する也
我か恋はよむともつきし

此哥たとへたる所は興にあたり、興に乗する躰はな
きにや

これはよろつの草木鳥獸に、興の心を注する也
此哥はかくれたる所なむなき

興ハかくるゝ躰あり、しかるに此哥かくれたる所なし
と也

されどはしめのそへ哥と、)

我恋の哥を出したる心の注也、風も興も共にかくれた
る躰也、風と興との差別あらんために、わか恋の哥を
出したる也

すこしさまをかへたる

とは、我恋の哥も興にあたるへけれとも、猶未十分を
入たる心也

すまのあまのしほやく煙
わか思ふ人の外へなるさまをたとへたる也、かくれた
るとへ也、そへ哥よりは又すこしあらはに心得らる

ゝ哥也、興によくあたれり、おもしろき方もありと
云々、風は外物に託す、興も外物による、比は類をとる

也、風はいたりて深キ心也、興は風よりは浅し、比は興
よりはあらは也、此差別猶可思惟云々

第一関雎クワンシュウ詩ニ関タル、雎鳩キウキウ在ニ于河洲ニ

第五淇奥キイコウ詩ニ瞻ミレハシ彼淇奥ニ緑竹キョクチク猗イ、タリと
是風にして興なり

いつにはたゝこと哥 雅也

雅は正也、素也、正はたゝしき也、政をたゝしくいふ

也、素はあきらかなる也、淳素の心もあり、雅は賦

相似たるやうなれども、賦は政の善悪をかそへいふ

也、雅はまつりことをたゝしくありめにいふ也

いつはりのなき世なりせば、此哥は雅あたらざる也

これはことのとゝのほり、雅の躰を注する詞也

とめ哥とやいふへからん

正にあらぬよし也、たゝことにいふのみにて雅にあた

らすとなり、とめ哥とは墨などのうすきを筆にてとむ

るやうの心也、家注同

山さくらあくまで色を

雅の哥の正中也、よく相当す、此哥の作者の事、前に

注す

詩には正雅、変雅などいへり、変雅は政の廢たる処

也、又大雅小雅あり

第十六大雅詩、文王在上於昭于天、在上在民上也

周雖旧邦、其命維新、是大雅躰也

第九小雅詩、呦呦鹿鳴、食野之苹

是雅にして風躰を兼たり

むつにはいはひ哥、頌也

頌は容也、誦也、容とは王者の盛徳をかたとり出し

てほむる也、誦は歌ひあくる也、ひろめてほむる心

也、頌の詩は宗廟にて誦して神に告也、世をほめて神

につくる也といへる此心也

此どのはむへもとみけり

此哥も頌あたると用る也、さきくさは檜木の異名也、

又は家の惣名と云説あり、三は四はとは棟などのおほ

きさま也、さきくきの縁にて三は四はとよめり

これは世をほめて、頌の心を注する詞也

かすか野にわかなつみつ

此哥よく相当也、頌の心勿論也、又此殿の哥も頌か

なふへし、祝の心つよければ、神に告る心もをつか

ら有へしとそ

第十九周頌^{キウシヨウ} 清席詩^{セイセキシ} 清廟祀文王^{セイミョウシニキミ}也

於穆^{アツホク}清廟肅雍頤相

おほよそむくさにわかれん事は、)

いつれの哥も六義^{ロクギ}はなれたるはあるへからすと也、
貫之注之、当流義也、又説、六義^{ロクギ}よく分別せむ事あり
かたき事也^{云々}、小注の作者の心にや、此義貫之をもと
くやうなれは有憚、ゆへに不用之也、尤貫之を仰きた
とふる故也、又たとへ後人の注なりとも、難分別之由
は卑下の心なるへければ、は^レかりあるへからす、然
而二条家には猶以先哲をもとく理にみる人もあるへき
所をは^レかりて、不用之也、但貫之も謙してかける詞
たるへしと^{云々}、又、本に出せる六義の哥も、貫之あや
まりたるにはあるへからす、聖人作して賢人述すとい
ふ事あれば、先大躰を出すのみなるへし、後生にても
相当したる哥を注せん事、貫之の心にもそむくへから
ざる理也、凡六義いつれも政のためならずといふ事な
し、哥の道上古は教誡の端たり、花鳥風月の耳目にお

つるのみにはあるへからす、尤世をおさめ身^{治め}をたもつ

へき道也、六義之中、雅を執する事あり、正しき道を

本とする理也、周詩^シ思无邪を用る同心也、畢竟此義

を肝心とす、当流の心也、詩六義^シ次第をたつる理あ

り、和哥^{ワカ}異なり、

いまの世中色^{シキ}につき、)なりになり

なりんたりとよむ也^{云々}、人の心もおとるへ来たりて、教

誡の道とも用ぬ時よりの事をいへり、此段古の事をい

はむために、今の世の事をいふ也、抑哥の道、此国の

風俗として世々にたえず、殊^ニ持統文武御時、人丸合

躰にして盛なりしより以来、理世撫民の道たりしに、

今の世は色につき花にのみ成て古のことく用る事なし

と也、巧言令色鮮矣仁の心也、しかるに当代の又道を

おこしますます心をいはむため也

色^{シキ}につきとは

あたる哥 とは実ならぬ也

はかなき事のみ 思慮もなき心也、されは哥もはかな

き也

色このみの家に、^{*1}、)

埋木は人しれぬといはむ枕言也、しる人なしと也、好
色の家には、此道の実ある事をしらすなりぬと也
まめなる所には

実ある所には又実のみにて和したるかたなしと也、此
道花実いづれもかけてはよろしからず、質勝文則
野、)といふかことし、花すゝきはほにいたすへきと
いはんため也、又説、まめなる所には、^{*2}は実なる人あれと
も、此時は用にたちかたき心にて、巻て懐にする義也
(二行空白)

そのはしめを思へは

上古以来代々の御門此道を用給事、今の世のことくは
なかりしと也、いにしへの代々の御門といふうちに、
当代延喜の事をこめたり、又むかしのことくまします
心あり

かゝるへくなむあらぬ

いにしへの代々の御門とつゞけてよむ也、又かゝるへ
くなむあらぬ、とよみきるともいへり

秋の月の夜ことに

殊也、当流用之、⁽¹⁾但をき字のやうに心うへし、よみ
やうに故実あり、⁽²⁾ことにとは近臣など也、毎夜と用る
説ありと云、不用之

あるは花をそふとて、)

花をそふとは尋る心也、此段上古有道之躰也

さかしをろかなりと

臣の心をはかりしろしめす事かたき故也、哥をたてま
つる人々のさまくをいへり、よろつさしむきたる趣
を本とすへし、諸人又如此なるへし、花を尋るにも思
よらぬ所をおもひ、^{*3}入月を賞するにも明石さらしなの
外をとのみ思よれるは、よこ入たる性也、道の心にか
なはず、詠哥にも此理あるへし、是をもて人の賢愚を
しろしめすと也、道ある御代の様を云り

(二行空白)

歌人の心は情欲シヤウヨクをはなれて執シをとめず、花月に対しても、当一念シの景を愛すへき也、もろこしにも、国々より学士のほりて詩賦を試事シ有て、官職シヨクにあつかる也

しかあるのみにあらず、)

君の臣の性をしろしめすのみならず、臣も又此理コトハリあり、物々にことの心をわきまへしるよし也、以下みな

哥人のさま也、つくは山*2、はの字すみてよむ也、此処にかきると云

さゝれ石に、)

以下みな此集の哥に此心あり、かならずその哥の事をいふにはあらず

君をねかひ とは千年万代をねかふ心也

よろこひ身にすき 君*3の代をねかふ徳にて、悦の身に

あまる理あり

たのしひ たのしみとよむ也

ふしの煙によそへて

人をこふるには、をよひなき高山によそへても思ふ事をいへり

松虫のねに

富士煙、松虫のね、大小を対する詞也、友を忍ふには

松虫のこゑなどにも思をそふる也、あれたる宿などの

さまなるへし

高砂すみの江の松も

山海の名所を対す、あひをひとは相遂アヒマツ也、たかひにを

ひすかひなるやうにと也、平等*1に思ふ理也、名木を愛

する心也、哥人の心物によせておもひをのふるよし

也、以下可工夫云、師説

おとこ山のむかしを、)

男山の女郎花墓の上より生る事あり、と云説をは嫌道

也、我もむかしはとよみ、あなことくしなどある哥

の心をもて云り、しかれとも自面は惣しての理也、男

山のむかし昔を思ふとはおとこといふのみ也、おとこ

は人々むかしを思ひいつれば、何事も昨日の夢になり

ぬ、此理を思ふ也、女郎花の一時をくねるとは、をみなへしを弄する心也、仮令あなしかまし花も一時なといふも、弄したる心也、くねるとは違する心あり、そむく心もあり、一時そなといひおとすはたかふ心也、女によそへていへり、又説、おどこ山女郎花といへるは文章の対也、男女の心也、むかしを思出てとは、夫婦のかたらひも一時のさかり過昔と成ぬれば、いたつらなるよしを觀し思ふ心也、古哥をもおもひ新哥をも詠して、此理をなくさむる也、是哥人の徳なるへし、さゝれ石にたとへ、つくは山にかけてといへるより、みな哥人のさま也、畢竟して一時をくねるにもとかける也

又春のあしたに

又とは、前の事に対して、世のことわさを巨細にいへる也、花のちるを見といふより、よしの川をひきてとあるまては、みな此集の中の哥をもてかけり、しかも自面は世のことわさをいふ也、飛花落葉をみては誰か

常住の思をなさむと觀する也

年^{*1}ごとに鏡のかけに、

はなやかなりしかたちもおとろへゆけばたのむへき方なき身を觀する也

草の露水のあはを、きえをまつまの程なき事をよそへ

思ふ也

き^{*2}のふはさかへをこりて、

盛者必衰の理を思ふには、したしかりしかうとくなるをも必歎へきにもあらぬ心也

松山^{*3}の浪をかけ、此世後世と契れる中も、はやくうつ

ろへる事を思なり

野中の水をくみ、もとの心をしる人そくむの心也、う

とかりし人の、又むつましくなる事も世間のならび

也、みな世中のさま也

秋萩の下葉をなかめ、うつろふ草葉^{*4}につけてひとりあ

る人の物思へるなどを、さこそと思やりて、あはれを

かくる心也

暁の嶋の　こぬ夜のかすのつもりゆくも、たゞ我から
の事^{*1}と思て、人をうらむへき世もなき心也
くれ竹の^{*2}　世のうきふしをしる人などにかたりて、思
をのふる心也

よしの川をひきて
はねをならへ枝をかはす契と云も、みなおとろふるは
てを、よしや世の中と恨すてたるなるへし、又説、う
らみきつるといふも、なくさめきつるといふも同心^{*3}
也、うらむるも心をなくさむる也

いまはふしの山も
煙たゝすとは煙不断也当流義、富士の煙むかしは立時
もあり、たゞぬおりもありしにや、其を世の人の思あ
る時はたち、思のなき時はたゞぬやうによそへ思し
也、今は彼煙の不断にあれば、人の思にくらへんさま
ならずと也、人の思は不断なる事ならねは也、されは
なくさめかたきよし也、思のたくひに成かたき心也
なからの橋も

つくるは造也、なからの橋も今は作るなれば、古ぬる
身のたとへにもならぬ心也、俳諧部にては尽也、前
に注す

哥にのみそ

煙も橋も思をなくさめかたき故哥をもて心をなくさ
むるよし也、恨きつるとはなくさめぬる也、しかれと
も煙橋のさま、世中の思をなくさめかたきには、哥を
もてなくさむると也、哥はさらになき物を胸中につく
り出す物なれば、よろつの思をなくさむる便也
一説云、上の詞にうらみきつるとは実^{*4}にうらむる也、

煙不断なるとは、彼山の煙のおもしろき興也、なから
の橋の古ぬる^{*5}と思しも、又造なれば道ある世となる心
也、うらみきつる心も今はなくさむへきと也、哥にの
みといへるも煙橋を翫ふ心也、おもしろき説也と云、
当流にも用之也

抑、不立不断両説、二条冷泉家各別也、冷家には不立
の義を用、煙のたゞされは思をなくさめかたき心也、

橋を作事は両家同義也、不立不断につきて口伝等ありと云々、凡富士の煙のたえたりとよめる哥は、万葉にもみえさるにや、先此集にも思をつねにするかなるとよみ、神たにけたぬなどあり、序には大略哥の心をもてかけり、尤支証たるへきにや

※¹いにしへよりかくつたはる、)

ならの御時、文武天皇京極黃門、此ならの御門事、古来難義とす、或は平城大同天子の御門と申、是は醍醐まで十

代と勘合する説なるへし、顯昭等用此義云々、人丸合躰の時に相違す、又万葉被撰之代にあらず、或人云、顯昭など此説を用事不審也、所存別に有けるにやと云々、

真名序平城天子と書るをは当流にはならのみかと、

よむ也、或はならのみかと、は、聖武の御事と云、万葉をえらひ給し御門なれはにや、大方聖武の御事と心得侍り、奈良七代は元明和銅三年和州平城うつり給しより光仁まで七代也、桓武此京遷都ありき、聖武をならの御門と申は、七代の中にも他にことなる御

門にて仏法をも興隆まし、東大寺等御建立あり、哥道又盛也し故に、とりわき称し奉り来る也、万葉集えらはれし時のやうにみえたれば、聖武の御事をならの御門と書たるとみゆ、しかれ共当流不用之、此事口伝あるへしと云々、当流にならの御門を文武と用るは

元明の前一代なれば准しての義也、是一説也

※²文武開テ奈良宮ヲ而歸リ藤原宮ニ給、重用テ奈良宮ヲ云々、
後常恩寺殿注

又ふりにし事をならと号する理也、仮令とをき事をは神代ならねとも、神世などいふ類也当流用之

かのおほん時に、)

おほきみつの位、正三位也、柿本は性也(ヤマ)※³

(二行空白)

人丸は文武の帝師として君臣合躰の哥聖なり、聖武の御時と申かたし、故定家卿文武天皇と被注早※²、龍田河の行幸時、おなじ心の哥を人丸つかふまつりし事もあり、人丸は持統より聖武まで五代つかへし人といへ

り、しかれども、帝師として尤哥道盛なりし事は、文武の御宇なるへし、ならの御門を俊成卿古来風躰抄に、聖武御事也、大仏つくり給御門と云々、此事定家卿の心に相違せり、仍三品の作にてなきよし被申き、定家所存あるへし、すへて父子なから心のかはる事あり、三品はおほやうにして、黄門はねん比なる事ありき、猿沢池にて、わきもこかねくたれかみを、と人丸のよみしといふ事、万葉にみえず、如何と云々

秋の夕たつた川に 文武龍田川行幸時の御製也

春のあしたよし野々、同行幸の時、人丸みむろの山に時雨ふるらしの哥を詠す、しかれども、其哥の事をはいはすして吉野の桜を出せり、其故は秋夕龍田川と書るに對して、春の朝よしの山といへり、文躰のかさり也、人丸の哥にはなき事也、此哥の事、切替ありと云々、猶以文章の對にかけける心おもしろくよろしき義也又山のへのあか人と

ならの御門人丸赤人三人の事を書也、赤人人丸同時

也、赤人はすこし末の人にや、万葉集の末には人丸の哥みえず、赤人の末までありあやくたへなりけり

とは、奇妙也、赤人の作は自然にしてしかもめつらしき所あり、人丸の詠は環のはしなきかことしとそ

人丸は赤人か、

畢竟等同のよし也当流用之、或説、人丸は赤人よりはすこしまさるといふ心歟、只等同の義なるへし、かさねていへるは文章のかさり也

たつた川もみちみたれてなかる 秋哥に注す

梅花それともみえず 冬部にあり

ほのくゝとあかしの 旅に注す

春の野に堇つみにと 野遊の心也、春の野を愛する心

にて、不慮に何となく一夜ねたるよし也、奇妙の作、和哥の浦に塩みちくれは

鴻をなみとは、塩のみちて鴻のなくなると也、又は方と用る説あり、当流方をなみと用る也、其中に鴻の心

もあるへし、方をなみとはいつくともなく輩へへ鳴行
さま也、作意によろしと也

此人をよきて、

ならの御門の御事にはあるへからず、人丸赤人兩人の
外にもといへり

これよりさきの哥を、

さき不審未決^云、定注也、^{*1}さきとは古今集よりさきの

心にや、万葉^{*2}あつめられし事也、万葉撰は聖武疑な

し、当流にも其分なり

こゝにいにしへの事をも

人丸赤人等の比ほひの人を云にや、次詞に、かの御時

より此かたとあり、其比の人々の事とみゆ、又遍昭等

の六人の事と^云

えたる所えぬ所、各すこしの徳失ありしと也

かの御時より此かた

貫之か心、文武天皇御宇よりとかけるなるへし、万葉

撰られし御時よりのやうにみえたれと、しかるへから

す、自文武至醍醐延喜五年十九代二百余年也、然而大

数をいへる斗也、文の躰なるへし、当流用之、大同天^{*4}

子よりは十代百年にあたり、此時人丸あるへから

す、聖武よりは十六代百七十年也、冷泉家には継躰の

次第を勘て十代と用也、注別番、此事猶以可有口決乎

いにしへの事をも、

此段又上の詞、万葉の事つゞくへからすとみゆ

今此事をいふに

貫之批判する所を今といへり、されともちかき世にと

いふは、貫之より前の遍昭等の事也

つかさくらゐたかき人は

高位等の哥を批判斟酌ある心、殊勝の義也、貫之猶以^{*5}

有遠慮、思へき事とそ

その外にちかき世に

僧正遍昭は、すこし実なる所なしといへとも詞心と、^{*7}

のほりたる哥なるへし、後鳥羽上皇、定家に此六人の

事を御尋ありしに遍昭を挙し申されき、其時まことの

なからんにはと被仰しに、定家卿それを哥とは申侍、

と奏せられけりと云々、哥道の故実なるへしとそ

ゑにかけるをうなをみて

露を玉そとみたる心、ゑにかきたる女に心をうこかす

ことくのさまなるへし

あさみどり はちす葉の 前に注す

浅みとりの哥、露を玉とあさむくなといへるしたて上

手なるへし、たしかなる所なき歟、すかたを本とみゆ^{*1}

さか野にて馬よりおちて

かゝる時まで哥道を忘さる心、殊勝の理也、哥には落

馬の心はあるへからず、哥の心は秋部^ニあり

在原のなりひらはい

哥をふかく案し給へるに、詞のたらぬ処ある也、つね

の余情よりもふかゝるへし

しほめる花のい

詞のすこしたらぬ所のたとへ也、句残れるとは心のあ

まりあるよし也、智者堪能などのことはすくなき類な

るへし、心ふかくいひきらすして、残おほかるかこと

く也、こと葉おほきものゝしなすくなきともいへり、

言を巧にして仁^{*2}すくなきなどいふかことし、哥道の肝

心なり、可思^{*3}とそ

月やあらぬ 前に注す

大かたはの哥も、中将の哥に殊^ニ執する詠也

文屋のやすひては

詞のたくみに面白き所を、よききぬにたとへたり、心

にすこしいやしき所のあるを、あき人にたとふる也^{*4}

吹からに 秋部には秋の草木とあり、本は野へとよめ

るなるへし

御国忌^{ミコクキ} おほんこきともよむと云々^{*5}

草深き たくみにして余情ありと也、此序^ニ出したる

哥は、ことくく批判のことくならさるもあるへし

宇治山のい

わか庵はみやこのたつみ

此末の句、人はいへともとあるへきを、いふなりとよ

める処、すこし物のたかへるやう也、始終たしかならぬさま也、晴天の月に暁がた一点の雲のさへきるにたとへたり、又云、此哥のさま、かすかにおほつかなき心を、暁月を雲まにみたるにたとふる也、両説其心かよふへし

よめる哥、一首のみあれともおほくきこえすとかける文章也

をのゝ小町は流也(りゅう)

其流といふ心也、又たくひとよむ説あり、なかれとはよむへからず、其なかれにはあらず、六人の中に小町は難なき也、つよからぬは女の哥なれはといへり

思つゝぬれはや 哥心前に注す

そとほりひめの哥

わかせこかくへきよひ也

哥のさまの支証に出せり、此哥古風のやうなれとも、やさしくよはき処もあるにや*1

大伴のくるぬしは 哥のさますかたはいやしく、心は

やさしき也

思出て恋しき時は

人はしらすやといへる処*2さまのいやしき也、恋部には人しるらめやとあらためて入たり

かゝみ山いさ立よりて

心はあはれなる哥なるへし、いさ立よりてみてゆかんとよめる処、姿のいやしき*3となむ、抑六人の哥の失をいふに、いつれの哥を本としていふとならば人丸のを本として失を定へき也、人丸の作は第一其心限なく景気又殊勝也、詞のつゝきとゝのほり建立たくみ也、環のことくにしてはしなし、故本とするなるへし

此ほかの人々

前にいへる六人の比ほひより以来の人々也、哥人おほしといへとも、哥をよむとのみ思て教誡の道たる心をしらぬ也、上の詞に今の世中色につきといへるに相当れり

かゝるに今すへらき

すへらきのき文字、爰にてはすみてよむへし、つねに
はたゞにこりても用云、寛平九年受禪まし／＼ける
より延喜五年まで九ケ年也、当朝に道をおこし給ふ心
也、前の詞古の代々御門の御事を書く中に、延喜の
御代の心こもると注しき、此段のさまに見えたり

あまねき、つくは山、は文字の声清へし
よろつの政をきこしめすいとま

難云、万機の余暇諸事のあまりとあり、しからは哥道
は教誡のはしといへるにかなはずや、答云、哥道を
かならず政とのみいふにあらず、政の助業也、政道無
為の時にいたりては、哥を教のためといふに及ふへか
らさる也、行有^{カウトキシハ}余力^ニ則^チ以^テ学^レ文^ヲといふかことくなる
へし、此問答一往の理也、此序の心は、君よろつの事
をすてましまさぬ故、哥道をもおこし給ふと云義也、
又云、哥は諸道の源也、詩は政の名也といふかこと
し、さしあたりておこなふ事をのみ政といふへきにあ
らず、仁徳の心を政を行ふといふへし、しからは政と

いへる中に哥道あるへし、余暇に此集をあつめ給へき
事をおほしめすよしなるへし、此集えらはるへき事を
いふ起也

古の事をも忘し

神代より以来、文武人丸等の道を忘給はしの心也

ふりにし事をも 万葉をうけて撰集ある心也

いまもみそなはし 当代御覧のみならず後代までのた

めと也

延喜五年、奏覧の時にはあらず、事のはしめを記せり

御書の所のあつかり

前のかひのさうくわん さくわんとよむ

万葉集にいらぬ、

此集に万葉の哥の入たるもあり、それは家集をもて撰
入られたるなるへし、延喜比までは万葉にくはしから
さりしにや、村上御時、源順点を加しより世にも学
びるとなむ
みつからのをも

撰者四人の自哥を奉る事也、貫之哥はみつから撰入る

にあらず、みな勅定也と云

それか中に、此集の部立のやう也

雪をみるにいたる 以上四季也

又つるかめに 賀也

秋萩夏草を 恋也

相坂山に 離別旅等也

春夏秋冬にもいらぬ 雑哥以下雑躰等部類也

古今和哥集といふ

真名序ニ統万葉集云、撰集の時は先集の号をかりに

名つくる事あり、其義にや云、首尾して古今と号

せしなるべし、古今の二字の事第一卷に注了

かく此たひあつめ

山下水のたえず 次第つもりて行末も不可絶之理也、

濫觴ラフンシヤウよりおこる心也ウカフサカツキ

はまのまさこの 此集の千余首とよのほり成就の心也

いまはあすか用の 世の変化はありとも、此集不変に

して限あるへからすと也

され石の

転変もなく次第増長して万代不窮なるへき理也、是可

喜之処也、聖代貫之此道の聖として合躰の撰集なれ

は也

それまぐら 臣等也、貫之か我等といへる詞也

詞春花、詞の句すくなきよしの卑下也、春花は縁也*1

むなしき名のみ秋の夜の

はかなき名を行すゑなかくとよめむ事を歎也

かつは人のみよにをそり

未練の身を卑下し、又此集を撰をく事を道の心にはち

たる義也

たなひく雲の

起居動静 此事をよろこぶ也、聖代にむまれあひて撰*2

此集事也

人丸なくなりたれと

なりんとよむへし、文王已没 文不トモ在ヤ于茲ニの心をも

て書り、当代をほめたる心あり、それも人丸の余慶余風なるへし、人丸をなをさりに云心にあらす、既先師柿本云々

とまれる哉 かなと云詞に心あるへし、喜ふ心みゆたとひ時うつり

世の哀樂変化ありとも此哥の文字たえすあるへしと也

とまれば

*1 たのしみ悲み行かふとも、此哥風とまりなはの心也、鳥の跡とは此集にしるしをく処也

*2 哥のさまをしり

哥道の花実等相具し、正風正路等をしるへき人の事也

ことの心を 此道を教のためなる理と心えん人はと也

大空の月を

哥道は人の心のやみをてらす事也、おほ空の月をみる

たとへ也、人としたひみて和する心あるへき也、与_{文選序}三日

月_{トモニカ、ツテ}俱懸、明_注如_{コトハ}日月_ノ深_{コトハシ}如_ニ鬼神_ノ争_云、鬼神争_{ヲラ}

奥

いにしへをあふきて、

天地未分以来二神素戔嗚尊等文武天皇人丸よりの道をあふくへし、今とは当代をいへり、延喜御門貫之時をこひしたはさらめやと也、帝師として撰置所の集なればなるへし、此詞古今の二字をもて書終也

*1

所一見存分無相違尤以無比類者歟

文明十四春正月日

宗祇判

文明十三 九月下旬之聞書也

同十九未年六月重聞此説加筆早

延徳式_{庚戌}年三月又聞彼説矣

此一冊依友弘懇望所許書写也

必可禁外見者乎

永正三年初冬日

夢庵判

此冊依竹田治房懇望所許書

写也必可禁外見者乎

天文十五年二月八日

宗訊(花押)

古今和歌集卷第一 宗祇禪師

古今二字事

1(朱)

古とは、文武御宇人丸之時をいふへし、今とは、

醍醐御門貫之此集之時なるへし、和哥道は聖武

御宇尤被寅といへとも、文武御代、人丸合躰

之臣として盛なりし時なる故、古を文武人丸之時

といへり、其以来代々の中に延喜御時にいたり

さて、此道を興しします故、西貫之の時を今と

さす也、序曰先師柿本大夫、貫之か心は、人丸

を師とすとみえたり、時代はるかにへたるといへ

とも、此心あり、文武と人丸との道を模して、延

喜貫之此集を撰しめ給也、万葉集は集の最初たり

といへとも、其以前の文武をもて根本と用也、其証

追而可伝也 (2) 万葉ハ聖武之時撰之也

又云、古者、大易天地未分之処也、今者、太初以来

国常立之延喜御宇貫之之時、又は今日に至へし、

凡混沌未分、為太易、未見世氣、即空劫

也、於季者為冬、其次為太初、太初氣始也、

即成劫也、其次為太始、形始也、即住劫

也、其次大素、質始也、即壞劫也、象秋

也、日本記如三鶏卵云、空劫あたれり、鶏卵

は円形して、破てみればたゞ水のみ也、水は氣

形色分別なき処也、故未分を鶏卵のことしとい

へり、葦芽ことしといへるは、太初あたるとい

即開關の処也、混沌未分之処教禪之二法を不借し

て知事は此集之徳也、尤大切之理也

又云古今二字者正直也、正は自性言語所及あら

す、中而不中、日正中者无極之称也、曲

而不曲、日直正は天照太神の御心也、彼御心を

学ふは即直也、是我朝之風也、直は正よりい

つる也、⁽¹⁾此集は正直^{チキ}をすかたとせり、天下も正直^{チキ}にて治^{フサム}へし、^{*1}哥も正直^{チキ}を可^レ守也、尤哥人用心也、以上三説也、此外説有といへとも相伝^{サウテン}之次第^{シタイ}あるへし、⁽²⁾又万事^{マンジ}古今の理有、事々過ぬるは古也、^{*3}当^{タフ}信^{シン}は今也、⁽²⁾刹那^{セツナ}も如^レ此、天地人^{テンチニヒト}正直^{チキ}ト^ル、⁽²⁾天地^{テンチ}は正也、人は直也

○和歌事

和は和国也、哥は風也、たとへは松竹等のことし、松竹といへるは、松竹の本脉也、⁽⁴⁾屈曲^{クツク}清立^{セイリツ}は松竹の風也、⁽⁴⁾彼^カ屈曲^{クツク}を自然^{シゼン}とみれば直風也、⁽⁴⁾造作^{ゾウサク}の心をもて愛^{アイ}しみれば異風^{イフウ}となる、⁽⁴⁾哥の道^{カノミチ}はすこしの心えにて異風^{イフウ}となる物也、⁽⁴⁾直^{チキ}而不^レ直^{チキ}之心^{ココロ}肝要也、⁽⁶⁾治^チ世^セ守^{シウ}レ家^カ之道^{ノミチ}同^レ之^ノ、⁽¹⁾和^ワはやはらく也、⁽⁶⁾天地之和^{チキノワ}する処に、⁽⁶⁾五大^{イハヒ}おこり人も生^{シヤウ}する也、⁽⁶⁾君臣^{クニシ}之道^{ノミチ}も和^ワを貴^{タトフ}ふる也、⁽⁷⁾此道^{ココノミチ}以^テ和^ワ為^シ詮^{セン}、⁽⁷⁾人の心^{ココロ}の和^ワく時^{トキ}述^ズ出^スすを哥^カといへり、⁽⁸⁾胸中^{ムネノウチ}无事^{ムジ}にして和平^{クハヘイ}なる時、⁽⁸⁾まことの哥^カもいてくへき也、⁽⁸⁾人の心^{ココロ}をたねと

すといへれば、⁽¹⁾尤直^{チキ}道^{ミチ}をまもるへき也、⁽¹⁾我心^{ココロ}は是^{コレ}神明也、⁽¹⁾我身^{ワタシ}は是^{コレ}仏也、⁽¹⁾集^{ツク}はあつむる也、⁽¹⁾内外^{ウチソト}の道^{ミチ}をあつめ、⁽¹⁾古今^{コキン}の宜^{ヨシキ}、⁽¹⁾哥^カを集^{ツク}する也、⁽¹⁾論語^{ロンゴ}記^キ諸善^{シヨケン}言^{コト}と云^フかことし、⁽¹⁾又⁽¹⁾此題^{ココノイ}号^{ガク}毛詩^{モウシ}出^デ事^ジあり、⁽¹⁾序^{コトバ}載^{ノス}之^{コレ}

⁽¹⁾卷第一^{クワンダイ} 定^{サタムル}法度^{ハツト}之心^{ノココロ}也、⁽¹⁾是^{コレ}肝要^{カンヤウ}也、⁽¹⁾法^{ホウ}をまもる

事、⁽¹⁾此集^{ココノツク}の肝心^{カンシン}也、⁽¹⁾古^コの人の心^{ココロ}はをのつから道^{ミチ}かなへり、⁽¹⁾末代^{マツダイ}ことに可^レ思^シ之^ノ処^{トコロ}也

春哥上

⁽¹⁾春^{ハル}の内^{ウチ}を上下^{ジョウゲ}とわかつ事、⁽¹⁾をよそ二月^{ニグハツ}廿日^{ニニチ}あまりの比^ヒまてを、⁽¹⁾春^{ハル}の上^{ウヘ}と心^{ココロ}うへし、⁽¹⁾又⁽¹⁾は年^{トシ}による事^{コト}もあるへし

ふるとしに、⁽¹⁾在原^{アリハラ}元方^{ゲンカタ} ⁽⁸⁾ありはらとはよます、⁽⁸⁾はらとよむ也、

第一^{ダイイチ}入事^{ニルコト}名譽^{メイヨ}也

⁽⁹⁾1としのうち^{イチトシノウチ}に春^{ハル}はきにけり

此哥はすこしも心を別にやるへからず、ことかきのうへを、そのまゝみるへし、ふるとしに春立日とある分也、よろつの事やすらかなるを本とす、卷頭は一部の根元なれば此義肝要也、造作の理は、大道の廢て仁義おこる、といへるかことくなるへし、¹(朱)此集を集の根本とす、万葉は上にあれ共、それは別段にて此集を執する義あり、又、いつれの集の卷頭も、無事なるを用る心みえたり、此集の哥はいつれも大かたやすらかなるを用とみゆ、又貫之の哥の躰もかくのことし、¹(朱)こそとやいはむことしとやいはむ、といへる下句はさるからあたらしくまうけたる作也、又、此下句の二句を古今の二字にあてて、しかも古今一致之理あり、³可受³師説、⁴此集聖代の勅撰也、卷頭に元日の哥を入すして、年中立春を用る事不審あり、しかれとも春は万物を生ずる恵あり、そのきさしの早くもよほす時、万象これをよろこぶ心あるにや、聖代の恩に比して此哥

を用たる也、仁徳未遠くおこり、民の心も樂へきをみする也、此哥、こそともおもふことしとも思ふとありしを、貫之なをして如此となんはるたちける日、¹元日の哥也、¹此哥朔日の心也、卷頭にもあたるへく⁵歟⁶ ¹(朱)袖²ひちてむすひし水の¹ひちての詞等僻案抄にみえたり、¹水は夏の程むつまじくなれつるか、氷れるおりはすこし冷しく成ぬれとも、それもおもしろき心あるを、又東風に打とけたる水のさま、⁷たちかへりめつらしくむつまじく成ぬる心也、或説、此哥は四季をよみ入たる⁸、此義はきらひ道也、⁹但光陰のうつり来るを思ふ心はあるへし¹(朱)裏説云、むつまじかりし人のすこしたかふ事などありし時も心をやりて過しかは、又はたしてむつまじき中となる事あり、そのたとへなり、心を安すん

する理也、僻案ヘキアンの義*1も此心*2こもれり、此説は重カサネて受ウツへき事なれども、師説シツの時も如此ありしかは今イマ傳ツタフ之云

題しらす

説とある事也、時にのそみてよむ哥の題などなくてよめるを題しらすといふ也、又は、あまたの物をよみて、いつれを題とわきかたき哥などをもいふ、又は、会所などさしもあらぬ所にてよみたる哥を、題などありしをも、題しらすとする事あり

よみ人しらす*1

い朱にしへの作者サクシヤを執シウして名をあらはさぬ事あり、仏神等の作サクを秘ヒして読人不知チヨクカンと書カケるもあるへし、又勅チヨクカン勸クワンの人をはかりて如此、又作者をもとより不知チヨクカンもあり、近來勅チヨクカン撰ケンに初参シヨサンの人を読人不知チヨクカンと入るよしは、上古に沙汰サタなき事也、道のすたれたるさまにや云

*3 春霞たてるやいつこ

かすみ朱 片伝*4 (朱)、此哥大かたはうちきこえたる分

也、春の色をは、先みよしの山にこそみるへきと思ふに、*5 さもなくて雪のみふりぬると云へる心也、

霞をも思ふ心あるへし、遠白き哥也、又はたてるやいつことはかすみを尋る心也、霞をしたひ愛アイする心

あり、霞をしたふは則花を思ふ也、又花を思ふまて有*6へからず、俊成卿シユンセイノキヤウは、たゝるやいつこといふを面白きよし、古来風躰フウカキにもあり、然而、定家卿はた

てるやを用給ふ也、此集の奥書ウクキ、且任ニ師説シツ又加カ了見リョウケン云々、其心みえたり、此哥の理はさる事にて、

風躰尤幽玄也云、理をさし置ヲキて吟味ギンミすへし、雪はふりつゝとある末まで、たくひなき姿なるへし云、此

作者に口伝あり、貫之か女の内侍也、此時勅チヨクカン勸クワンたる

るによて、読人不知と入たり、然而此集の第三番入たる事名誉也、聖時之直セイジノチヨクダフ道もあらはれ、貫之か

他に異なる義もみえたり
二条のきさき、キサキ 后の御哥也

4 雪のうちには春はきにけり

1(朱) 顯注には、雪の中とは年内といふ心也云、不用之、^{*2}

密勘二云、ふる年の雪^{*3}いまた消ぬに日数ははや春に

成て、涙も氷雪にとちられし鶯も、をのか時待出て

春^{*4}に木つたふ心もつきぬらんかし、との由とそ聞侍

し云、こほれる涙とはなかぬ心也、愁^{ウレヘ}を散^{サン}する心

也、哥はたゝあさはかなる事をもとゝして、人の進^シ

退を安するはし也

5 梅かえにきある鶯

1(朱) きある鶯とは梅になれたるさま也、春かけてとは春

になりて也、両方かけたる事をかけてとよめる哥も

あり、此哥は隔句にみるへし、梅かえに鶯なけと

も、いまた春かけて雪はふりつゝといへる心也、^{1(朱)}

畢竟は、梅雪鶯の三をいつれも愛^{アイ}したる心あり

6 春たては花とやみらむ

みらむとはみるらん也、みえむといふ説は不用^レ

之、春^{1(朱)}になりてあは雪などの木にふりかゝるをみて

愛する折節、鶯のきて鳴を、我かく思ふ心より花と

やみるらむとよめる也、鶯を察する也、僻案^{*5}みら

むの詞を、今も時によりては読へきよしあり、しか

れともいかゝ侍へきにか

逸^{イフセルモノハソノコヘタノシミウラムルモノハ}者其声楽 怨^{ギンカナン}者其吟悲之心也

*6 除居セル人ノ事也 7 心さしふかくそめてし おりければ

おりければ、居^{フル}也といふ説不用之、折^{フル}ける也、哥^{1(朱)}

心は、我にても人にも春の雪の枝なから折たるを

よめるなり、心さしをふかくそめて折ければ雪と^{*7(マ)}

花とみえけるそといふ心なり、らむとあるもうたか

へるにはあらず、詞のたすけ也、詞をいたはる故

覽とよめる也、又^{1(朱)}はおりければにや花とみゆらんと

よめる云、きえあへぬとは、春の雪の心也

ある人のいはく、まうちきみ

此哥忠仁公の詠也云、左の注は作者を賞^{シヤウクハシ}翫^{ハシ}の心

也、又いたりて執するをは、如此注せざる事もあり

二条の後の、)

東宮トウクウの母御息所ハハ、ミヤストコロ也、みやす所と読へし

正月三日

みかと読也、但、つねのことく読*1へき歟云々

文屋のやすひて 康秀ヤスヒデか哥の躰は、物を詠する事た

くみにして其躰いやしといへり

8 春の日の光にあたる

こと葉にみえたるさま也、春の日とは春宮をよめ

り、その御息所の御かたにての事なれば也、其身老

ぬる時なるへし、かゝる春のめくみにあひぬる身な

れとも、老ぬればなからへて行末のめくみにあひか

たき事を歎く哥也、哥のさま、ことから思へしと

そ

9 霞たち木のめも春の

このめもはるとは木の目のめくむ事也、此哥にとり

ては其理を捨て、只春になる心にて吟すへし、哥躰ノタイ

優ユキになるへし云々、花ぞ散けるとは、霞立て春の雪な

れは花と見なしたる也

真*2春のきたりて花にあへるは、祝言の心也、君徳クニトクのあ

まねき心也*3、花なき里も花になる心也、雪なれば自

面如此

ことなお 言直コトナラ

10 春やとき花やをそきと

春と花との遅速チソクの支証シヤウに鶯をせむと思ふ心面白

云*4、それさへなかね事をよめる也、花とはいづれの

花とも不可決也*1

みふのたゝみね ふの字すみてよむ也

11 春きぬと人はいへとも

鶯を切によめる哥也、以上二首は初春の哥也、鶯の

題にては有へからず、鶯は春をつかさどる物なれば

かくよめる也、なかねかきりは、さもあらしと思ふ

也

寛平御時后クワンヘイノキサイノミヤ 宮 七条1の后キサキ、昭宣公セウセンの女也ムスメ、哥

よみにてまし／＼ければ、七条の后御事にや、又延

喜母后キハノキサキ 御事にや、可カン勘カフ之

まさすみ 当純、近院右大臣男、文徳御子能有、定

家卿の小書也

12 谷風にとくる氷の

毛詩云、谷風コクフウハトフ東風也、されは、谷風は春風といふ

心也、といつれの注にもみえたり、当流タフリフには、深フカキ

谷までもはや春のいたりて、氷のとけたるをみて、

春なれば花とみなしたる心也

13 花の香を風のたよりに

梅のうちかほりたるに、鶯もなかなかむとおもふ時

分、風の過ぬるをみて、しるへにやる心ちする也、

鶯のこゑを思ふ心より也、此哥*2より鶯をよめる哥

也、谷風の哥をへたて、見えたり

14 鶯の谷よりいつる

春としもおもひわかぬ時分、鶯の時を得て、谷のふ

るすを出て時節を告たるを、ふかく感したる心より

よめる也、声なくはとよめる、此心也*1

在原棟梁 業平朝臣男

15 春たてと花もにほはぬ

花もいまたさかぬ山里なむとには、鶯のこゑも物う

けなると也

裏説云、花もにほはぬとは、一門の時にあはぬ心

也、物うかる音にとは、我涙の事をよめる也、此哥

の姿をよく吟味すへし*3

16 野へちかく家ゐしせれば

是も鶯のこゑを愛し思ふ也、哥心はきこえたり、我

宿のさまを述懐したる心あり、鶯のこゑを朝なく

聞事をもて、なくさめたる心也、詞のつゝき古躰に

して、拔群ハツグンとみゆ云、余情有と云

17 かすか野はけふはなやきそ

野遊の心也、此哥に異説等あり、不用之、伊勢物語

には武蔵野と有、其につきても種々説不用之、かす

か野とよめる、ことに面白し、武蔵野は広大にし

て、野遊の興によるしからず、若草のつまこもると

は、春になりて枯葉などの下にやうく若葉のもえ*4

初たるを、つまこもるとはいへり、我も又野遊にたちなれたれば、かゝる折節には、はやなやきそとよめる也、春の野はやく事なれば也、^{*1}けふはといへるを、大やうに心うへし

19 山には松の雪たに

^{*2}古注には貞松の寒を不^レ知、其木の雪たにもいまた消ぬにといへり、当流にはきらひ道也、松は深山にある物なればよめり、たゝ深山の雪の消ぬ時分をいへる也、杉ども檜原ともよむべきを、詞のよろしきにつきて松の雪たにとよめるなるへし、心は、都の早く春に成ぬるを感じたるなるへし、春の哥は殊にたけたかく其躰を思ふへしとそ、⁽²⁾又雪は松にみる興也、眺望あり

18 かすか野とふ火のふもり

^{*3}烽火たてられたる所、僻案みえたり、野守は其火をまもる人也、野守なればみよとよめる也^{*4}裏説云、万事其事を知へき人に其職をあたふへき

也、其職に不勤の事を仰すへからさる也

20 梓弓をして春雨

をしてとある詞を下へかけて、雨ふるともをしてつまむと心うる説あり、^{*1}いかとそ、当流には、をしとは春雨といはむため也、春の雨にはふるたひに若菜もおひゆく物なれば、あすさへふらはつまんとたよりありて思へる心也

以上初日(朱) 廿首

仁和御門みこにおまし／＼ける時、⁵光孝天皇御事也、仁和をにんなど聞ゆるやうによむ也、おまし／＼とあるを、おはしましとよむへし、人にわかな給ふとは、さるへき人にや賀をおこなはれし也

21 君かため春のふり

心は明也、自面おもしろき哥也、^云此哥に有心躰あり、余情といへるにはかはりて、別にひとつ心のある事也、君かためにするわさなれとも、雪氷は我袖

にとまる事を思ふ心あり、かゝる雪氷の袖にとまる
くるしさを思はぬ心は、人のためにめくみある也、
是則王道に御心のかよふなるへし、此哥を定家卿も
殊執し給へりとみゆ、抄物ことに書いたし給へり

哥たてまつれとおほせられし

よみてとあるをよんでとよむ也

22 かすか野ゝわかになつみにや

ふりはへては、源氏物語などにはわさとといふ心
也、此哥にては、たゞ打はへてなどのやうなるへ
し、袖ふるともよめは也、さりなから、又若なつむ
事なれば、わさとの心も少はふくむへきにや、必わ
さとと読るとは用へからず也、如此の分別をよく思
ふへし云、哥の心は明也、野外の春の望の心をもて
みるへしと云、其さまをよく思案へしと也、人々あ
またとみるへし

23 春のきる霞の衣

はるのきるとは、霞は春のつかさとする物なれば也、

珍しき五文字也、眺望の心より出来たるへし、うす
き霞に山風のいかにもやはらかにうち吹たるをみて
思へるなるへし、へらなれとは、みたれつへしき、
といふ心といへり、又さもあらずとも

24 ときはなる松のみとりも

自面の理也、春来て松をみるに、時を感じる心より
よめる也、造作なくして感ある哥也

25 我せこか衣春雨

わかせこかとは、衣春雨といはむためはかり也、衣
は春といはむため也、さるから五文字も面白しと
云、眼前の躰也、此哥晴の哥の躰也、色にとら
は白き色なるへし

26 あをやきのいとよりかくる

心は明也、春しもそとある句に心を付てみれば、こ
とに面白と云、ほころひにけるとよめるを、糸より
かくると有に、つくりあはせたとはいみるへから
す、自然にたよりありではきこゆるにや

1(朱) 西大寺のほとりの

27 浅みとりいとよりかけて

柳かとは柳哉といふ心也、前の哥の躰也、心は明也、此哥はすこし作たてたる作也、しかれ共あしくはあらず、哥のさま奇特也、云々、遍昭は姿スカタをえたる

哥よみ也云々

1(朱) 28 も千とりさへつる春は

も千とりを範兼卿は鶯の事也、云々、定家*1は其説を嫌キラヘへり、僻案御抄にみえたり、たとへは、郭公なくやさ月とよめるかことし、物ことには万物也、あらたまれともとは年々改アラタマレとも常住シヤフチヤフなる理也、*1

春に成ぬれば、万の物の又去年のことくになりく、年々歳々あるを、あらたまるといへり、其中に我身はかりはあらたまる事なし、老衰ライハイトロヘ行のみ也、とよめる也

29 をちこちのたつきもしらぬ

深山幽谷シンサンユウコクなどの春旅行リョウカフの心を思ふへし、鳥の声をた

よりとすへきに、又そこともなき心也、哀アハレにさひ

しき躰也とそ、よふと云に便あり

以上二首三鳥の内也、口伝*4あり云々 *2

30 春くれば鴈帰也

1(朱) 道行ふり、みち行つゐて也、春くれば、春になれば

の心也、此哥たくみにして大なる躰也、鴈を聞てかく思よれる也、詞にみえたり、躬恒か哥はたくみにふかくよめる也、幽玄ユウゲンなるは稀マレナルなるにや云々、
帰鴈をよめる

31 春霞たつをみすて

花もいつかは咲へきなと思ふおりふし、鴈の帰ルをみてよめるなるへし、下句の心、あたらしくまうけたる心也、伊勢ササか作は小町よりはまさりたりとなん、花に心をふかく染たるよりよめる也

32 折つれば袖こそ匂へ

鶯の梅にふかくしたしむ心をよめる也、此哥ひとへ

に艶ウツクシなる哥也、余情ヨセイフセイ風情ありと云云。

33 色よりも香こそあはれと

むかし誰袖をふれそめてより、かゝる句と成けんとも、たくひなき句を愛する心よりよめる也。※1

34 宿ちかく梅花うへし

此哥は必恋の哥にては有まじきにや、又は恋の心にもや、是も梅かゝのすくれたるより思よれる心也

35 梅花たちよるはかり

明也、立よるはかりと思しに、花に程ふるを忘わすたる心あり、ふかき句也、兼輔カネスケ哥也

東三条の左トヨ源常トヨ、嵯峨源氏、左大臣左大将、

齊衡サイカフ元年カウシヌ薨、卅四

又説女の所へ立よる事をよめると云云。

左の、※2

36 鶯の笠カサにぬふてふ

催馬楽サイバクの青柳の哥をもてよめる也、笠にぬふとは、

鶯の梅の枝の間を行かへるか笠をぬふこととく也、と

云説あり、不用之、ぬふとは、笠のわさなれはよめ

る也、衣ほすてふあまのかく山、とあるも、ほすは

衣をはほす物なればよめるはかり也、此たくひなるへし、梅花のかさにゝたる物なれば、老のかくした

くおほゆるを、笠のえんにてかくよめる也、鶯の梅にしたしきさま也

37 よ所よにのみあはれとそみし

心明也、梅を愛す、ちかまさりしたる心也

38 君君ならて誰にか見せむ

人を賞シヤウして君ならてとよめる也、色は大躰タイ也、香

はくはしき也、万の事に知人肝要なる事也

裏裏大事小事共、人に云あはせむ事は、人により

て其機をみていふへき事也、人の程をしらすして

は、我思事とてもそゝるにいふへからず、といふ心

あり、和哥はすへて此国の教誠ケウカウとなる物なれば、如

此之理、肝要也

くらふ山にて

物にくらふる方に用る時は、ふの字を濁、たよむ
には清といふ説あり、^{※1}く¹ら¹ふ¹片¹(朱)^{※2}

39 梅花句ふ春へは

心明也、夜のさまをよめると見えたり

40 月夜にはそれともみえず

白梅とみえたり、月もしろく花も白き心也、香を尋
てそよといへる心は、折てといひし人に香をしる
へにてもなとか尋ねぬ、といふ心をふくめり、躬恒
か作は此たくひおほし¹云¹

41 春のよのやみはあやなし

心明也、御抄、あやなしとはかひなき事をあちきな
くなどいふ詞也、色はみえすして句ひはかくれ
す、あちきなしと思ふ心也

裏、人の性、此類あり、やすかるへき事などを、

一方にもつかすしてやうかましきは、みるにもあち
きなき也、よろしからぬ性也、思ふへき事³にや

はつせにまうづること

貫之は初瀬を信して常にまいりける也、又かくさた
かに、やとりはかはらす有といへると也

42 人はいさ心もしらす

花の句ひのみかはらぬとよめり、を返し人はいさ
とよめる也、故郷とはひさしく見し宿也

43 春ことになかる、川を

梅花のうつるへるかけゆへに、流をも花とみておら
はや、と思ふ心ある也、春ことには、毎春かくの
ことくわか心のありきたるよし也、はかなきさま
也、花を思ふ故にまことなき事をよめる、是哥の作
也

裏、世中のことわさは、毎事おられぬ水也

44 年をへて花の鏡と

花の陰の水は鏡のことくなるに、ちり敷たるをく
もるといへる也、年をへてとは、年々歳々花の陰の
水は、鏡となりて花もむかひきたりぬれは、花と水
との中は思ふこともなかるへきに、散ぬる時にいた

りて、此一事のみ思事となる心也、うつろふ事のは

やきをいはんため也

45 くるどあくどめかれぬ物を

心明也、家にありける梅とかけるにかなへり

46 梅かゝを袖にうつして

明也、花に執心ふかき哥也

47 ちるとみてあるへき物を

うたてとはうたゝ也、ウタ字也、此哥にては、はな

はたしきといふやうなる詞也、哥心は、ちりなは忘

なんする物をとよめり、愛する心のふかきによりて

かくよめる也、うたゝ、あまりになどの心にや

裏、ウなに事も過ぬることに執をとむる心はよろし

からず、一念にはたさずして相サカソク続するより、此世の

みならずあしき事とはなりぬる也、是を思ふへしと

そ

48 ちりぬともかをたにのこせ

明也、※1おもひいてに也、思てとはよむへからず

49 ことしより春しりそむる

明也、心も詞も殊勝シユセウの哥也、云人のいへに、といへ

る心をよめる也、此哥治フサムル世姿也となむ、王昇ノボツテ

宝殿ホウデンニヤラウウタウタフ野老謳歌と云句の心にかなへりとそ、たゝし

き哥の躰也、云治世乱世の姿あるへし、思ふへき事

也云

50 山たかみ人もすさめぬ

又里※2とをみ、心はおなしき也、里とをみといへる

も山たかみの心也、山高みはまさるへきとみえた

り、是は一本ある桜とみるへし、花さきぬれとさひ

しけなる花の心を思てよめるなるへし、いたくなわ

ひそとよめる、哥道の命也とそ

以上第二日※4(巻)卅首

51 山桜わか見にくれは

霞は自然にたてるを、花をへたつる事のあやにな

りとみるゆへに、我ために立かくすかと思ふ也、五

文字に山桜とをける、よくかなへり、肝心也云

そめとのゝきささきの

本の小書ニみえたり、清和母大皇太后宮、忠仁公女后明子、昌泰三年

正月一日崩、七十二*2

52年ふれはよはひは老ぬ

授政大政大臣彼母後の栄花の心をよみ給へる也、哥のさまこ*3とからをみるへし*1云

53世中にたえて桜の

花に執心シツシンふかきよてかく思へる也、開落カイラクに心をつくし跡まで忍ふ心の、春の間のとかならねはかくいへり、是も哥のさまをよくくみるへしとそ

54石はしる滝なくもかな

或説ニ此滝は落花をいへると云々、此哥サルマル猿丸か也、彼家集にも山川*2に、当流は滝をへたて、花をみたる也、哥の次第落花の部にあらず、哥の心は明也、古来風躰フウタマに此哥をまことに優ユウにも侍哉とあり、吟味ギンミすへき事也

55みてのみや人にかたらん

哥は義なし、ことから面白*5、ことに春の哥の躰*6に似合たりと云々

56見渡せは柳桜を

春秋の野山をこそ錦といひたれと、此時都をみて、都そ錦なりけるとよめる也、都をほめたる心也、遍昭*7素性父子たりといへとも、素性が哥はさまくの躰をよめり、遍昭ニまさりたる詠とみゆ云

57色も香もおなし昔に

花は年*8にかはらす昔の色香にさくらめとも、我身老ぬるみるめにあらたまりて、昔のことくもあらずと也、年ふる人の、めにそあらたまりけると也

58誰しかもとめて折つる

顕昭ケンセウは誰然タレシシカもと注せり、密勘ミツカン誰かとめて折つるの心也、文字のたらねは誰しかもとそへたる也、三わ山をしかもかくすかの類にはあらず、と注給へり、哥の心は明也、おれる桜の妙なるをみて、愛する心よりかく読る也

59 さくら花さきにけらしも

山のかひとは山のあひた也、此哥晴の哥の躰也、幽チウ

玄躰也云、貫之作にもたくひなしとなん、百人一首

には、花そむかしの哥を入られき、それは又有子細

云、¹ゆへある哥と云、ことかきにも口決有へし

60 み吉野山へにさける

明也、吉野山には雪をよむ所なれば、ことによせあ

り、山辺にさけるといへるは、山の辺は勿論なれと

も、此句面白し云

61 桜花春くはれる

御抄みえたり、此五文字は桜花とよひ出したる也、

桜花さきにけらしも、なとよめるにはかはれり云、

あかれやはせぬといふも、満足せさせよの心也、此

哥三月²閏月有ける年云、閏三月²よめる哥ならば

暮春に入へきに、春部上に入たる事不審也、閏月有

ける年とあれば、其年いつの程にてもよめるにや、

又こと書を必用る事もあり、大やうにみる所も有へ

し、よく弁へしとそ

62 あたなりと名にこそたてれ

明也、花ゆへに待つけたれば、人も待けりとよめ

り、伊勢物語には恋の心の哥也、爰にては花のうへ

のみ也、あたにはあらずといへる也

63 けふこそすはあすは雪とそ

けふきたれはこそとよめる也、散なは雪とみると

も、けふの花とはいかみむと也、此哥返哥の本也

とそ

64 ちりぬれはこふれとしるし

無義、是はすこしうつろひかたなる花をみてよめる

なるへし、花に執心の作也

65 おりとはおしけにも

一木ある花の陰に立よりて、愛する心のあまりにお

らはやと思ふ時、又思へは、花もおしけなるへしと

心をやりたる也、おしけにもといふは、あるしなと

ある花にはあらず、花の心をおもへるなるへし、宿

かりてとは、花にやとりて也

66 桜色に衣はふかく

明也、花に執心ふかきよりおもへる也

67 わかやとの花みかてらに^{*1}

明也、有心躰哥也^{云々}、花ゆへにこそとはれぬるう^{*2}

ちより後の事を思やりたる也、其心をいはずして、

散なん後そとよめる、有心也

68 みる人もなき山里の

明也、伊勢述懐の心あり、亭子院^{テイジイン}めしける人なれば^{*3}

思をふくめる也、外の散なん後ならば、山里の花も

人にもしられぬへし、人めもみる事あるへしと也、

余情おほき哥也^{云々}、桜に対していひをしふるやう^{*4}

の心也

古今和歌集卷第二 春哥下

春下は二月末つかたよりの注也^{*5}

69 春霞たなひく山の

うつろはむとはちらんといふ事也、といふ説あり、

不用也、やうく色かはりそむる比なるへし、上句^{*6}

は、郭公鳴や五月などのことくつきたる也、但哥

の縁とはなるへきにや、霞に映したるさまもあるへ

し、うつろふと色かはるとも、浅深^{セシシ}あるへきにや、

花欲^{トス}散^{チラ}などの心なるへし

70 までといふにちらてしとまる^{1(朱)}

までとはちるなといはん也、ちらてあらは、なにを^{*8}

桜におもはんそ、といふ説あり、当流ちる事の程な

きを感じて、花を思ふ也、しかるに、ちらてとま^{*9}

らは花を思ます事有まし、といふ心也

71 のこりなくちるそめてたき

めてたきとは愛したき心也、めやすきなんとの心

也、万事此理也、寿^{イノチナカキモノハフ、シハチ}長者多^チ恥^チといへる心にかな^{*10}

へり

72 此里に旅ねしぬへし

此里にとは、花のある所をさしていへり、ちりのま

かひにとは、花のちるに家路をまかへて也、殊に風流なる哥也^{*1}云々

73 うつせみの世にもにたるか

花桜といふ桜あり、といふ説不用之、にたるかとは、哉也、花さくらとは、桜花といふにおなし、しかれ共、世にもにたる花といはむために、花とつゝけてよめる也

これたかのみこ 惟喬、文徳第一、母從五位上紀靜

子名虎女

74 桜花ちらはちらなん

故郷人とは知音の心なるへし、明也、花もたゝむつましき人のためゆへにこそおもへ、かゝる身一にはせむなし、^{*5}など思へる心也、^{*6}古来風、此みこのいかに思給てか、かゝる哥をよみ給けんなんとあり、殊勝なるへきにこそ

雲林院

うりんゐんとよむ云々、或説、うんりんいん、うりんと仮名にあるをもうんりんと云々

そうくほうし 承均と注せり、しかるをくと読事不

審也、或説、文字書たるをは、きんと読へし云々、又

云、字を誤て注たるかと云々、^{*8}所詮かんなを本としてよむへき也、然者承均と書たるをも、そうく

とよむへし云々、^{*9}文字猶可尋之、⁽²⁾私云(朱)

均垢同此字歟

75 桜ちる花の所は

明也、更冬の心ちする躰也

76 花ちらす風のやとりは

明也、句々奇特也、心なき物に心をあらせたる作、

これを哥といふへきにこそと云々^{*11}

うりん院にて 仮名に書たる時は勿論也、雲林院と

書たるをは、うりんと字のことく読へし、と云説

あり、常光院此分也云々、当家には、いつれをもうり

ん院とよむ也

77 いさ桜我もちりなむ

明也、一さかりを、いとさかりといふ説あるにつき

て密勘くはしく注給へり、最説不可用之也、此哥、^{*12}

有て世中はてのうければのおなし作意也サライ

78 一めみし君もやくると

けふはとよめるを、大やうに心得へし、あすはちるともなとは心うへからす、しはし待みて、ちらは花にも恨あらしと也

79 春霞なにかくすらん

明也、花を切に思心也、ちるまをたにもといへる

詞、尤あたらしく面白し云、散をたにも也

藤原よるかの朝臣テシシ 典侍、貞観寛平延喜テラフツクハシヘイ、ニシキ

80 たれこめて春の行衛も

尤哀なる哥也、ことかきに思合へし、風にあたらぬ枝もちりぬるをみて、世間の限ののかれかたき事を観する心也、わつらふ人の心になへり、たれこめて日数のうつるもしらぬさま、哀なるへし云

待賢門内北壬生東*1 東宮の雅院にて 東宮の楽ガクなどあそはす所と云、

猶可尋之云

81 枝よりもあたに散にし

此哥は此集撰センして後、廿年許ハカリも後に入たる也、貫

之か追て入たる心さまくあり云、貫之、此哥を

殊ニ面白く思ふ故ニ入たりと云*2、又は、貫之延喜御門

合躰カッテイの臣として此集を撰せしより、他に異コトニに思ひ

奉るに、崩御ハウギヨの後なれば、此哥の心無常の理有ニよ

りて、感心*3のもよほす故ニ入たる也、撰集の後ニ用捨*4

ある事也、する事也、裏、枝よりもあたに散と

いへるも、人の生れ来る心也、落アハて泡アハとなるとは、

死去心也、此理をみれば、生死共にあつかる心なき

也、人の生するも、たゝ花の枝*5より落ぬるも、こと

ならぬにや、生死共にかろくする所、哥人も可思

也、枝*6よりも、ものしは、やすめ字也、此哥の外

はみえさるにや、詞或人云つゝまやかにしてむねひろしと

云へき也

*7 以上第三日(朱)卅一首

82 ことならはさかすやはあらぬ

ことならはとは、かくのことくならはと也、花を待

より、さきぬる時もさま／＼心を尽しぬれとも、花は思くまもなくとく散ぬれば、さかすもあらなむ、といへる也

83 桜花とくちりぬとも

人のいひけるにあたりてよめる也、世上は人の二世三世と契るも、変する事は夢のことく也、此理を思ふ故かくよめる也、詞つかひめてたき哥也

84 久かたの光のとけき

のとやかなる春の日に、花の時いたりて散行さまいそかはしけなるをみて、かこつ心にてよめる也、いづれもく、哥のさまを思ふへしとそ、猶観すへき心ありと云

85 春風は花のあたりを

花の心つからうつろふならば、風に恨もあらしと也、よきてはのそきて也

86 雪とのみふるたにあるを

をのつから花の散に、剩へあやにくなる風の吹た

るさまをよめる也、常にかやうにある事也、裏世中のさま也、人の不運なる事などありて愁ふる折節、重てくるしき事などの出来て、いかにともせぬ事あり、身にあたりてさやうの時は、此理を世上のならひそと、心をやすむせよと也

87 山高みみつゝ我こし

初五文字、ことにひえにのほりてといへるさまによかなへり、見つゝとよめる詞に心ありてみえたり、山の花を思ひをきて帰たるさま也、風は心にとは、わか心にもまかせず、花をみすてきたる心にてよめり

一本
大伴黒主

一本と付たるは、嘉祿貞応の本の前に、

まち／＼なる本ありき、定家卿相伝之本には此作者なくて、或本此名あるをよろしく思給ふ心ありて書て、さるから一本と付給へるなるへし、哥の躰、定家の心に黒主とおほしきにや

88 春雨のふるは涙か

春雨のしめくくと降うちに花の散行をみて、其心より思へるなるへし、春の雨はあまねく降物なれば、世に人のなへておしむ涙に、思よそへたる也

89 桜花ちりぬる風の

花の風にふかれて空に散をみたる、当位也、浪にいたりとみる心より、水なき空といふ詞は出来たり、なこりは、余波のえん有へし、当位即妙哥也

ならの御門 平城天皇、大同天子、桓武御子也、

治四年、後南都ましまし、其後又世の御望あり

しか、其もとけすして、つゐに又南都におはしませける也、此ならの御門と申は、奈良七代の御事にはあらず、陵和州にあり

90 故郷となりしならの

故郷のさま也、御門の御身の上をおほしめす心あり、なひきつかへ奉りし人も、かはり行時分の御心なるへし、花のみひとり色もかはらぬとは、御述懐の心なるへし

良岑むねさた 遍昭也、僧正遍昭と入たる所もあり、又俗名をも入たり、或説には、俗にてよめる哥

は俗名を入、法躰以後の詠は法名を入と云、又云、僧似合たる哥は法名を入、俗に似合たるを俗名也、此説も哥をみるに其定ともなし、如何

91 花の色は霞にこめて

心は明也、ぬすめとは、花のかをひそかにさそひこよの心也、霞中花をみたる時のさま也、ぬすめの詞、今も時によりて用へしと云、おもひはからふへきにや

92 花の木も今は堀うへし

うつろふ色に、世の人のならはむ事を制したる心也、うつりやすきを思ひかへしたる心也、人ならひけりといへるも、我心をことくさいへる也、非恋心、春たてはとは、春に成て花の比とみるへし、今はとは、色なる花に心のうつる時をいへる也

93 春の色のいたりいたらぬ

春の色は霞にこめて

93 春の色のいたりいたらぬ

表^{*1}の心は明也、つゐに春色のあまねき心也、裏説、

君子^{君子}の道はいたりいたらぬ処はあるへからず、しかるを其恩に預る事のあまねからざるは、人によるへし、愚にしてをのつからうけざるもあり、又賢者^{賢者}なれとも不幸^{不幸}にてうけぬも有、又不賢^{不賢}なるも幸^幸にうる事もあり、いつれも思へはた、我からの理也、此義をしらは恩^恩の及はざるを恨心もやむへし、作者の述懐も待るにや

94 三^三わ山をしかもかくすか

しかもとは、さもかくすか、などの心也、かうもなと云心也、あやにくに霞のかくすは、人にしられしとする花のあるにやと也、霞をいとふ心より、かゝる心をまうけたる也、万葉に、三^三わ山をしかもかくすか雲たにも、

95 いさけふは春の山へに

なけ、御抄明也、暮ぬとて花の光のなきにてもあらはや、やとりてみると也、或人云、なけ、にこり

てよむともなき心なるへし云々

96 いつまてか野へに心の

限もなく奇特^{奇特}によめる心也と云々、理は明也、思かへず心あり、人の心の着^着する処一切如此、されは其理を思かへしたる心也、心の師となりてよめり

97 春ことに花のさかりは

ありなめとは、あらんすらめとも也、心は明也、尤哀なる哥也云々

98 花のこと世の常ならば

花は散といへとも、又はさきく常也、むかしと成ぬるは、一日くとうつりて更かへる道なき心也

99 吹風にあつらへつくる

告也、よくとは除也、一本の花の陰にしてよめる也、風の方へいひやるならひも有物ならば、とよめり

100 まつ人もこぬものゆへに

待人のために花を折たるに、その人もこぬ折、な

となく口すさみによめる心也、花をおれは、鶯のう
れへつる物を、なといふ心はよろしからず、又益エキな
く花を折て、鶯もはやこぬ心キヲヘなとも嫌へる説也、只アヤ
鶯の鳴つる花を折て待人のむなしき折のことくさな
るへし、鶯に心をあつかふへからず

101 咲花はちくさなからに

心分明也、千くさなからにとは、花といふ花は皆ミナ
たなれとの心也

102 春霞色の千くさに

花やうくうつろふ比、山の霞の色くクなるをみ
て、花の映エイたる陰カクかも、とよめる也、遠望トラクノソムの様也サマ

103 霞たつ春の山へは

いつくともなく立こめたる山への霞キより吹くるかせ
に、ほのかに花の匂ひたるをよめる也、尤面白き躰
の哥なるへし云

104 はなみれは心さへにそ

はかなき事に心のうつろふを、世の人にはちチたる心ココロ

也、本心もなくなる様を思かへす也、花の木も今は
堀ホリうへしの類也

105 鶯の鳴野へことに

鶯の鳴を聞て行てみれば、けにうつろふ花に風の吹
ける、といふ義は嫌ふへき道也、鶯の鳴野へなとに
野遊して、をのつからみれば鶯※1のなけるは、うつろ
ふ花に風の吹ければと也、少の差別シヤヘツながら、幽玄ユウゲンな
るへし云※6

106 吹風を鳴てうらみよ

心明アキラケシ也、鶯のこゑも人をうらみて鳴心ちする
故ユ、かくよめる也、此心、哥の命也

以上第四日朱 廿五首※7

典侍治アヲネイコ 子、小書ニ寛平延喜、掌侍シヤウ典侍、糸所別
当云、掌侍にて有しか、後に典侍に転したるにや

107 散花の鳴にしとまる

無義、けにとまるならひあらは、涙おしむへきにあ
らすかし、又景気あり

仁和の中將のみやすん所の家に 此こと書心得かた

し云、説あり、当流義は、仁和の御時、中將なる

人の女の御息所なるへし、家と云へるは、中將の家

の事にや

藤原後蔭^{*1} 藏人右少將^{*2}
中納言有穂男^{*3}

108 花のちることやわひしき

優なる哥也、別而理を付すして、たゝ其まゝにて

みるへし、侘しきとは、かなしき心也、など釈する

も不可然也、わひしきとは、たゝならぬ心などいふ

へきにや、景氣の哥也、幽玄也

109 木つたへはをのか羽風に

心明也、こゝら、そこはくななどの心也、おほき也、

裏、花のちるをかなしむ事も、我心より出る也、

然を、他におほせてかこつ事を制したる也、鳥の上

にかきらす、世上此心ある也、あしき事也

110 するしなきねをも鳴哉

明也、花をおしと思ふ心より読る也、鶯のとある、

の文字、尤優なるをき様也、世に観して見侍るへ

きとそ

111 出駒なめていさみにゆかむ

なめて、なへて、共に用へじ、ならへたる也、故郷

はとよめるに、余情おほしと、故郷の花はみる人

もなく、いたつらに雪とのみこそ散しくらめ、と思

やりたる也、哀なる哥也、哥のおもでは、又たけあ

り

112 散花をなにかうらみん

花をおしむ心には、とまるへき事のやうに思ふに、

さもあらず、散行時、思かへして観したる理也、散

花を何かと其まゝにみれば、こと浅也、花をも風を

も恨あまりて思ひ侘て、なるへし

小野小町 出羽郡司常澄女

113 花の色はうつりにけりな

二の心あり、なかめせし、一説、霖雨也、一説、な

かむる心也、一云、花さきなはみむ事を思ひしに、

我身世にふることわきなとに打過して、長雨の比に
さへ戒て、むなしく花もうつろひぬる事を思へる
也、為氏卿は此義を賞し給へりとそ、一云、花の
うつりぬるとは、^{*1}小町身のおとろへを思ふ也、世に
ふるうちに、物思などになかめかちにて、いつ過る
ともなき程うつりにけり、なとよめる也、是も花
をみてよめる心地、両説共用之、に文字四あれとも
耳にたゝす、妙也、小町好色の人なれば、世をも人
をも根かちに打なかめてくらすへし

114 おしと思ふ心は糸に

花を思ふあまりにわりなくよめる也、こまやかにた
くみなる躰也、素性が哥にはみる所待るとそ、余の

哥人も又同

115 梓弓はるの山辺を

弓を女にたとふと云説あり、不用之、みちもさりあ
へす、花を女によそへてよめり、心をうつして
行やらぬさまをよめる也

116 春の野に若菜つまむと

若菜をつみし時、霜雪をふみ分て道もまとひしか、
又野遊などに落花を分まとふ心也、光陰のうつる
事を思ふ也

117 やとりして春の山へに

心明也、春の山に宿したるさま也

118 吹風と谷の水とし

山風、谷のなかれのたよりに花をみて、散ぬる恨を
も忘たる心也、風も水も花のためはうらみある物な
るを、思ひかへす心也、世上にも此理待るへきにや
志賀より帰けるをうな^{*2}もの をんたと読へし

花山 はなやまとは花山也、遍昭か住ける処也、し

かに近かるへし

よみてをくりける 此人は遍昭知人なるへし

119 余所にみて帰らん人に

枝は折共とは、くせちなと出きぬ共したへの心也、
遍昭は、少されたる哥つねにみゆ

120 我やとにさける藤浪

花の折ならぬ時は、やすらふこともなき人のきたり
て、花にやすらふをかこちてよめる心也

121 いまもかも咲匂ふらん

明也、今歟也、もは、そへ字也、もとみしを思ふな
るへし、⁽¹⁾顯昭^{ケンセウ}は、こ嶋のくまといへり、⁽²⁾猿丸^{サルマル}哥也

122 春雨にほへる色も

にほへる色とは、うつろひかたに成たるをいへり、
つよく降雨^{フル}には有へからず、打なひきたる様^{サマ}、面白
也、下句明也、作者同^{サク フナシ}

123 山吹はあやなゝさきそ

あやなく^{*1}なさきそ也、あやなは、かひなき心也、歟^{ヤマ}
冬^{フキ}をうへたる宿に、そのうへし人のみえぬおりなど
行て、よめる也、今夜とは今日なといへる、同心な
るへし

124 吉野川きしの山吹

明也、花ちれば影にもちる心也、うつろひにけり

は、うつるとちるとの心を兼たり

125 蛙^{カワツ}なく井ての山吹

幽玄^{ユウゲン}なる哥^{ウタ}、かはつ鳴は、井てといはむ為也、
^{*2}又は、かはつなとも有へし、山吹の過かたにみてに

行てよめるなるへし、左の注^{チウ}は、作者を賞したる義

也、^{清友、贈太政大臣}
^{嵯峨后父、諸兄ノ孫也云々}

126 おもふとち春の山辺^{*3}に

明也、そこともいはぬとは、所もさためぬ也、旅ね
してしかとは、たひねをせはや也

127 梓弓春たちしより

両義あり、暮春の心は詞にみえたり、三日卅日比の
心也、む月一日より一日くとうつりて、程もな
く、三月晦日方に成ぬるを、おとろきたる心也、そ
れを年月のとよめる句、尤幽玄也^云、^{*4}いるかこと
くとは、弓の縁也、矢のことく早き心也、一説、

^{*4}春たちの心は同前也、年月のいるか如くとは、年
の末までを思ふに程もあらし、とよめる也、三月卅

日比思ふなるへし、此作者の事、長明無名抄、貫之にもおとるましなといへり

128 なきとむる花しなけれは

是も我心より思ひよれる心也、はては物うくとは、すゑよはになるやうなる心也、うき心もすこし有へし、トケンノ杜鵑ホト、キス詩不シカツグンテ如緘ラ口送サン残春ラといへるか如し

129 花ちれる水のまに／＼

まに／＼は、水にまかせて也、花の流をみて山に入ぬれは、次第ニ春もなく成ぬるとやうに心うるは、きらひ道也、此哥は、やよひのつこもり方の山中の木々は皆青葉にて、花はのこらす水になかれたる、眼ガン前ゼンにおとろき思へる心也、とめくれはとは、花を見ゆくさま也

130 おしめともとまらなくに

霞も春の帰る時節は、思たちてとまらぬと也、霞をうらむる心あり、とまらなくにとは、とまら

ぬといふ心のみ也、思へとは、霞のさまをかく思ふ也、忘れて又したふ心也

131 声たえす鳴や鶯

明也、春のうちをたに、こゑたえすなけと也、二たひくるにもあらねはと也

花つみより 師説、花をもとめ愛したる事を花つみ

と云へし云々、或説云、三月比、人々野などを分て色

々の本草の花を折て、無縁ムエンの靈リヤウなどに手向タムケル事あり

き云々、此事定家卿自筆の本に書加給へるありと

云々※1(2)、それをみる女とも也

132 とむへき物とはなしに

女ともをあはれと思ふ心をよめり、花を女によそへたる也、行帰るさまをちる花ことにと読る也、思かへしたる所、あはれふかし、心かとは心哉也

133 ぬれつゝそしめて折つる

雨のうちのよしは詞書※5にみえたり、雨中折たるは、心さしをいたすよし也、年内と読る優也、つこも

りをいくかもあらしといへるも、大やうにて面白

134 けふのみと春をおもはぬ

明也、春の中は、いつとてもたつ事やすからぬ花の

陰なるに、けふのみと思ふ春の花の陰はことに也、

長たかく哀ふかゝるへき哥とそ

以上第五日(卷) 廿八首

古今和歌集

夏哥 夏哥の次第は不定にみえたり、古は夏哥おほくもなかりけるにや、郭公の外少云

135 我やとの池の藤浪

池の藤も咲ぬ、此上に郭公を聞そへなは、いか斗面

白かるへきの心と云説は、嫌道也、心深遠の哥也、

可仰とそ、春過復来て池の藤も咲ぬ、郭公又いつか

なかんすらんと想へる心也、⁽¹⁾ たけたかく面白躰云、

春の内の事をふくめる、余情也、⁽²⁾ 光陰を思へる也

136 あはれてふことをあまたに

あはれとは、愛するをいふ也、心は、たゞひとりあ

はれと思はせんとて、春にをくれて一木さきたるか

と也、花の心を察したる也、夏になりて一木さける

花をみるに、春みるよりも哀にたくひなくおほゆる

によりて、此心をまうけたる也、さくらむを桜をた

ち入たるといふ説は、不用之

137 五月まつ山郭公

ほととぎすは、もろこしには春鳴やうにみえたり、

爰には五月を時と、いひならはせり、されは、五月

まつとよめる也、卯月の哥なるへし、⁽⁴⁾ 打はふきと

は、郭公の鳴時、羽をひろけぬる也、⁽⁵⁾ 躰也、又おり

はへて、⁽⁶⁾ 打はへてなどいふ心もすこしあり、又あま

ねく声おしますすなけ、と云心こもれり

138 五月こはなきもふりなむ

五月は⁽⁷⁾ 珎しかるへからず、と云心にはあらず、い

またあまねからさるさきにきかはやの心也

139 五月まつ花橘の

橘タチバナはとこ世より来る、なといふ故事をよめるにあ

らす、むかしの人などを恋しく思ふ折節、橘のには
ひぬるを、かく思よそへたる也、さ月まつとは、橘
のさ月を待て匂ふ花なれば也、卯月ウいへる心には
あらず、又彼物語の心にはかはるへし

140 いつのまにさ月きぬらん

郭公のあらたなる声に驚たる心也、覚えすして日月
のうつりぬる事を思ふ心あるへし

141 今朝きなきいまた旅なる

郭公の初て打鳴をあはれに聞て、過なん事をおしむ
心也、旅なるとは、初て来るをいへり、宿はからな
むといふ心より、旅なるともいふ也、下句又面白き
心と云*1

142 音羽山けさこえくれは

ことからたくひなく長高タケタカき哥也云、今朝こえくれ
はとは、兼カネても越たりし山なれと、ほのかに初て聞
たる心也、待きつる心にて、今そ鳴とよめり、景気ケキ

のそむさま、尤面白し

143 郭公初声きけは

両義あり、時鳥は妻ツメをこふる物なれば也、初こゑを
聞て面白く心もそゝるにて、かゝる時人もとへか
し、と思ふ心有也、誰とはなく思へる也、思へはは
かなき心也*3けりと思ふ心あり、一云、此初声を心あ
る人も来たりて、おなじくきけかしの心也、両用
之、はたとは、まさになといふ詞也、将字也、但、
しかと理をつくへからすとそ

144 いその神ふるき都の

頭注にさまミツカニの義あり、密勘キヤウ境サカイの分別までを
たゝすに及へからすとみえたり、ならを過て磯の
かみに行心なるへし、磯上イソノは、ふるといはむ為也、
故都とは奈良ナラをよめり、*1*4万葉にはあすが寺とよめり*5

145 夏山に鳴ほととぎす

郭公の声をきゝて、あちきなく悲カナシき心也、詩にも
愁ウレを催*6す心に用也、和哥には此心によめる稀也、マレナリ

物思ある身に此声を聞て、いとかなしきのまさるよし也、妻を思ふ心ふかき鳥なれば也

146 時鳥なくこゑきけは

不^フ如^レ帰^キと鳴と云心を思へり、いと故郷の恋しくなるよし也、さへの詞、心得かたし、思捨つる古郷も恋敷なる心なるへし^{※1}

147 郭公なか鳴里の

汝か鳴也、あはれとは思へとも、うとましと也^{※1}

148 おもひいつるときはの山の

紅のふりてとは、紅の花を布などに染付てふりいたす物也、思ひいつるときはとは、思出る時とつたり、時鳥を思ふ折也、又ふりいて、鳴とは、花やかなるこゑの珍しく聞ゆるさま也、又杜鵑泣^{トケンナク}血^{チニ}ともいへは、紅のふりいてとよめり、此こゑを聞て我思のそふよしを、よそへよめる也

149 声はして涙はみえぬ

我はねにはたてすして、袖の涙にひちぬる故、時

鳥の涙はみえぬとよめり、ひつとは、ぬれたる心也、袖をかなしみていへる也

150 足曳の山郭公

おりはへては、打はへてと同、鳴ねのあまねき心あり、我思にまさるはあらしと思ふ由を、ほとよめりにゆつりて、誰かまさると鳴とよめり

151 今更に山へかへるな

初五文字の心あたりても聞えかたし、一説に、今とよみ切て、更にと心得へし、又云、今殊の心、いつれもわつらはしき義也、今山へ帰るなと、大やうに心得へしと也

みくにのまち

仁明更衣、貞登母也、登は仁

明御子也

152 やよやまで山ほとよめり

なき人を思ふ折節、郭公を聞てよめる也、しての山にかよふ鳥なれば也、なき人にことつけせまほしき心也、下句ことにあはれ也、たのみし人などに別た

るにや、^{※1}紀氏^{キウヂニ}に此名あり、可^レ尋^レ之

153 五月雨にものおもひをれば

時しも晴^{ハレ}かたき五月雨の中に、物を思ひてゐたる折
ふし、夜ふかく時鳥のほのかに鳴て行を、聞てよめ
る也、時鳥も物かなしく鳴ぬ、され共、猶もゆく方
あるや、とうらやみて読り、哀なる心と^{※2}云々

154 夜やくらきみちやまとへる

過かてに鳴声を聞て、夜やくらき、又道や迷^{マヨヲ}とよ
めり、我やとをしもと、卑^{ヒゲ}下したる心あり、くらき
にまとふか、又行へき方ある道にまとへる歟と也、
やすらふへきにしもあらぬ我宿に、と読る也、感^{カン}ニ^{スル}

郭公^{コウコウ}声^{コエ}也

155 やとりせし花橘も

橘は枯ぬにと心うるは、あまりにつよき心也、不
可然、やとりし橘もかはらぬに、と心うへし、尤

幽玄^{ユウゲン}なるへし
カスカニクロキ

156 夏の夜のふすかとすれば

心明也、夜のみしかき心也、夜のとをける、のの字、

優也^{ユウ}云々、又云、時鳥の声に食してかく思ふ也^{云々}

157 くるゝかとみれば明ぬる

暁かたに郭公のしきりに鳴心也、夜をしたふかと聞
也

158 夏山に恋しき人や

声ふりたてゝは、しきりに鳴也、声のしきるを聞て
思よれる心也、時鳥のこふる人や山に入ぬらんと
也、珠^{タマ}しく思ひえたる心也

159 この夏なきふるしてし

かはらぬ声なから、今あらたに珠しく聞故に、それ
かあらぬかとよめり、郭公を賞したる心也

160 五月雨の空もとゝるに

御抄^{セウ}にみえたり、とゝるは、空もうこくやうにと
也、夜たゝとは、夜さはくやうに也、時鳥の鳴さま
さる事也、我思ひのある心よりかくよめる也、物を
思へはかゝりけると思ふ也

さふらひにて 殿上也

161 郭公声も聞えず

此哥、詞には時鳥待哥とあれば、夏の初_ニ入_ニへけれど
も、哥は待心ともみえず、稀に成たる比の心にや、
勅にてつかまつる哥なれば、いづくに鳴声をも山ひ
こもこたへぬ事はやはあらし、と云心あり、フテシノシタ
アマネキアメノ普天下
王土_{ワツト}ならずといふ事なき心也、こたへやはせぬと
は、何とてこたへぬその心也、此時切_キ待心あり

162 時鳥人まつ山に

山にゐて人もとへかし、と思ふ比の心なるへし、*1恋
のまさる也、又時鳥は妻をこふる物なれば、時鳥の
人を待やうに鳴、と聞なしていへる也
はやくすみける所、むかしすみける也

163 むかしへや今も恋しき

へは、やすめ字也、我もむかしを思ふ時分、古郷に
時鳥の鳴をきよて思よれる也、故郷にしもとある、
しもの二字、トニカシ殊_ニ感_ニありと*2云、余情有へしとそ、家

伝説、むかしなとや今も恋しきの心と云

164 ほととぎす我とはなしに

二の意あり、我とは何しにの心也、我こそ物思てか
なしきに、我と共には何しにの心也、卯花のうき世
中とは、重詞也、渡りかたき世を歎心也、又云、我
こそあらめ時鳥は、我にもあらぬになと鳴渡るらん
と也、我にてなきの心也、此義宜_{ヨシキ}歎_ト云

165 蓮葉のにこりにしまぬ

不染_スニ世間_{セカノ}法_{ホウ}如_ニ蓮華_{レンケノ}在水_{スイ}云、人の心は蓮のこ
とく清き物也、しかるに此心を以て蓮葉の露をみ
て、玉とあさむく心をかへりみたる也、露をは露の
まよとみるへきに、玉とみる心をきらへる也、あさ
むくとは、愛_{アイ}し弄_{ロウ}する心也、御抄、いつはりはかる
也*3云

166 夏の夜はまた宵_{ヨイ}ながら

月を執_{シツ}心のさま、詞にもみえたり、宵のまとおもひ
しに明ぬれば、月もいつくにか有らんと思ふに、*4さ

もあらねは、かくよめり

167 塵チリをたにすへしとそ思

妹と我かぬへき床夏といふ説は、嫌道也、妹イモとぬる

床のやうに、花の上をおもふ也、花を愛したる心

也、又は、床といはむために、妹と我ぬるといへり

168 夏と秋と行かふ空の

行かふは行ちかふ也、*1かたへは片方也、ナカハス、半涼しき

心也、涼風のすこし吹比*2珎しき様也、裏、暑シヨ涼リヤウしき

善悪センアクたとへたり、暑シヨは悪也、悪はつよし、物モノを破ヤムル

る也、されは善悪センアクノアイトイ相對したらむ時も、悪方アクノヘ用心

すへき事也とそ

*3以上第六日(朱)卅四首

*4古今 第四

169 焮ヒキきぬとめにはさやかに

春哥の卷クハントフ頭のごとく、さしむきてやすらかに心う

へし、さやかにとは清キ心也、早涼ハヤクサシキのいたる比、

時の氣キにおとろく心也、夏*5の空のくるしき、引かへ

たる心也

秋立日アキタチヒうへのをのことも、殿上人テンジョウジンともの河せうえう

の様、面白かるへし

170 河風の涼しくも有か

此哥、晴の哥の躰也云、逍遙セウヨウの折マヅリに似合ニアヒたるとな

ん、貫之か哥は、其ものくによく叶云へり、あ

るかとは、有哉也

171 我せこか衣のすそを

上句は序也シヨ、うら珎メツラしきといはむため也、又めつ

らしきといふに、我せことをけるもたよりあり、う

ら珎しきとは、なにとなく珎しき心也

172 昨日こそ早苗サナエとりしか

心明也、程ホトもなく過て又来る事、万如マンニ此、景氣ケイキに

のそむ哥也云と云

173 焮風の吹にし日より

別れしよりまたぬ日はなけれども、殊コトニ秋に成て、

わりなく思ふさま也、是は七夕にかはりてよめる哥也

174 久かたのあまの河原の

別の切なるへき事を思やりてよめり、君とは彦星の事なるへし

175 天川紅葉を橋に

紅葉を橋に渡すにやと也、紅葉の橋と云物のあるにはあらず、秋をのみ契りて渡る故、かく思へる也、七夕つめとはつま也、実方の、かよふ浮木にとよめるは、紅葉の橋の有やうによめり

176 こひくへ逢夜はこよひ

心明也、恋くへてとをきて、あけすもあらなんといへる心かなへり、第二の句、面白き詞也

177 あまの河あさせ白浪

浅せもしらぬ心也、渡りはてねは、とは、ほのかに逢夜の夢のことくなるさま也

同御時后宮

178 契心そつらき

明也、心あさからす、一夜のあかぬかなしみよりかく思ふ也

179 年ことに逢とはすれと

明也、哀なる心也、をもく吟すへし、感ありと

180 七夕にかしつる糸の

かしつるいと、願糸の事也、竹頭糸左糸七右糸七、第一二句、序也、年のをと、年々相続してたえぬをいふ、思のいとなどいふか如し、恋や渡らんとは、七夕の心をふかく察したる心也、はかなき契にして、年々なかく恋渡らん事を歎也

181 今夜こむ人にはあはし

切に思人など待心とは、みるへからす、大やうにみるへし、今夜はあはしとは、七夕の契のさまをいまはしく思よし也

182 今とはとてわかるゝ時は

明也、切なる心也

183 けふよりは今こむ年の

いつしかはいつか也^{*1}、こし方を思て、今はたのむか
たなき心也、切なる哥也^{*2}

184 木のまよりもりくる月の

木間コマの月のもりかねたるを、あはれとみるあまり
に、秋といふ物はたゞ心尽しにきたりけるぞ、と思
ふ心也

185 大かたの秋くるからに

おほかたにくる秋なれとも、思ひはたゞ我身ひとつ
に来ぬる思也、此哥も、をもく吟味キンミすへしとぞ、物
思人の、秋になりて万マンを思つゞけてよめるにや

186 我ためにくる秋にしも

わか身にうかれとてくる秋にはあらねとも也^{*4}、虫
のこゑは悲カナシ生シる物也、まつそかなしきといへ
は、よろつの思ひこもるへし

187 物ことに秋そかなしき

此哥初秋に入たる、尤ユ感カンあり、もみちつゞとは、一

木などやう／＼色かはりそむる比より、世上の何事

もきはまりゆくことはりを観したる心也、哀アハレふかき
哥也^云、高円タカノの野ちのしの原ハすゑさサはき、^{*7}とよめ
る哥も此類の心なるへし

188 ひとりぬる床は草葉に

明也、秋くる宵ヨはとよめる、夜のなか／＼らん事を思
ふ心あるへし

これきたのみこ 仁和第二、元右中将云、光孝クワウカフ

御子也、御位の事不定なりし故、御子もまつた、
人にて、後にみこになり給し也、宇多御門も、初は
侍従にてまし／＼けると云

189 いつはとは時はわかねと

大底ダイシ四時シ心シン惣ソウ苦ク、就中スヘテクルシ腸断ツイテナカニハラワタ是秋ハタフコロシユフテ天、此心也、
いつはとは、いつとは也、思のいたりての限也
かむなりのつほに^{*9} さるへき人々の、秋の夜をおし
むさま面白し

190 かくはかりおしと思ふ夜を

秋風すゝしく、取あつめて深行空のけはひえんなる

比、人々秋の夜を哀みおしむ心なるへし、其心のあ

まりに、人さへそとよめる也、秋の感さまをこめて

よめり、月の夜とは見えす云、余情かきりなし

191 白雲にはねうちかはし

影さへといふ説は、不用之、御抄、しら雲にはね打

かはしとは、中空などにはるかなる心也、哥の躰を

みるへし云、月前鴈とあらん題には、此躰尤可然、

落鴈などはいかゝにや

192 さ夜なかとよは深ぬらし

夜もはや深ぬらんと打なかめたる折節、鴈打なき

て、月やう／＼かたふく空の様なるへし、哥の躰た

くひなしと云、古風なるへし、万葉の哥にや、又

幽玄也云、風情詞云、つき言語道断云

193 月みれば千々に物こそ

夜もなかき比、月に対しては千々のかなしみの生す

る心を、いひつゞけたるなるへし、月は陰の氣に

て、月に対すれば愁も生し、身一の心ちすれは也

194 久かたの月の桂も

明なる月にむかひて思やれる心也、紅葉を橋、とい

へるたくひなるへし

195 秋の夜の月の光し

月如屋といへるやうなる夜のさまなるへし、くら

ふの山に対していふにあらす

196 きり／＼すいたくなきそ

人のもとにてとあれは、我宿よりも夜のなかき心也

と云説、不用之、又、はしめて我思人のもとにとま

りて、行末のなかき思ひとなるへき事を思てよめる

也云

197 秋の夜の明るもしらす

明るもしらすとは、いたくなくさま也、それをき

て、我ことくとよめり、思の切なる心也

198 秋萩も色つきぬれは

秋はきもやう／＼色かはる時分、葦の声を聞て、

我ことくかなしきにや、とよめり

199 秋の夜は露こそことに

露はいつもをく物なれとも、秋の夜は殊深かるへし、露の夜さむなる比の心也

200 君しのふ草にやつるゝ

まつといふ心より、君しのふ草にと読り、第一第二句、やさしき詞也、荒たる宿にひとりのかりて、松虫の催す声にいとかなしき心なるへし、恋の心などにや

201 秋の野にみちもまとひぬ

旅の心にあらず、野遊にこゝかしこ分つゝまよふ様也、松虫の声する方になといへる下句、野遊の心にかなへり

202 秋のゝに人まつ虫の

虫の哀に鳴こゑ、人まつやうの心あり、下句、其心よりいへる也、とふらはむは、なくさめむの心也

203 紅葉はの散てつもれる

秋もやうくふかくなりて、紅葉のちり敷たる比の

宿には、とふへき人も思ひ絶たるに、松虫の人まぢ

かほに鳴を聞て、かくよめる也、こゝらはおほき心

也、一云、我思にて虫の心を察したる也、秋の末の

哥とみえたれと、虫の哥をあつめたる処にて、始末

相交なるへし、又、松虫はたのむ人もあるにや、と

いふ心もあり

204 ひくらしの鳴つるなへに

日くらしの声を聞て、日も暮ぬるにやと思ひしは、山の陰にて有けるとよめり、なへには、鳴つるからになとの心也

205 ひくらしのなく山里の

明也、ひくらしは山里のさま也、姿心優に心ふかし、以上三首は猿丸哥也、ことに好士也とそ

206 まつ人にあらぬ物から

鴈の鳴そめたる声をあらたにきけは、まつ人などの来たるを聞こちする由也、まことにさる事也

新鴈の声を聞たる感よりよめる也

207 秋風に初鴈かねそ

蘇武か故事は勿論なれとも、初鴈の声を聞て面白く

思ふ心より、たか玉章をと思へる也、初鴈かねと読

る、肝心也、是も珍しき声に感して思よれる下句也

以上第七日(朱) 卅九首

208 我門にいなおほせ鳥の

此鳥の事説々あり、御抄みえたり、如此事をは、御

抄も態かくして注し給事あり、此鳥三鳥の一也、

口伝は裏の心也、おもての義を用へし、御抄のおも

むき面白し

209 いとはやも鳴ぬる鴈か

いとはやくも也、鴈かとは、哉也、かゝる折、鴈の

鳴たる也、賞したる心也、色とる木きとは、染初

たる心也

210 春霞かすみていにし

先景氣を思へし、春の空よりの心こもれり、春の空

に帰る折はうらめしき心あるを、秋来て初鴈の声を

きけは、恨をも忘て感する心也、世上の様も如此な

るへし、又云、春秋の程もなく世間のうつり行事を

思心也

211 夜を寒み衣かりかね

衣かりかねとは、衣をかると云縁有詞也、鴈の衣を

借といふ心にはあらず、哥の心は、秋の空の夜寒に

なる比、鴈鳴折ふしの景氣也

212 秋風に声をほにあげて

ほにとは、あらはなる也、鴈を船にたとふれば也、

初五文字ことに面白し、秋風の空に鴈のさやか

に鳴たるを聞てよめる也、天のと渡るとは、空を渡

る也、景氣又可見、遠天の晴たるに遙にきく

也

213 うき事を思つらねて

秋の夜のね覚に、こし方の事、又時にあたりたる思

など思ひつらぬる時分、鴈のなく折愁にたへすして

打鳴心也、又云、一事／＼を思ひつらぬる心也云

214 山里は秋こそことに

山里の哀はいつと侍らねと、鹿の声する時分の秋の
ね覚こそ、ことに侘しけれと、*1くときたてたる也、
侘しきとは、一事ならず心ほそき様也

215 奥山に紅葉ふみ分

外山トヤマのもみちも散はて、奥山ウヤマのかけをたのみし
に、それも落葉の比ふみ分て鳴鹿の声に、物の限を
おもふかなしみ也、かゝる時、秋はかなしと也、

(1) 是貞コレサダの家の哥合とあり、不審也、時代相違す、猿丸サゲイ

詠也元明比人云

216 秋殊にうらひれをれは

*2とよみ、うらひれとは、物思ひなつむ様也云、わ
か物思ふ折節、花もやう／＼おとろへて、露けくう
つろふ時分なるへし、此時鹿も物かなしけに、とり
もしつめす鳴を、ことはり也と聞心也、秋萩*4にうら
ひれとつゝけたるは、萩に対しての心にや、*2又、か

ゝる折ふし、鹿の声を恨る心も侍るにや

217 秋萩をしからみふせて

しからみふせては、鹿の萩に立なれつゝ鳴様也、
(1)一云、領する心也云、*5めにみえぬとは、いつくと
もなく聞たる也、(2)はるけき野への様也、をとゝは声
の事也、又云、さやけきは、ひやゝかなる也

218 秋殊の花さきにけり

秋はきの咲ぬるをみて尾上の鹿は、と思やりたる
也、此高砂は山の惣名也、たかき山をいふへきにや

219 秋萩のふるえにさける

古枝フルヘには花咲ぬへくもみえぬに、又咲たる也、故人
の、もとの心を失せぬに、よそへたる也、詞にみえ
たるか如し

220 秋はきの下葉色つく

萩もやう／＼色かはる比、我いねかねたる心より、
人の事をも思やりたる也、時節の感なるへし

221 鳴渡る鷹の涙や

物思ふ比は、萩の露もみし秋にもあらずたゝならず
みゆる折に、鴈の鳴渡るを聞て、かく思よれる也^{※1}

222 萩の露玉にぬかむと

無義、ならの御門は聖武天皇也、奈良七代の内也、

此集、号奈良御門、三あり^云、裏、君子の心は、

わか賞^{シヤツ}する事をも世間にゆつりて思ふへし、憐愍^{レンミン}

の心也、御門御製に殊勝也^云

223 折てみは落そしぬへき

たはゝ、とをゝ、共に用之、なひくさま也、心は面

白き様也、花の露を愛して、とかく思ふ也

224 萩か花散らむを野の

思ふ人などのかたへゆかむと思ふ心にて、かゝる折^{※3}

こそ、又哀とも思ふへけれなど、又云、たゝ萩を愛^{※2}

する心にて読り^云、此義猶よろしき歟^云

225 種の野にをく白露は

目前の様也、面白躰なるにや

226 名にめてゝおれるはかりそ

序には、嵯峨野にて馬よりおちて^云、爰には、題

しらすとあり、優になれるにや、女郎をは女によそ^{※4}

ふれは也、作者遍昭なれはかくよめるなるへし、女

におつる心也、馬よりおつる心をは不用也、又序^{※5}

あるをなをして入たる事もあり

227 をみなへしうしとみつゝそ

女郎花、墓上より生たる花也、など云説、不用之、

心明也、又詞書、遍昭かもとにまかるとあり、其心

あり、遍昭はたくひなき道心の人也、其所へ心さし

て行道にて、女郎花の男山といふ山に咲たるをみ^{※6}

て、此心出来る也、遍昭は最愛の妻を捨て遁世の人^{トシセイ}

となむ

228 秋の野にやとりはすへし

野遊の心也、とても旅なる身にもあらずと也、女郎^{※7}

を愛する心也^{※8}

229 女郎花おほかる野へに

明也、あやなくは、せんもなき也、又は、あちきな

ぎ也

朱雀院シユシヤクインの女郎花合

宇多御門ウタノミカド御事也、此院ココノイノミカドにまし

くける時の事なるへし、朱雀冷泉シユレイセンは、おりる御門イノミカド

まします院イノ

230をみなへし秋の、風に

心をもをかす打なひきたるを、はかなく思ふ也、女

のさま也、又云、女郎花の心一を誰にかよすらむ、

とゆかしく思ふ由也、いつれも面白云

231秋ならて逢事かたき

明也、珍しく思ひえたる心也、更サラにくたらぬ躰こと

から也

232誰か秋にあらぬ物ゆへ

秋にあふも、女郎花の我秋にてこそあれ、心より色

めきて又うつるひなどするも、誰ゆへならぬ物をと

也、女の心になしてよめる也、色に出るとは、思ひ

の色也

233妻こふる鹿そ鳴なる

女郎花を妻となしてもなくさめかしの心也、躬恒か

作、常にかくたくみ也

234女郎花吹過てくる秋風は

明也、なつかしき心あり

235人のみる事やくるしき

霧のうちには、ほのかに花をみて思よれる心也、景気

を思ふへし

236ひとりのみなかむるよりは

二の意あり、やもめにて独ヒトリながめたる比、かく思

也、又云、女郎花*3のひとり有をみて、荒アサたるやとり

なりともうへてなくさめましと也、女郎花*4のひとり

なかむる心をおもひやりたる也、いつれの説も面白

し云、始の説、猶宜歟ヨロシキカ云

兼覽王 惟喬男

237をみなへしうしろめ*5てくも

うちあれたる家の、男ひとり住らん*6などおほゆる所

に、女郎花*7のさけるをみて、うしろめたしと也、た

ゝならしなんと思やる也

238 花にあかてなに帰るらん

明也、こと書の心みえたり、あかす帰る心也、世に

つかへ人にしたかへは、身にもまかせぬ心あり、貞サダ

文好色フシカウシヨクナル者なりき云々

以上第八日朱卅一首

239 なに人かきてぬきかけし

心明也、たか袖ふれし宿の梅その類也、此五文字

をは、やはらかに吟すへし云々、たしか過たる句な

る故也

240 やとりせし人のかたみか

思ふ人などの宿サトにかりに立よりて、あかす思へる心

より思よれる也、一説、我宿に人のやとりし其かた

みともいへり

241 ぬししらぬかこそほへれ

何人かきてぬきかけしの類也

242 今よりはうへてたに見し

大かたも野への薄ほにいつる比の秋は物あちきなき

に、殊ト物思ふ人などは物かなしき心なれば、かく

いへる、有増事也、たにの詞、つよくはみるへから

す、うへてもみし、などの心なるへし

243 秋の野の草のたもとか

下句は上を訓尺したる也、秋の野の景氣を愛する哥

也、打まねくやうなれば也※1

244 我のみやあはれと思はむ

物ふりたる宿などに、きりくすの打なきつゝなて

しこの哀に咲たるをみて、尋とふへき人もなければ

は、我のみや哀と思はむとよめる也、又云、我のみ

や、レとは、誰もかゝる様をはあはれとこそおもは

めと也

245 みとりなるひとつ草とそ

明也、裏ウラ、レ一氣キのおこりて、葦芽アシガイの如コトシしなとい

へるより、人生のさまく四時をくくりむかへて榮

へ衰ふる事を、思ふなるへし

246 もゝ草の花の紐とく

たはれんとは、たつさはらん也、野遊の心也、うかれ行とも人なとかめそと也

247 月草に衣はすらん

明也、はかなく思へる、事*1(マヤ)に面白し云、哥人の心は、はかなきを賞して、物にふかく着チャクする性シヤウをは嫌也キラフ

248 里は荒て人はふりにし

荒たる宿の様也、人はとは、我身のふり行心、又は母などの事にもや、物かたりのつゝあてにと詞にあれば、かゝる様をおほしめしやれ、と思心なるへし、尤哀ふかき哥云、こまやかなる躰云にや云

古今、一五 秋哥下

249 吹からに秋の草木の

此哥、序には野への草木とあり、野へと有しを、貫之撰センシ入コレヲ之時、焮フタメと改フタメて入たるなるへし、吹か

らに、一山風の一吹くふく度に、秋の草木のしほ

れゆく故云、あらしといふらん、とよめり、あらしき也、山風は嵐と云字也、といふ説は嫌之也、むへとは、ことほり也と云心也、宜字ムベ云、康秀ヤスヒテはたくみなる躰をおほくよめりと*2云、九品ホンの時下品ケホンに入と云

250 草も木も色かはれとも

草木のうつろふ比、さもあらずして、しかも浪の花*3の面白きをよめる也、景氣有ケイキ云、たゞしき哥也云、或説イハレ、家集イハレ、人の処イハレにまかりたるに機嫌キゲンよからぬ事ありて、帰カヘて大盤所オホバンシヨに出たるに、人々のなたらかなるをみて、大海のをもむきを思ひて、独吟ドクと云、如何、独吟のを又哥合に出したるにもや

秋の哥合しける 何の家ともなし

よしもち 淑望シュウボウは貫ツラエキ之イニウツシか猶子也云

251 紅葉せぬ常磐の山は

明也、余情ヨセイあり云、ときはの山里に住人は、紅葉

なんとの面白き景になくさむ事もなくて、只風のを
とにのみ秋を聞らんの心也、聞渡ると云詞、感あ
り、秋風の思ひのみを思ひやる心なるへし

252 霧たちて鴈ぞ鳴なる

面白き躰也云、第五の句たしか過たると古人評け
り云

253 神無月時雨もいまた

神みなみひ朱、神無月によめるにあらす、又(1)、神無月の
時雨もいまたふらぬ比と也(2)、神無月は時雨といはん
ため也、裏、(朱)身上シノウヘの行末イソクなんとを人々しらさる
也、此哥は此理を思て、身退※1シリンクへきをしへ也*3

254 千はやふる神なひ山の

神社シヤの紅葉なれは思懸し、なといふ説は嫌之也、ち
はやふるは、神とよめる枕詞也、境界キヤウカイうつりて本
心シンを失ふ処をかへり見たる心也、又、うつくしき物
もうつるふ習ナライを思ふへき也

255 おなしえを分て木葉の

秋ニシの西より来るといふ事は勿論なれとも、今此紅葉
をみるに、領解レウゲしたる心也

256 秋風の吹にし日より

音羽山は、紅葉を賞シヤウする山也、秋の立にしより程
もなくうつり行事を、思へる心あり、景気面白き哥
也

257 白露の色はひとつを

明也、其色々にわかれて染ソメたるをかくよめり*2
裏、(朱)君子クニシたらん人は平等の心なるへきに、偏頗ヘンな
んとある事を歎ナゲクく心也

258 秋の夜の露をは露と

秋の夜の露はことに深くして、草木の色も染ます物
なれは、秋の夜の露と読る也*3、感したる也云、野
への色のたくひなくみえたるに、鴈の鳴折、ひとし
ほなれは思よれる也、鴈の涙や落つらんのたくひ也
259 秋の露色々ことに

明也、又、異コトにとよむ説あり、心は同にや*4

260 白露も時雨もいたく

明也、見所ある哥也云、守山に漏モレとよそへたり

261 雨ふれと露ももらしを

かさとり、笠を取トルと云心にはあらず、雨に笠は縁ヘリあれはつゝけたる也、心は明也

262 千はやふる神のいかきに

あへすとほ、秋にたへすの心也、心は、時節来りては、神のいかきをたのむ葛ものかれぬ事はりにてうつるふ心也※1、世中の理、又同

263 雨ふれは笠と山

是も、雨ふれは笠をとるといふ心にはあらず、哥の心に不可然云、笠の縁ヘリによめる、優ユウなるへし、心は、雨ふれは袖カサさへそてるとよめる也、笠取山二首（朱）

の間に、神のいかきの哥の入たる事を不審ありしに、答タフ云、山はいかてかと読ヨメるさまと、神のいかきにははふ葛もとの哥の心つかひ、類する故也、又、前の笠取の哥は、白露もいたくもる山と、雨ふれと※2

露ももらしとの詞の類する故也云

264 ちらねども兼カネてそおしき

明也、今は限の色とは、染ツクシ尽シしたる比の事也、欠盈カケミチの心を思ふべきよし也

265 たかための錦なれはか

いかなる人のためにか立かくずらんと、霧の中にあがす見たる心より思ふ也、人のために切にするか敷の心也、景気面白云し、怪惜リンシヤクするかと思ふ心にはあらず※1

266 妖霧は今朝はなたちそ

さほ山に霧をよめる処也、よそにてもみむとは、心さしをふかくつけたる心也、今朝とは、只今の時節の感也カ

以上第九日（朱）廿八首※2

267 さほ山のはその色は

心は明也、妖はふかくも成ナにける哉とあるを、心にしめて吟味キンミすへし、万の心こもるへし云

268 うへしうへは

花に付たりとあり、かゝる哥は殊^{*1}花を賞して読へし、うへしうへは、かくうふるとうへはの心有へし、秋なき時や^{云々}、秋たゝむ時は、必年々咲へしと也、第二句粉骨也、哥人思へき所也^{云々}

269 久かたの雲の上にて

菊^{キク}を星^{ホシ}かとみたる也、あやまたれけるとは、おとろく心あり、左の注に、殿上ゆるされぬ時めしあけられたる時と^{云々}、其心をよめる也

270 露なからおりてかさゝむ

菊の齡^{ヨバイ}をのふる心也、露なから折てかささんとよめるわたり、爰^{ココ}にやさしく読る^{云々}、露は草木を養^{ヤシナウ}ふ心あれは也^{*2}

271 うへし時花まちとをに

明也、うつろふ秋にあはむとやみしの心は、世間の事みな如^レ此、この哥におなし、し文字三あり、され共、みゝにもたゝぬにや^{云々}^{*4}

^{*5}おなし御時、吹上^{フキアゲ}の浜^{ハマ}のかたに、其時のうちに、

此哥は吹上のかたありし所によめり、といふ詞也、すかはらの、小書^{コカキマシ}にみえたり、右府^{ウフ}にて在^{マシ}ましけるか、左迂^{サセン}の時除^{トキナ}名たり、其後、贈位^{ソウイ}たひなり^{*6}しか共、それは又、此集以後の事なれば如此^{云々}^{*7}

272 秋風の吹上にたてる

時の興に乗して花を賞する哥なれば、珍^{メツラ}しくあらたによみ給へる也、花とやみん、浪とやみんの心也^{*8}仙宮^{センキウ}に、かたを、絵^エを題^{ダイ}にてよめる也

273 ぬれてほす山路の菊の

仙境^{センキヤウ}のさま也、ぬれてほす露のまとは、その程也、いつかちとせを^{云々}、仙宮にいたれる人に成てよめり、やかて千とせをふる心ちする故にかくよめり、塩^{シホ}かまにいつかきにけんの類なるへし^{*1}

274 花みつゝ人まつ時は

白衣佳人^{ヒヤクニノカジン}の故事は爰^{ココ}には不用、一二句、花をみて人をまつとさしつめて心うるも、嫌^{キラウ}心也、人を待

比、花の白妙なるを何となく思ひよそへたる心とみるへし

275 一本と思ひし花を

菊を花とのみよめる也、只みたる端的也、此哥花の影のうつる心は勿論なれば、其沙汰をせざるをよしとす、右四首同時哥也

276 秋の菊にほふかきりは

明也、句はむ限はかさゝんと也、詞にみえたり、
*1 あらたになくなりたる人を思ふ比などにや、花より
*2 さきといへれば、後ともしらぬ心あり

277 心あてにおらはやおらん

かさね詞也、おらはやとは、有増にいふ也、白妙なる花のうへに初霜のきたる様の心也、花をも霜をも愛感したる心なるへし、心あてにとは、霜のきまとはすによて也、埋はてたるにあらず

278 色かはる秋の菊をは

白菊のうつろひそむる比面白きを、ふかく愛する心

より、かく思よれる也、一草より二様に花の咲たるかと思よし也

仁和寺に 寛平法皇此寺に在ましける比なるへし

279 秋をきて時こそ有けれ

さかりの秋を置いて、又時こそ有けれと也、うつろへるを愛したる也、仙境の事を思ひてよそへよめる也、賞し奉る心也

280 さきそめし宿しかはれは

明也、詞みゆ、色さへにとは、所もうつろひたる心あり

281 さほ山のはその紅葉

明也、ちりぬへみとは、ちりぬへくなりぬる也、かゝる折をみよと月の照すと也、此哥よりは秋の落葉の部也、故、紅葉の哥の次、菊哥ありて、又如此

282 奥山の岩かきもみち

いはかきは、岩のかさなりめくりたるか、垣のこくなるをいへり、奥山の様明也、又詞にかける心を

よめり、紅葉を我身にたとへてよめり、日光は君恩クニオンのよそなる心*1、又いく程も有へきならぬ心也

283 たつたかは紅葉みたれて

当位即妙之景氣也、下句殊たくひもなく新なる作也

云

此哥は、文武モンム、定家卿注也、奈良御門を文武と注

し給事有子細、序シヨいたりて可聞之云、貞応テウラウノ本の

規模也、嘉録カコクノ本*2、阿仏写之云、文武天皇行幸*3の

時御哥也、嘉録本*4書加事の沙汰、後光厳院御時、

良基公ヨシモトへ為明卿申上し事也、又此哥、上の三句を古

の字にあて、下二句様の委を今の字にとる、古今

一部は此哥より出ると云口伝あり

284 龍田河もみち葉なかる

家隆卿は、嵐カリエウふくらしとはなとなかりげんと云、

定家卿は此義をうたて思給へり、打吟するにあち

はひ限なし云、時雨ふるらしとあれば、こし方時

雨きぬるより今も思やれる心こもりて、犬やうにお

もしろじとそ、又上下をならへてみるへし、小書

云、此哥不注人丸哥*6、定家卿注也、何本*7人丸

注せすと也、されとも人丸の哥也と云注也、此哥を

も古今の字にとる事あり、此立田河の二首は、君臣

の道、此集の根源也、非アラスンヘシセツニ師説者難許カタシヘカリ

以上二首の子細、序相伝之時可聞之云

285 恋しくほみてもしのはむ

散にし木末の紅葉の恋しくは、木本の落葉*1の面白き

折、風の吹ちらすをみてよめる也本ノマ

286 秋風にあへす散ぬる

二の意あり、秋風にはかなくたへす散行もみちのこ

とく、我身行ゑもさためすとかなじむ也、又云、紅

葉はのと序シヨをきて、心は、風にさそはるゝもみち

葉カ、落つく所も有へきを、我身は更ニ行ゑもなき

事をかなしむ心也、是もしにあたりて也*9

287 穉は来ぬ紅葉は宿に

穉はきぬとは、穉も過行心也、ゆきぬといふを上略リヤウ

したる歎と云、六卷注も、秋の過る心也とあり
云、心は、秋暮て紅葉はちりしける比、ふりたる
宿のさま也、うしともかなしともいはぬ心にこもり
て感あり云

288 ふみわけてさらにやとはむ

さらにやとは、態といふ心と云、又といふ心にも
通すへきにや、山里などにも人の家にも紅葉の
散しけるをみて、忘かたくしたふ心ありて、さらに
やとはんとよめり、ふりかくしてし道とみなから、
といへる二たひの心にもや

289 秋の月山へさやかに

明也、濃なる躰也云、山へなといへるわたり面白
し云

290 吹風の色のちくさに

当位の面白心也、第一二句の作あらた也

291 霜のたて露のぬきこそ

露霜の織出したる紅葉の事也、紅葉の色々面白をみ

れは、程もなく散行事をおしむ心よりよめり、珠
しき作也

292 侘人のわきて立よる

雲林院は花も紅葉もある所也、世間不運なる理也、
世上はかゝる習そと観して、心をやすんずる事有
へし、又、執心あらせぬも、よしやと思かへす心も
有へきにや

293 もみち葉のなかれてとまる

明也、湊とは、津みなとて、舟どものより所と
する処也、女御の御事によそへて、めくみのふかき
心を、紅ふかきとよめり、紅葉の、人々の寄す
る心さしもふかゝるへし、しかれば又恵も深かる
へしの心也

294 ちはやふる神世もきかす

立田川の秋の末つかた、落葉の当位、言語も難及さ
まなれは、神世もきかすとよめり、是も御息所の御
事をほめたる心あり

295 我きつる方もしられず

明也、ちるとまかふとは、ちるとなれば必道のまかふ心也、又、たゝ散まかふなるへし、我きつる方さへしらぬは、散まかふ事のしけき心あり

以上第十日（朱）廿九首

296 神なひのみむろの山を

明也、落葉の哥也、紅葉に映したる心のみ也

297 みる人もなくて散ぬる

明也、深山の紅葉をあはれふ也、詞におらむとてとあり、かゝる所のを、我さへおらすはの心有へし

云、又た、此所のさまはかりにても

298 たつた姫手向る神の

たつた姫の心を尽してそめくし紅葉をちらすは、

たむくへき神の有にこそ、とおもへる也

をのといふ所に 当国の小野にやと

299 秋の山紅葉をぬさと

秋の山かぬさと手向る故、我さへ旅心ちすと也、

旅にぬさを手向る事なれば也、心ちして、心ちする

といふ詞は耳なれたる故にや、きはる也、但、旅心ちするといへるはくるしからすと

300 かみなひの山を過行

神なひの山を過て、立田河の水上、神なひ山也

わか過行やうに焮の過行とよめる也、其秋の手向るぬさも、又我過行事はいはすと

301 白浪に秋の木の葉の

眺望の哥也、落葉の河上にうかへるをみては、大方

の秋の愁世の思ひをもなくさめぬるに、白浪のは

やき流に、をしなかけて行程に、なくさめし心のたよりをうしなふ処を、海人の船をなかつたるによそへたる也

へたる也

302 もみち葉のなかれさりせは

五文字先興すへき心みゆ、水上の紅葉の面白よりお

こる也、水は不変なる物なれば、流さりせは誰かし

らまし、といへり、又、水上の景に乗して、落葉

の恨をも忘たる様也、此哥のたくひを、二条家の作
の躰に執したると云^{*1}、すこしの所に珍しく成義也

303 山川に風のかけたる

落葉の留て水をせく心にはあらず、山川のはやき水
上に、落葉の嵐もはけ敷て間断なき様也、景氣を思
へし云、上句たくみなる作也、志賀山越ゴクの秋の興也

304 風ふけは落るもみち葉ヨ^{*3}

ちらぬ影さへ、ちるもちらぬもみゆる心也

305 立とまりみてを渡らん

無義、絵にかける其人になりて読る也、景氣也

306 山田もる秋のかりいほに

或云、たうといふ鳥也、不用之、又は庭たゞき也

云、此ニへ無用也、^{*1}此哥にては鳥の名をたゞすに不

及、此哥は当位面白き様也、秋の田面の露をみる時
の心也、稻イネの縁也(2)

307 ほにもいてぬ山田をもると

ほにもいてぬ比より程をへて苦身クシしたる様也、哀アハレ^{*4}

なる心也云、五文字より山田のさま也、猿丸哥也、
家集に恋哥也

308 かれる田におふるひつちの

ひつちもほに出る事もあり、是はほにいてぬをみて
よめる也、朝にもつかへし人の出身なくして、身上
を比してよめる也、身を思ふ折節見たる作也

309 もみち葉、袖にこき入て

明也、秋も暮ぬ、紅葉もちりはてたり、と思はん人
にみせはやの心也云^{*2}

寛平クハシロ、ふるき哥奉れと云、みむろの山にしくれふ

るらしの名哥をたてまつりて、そのおなし心をよめ
る也

310 深山より落くる水のヲチ

或説、落葉も過て水の元の色になかるゝをみてよ
める心也云、嫌道也、落葉のなかるゝをみてよめ

るなるへし、詞にもおなし心をとみえたり、尤哀アハレ
なる心也云、俊成卿、此哥を立田河の哥に合給へ

りと云^{*1}、俊成卿は、み山より落くる水を^{*2}、みむろの山に時雨ふるらしに合、定家は^{*4}、秋は限といふを、みむろの山に時雨ふるらしに合給へりとなん、

此用様二浅深有へしとぞ

311 年毎にもみち葉なかつ

立田河紅葉に名をえたる所にて、年々歳々かゝるよしをよめり、みなとは、紅葉のなかれとまる所をいへり

312 夕月夜をくらの山に

鹿の声を今きく心にあらず、夕月夜の比より鹿のねを聞し内に、殊の暮ぬる事を思ふ也云、又云、夕月夜は、をくらの山といはん枕言也、或、今きく鹿の声なから、秋も暮たる心也、何も用べき説也、後の義は猶優なるにやと云、声の内には、鳴一声に明るしのめの類也、所の興を思入てみるへし

313 みちしらは尋もゆかむ

秋をしたふ心也、秋を尋もゆかんと也、おなじ卅日

とは、前の詞書の哥の同時のつこもりの事也と云、行秋のぬさを手向ると也

古今 第六冬哥

四季を六卷とする事六義を表す、六根をも

よみ人不知 口伝延喜御製云、彼御製はいつれも

其心ふかし云

314 立田川錦をりかく

明也、をりかくとは、織かくる也、にしきをりかく

神無月、とつゞけてよむ説、又、神無月の時雨の雨

を、と心うる義あり、景氣の面白き心あり、共用

之、其謂重可聞之云、又貫之作と云義あり、

しからは、やすらかにしてしかも一ふし有躰なるへ

し云、猶有口決云、文武天皇立田川に行幸あり

て、一人丸合躰として誦給ひける哥をうつしたる心

也、されは、文武人丸の二首を古今の古の字にあ

て、此哥をは今の字にあつる也、此哥の心を二に云

事、御門と貫之との心にあて、二首用る也、仍貫
之か哥、別にはなし、此哥、冬の巻頭に入事、此集
に秋おほく落葉の哥あり、冬の落葉に此哥よくあら
は也、下の心、春夏は不定之時也、冬は物皆おさ
まりて実なる時也、春は花さき、夏葉さかへ、秋色
付は、皆不実之義也、草木落葉して根に帰るは実所
の姿也、是王道の大意也、実なる所に心を定をける
は、あたる方へ心をやるも、みたる、心はなき也
315 山里は冬そさひしき

山里を都に対していへる心也、山里は四時さひしけ
れとも、取分冬そさひしきと也、春は花鳥のたより
にも入めをみる事あり、夏は郭公など、秋は草木の
紅葉に付て、をのつからとふ人も有へし、冬になり
てさひしさのみなる心尤深かるへし、思入てみるへ
しとそ

316 大空の月の光し

月の清くやとりつる水のいつしかこほりたるをみ

て、月に映せられて氷も先むすひける、と思よれる
也

317 夕されは衣手さむし

夕されはとは、夕にしあれば、なといふ心也、た
夕に成たる心也、た夕暮なるへし、吉野山を思
やりたる心、さのみとをき所よりにてはあらしと
云、又、彼山は雪の深き所なれば、都よりも思や
るへきにや、長高躰也、余情ありとそ、万葉には
夕去と書、但、去心はなし

*3 以上第十一(采)廿二首

318 今よりはつきてふらなる

相續ての心也、すきをしなひかす程の雪也、と
いふ義は悪し、薄もそのまゝにて、うす雪に降そめ
て、すこし打なひくはかりの雪なるへし、雪も薄も
面白き程也、かやうに相續てふれといふ心也

319 降雪はかつそけぬらし

冬も雪のふりきゆる事あれば也、大雪にはあるへか

らす、滝タキの音ヲトのまさるやうなるを聞て、思へるなる
へし

320 この川に紅葉*1はなかる

落葉の山川ナカレに流ナカレ来れるをみて、さしむきて此川に
とよめり、是は常ツネの落葉の比過たる時分なるへし、
冬あさき比の雪はやかてきゆる也

321 古郷は吉野の山し

吉野の古郷の感也、荒アツたる所は雪もふかき心あり

322 我やとは雪ふり敷て

雪には道のたゆるならひなれとも、又必*2たえはつ
る事もなきを、只我宿トドから問人トウもなければ、道たえ
たるを思ふ心あり

323 雪ふれは冬こもりせる

御抄ゴセウにくはし、冬こもる草木とは、花も葉もなく枯
たる木の雪中の様也、さくや此花といふ哥*3よりおこ
れり、春のちかき比の雪を花とみる心よりよめる也

324 白雪の所もわかす

志賀シガは花の処なれば此心あり、山の岩ほの花もなき
所に、うす雪などのむら／＼面白きをみてよめる

也、裏説、花とは和ワする心あり、和する心なる人に
は、いかなる磐石バンシヤクの如くなる心もやはらく事ある
理也、井蛙抄セイワセウ、文覚モンカク西行を批判ヒツパンせし事、此心
にかよへり、又云、必とする事なかれの心也、岩ほ
にも花のさく如の事有と也

325 みよし野の山ノのしら雪

故郷さむくとは、ならの古郷の事也、幽ユウ玄ゲンなる
哥也云、余情限ヨセイカギリなし

326 浦ちかく降くる雪は

浦ちかき所にて雪のふるをみたる心也、末の松の浪
に思よそへたる也、景氣の哥也*4、金玉集キキョクには人
丸哥といへり

327 み吉野の山のしら雪

山ふかく雪をふみ分て入にし人の、心さしのふかき
事を哀と思に、あ*5のことくをとつれもなきを思入た

る也、余情あり云々、世のうき事なども、思しられぬるなるへし

328 白雪のふりてつもれる

山里ならぬ宿も雪の中の物心ほそき時分、山さとを思やりたる也、何事も※1あどなくこそ思けちて、すむらん人を思ふ也、忠岑殊タハミネ上手也シヤウスと云々、源氏物語にかゝる所にすむ人、心に思ひ残す事あらし、などいへるか如し

329 雪ふりて人もかよはぬ

雪ふり敷て道もたえつゝ、人もとふへくもおほえぬ時分、打なかめて、何事か我思ひこし事の跡あると思ひゐたるに、又衆シユ相の跡なき事を※2観アトに※3云々、道なれやとたとへ思也、冬は空劫也、上句を序として、跡なしとうけたり、さりながら、雪中の観クハンスル心なるへし、らんは詞のみ也

330 冬なから空より花の

漸ヤウク春ちかき比の空をなかめたる折也、春はいづく

より来るともしらぬ故、かく思ひよれる也、新アタランなる作也

331 冬こもり思ひかけぬを

我冬こもりしたる也、木高コタカキきひまより雪のふりくるを花とみて、雪そふりけると思へる也

332 朝ほらけ有明の月と

山といふへきを里とよめるは、心有へし、有明の月にまかふ程の、うす雪の面白※4き興なるへし云々

333 けぬか上に又もふりしけ

明也、春霞たちなはなどのわたり、殊コトニイフ優也云々

334 梅花それともみえず

疎句ソク哥也、あまきるとは、うすくもりたる様也、すこし空のきら／＼としたる心あり、大雪とはみえず、ふか／＼らぬ雪のなへてふりたるなるへし、花も雪も難分ほどの様也、花をも雪をも賞したる哥也

335 花の色は雪にましりて

明也、かをたに／＼ほへの、をの字、人にわかるゝ事

を、人をわかるとて、といへる類也、又妹を恋といふ心に、いもに恋といふも此類也

336 梅のかのふりをける雪に

ことごと、悉也、誰かかくわかんこと也、ことごと、又は清歟云

337 雪ふれは木毎に花そ

木ことにとは、梅字の心也と云説、不可用之云、諸木の雪も面白き比、梅を賞したる心也

338 わかまたぬ年は来ぬれと

年はきぬるとは、歳暮に成事也といふ義は、嫌道也、晦日なれば、明日の春の来る事をいふ也、冬草の枯にし人などいへる渡り、優也、冬草は枕詞也、又はほひとなる云

339 あら玉の年のおほりに

年々如此うつり行事を思也、初五字、幽玄にをけりと云、此哥思入て心うへし

340 雪ふりて年の暮ぬる

真松は年の寒にあらはる心也、こしかたは思とちめぬを、年暮に思えたることる也

341 昨日といひけふと暮して

必歳暮の哥ともみえねとも、こと書にてしられたり、人の心は千と世をすくすとも、又如此なるへし

342 ゆく年のおしくも有かな

歳暮はいつもおしき事ながら、老となりて鏡に對してみる時、いよ／＼悲き心也、我影をみれば、わか年も暮る心ちすれば也、影さへくるとよめる、新なる作也、余情あり、又一年も如此なるへし、と思ふ心有へし、以上第十二回(巻)廿五首

古今 第七賀哥 祝言也

我君は千代にや千世に

八千代といふにはあらず、千世にやと云之、又千代

にやと読る也、心は、限もなく遠くといはふ也、哥

無義

344 わたつ海の浜の真砂を

わたつりみとは海の惣名也、四海の心也、真砂を
おほくいはむため也、砂の一を千代の数にせむと
也、四海に心あり云也

345 しほの山さしての磯に

甲斐国名所云、彼国には海もなき国也、そのかみ
いかゝ有けむ、此哥はしほの山といへるも磯をい
む為也、千鳥も千世くと鳴心あり、哥の心は、我
君を八千世といはふ心より、千鳥の鳴を聞も、八千
代と鳴心ちする故にかく読り、鳴とは告る心也、
景気も有へし云

346 我齡君か八千代に 思いてにせよ

わが齡も君にひかれて君とひとしくあらんを、思出
にせよと也、合躰の心を思へり、是思出なるへし、
ととめをぐとは、君と共になからへん事也、思出に
せよとは、我とかく思出る由也、ととめをきてと

は、治定したる也、祝の事なれば也

347 かくしつゝともかくにも

かくしつゝともかくにもとは、不満足之詞也、
なからへて其しるしもなけれども、とにかくになか
らへて、我思ふ君が八千代にあははやと也、天子の
御製にて弥々面白し、其徳もまじまきぬ御身なか
ら、とおほす御心なるへし、初五文字、殊々勝
と云

仁和御門みこに 御をは

祖母の御事にや、尚可

尋

348 ちはやふる神やきりけむ

此杖をつきては、則千年の坂をも越ぬへくおほゆる
に、神やきりけむと読り、神は神通自在の事あれば
也、又命なかり事にも便あり
堀河のおほいまうちきみ 昭宣公、貞観十七年、
四十

349 桜花散かひくもれ

散かきくもれと也、^{*1}まかふかに、かにとよめる、わ
さとはなけれど、をのつから賀によせありと云、^{*2}

俊成定家卿も此よしの給へり

さたときの御こ 小書云、貞辰清和第七、をは、^{*3}伯

女なるへし、四十とあり

きのこれをか ⁽¹⁾家本用之、⁽²⁾小書云、^{*1}惟熙、定家はこ

れをかを用と也、^{*5}惟、^{*6}思也、^{*7}有也、^{*8}辞也、^{*9}為也、

謀也、^{*10}伊也、^{*11}熙、^{*12}和也、⁽¹⁾光也、⁽²⁾広也、^{*13}長也

350 亀のおの山の岩ねを

明也、亀も久しく、^{*14}巖もうこきなき物なれば読る

也、所又大井辺也、とめて落るとは、岩ま／＼など

をもとめて落るさま也、景気くはゝれる哥也

さたやすの御こ 小書云、貞保、二品式部卿、^{*15}清和

第二、号南宮、母二条后

351 いたつらに過す月日はおもほえて

賀の時、^{*16}四季の絵の屏風などあり、^{*17}平生月日の過

行はおもほえずして、^{*18}花に対する春は早くうつる事

を驚心也、花に着する故也、^{*19}此哥賀の心はみえ

す、こと書にてみえたり、又云、おもほえてと清て

読説あり、^{*20}当流には濁也、^{*21}此哥、^{*22}廿四首とて書拔

て相伝する事あり、^{*23}世上の道の為に観、^{*24}心となる

事也、^{*25}賀の哥にも、たゝ絵のさまのみ読て、いはひ

の心なきもあるへしと云

もとやすのみこ 小書云、^{*26}本康、^{*27}仁明第七、^{*28}式部

卿、号八条宮、母

352 春くれは宿に先さく

梅は諸木の花の中に、^{*29}早く開る事也、^{*30}又は、^{*31}梅

花の中にとくさける花ともいへり、何にても其人を

賞する心に読る也、^{*32}心さしの切なる儀也

353 いにしへにありきあらすは

君にとは、^{*33}此君にはしめむと読り、^{*34}心詞新に読り

云

354 ふして思ひおきてかそふる

おきふしに^{*35}万代を祈由也、^{*36}家隆卿、^{*37}大方の秋のね

さめの長夜も、とよめるは、此哥よりよめり、此哥*1には、身を思ふとての心もこもりて、優也ユウと云云。
355 鶴亀ツルカメも千とせの後は

我思ふ心は限なき也

此哥はある人の、*2哥の同類を思ふへき心つかひ有*3へし云、黄門クワウモンことにいさめられける事となむ

よしみねのつねなり 素性ソセイ一性*4の人なるへし*5

356 万代を松にそ君を

松にそとは、待といふにはあらず、只松にいはふと也、但、待心も少は有へきにや、千とせの陰にすまむと読る、むすめにかはりたる哥なれば其心あり、祝つると有も、鶴を思へるにやと*5云云。

内侍のかみ 小書云、満子、内大臣高藤公二女、奉ホウ

養延喜聖主ヤウエンキセイシュ云云

右大将藤原朝臣 大納言右大将定国、延喜八年、四*6

十云

良門(朱)—高藤—大将内侍*7—定国

—母—*8—満子*9
—女—延喜母后

357 かすか野に若なつみつゝ

此哥祝の哥の本たるへし、序リクギ、六義の頌シヨウにも此哥を出せり、此哥は素性ソセイか詠也、前の哥に同しとみゆ、素性*10は此賀を奉行フギヤウしける也

358 山たかみ雲井にみゆる

心詞たくひなく面白き哥也*11云云、躬恒ミツネか哥也、賀の心は明ならね共、絵に對したる心也、但*12、何も少は賀の心あるにやと云、以上二首は春の哥也、春と題せされ共、こと書に、四季*13の絵かけるとありて、此哥を出せり、夏秋冬を題したれば、春の哥とはみえたる心にや

359 めつらしき声ならなくに

こゝらの年を、賀の心あり、貫之か哥也、年々あかす聞由也、哀アヘレ有有にや云、*13

360 住スミの江エの松マツを秋風

秀逸シウイツ 躰タイ也云、躬恒ミツネか哥也、ことなる理リなくて、*3

殊勝シウシヨウなる哥カなるへしと云云

361 千鳥チトリなくさほの河カハきり

遠白エンハクの躰タイ也云、忠岑タケミネ哥也*4、尤幽ユウウ玄也云、有感ウカクと云云

362 妖ユキくれと色イロもかはらぬ

常磐山トキワヤマの陰カゲに、いつくともなき紅葉コノハの散来サンライる様也、

下句新なる作也云、忠岑タケミネ哥也、又云、紅葉コノハを吹来フキライ

るにあらす、風の秋の気色キキに吹フクなしたる心也云*6

363 白雪フクユキの降フリしく時は

貫之哥也、降フリしくとあるを、ふかくつもれるとはみ

るへからす、此詞コトバをはつよくあたらずしてみるへし

と云云、つもりたる雪ユキにては、下句シタマシの様もかなはず

と、花ハナぞ散チリけるといふ様サマにみるへし、当位トウイの景也云*7

以上七首、素性ソコウはかり名ナをあらはせり、余ヨリの人あ

らはさるるに口伝クチデンあり、其故ユヘは素性ソコウは作者メイ名譽ヨにし

で、又能書也、勅命チヨクメイにかなへる人也、此賀コトバの時トキ*8

奉行フキヤウして哥カをよませかける故ユヘ、皆素性ソコウか哥カのこと

くに入イたる也、素性ソコウは出家イカクにはあらす、入道也、

古今コキン一部イチブの心ココロもみな天子テンシの御製ミツクなる理也云、二百人許ヒツヤク

の作者ソウシャなれども、此勅撰チヨクセンによて悉コトクク名譽メイヨあらはず

故ユヘ、畢竟ヒツキヤウ天子テンシの御製ミツクなる道理也、此賀コトバの四季シキの哥

も、其理コトバに同じ、又此集コトバも、貫之タケミネ一人撰ヒツクのやうに心

うるかことし、猶ナカ口決クツケツ有アへし云

春宮ハルミヤの、小書コトバ云、文彦モンゲン太子、保明ホメイ親王、延喜エンキ三年誕

生ユメ、延喜エンキ之御時ミトキ春宮也、此みこは北野キタノ天神御た

よりにて、うせ給タマハへりと云云

364 嶺ミネ高タカき春日カスガの山ヤマに

明也、此春宮ハルミヤの御母ミハハも藤フヂ氏ウヂなれば、春日カスガ山祝心也

以上第十三日九月朔シツキ廿二首

古今コキン 第八離別哥リツベツカ

わか別路リツベツにても人のわかるゝにても也

365 立別タチベツいなはの山の

わか別路リツベツにても人のわかるゝにても也

立別いなはとは、いぬる心にうけたり、此哥は、詞
のつゞきはなれたる所なくみえぬるを、末に今帰こ
むと読るによりて、^{*1}めてたきとそ、まつとしきかは
いといへるは、其人を賞したる心あり、今かへり
こんとは、やかての心也、待人もあらしの心もあ
り、行平述懐ある人也

366 すかるなく秋の萩原

すかるの事、御抄^{セウ}みえたり、鹿^{シカノ}別名^{ヘツミヤウ}云、心は、
秋の萩原の花の盛鹿も鳴比は、別行人も心をと、
むへき折なるに、其にさへやすらはてわかるゝ人な
れは、^{*1}帰りこむ事をもいつか待へき、と思心也、尤
哀なるへし^云

367 限なき雲井のよ所に

我旅にたつおり、切に心さしある人などを思ひをく
心也、限なき雲のよ所に^{*2}とは、遥なる心也、月日
をくくり、千里万里をへたつとも、心をは君にそへ
んの心也、^{*3}をくらさんやはとは、人を我にをくらか

さしの心也、我心を人にそへすは、とまる人^{*4}はを
くれぬへき理也、遍昭哥也
をのちふる 小野^{ヲノ}は氏^{ウヂ}也、^{*5}千古、名也

368 たらちねの親のまもりと

まもりとは、切思ふ心は、則まもりと成へき故也、
^{ケリヤウ}仮令、人をあしく思へは、其しるし有か如し、国に
くたるを親の心にとめたく思へとも、大やけ事な
とにて、留かたき事あれば、心^{*6}はかり也と読り、哀^{*7}
也、とめそとは、誰にいふともなくいふ也
さたときのみこ ^{ウ(朱)キョウ(朱)}きよふ 清生

369 けふ別あすはあふみと

都ちかき国なる心を読り、思へともとは、又やかて
も逢へき事そ、といはひ思ふ心あれとも、夜や深ぬ
らん、何となく袖も露けきと也、尤哀なるへしと
云、露けきとは、涙の事也、とはこととはるへから
す、只大方にいへる此哥の感なるへし、又涙の事^{*8}
ては有らん

370 帰山ありとはきけと春霞

こしへゆくには、^{*1}かへる山をこゆる也、此山の名を
帰^ルへき便^{タヨリ}とたのめとも、恋しかるへしと也、春霞
とをける詞、面白^云と、立といはん為也、又おほ
つかなき心あり

371 おしむから恋しき物を

別^{*2}をおしむに、やかて恋しき心有^{ナライ}習也、まして立
なはいかならんと也、なに心ちせむといへるに、心
こもるへし、白雲のといふに、はるくとわかるゝ
心あるへし

372 別ては程をへたつと

かつみなからとは、かくみなからと也、遥^{ハルカニユク}行人を
思ふ故に、行末の恋しさの、はやうかふ心也
いかこのあつゆき ^{*3}いかこ、氏^{ウヂ}也

373 思へとも身をし分ねは

思へともといへるは、様くの心こもるへし、此五
もしをよく思ふへし、はるくと東まで行人の上を

も思ひ、我心にも又いつかは、など様々思へとも、^{*1}

世にしたかふ習あひそひて、行事もかなはず、又身
をもわくる事なき故^{*4}、心をたくふるはかり也

なにはのよろつを 万雄^{ヨロツヲ}

374 逢坂の関しまさしき

しは、やすめ字也、逢坂は、あふといふ心にあら
す、関は人をとむる所なれば、関もまさしくはと
也、人にわかれて切なる心よりかくよめり、関の心^{*5}
とむへき事ならねとも、思よる心也

375 から衣立日はきかし

朝露のおきてとは、露のをくによせて、おきて旅立
心をよめり、此哥には、又置といふ心をふくめり、
我を捨をく心也、尤哀ありと^云、左の注にみえた
り、貫之も心ありて、此左注をせしにや

ひたちへきみとし ^{キントシ}きんとしと読へし、公俊也

寵^{チウ(朱)} 小書云、或本、無此名^云、然^{*6}は読人不知なる

へし

376 あさなけにみへき君とし

あさなけは、朝夕也、草枕⁽¹⁾也とは、旅と云心也、万葉にも、草枕旅とおほくよめり、万葉⁽²⁾にはあさにけと有、きみとしは、公俊をよそへたるにはあらず、たゝ君と読るを用る、優也、さりながら、君としとよめるは、公俊と云心もありしにや、心は、朝夕にあひそひてみるへき君ならねはと也、人の心のうつろふ比などにや、以上兩首相ならへたるは、女の人にわかるゝ哥、又女のとゝまる心などを、類したるにや^云

紀のむねさたか 人の家にやとりて、門出なとしける処にや

377 えそしらぬ今心みよ

初五もし肝心^{カシシ}也、此句^ニ心は皆こもれりと^云、いま心見よとは、まさに心みよの心也、命^{イシチ}あらはと読る、尤哀也^云、人やとはぬとは、人や忘るゝの心也

378 雲にもかよふ心の

雲井にもとは、遥^{ヘルカナル}なる心也、更にをくれぬよし也

379 白雲のこなたかなたに

しら雲とは、立別るゝと云縁也、又遥かなる心あり、こなたかなたにとは、朝夕にあひなれたる人の別行は、こなたかなたになる心也、別の心のみたるゝを、ぬさと読り、ぬさは、こまかなる物也、切^{ケツ}なる由也、手向のぬきによそへたり

380 しら雲のやへにかさなる

大かたのあつまよりも、みちのくなれば弥々^ニとをき心也、おもはむ人にとは、旅なる人を思ふへき人に、心へたつなと也、わか思^{※3}ふを公界^ニになして読る、優也^{※3}と^云、たけある哥也

381 別てふことは色にも

心にしみてとは、心にとをる様也、心にはなれぬ也

382 帰山何そはありて

へたゝりては、帰山といふをたのみしに、又程もな
くくたりぬる事を思ふ也、詞つかひなどたくみ也
云々、とまらぬ事の名にこそあれと也

383 よそにのみ恋や渡らん

雪を行によそへたり、行みるへくもなきとは、身を
心にもまかせぬ心也

384 音羽山木たかく鳴て

我思ひを郭公におほせてよめり、木たかく鳴てとよ
める、殊面白^云、時鳥の声もことなるさま也、我
思ひも遙に行人をしたふ涙なれば、切なる由なるへ
し、木高く鳴、切なる心あり

藤原のちかけかから物の使に ^{アヅタウシ}遣唐使の事にはあ

らす、帰朝の船より、唐物など奉るへきための勅使^{チヨクシ}
の事にや^云

385 もるともに鳴てとよめよ

長月卅日なれば ^{キリク}蜚の秋を時なる物に云へる也、
我心をきりくすにいひたる也、秋の別は尽の心

也、又云、秋別^{*1}わかるゝ人の事を秋別と^{*2}云、いつ
れもかよふへし

386 秋霧の共に立出て

秋霧と共に立出てといふ心也、秋霧のと読る、優
也、朝霧の空に旅たつ心の哀も有へし

^{*3}源のさね ^{サネ}実公、^{サガ}嵯峨第五御子、^{ソウシヤフ}明大納言贈正一

^イ位の孫也、^{ノフユキ}舒之三男也^{*1}

しろめ ^{マコ}遊女也、^{サネ}実公右少将なる、^{*4}時の事にや

387 命たに心になふ

^{イフチ}命の長短^{タンスル}を歎心也、我身なからへても人をはし
らす、^{*5}人なからへぬとも我身しらぬ事なれば也、女
の哥にて殊哀也、思入てみるへし、¹立帰る^(朱)までの命
をしらぬ心也

388 人やりの道ならなくに

⁽¹⁾御抄^ニみゆ、⁽²⁾朋友^{ホウユウ}の別をおしみて、したひ来たる心
を謝したる心也、下心、心を人にまかせたる道の太
切也

389 したはれてきにし心の

人をしたふ心にて来たる也、心空にして道もしられ

ぬ由也、志の切なる也

390 かつこえて別も行か

かく越ての心也、逢坂といふ所もかくこえて、別も

行かとも

391 君かゆくこしの白山

必白山へ行人ならねとも、こしへ下人なればよめる

也、雪にまかせて尋んと也、かくれあらしと也

人の花山に、夕さりつかた

392 夕暮のまかきは山と

人をしたふ心の切なるによて、わりなくいへる也、

入ほかにならさる也、五もし、山となりなむ、と

いへるに便あり

山にのほりて、山にのほりては、比叡の山への事

也、幽仙か住る山に人々来りて、其内に入堂など

にても、又何方へにても出て、幽仙か坊に帰て、さ

て京へ人々別る、時よめるにや、此詞書あらはなら

すと云

393 別をは山の桜に

無義

九月二日(卷)廿九首

みこはつねやす親王也

394 山風に桜吹まき

山風に、とをけるに文字面白と云、山かせの内に

など云心也、心は、人をとめ侘て、花故にや立

とまると読る也

395 ことならは君とまるへく

同じ時の哥なるへし、遍昭はみこに対しての本人な

りしにや、幽仙か哥、へたたりたり、此哥の心は、

花の匂ひの面白に対して客も来れり、如此ならば、

君をとむるやうににははなむと也

兼藝(兼)

396 あかすしてわかる涙

こと書の様を思ふへし、此哥ことく敷珍しく読る也^云、下とは河のすゑ也^{*1}

かんなりのつほにめしたりける 勅にてまいりたるなるへし

397 秋萩の花をは雨に

秋萩のしほるゝは尤おしき事なれとも、それにもまさりて、わかるゝをしたふ心也、兼覧王の帰るをし
たへる也

398 おしむらん人の心を

しくれと読るは、雨の折節なれば也、心は、おしまるゝ我身としりなましかは、いたつらに有ふる身と^{*2}
は思ましき物を、といふ心也、尤心詞面白哀なる哥也^云、^{*3}前の貫之か哥はさしたる事もなきにや、此哥のすくれたる故に、前のこと書より、貫之か哥をも入たるにや^云

399 わかるれどうれしくも有か

有哉也、人を恋ふるも一たひあひたる縁^{*4}なく^にては

な。れは、わかるれどうれしと也

400 あかすしてわかるゝ袖の

我涙は珍しからぬ物なれとも、君か形見故につゝむ由也、切なる折の涙なれば、形見にといへる也^{*1}

401 限なく思ふ涙に

明也、哀なる心也、五^{*5}もし心あり、此哥をはよく思入て吟すへし^云

402 かきくらしことはふらなむ

かくのことくふれと也、ぬれきぬと云事、本説有に
よて読るなれとも、しゐて不可用、哥の心は、春の雨なかくと降たるさまは、行人の為にさしもなき^{*6}
事なれとも、如此ふるは、君をとゝめむたよりとせ^{*7}
んの心也、雨故とゝまると云は、かこつけなれば、ぬれきぬと読り

403 しゐて行人をとゝめむ

無義、我がとゝめかねたるを、花にたのむ心也

志賀の山越にていし井のもとにて 此詞のにてと云^{*8}

ことは、かさなれり、しかれ共、かくならてはよろ
しからざるにや云々
404 結ふ手の雫にゝこる

水をむすへは手の垢の落るによて、にこると云心
也、といふ人あり、不可用云々、此集におひては、
手の垢アガなどをよまん事、有へからすと云々、あかて
もとは、すこしある水をむすへは雫にゝこる也、さ
れは、又むすひかたきによて、満足せざる心也、俊
成卿は、貫之か結ふ手の哥とて、幾度も感し給へ
り、哥の様を思へし云々、定家卿、貫之か哥を批判
に、余情ヨセイキエン妓艶キエンはなき由あり、此哥は余情も有にや
云々、万葉に、結ふ手のいしまをせはみ奥山の岩か
き清水あかすも有かな、と読るを本哥なるへし
道にあへりける 物をいひつきて、思ふ事を云入た
る心也
405 したの帯の道はかたく
帯をひきめくらすには、末ノの別トてあふ物なれば也、

行めぐりてもと読るは、車によせも有云々にや
古今 第九 露キリヨ旅リョ哥カ

406 あまの原ふりさけみれば
初ハジメ文字、殊面白云々、ふりさけは、ふりあふく心也、
此哥は、又手裏テノウチに提ヒキガたる心あるへし、此時の様を
よく思へし、もろこし我朝をかけて、万里マンリの外
まてすみ渡りたるに、思ふ心シボココロみかさ山の月も、手に
とるはかりなる様也、月の名所もおほかるへ云々かるへ
けれ共、もろこしに對して、春日ハルノヒなる三笠ミカサの山を讀
る、尤相当すへき名山にや、又は、彼山にてなかめ
なれたる月を思ふにや、仲丸は、元明元正リヤウテイ兩代リウダイの
比ヒコノ人ヒト、左の注を長くと書たるに余情あり、めい
しうとは、みやう州と云所也
407 わたの原八十嶋かけて

あまの釣舟とは、都へかくことつけやる人をよめる也^{*1}云、此集にては其儀を不用、此哥の一二の句殊に哀也^{*2}云、かゝる行ゑもしらぬ海上茫々たる処に、

更ニことかはすへき人もなし、此国の外までも漕出る心ちするに、たゞあまの釣舟のかすかにみゆるならては対する物なし、されは、人^{*1}には告よ、と只釣舟にいふのみ也、此心をきかん人は、一段哀なるへき事也、此事、仁明御宇也、此時此処の様、哀深かるへし、可工夫云

408 都出てけふみかの原

明也、都を出ぬる事はたゞけふなるに、いつしか河風など寒き時分、物かなしく成たる心あり、旅行の行すゑまで思やる心有へし

409 ほの／＼と明石のうらの

此哥哀傷^{アイシヤウムシヤウ}無常の心ありなど、様々のよそへある説、不用之、旅の哥に入たる心^{*2}、奥義と云、あひなれたる人の、旅にをもむくを、明石の浦にて送る

時の様なるへし、はる／＼と漕出る浪の上に、朝霧

渡りて、ある時はかくれ、又はほのかにみえつゝ、

次第／＼にとをさかりて、奥津嶋などにはやかくる

をみれば、いつちへ漕行らん、いかに成行らん、

など思ひも捨すなかめたる躰也、大がたの旅の別さ

へかなしきを、切に思ふ人の海路にわかるゝ時、尤

思捨かたく物かなしかるへし、船をしそ思ふ、とあ

るに、心を付てみるへしとぞ、此哥上品上生也と

云、幽玄^{ユウケン}にして有心也、又うるはしき躰あり、哥

の道は、此躰に過へからすとぞ、仍、特に執する哥

也、切昏有と云

あつまのかたへ、こと書にて其様をみるへし、業平^{ナリヒラ}

の、未見すしらぬ国に遥にむかふ心を思ふへし、友

とする人ひとりふたり^云、筆のほひ幽玄也とぞ、

河のほとり、伊勢物語には沢とあり、三川と云につ

きて河と書るにや

410 から衣きつゝなれにし

衣はきつゝなるゝ物なれば也、なれにし妻しあれば

と也、旅をしそ思ふと読るに、余情おほかるへし

武蔵国としもつふさ(ウ(朱)) うと読ならひ也、こと書伊勢

物語にすこしつゝかはれり、猶面白かるへし、限(1)な

くとをくもといふより云々、はる(2)くとなかされ行

心を思ふへし、日暮ぬ、とある本もあり、一説、日

暮ぬるといふこと葉々、天子の御前などにて憚ハ、カレる

心あれば、暮ぬとはかりいふと云々、但、証本にも

日暮ぬ共あり、都鳥はうつくしき鳥にて、ひなひぬ

鳥なれば名つけたる也、此事書、余情限なしとそ

411名にしおはゝいさことゝはん

明也、心中ニ都を思ふ折節、鳥の名をきゝて読る也、

此所のさまなど、こと書にてよくくみるへし

412北へ行鷹ぞ鳴なる

此時のさまを思ふへし、孤ナレタルカリ 鷹の哀に打佐ワビたる声

を聞て、我思をなれもさこそ、なといへる心也、左

の注、尤哀也云々

*2 おと 在原滋春か妻の事にや、かりそめの行かひ路

と読し、同人歟、甲斐カイの受領ジュリヤウにて彼国にてうせた

り、かりそめの行かひ路とそと読し人々、可尋之マコ

413山かくす春の霞そ

いつか都にゆかん、など思道の心ほそき様也、春の

霞の様など哀也、たのみたる人にをくれて、せめて

都をたのみ所にて、はるくとのほる時の心中思ふ

へし、哥の躰面白しと云々、是も夫にをくれての哥

也云々

414消はつる時しなけれは

旅の哥とみえず、こと書にてみゆる也

415いとによる物ならなくに

別の哥とみえたり、是もこと書にて旅の哥とみえた

り、都を別たる事を思ふなるへし、こまやかなる躰

にて哀ありと云々、余情なしといへり

416夜を寒み置初霜を

初霜の比より、夜なくの旅ねの悲き様也、かひの

くにへまかるとあり、はるくの旅とみゆ

たちまの国 播磨*1 みたみの浦、但馬国也、人々の中に兼

輔本人と見えたり

417 夕月夜おほつかなきを

彼浦面白所なるに、夕月夜のほのほのとしたる折な

れはよくみたき心也、夕月夜はおほつかなきといふ

枕詞のみにはあらず

418 狩くらし七夕つめに

目前の理也、此時の様、こと書にて思へし、当座に

て七夕つめに宿からん、と読る感あるへし、つめ

は、妻也

*2 みこ此哥を云々 此みこ、哥人にてまします、誠マコトに

返しをえし給はぬにはあらず、ふかく思惟し、吟味

し給ふなるへし、其時やつねか請取て、時の興につ

かうまつれるなるへし

419 一年に一たひきます

かゝる作意、尤哥の命也

420 此たひはぬさもとりあへず

此度は也、御幸ミキニハカの俄なる供奉ケツにて、私をかへりみ

給はぬ心也、紅葉を其まゝ神にまかせて手向る由

也、奈良ナラへ御幸也、ことからいかめしくして、目出

き哥也云々、此御詠、多分如此とそ

421 手向にはつゝりの袖も

同御幸の時の事也、つゝりの袖は、衲衣ナウエの事とい

ふ、不用之、只卑下ヒゲの心也

*4 九月三日已上十五度(朱)廿八首

古今 之十(以下朱)*5 文明十三 十月一日 廿三首

物名 1(朱) 口伝ありと云※1

物名とは、万物之名也、有物先天地アリモノサキツツチニ無形シテカタチモトセキ本寂※2

家能為三万象レウヨクタリマンザウノシユ主遂ラツテ四時シラ不凋スシホマと云頌あり、此心※2

を用、混沌未分を云也、言語道断之処也、万物是よフツ

りして出る也、第十二(朱)をける事も心あり、此部を執

する義也、第一(朱)は最初勿論也、第十も一段之処也、

第十一も恋は万物のはしめなる義なるに由て一段之部也、第二十卷又一段也、名は万物之名也、草木名所等仏神等も同し、神は陰陽不測之神、仏は法身なるへし、物名の哥は物の名をよむといへども、哥1(朱)の面は其事にあらず、以虚成実之心あり、裏説1(朱)云敵を代之儀也、はかり事のたとへ也、知ものは(1)*3テキ知之、しらするものはしらする心也、。代敵事は1(朱)治^{フサムルクニヲノマツリコト也}国^{タツトフ}之政也、故貴^ラ此理也、(2)ハカリコトヲ籌^{イアク}を惟握の*4中にめくらすへき心なるへし*6

うくひす 鶯は春をつかさとる鳥也、春四時の始也、此鳥、春をえてはしめて陽を発する初也、故*8第一に出也、事の始終^{シユウワフンヘツノキ}分別之儀也

422 心から花のしづくに
うくひすとのみ、憂く不^ス干^ヒの心也、花は春の花也、鳥とは鶯の事にあらず、一切の鳥の事也

ほととぎす

423 くへきほととぎす

とよむる、一説、此哥郭公をよむ也と云、不用之、物名は其物をは不詠也、此哥恋哥也、人をたのめたる時過れば、*1まぢわひて鳴由也、切なる思ひなれば、大かたの鳴ねならず、人をもとよむるほととなると也

うつせみ

424 浪のうつせみれは玉ぞ

瀬々の白浪のうちみたれたるか、玉のことくなるをみてよめる心也、裏云、1(朱)真の宝珠、又は金銀也共、取ましき事をは取へからさる教也、必はかなくあしき事となるへし*2

返し

425 たもとよりはなれて玉を

前の哥をうけてよめり、たもとをはなれては、玉をつまむ事ならねは、うつせみむと也、人にいふ心也

うめ

426 あなうめにつねなるへくも

花をよめる心也、あな憂目ウレメに也、常ならずはかなき

花なれとも、にほひはとまる心也、裏云、五もし

観する心あり、無常ムシヤウ対すれば法性ホツシヤウは常住也、無

常はかなしみ也、法性は香しき也、元来をいへは、

法性ならずといふ事なけれども、二となる時は、法

性の余薫ヨクは、したはしく恋しき心をよめる也、法性

無常一如ニの時は、いづれも不常住之理なる故に、常

なるへくもみえぬとよめり、二なる時は、恋しく

も香しくもおもはるゝ也

かにはさくら かはさくらの事也*1

427 かつけとも浪のなかには

東国トウコクかんはさくらといへり、かつくとは、そこを底

尋る心也、波の玉の風にちる様也、浪の下にはなき

物なれば也、裏云、人の心底シタなき事を、ことには

玉をちらすを、おもしろしと思てさくりみれば、実

なき事あり

浮沈ウキシヅミ不定無実之故也、よくはかるへき事なれば其コト

教也、浪の玉の風にうかふたとへ也、人に数年なれ*5

ても、不定の心はしられぬ也

すもの花

428 今いくか春しなければ

物はなかめてとは、物わひしきやうなる様也、暮春

の空を打なかめたる折節、鶯の哀に鳴を聞て、鶯も

物はなかめて思ふらん、と思ふ心なるへし、程なき

事を観する也

からもゝの花

429 あふからも物はなをこそ

兼カネ別恋の心也、会者定離之理也、裏云、何事も*1

不定なる事に心を付ぬるは、一切如此かなしき也

430 足引の山たちはなれ*1

殊シ面白き哥とそ、序哥也、世上の様也、此理をよ

く観すへき事也と云、旅などにはあらず

をかたまの木 三ヶ也

431 みよしの、吉野、滝に

滝の白玉の如くなるをみれば、又きえぬる程に泡を

や玉とみつらん、とかへして思也

やまかきの木 柿の木也、柿カキの実ミの小なるを云説あ

り、但、^{*1}不用也、又山柿と云木あり

432 秋はきぬ今やまかきの

今やとは、今よりやの心也、夜なくを思ひやる心

也

あふひアライ・かつらカッラ・ 葵アライト桂カッラト也

433 かくはかりあふひの稀に

恋哥也、義なし

434 人めゆへ後にあふひの

忍シッ恋也、人目を思ふ故に我うとく成を、人は我を

つらきとや思はむの心也

裏1云朱、人めをのみ本として、更サラ首尾シユビもあはぬ事あ

る人の性を風する也、わかつらきにやとは、天道

たかひてみゆへき心也

くたに 苦丹クタン、牡丹ホタン類也

435 散ぬれば後はあくたに

花の哥也、てふは蝶也、心は明也、裏1云朱人の物に着

して、はかなく心をまとはすたとへ也、裏説を先い

へる心は、哥2の自面2はかりは花の上を賞せさるに似

たる故也、裏の心もちてみれば、花をたすけてみ

る心ある故也、故実也とそ

さうひ

436 我はけさうひにそみつる

我はけさとは、朝花をはしめて面白くみて、思か

へしてあたなる物といふへかりけり、と思ふよし

也、¹春朱の花の事也

をみなへし

437 白露を玉にぬくとや

花の上に露のをきたるに、さかにかにの糸をはへたる

をみてよめる也、¹花朱は春の花の事也

438 朝露を分そほちつ、今そ野山を

へしりぬるとは、こゝかしこにやすらひ、夕までも
野山を分つくしぬる也、序、花をそふとてたより
なき所に、なといへる、入すきたるさまの類なるへ
し、^{1(朱)}凡哥人の心、^{*1}執着^{シウシヤウ(ママ)}をきらふ也
439をくら山みねたちならし

殊勝なる哥とそ、心は、秋の山の面白きに、鹿の打
なきたるを、いつの世の秋をへて、かくしつゝ有け
む事にか、と思ふ心也、余情多くこもれりと云、
物名の哥ともみえず、面白しとそ
きちかうの花 桔梗也

440秋ちかう野はなりにけり
明也、漸^{すすく}うつろふけしき云、^{1(朱)}裏云、君^ニ讒言^ニなど
する人の詞は、草の露玉をかさりたる如くの虚言^{キョゴシ}あ
り、されとも、次第^ニ其心^ニあらはれぬれば、讒人^ニ
秋ちかくなる如く、君にも許容^{キョウヨウ}なき事のとへ也

しをに 紫苑也
441ふりはへていさ故郷の

ふりはへて、わさとゝいふ心すこし有へし、心明^{*3}
也、心さしをいたしてしたひきたるかひもなきを、
うらむる心也、^{1(朱)}裏云、^{*4}変約^{ヘンヤク}の事を風する也、ふりは
へてとは、約を憑みきたる心也
りうたんの花 りんたう也

442我やとの花ふみしたく
野はなければやとは、野のなきやうに、此花になど
来るそ、といふ心也、ちらすといふ本あり、したく
はすこしをもき也、^{1(朱)}裏云、^{*5}いつくにてもなるへき事
を、あやにくに人のいとふ所なんとにてせん、と思
ふ人あり、あしき事也、可覚悟事也、偏^{ヘン}入て、人
の心をはからぬ事あり

^{*2}443ありとみてたのむそかたき
^{*7}たのむそ、たのみかたきの心也、^ニ如露亦如電^ニト観^{クワン}
すへきをしらて、たのむ事を教^{ヲシ}たる也
けにこし 牽牛子也^{ケンゴウシ}

やたへのなさね ^{1(朱)}なさね片^ニ也^ニ
なさね片^ニ也^ニ

444 うちつけにこしとや花の

花をみてよくも見さためすして、面白く色こき花と

みるは、朝露の当座色々と染なしたる也とよめり、

裏云、万事此理あり、能くみれば、はしめてみたる

にかはる事有へし、和哥を、一ふしある様などを面

白しと見る事あり云、巧言令色鮮矣仁の

理あり

*2 二日廿四首 (朱)

二条の後、めとにけつり花させりける

三ヶ也、后宮の御方にありしなるへし、可尋之、或

説、めとといふ草云、しからは、めとにけつり花

さすといふ、又不審也

445 花の木にあらさらめとも

けつりて花に作る物あり、心は、けつり花の事を説

り、此花をみて、身の思ふ事を成事もかなと也、

裏云、官位に成のほるましき人のあかる事あり、元

よりさりぬへき人の、古ぬるまでなりをくれたる

か、うらやみ見て述懐の心あるたとへ也

446 山高みつねに嵐の

明也、裏云、嵐は人の心のはけしく仁心なきたとへ

也、花をは、やさしき心ある人にたとふ、さるへき

人といへとも、仁心なき人の下には、やはらかにや

さしき心なる人は堪忍しかたきよし也、此用心有へ

きよしの風也

やまし しといふ草の名也、山にある也、こまのひ

さとやらんいふと云、しとは、羊蹄の事にやと云

447 郭公みねの

雲中にしてみえぬよし也、裏云、悪事をなす人の咎

かくるゝ事あり、あらはれぬをたのみて、悪を不

改、なをあしき事をなせは、つるに身をほろほす

也、慎、其独之理也

からはき 萩にあり、からなてしこなといふかこと

し

448 うつせみのからは木ことに

無義、裏云、諸人住所はあれども、道ありて玉のやうなる人は、さらにみえぬ事を歎く心也

かはなくさ 三ヶ也

449 烏羽玉の夢になにかは

明也、裏云、一切衆生の欲情の限なき事を風する也

さかりこけ ⁽¹⁾ かつらのやうなる物にや、苔は葛の類

也、さかりこけ ⁽²⁾ ^(朱)

450 花の色はたゞ一さかり

花の色は、たゞ一さかりのあたなる色とみゆれとも、露は返々よく染ける也と読り、裏云、人の心さしに如此の事あり、下なる人などの、すこしの心さしなれ共、其身には心をくたき身を尽して、涯分なる志あり、よく可分別の教也

にか竹 苦竹也

451 いのちとて露をたのむに

たのむにたのみかたき也

かはたけ 河にあり、^{※1}内裏竹台のかは竹也、^{※2}又

かはたけを、むかしは筆の管に用云々

452 さ夜ふけてなかはたけゆく

ことから殊勝なる哥とそ、物名の哥は、うつくしくのみはよますと云々

わらひ

453 けふりたちもゆともみえぬ

誰かわらひと、わらを焼火の事也、もゆともみえぬ草の葉とよめるは、^{ワラビ}蕨の事とみゆ

さゝまつ ^{※3} ひは ^{※4} はせをは

454 いさゝめにときまつまにそ

恋の哥也、いさゝめは、そとの心也、そとの間に有らむと思ひて、其時節を待つるに、逢事なくて日^{※4}をへつゝ、我心はせをは、世間の人にみえぬると

也、かひなき由也、忍心あり、裏云、一定ならぬ事

にたのみをかけて待つゝ、成就せずして、いたつら

に日月を過る也、^{※5}はかなく人にはみえて、胸中苦勞

するあしき事也

※1 兵衛たゝふさかもとに侍ける 女(朱)なるへし

455 あちきなしなけきなつめそ

明也、此哥をは思ひ入て吟すへしとそ

※2 456 浪のをとのけさからことに

義なし、唐琴(カラコト)の国、未分明(フシミヤウ)

※3(1) 457 かちにあたる浪のしつくを

船のかちにあたる浪の打ちるをみて、折節春なれ

は、花と見さらんやと也、い(2)か崎(サキ)、河内国(云)

あほ(朱)のつねみ 阿保経覽(アホノツネミ)

※4 458 かのかたにいつからさきに

船のさきたちてはやく行さま也、かのかたとは、行

へき彼方也、むかひに船のわたりたる心にや

459 波の花おきからさきて

明也

※5 460 烏羽玉(ウハタマ)の我くろかみや

鏡裏(カミミノウラ)思はず雪を新に見たる心也

※6 461 足引の山へにをれば

山家のさま也、哀なる哥とそ

※7 462 夏草の上はしけれ

序哥也、又たとへよめり、心の行かたなきとは、

慰(ナグサメ)かたなき也

かつらの宮 桂宮院是也、うつまさにあり

ほととす 忠

463 秋くれと月のかつらの

花さきて木の実(ミ)はなる物なれとも、月桂(カヅラ)は光(ヒカリ)を花

とちらす(許)はかりと也

百和香(ハクワカウ) あはせ薫(ガウ)の事也

※4 464 花ことにあかすちらし

風の花をちらしても、あかす(5)くちらすを、我かう

しといくそはく思ふらむと也

※6 すみなかし 帊(カミ)に墨(スミ)して文をなす也

465 春霞なしかよひち

中し、しはやすめ字也、かすみのうちに鴈の帰るさ

まをみてよめる也

をきひ 火炉クラなどの火の事にやと云々

都良香

466 なかれ出るかたゝにみえぬ

涙川の水上もしらぬ心也、深さま也、おきひん時と

は、大方ひん時は、底もしられしの心也

467*1 のちまきのをくれておふる

苗ナメに前後あり、をくれて生るも又あたらぬ也、憑タシム

は田によせたり、裏云、晩学のたとへ也、志をいた

す人は、晩学もあたらぬ也、前後によらず、志を

いたすへき教也

はをはしめ、るをはてにて、なかめをかけて

長雨ナカアメをたち入る也、又なかむる心*2にやと云々

僧正聖宝*3 当流本*4、如此或説*5、此集撰時は未極官して、

後僧正*6なりし故、正字を加たる也云々、定家卿被加

なるへし、延喜已前任給へり、もとの本僧と許あ

りしに、被加たる歟、よむには、僧正聖宝と読也

468 花のなかめにあくやとて

花を満足するほとみんと思ひて分入は、心も共に乱

やうにて、更満足スナハチの心もなき由也、裏云、一切事は

三昧サイをたつる事なかれと也、其三昧サイに入と思へは、

即スナハチ三昧サイにたかふ也、自然にして有へき様に、何事

も程をはからひてよき程なるへき也、此理殊ニ此集

の肝心也と云々*2

文明十三 以上十五度

九月三日聞之(朱)

同十九未夏之間重聞此集説加筆早

奉加一覽早無比類者也

文明十九年六月日 宗祇判

明応五丙辰七月上中旬之間ジユン以祇公聞書テ加筆也

文龜三癸亥孟春從三十一日一至仲春二日ミル之重見

合祇公聞書ニ加筆早為ニ源頼則ノ讀之時也

判夢庵

永正三寅自八月至九月卅日為真存法師友弘

同聽讀之

古今 十一 文明十三九月三日(朱) ※1

恋哥一 恋部を五卷とする事は、五大を表する儀也、

恋は五大を受る人のわさ也、一切妻をこふる生類も、五大をつかさとる也、十一(朱)の卷よりを下卷と云人あり、不可然、二冊にしたる本ならば、上下ともいふべきにや

469 郭公鳴や五月の

御抄にみえたり、序哥也、あやめもわかぬとは、恋にほれしく成て、善悪の分別もなき心也、此哥、恋の最初サイシヨに入たる事、物のはしめは、無分別なる理也、物思ひそむる時、いかなるべき事共分別せず、又行末いかゝともしらす、心ほれしくとある躰を、あやめもわかぬとよめる也、いたりての始也

470 をとにのみ菊の白露

序哥也、菊を聞によせたり、露は詞の縁とせり、あ

へすとほ、たへすといふ心也、夜はよすからおきあかし、ひるは又ひねもす思つゝ、かくありても思をもとけすして、むなしぐきえやせんと読り、昼は夜るに對していへり

471 吉野河岩浪たかく

上は早くといはんため也、又我心のたきる心によそへたり、はやくそとは、こし方思初し一念の、はや心のさはく様は、岩ね*1のたかきことくなれる、たきつ心を思へる也、思初カチヲシでしといへる、心有へし(朱)

藤原勝臣カチヲシ

472 しら浪の跡なき方に

御抄にみえたり、※2白浪の跡なき方とは、たよりもなき心也、風そ思人のゆかりなどをはつかにみて、是にこそ思をもつたへめと思ふ心也、*2寄恋の躰也、清輔注、大海の舩も風を便とす、我恋は便なきと也

473 音羽山をとに聞つゝ

逢事をはへたてゝ、音にのみ聞つゝ、いたつらに年
をへたる心也

474 立かへりあはれとそ思ふ

見御抄、奥津白浪は人に心のかゝる由也、思ふ人は
つれなし、さらば思もたえなんなど思ふに、又立か
へり思へは、我なから哀なる也、¹さるへき契なんと
にや、かく人に心の猶かゝるらんとたのむ心有也

475 世中はかくこそ有けれ

世中は一切あやくなる物也、一目も見ぬ人に心を
まとはすは、あやなくなる事也、我思ふより世中を
思ふ也、人は風を見すと云

右近の馬場のひをりの日 右近馬場は一条大宮也、

ひをりの事、見御抄、褐をひきおる事をいふとあ
り、ひをりの事、此集の大事也、たてたる車は物見
なるへし

476 見すもあらずみもせぬ人の

御廉(ごれん)をよそへて読ると云説、不用之、^{*1}ほのかなる心

也、恋しくはとは、ほのかにみしより、思ひは打つ
けにあり、猶切に恋しく成なほの心也、けふやと読
るを大やうに心うへし、今日はかりの心には有へか
らす、あやなくは、あちきなく也

477 するしらぬなにかあやなく

するしらぬとは、人の思かけたるを、領解すともせ
す共何かいはん、恋路は只其方の思ひこそしるへな
るへけれど也

かすかのまつりに 二月の初の申の日也

478 春日野の雪まを分て

君はも、わもと読也、序哥也、二月の初の比の様
也、草のはつかになど優也、^云見えし君はいかに、
などやうに心に尋る心あり

479 山桜霞のまより

序哥也、無義、¹下野入道素伝説云、^{*2}思ふ人をほのか
に物へたてゝみたるに、其人を桜によそへて誰にう

つろふらん、いかゝなとおほつかなく思ふ心あるに
や云、堯孝法印、此儀を甘心にしけりとなむ

480 たよりもあらぬ思ひの

万ツル(朱マ)の事は便マありてこそあるに、我思は更たよりもな
き人を思ふは、我なからあやしき心也、思ひは火の
心也といふ説、不用之

481 初鴈のはつかに声を

初鴈ははつかにといはん為也、中空といふも縁マあ
り、思の達せん事もしらすして、思かくるは、中空
なる事也、思初たる躰也、人又云(朱)をみるよりは声を聞
は、けちかき事也、中マくにて、又まことにみる事
もなく中空なる思也、と云義あり

482 逢事は雲井はるかに

雲の遙にとは、いつの世に逢へき事もなく、只音に
のみ聞て恋ふるははかなき心と也、たけ高き哥也
云、家集には禁中の人を思云、人丸マ哥に、天雲の
八へ雲かくれなる神の音にや人を聞云、相似作也

483 かた糸をこなたかなたに

とやいひよらむ、かくやせむなと思へ共、さても猶

あふ事なくは、何を玉のをにせんと也、命も絶ぬへ

しと也、玉のをは片糸に縁あり

484 夕暮は雲のはたてに

夕の雲の幡の手の如くなることあり、又雲のはたてマ

にとは、乱たる心あり、天津空なる人をとほ、及な

き人を思ふ也、夕マの空に物思さま也、雲などにも思

ひ有へし

485 かりこもの思ひ乱て

しるらめやとは、よもしらしの心也、いもとは、あ

ひなれたる思人をいへり、是はたゝ女の事と心マうへ

し

486 つれもなき人をやねたく

人をやねたくと我心をかへりて歎マしたる心也、ふか

く歎く心あり、おくとはぬとは、夜マは夜もすから昼マ

は尽日の心也

487 千早振かもの社の

序哥也、思かけぬ日もなく恋る也云々、ゆふたすきは、木綿は乱ちかふ物なれはにやと云々、千はやふる賀茂の社とよめるは、木綿を毎日などかくへき大社を思て、読るなるへし

488 我恋はむなしき空に

思の一天に満たる心地、行方もなしとは、思の達せぬ事也、心ゆかぬよし也

489 するかなる田子のうら波

海もあらし処にて、波のたゞぬ日もなき也、賀茂の社とよむも此類にや云々

490 夕月夜さすや岡への

序哥也、夕月のさしたる岡辺の松の様、面白云々、二の意あり、いづともわかぬ恋とは、我思の不變なる心地、又云、人の心の、つれなくみさほにて、少も打ゆるふ事なきを、いづともわかぬと云々、此哥能く吟すへし、をのつから感情もつかふ也と云々

491 足引の山下水の

入しれぬ心にたとへたり、木かくれてたきり落る水の様也

492 吉野川岩きり*1とをし

かひあるへき人の心にもあらねは、恋はしぬとも音にはたてしと也*2

493 滝つせの中にも淀は

淵を思のよとむにたとへ、瀬はたきる心地、ふちせともなきとは、いつも我思ひのたきる由也、又云、淵瀬は浅深かはる事あり、我思は常住おなし様也云々、一両儀、心は通也

494 山高み下行水の

山高みとをけるは、下行水の下にとかさねいはん為也、入しれぬ由也、なからへて恋こそせめと也

495 思出るときはの山の

思出るときはの山の、岩つゝしはいはぬとつゝけん為也、打出すは、思ありともしらしの心地、此哥は業

平元服の後、真雅僧正のつかはしけると云。

496 人しれす思へはくるし

末摘花は紅の事也、色ふかき物なれば読り、人しれす思へはくるしと云て、紅の色ふかき花を讀る心有へし

^{*1} 四日(卷)廿八首

497 秋のを花にましり

^{*2} 勘云、秋の野のいつれの花とも聞えず、盛過、心ほそけなる長月の霜に、尾花はかり残りたる比、りうたんの花やかに咲いてたるを、尾花にましり咲花とは、紫のゆかりを思へるにや、此花は思草の事也、りんたう也、密勘にくはし、序哥也、心は逢事はなくて色に出てやこひんと也

498 我その梅のほつえに

はつえ、いつれも用之、^{はつえ}末の枝也、^{片ノ片ノ}序哥也、無義、一説云、ほつえとはつほみたる枝也、花の次第色にあらはるゝ如く、^{*3}我思切に成行て、ねになきぬ

へき由也、両説也云、又云、人の心のとけぬによ^{*4}

て、我思の切なる也

499 足曳の山郭公

時鳥も妻をこふる物なれば、其を讀ると云儀は嫌道也、人を思侘ていねかてにせんかたもなき折、時鳥の鳴を聞いていと物かなしき故、我心をもて云付たる也、夜もねす鳴を聞て也

500 夏なれば宿にふすふる

思のくるしき様を、かやり火の草なとつみたる下に久しくくゆるによそへて讀る也、夏の哥にては此五文字如何云

501 恋せしとみたらし河に

伊勢物語には、逢て後の哥也、爰にては不逢恋の部也、せむかたもなかなしき故、恋せしと祈るに、それをさへ神やうけす成ぬらんと也、逢事を祈し心よりかくいへる也

502 哀てふことたになくは

人の哀といふ事たになくはと云説あり、又云、我となくさめたる事也、思の乱たる時、是もよしなど我となくさむる事あり、それたになくはいかてか思をやすむる事もあらんと也、恋の乱をつかぬる心珍しく面白^云、

503 おもふには忍ふる事そ

無義、哀なる様也、詞のつゝきなどを思へし^云、

504 我恋を人しるらめや

しらめやとはよもしらしの心也、身になれぬるものは、枕ならてはなければ枕のみこそとよめり

505 浅茅生の小野のしの原

あさちなどの生たる小野也、篠もかゝる所にある物なれば読り、序哥也、くるしくしのふとも云人なくはしらしと也、勘忍の心にやと^云、

506 人しれぬ思ひやなそと

かゝる思は何事そと也、蘆垣のとは、はかなきさま也、何そとは詞也、いかなれはなといふ心也、と文^{*1}

字はそへ字にや、はかなき^{*1}へたてなどにてあひかたき中の心也、忍ぶ中はかゝる事ある也

507 思ふともこふともあはむ

人に恋らるゝには紐のとくるといふ事アリ、ゆふてもたゆくとは、むすへは又とくるよし也、あはむ物なれやとは、逢ましき物をといふ心也、此哥は女の哥なるへし^{*2}云、心つよき様也、又説、身を心ともせぬ身なれはにや

508 いて我を人なとかめそ

見御抄、いてとは発言の詞也、ゆたのたゆた、大船はゆりたてゝしつまりかたき物也、我心中のしつまりかたき様也、人もとかめぬへきと思心よりいへる也

509 伊勢のうみに釣するあまの

糸をなかくはへて、それにうけと云物を付て浪にかふる也、うけはかるくうきたる物也、我心の、とやせまし、かくやせむなど、定かねたる思ひをたと

へたる也、思ひ切なる時の心なるへし

510 いせの海にあまのつり縄

我思ひのくるしく、又いつを限ともなき様を思ふ也、序哥にて又たとへたる也、打はへ折はへ同、又打はへては限もなくの心あり、打はへは行末とをきやうの心あり、折はへはなへての心あり、又所によりてもかはるへし

511 涙河なに水上を

明也、涙川の水上を、まことに尋る心あるによて、かくいふにはあらず、つれなき人を思侘て、打わするゝひまもなきを思へは、只我からの涙也けり、と思ふ心*iよりかく読る也

512 種しあれは岩にも松は

明也、思そむるは恋の種也、恋といふ恋のあはぬ事あらしと也、思よはりたる時思かへすたのみ也

513 朝なくたつ河霧の

思へともしるへもなく中空なる心也、又云、人の領

解せぬを何とかなと思ふ様也

514 忘らるゝ時しなけれは

明也、あしたつとは蘆の辺に常に住故也、思ひみたるゝと読るに縁也

515 から衣も日も夕暮に

日もゆふと云は、衣の縁也、かへすも縁也、切なる思ひなるへし、かへすかへすそ

516 よるゝに枕さためむ

いかにねし夜かと読る、殊面白き心也云、思の切に成ぬれば、枕もさためす、ねもやらず、されは夢にみる事もなければ、いかにねし夜夢にもみえけんと也

517 恋しきに命をかふる

逢事にかふる命ならば安かるへし、今はたゝ、むなしく思ふにきゆへき命なれば、後世までも思ひの散しかたかるへしと也

518 人の身もならはし物を

身はならはしにてこそあれあはすしてとは、合事を
思絶てもやあらむ、さありても又恋しぬる物にやと
也、思に死ぬへく成ぬる時思かへす心也

519 忍ふれはくるしき物を

胸中しのひかたく苦しければ、人にもかたらはや
也、されと人の為も我為も、うき名もたて、思をな
くさめむ人は、誰にかと思ふ也、又くるしけれと
も、さりとて又、忍事を誰にかたらむ也

520 こむ世にもはや成なむ

こむ世にもとは、世をへたてむこと也、さもあらは
つれなき人をむかしとなさむと也、我身きえてなと
まで、つよくはいふへからす云

521 つれもなき人をこふとて

切なる思ひの様也、つる哉といふに心あり、泣様也
といふ儀は如何、只切に読る也

522 行みつに数かくよりも

亦如画水随書随合の心よりおこれり、はかなき思ひ

をよめり

523 人を思ふ心は我に

明也、切なる恋を嗟したる心也、人の限なくつれな
き恋の心なるへし

524 思ひやるさかひ遙に

いよ／＼人の遠さかり行中を思ふ也、夢の中にもま
よふ心のみなるに、みる事もなきを歎也、夢路とを
ける、さかひ遙にと有にかなへり

525 夢の中にあひみむ事を

うつゝにさりともとたのみつゝ、暮ぬれととふ人も
なければ、さらは夢にもなど思心也、くらせる宵と
読るに、待詫たる様みえたり

五日(巻)廿九首

526 恋しねとするわさならし

ならしとにこりて云義あり、嫌道也、一向に夢にも
みえずは思ひもよはるへきを、又夢にみゆる事もあ
れは物思ひのはしとなる故、恋しねとすると読る

也

527 涙川まくらなかるゝ

明也、いかめしくいへる也

528 恋すれは我身は影と

影と成はおとろへたる様也、人にそはぬとは、影の

形にしたかふと云事あれは也

529 かゝり火にあらぬわか身の

鶺鴒かひのかゝりの事也、我思の火の、涙の川※1にうき

たる由也、珍しき作也云々

530 かゝり火のかけとなる身の

なからへていつともなく下にもゆる思ひをたとへた

る也、かゝり火は影の水の底にもえてみゆる物也、

爰に影となると云るは、おとろへたる心にはあら

す、切なる恋の心なるへし

531 早き瀬にみるめおひせは

涙の川のいたりて早き事を切にいふ也、早瀬にはみ

るめも生ぬ物なれは也

532 奥辺にもよらぬ玉もの

沖にもへにもの心たや、されと沖へとはたゝ沖にも

の心也、海上の玉もの様也、人はつれなく我身は思

ひもやます、中空にてよるかたもなき心をよそへた

る也

533 蘆鴨のさはく入江の

あしかもはあしたつといふかことし、切なる思ひに

は胸中のさはく様を白波にたとへたり、かゝる時立

かへり我心をせめたる心也、かく恋んとはしらす

やと、我と歎したる也、又云、しらすや人をとほ、

思の行末の、切にくるしかるへきなど、兼て思ひし

を、思つゝかくなりたれば、しらすやと我にいへる

也

534 人しれぬ思ひを常に

明也、二条家の富士の烟の不断の心みえたり

535 とふ鳥の声もきこえぬ

深山幽谷のたどへ也、ふかく思ふ心也、かゝる思ひ

を、少も人のしる事もあれかしの心也

素伝家伝説云、かく深く思われとも、人の音信はい

さゝかもなきを、^{※1}鳥の声も聞えぬと云

536 逢坂のゆふ付鳥も

ゆふ付鳥の、しきりに哀に打鳴を聞て思よれる也、

逢坂はあふ事にはよせぬ也^{※2}

537 逢坂の関になかるゝ

序哥也、是もあふことに逢坂といふにあらす、心に

思ふとは、あひみむ事を思ふなるへし

538 うき草のうへはしける

限なく深き心をたとへたる也

539 打わひてよはむ声に

せんかたもなき躰なるへし、我なけくこゑには、山

彦もこたへぬはあらしと也、さても我思ひを、人は

さそともいはぬ事を思ふ心あり

540 心かへする物にもか

物にもかなの心也、人の心をわか心になし、我心を

人にかへて見せはやと也

541 よ所にしてこふれはくるし

入ひもはさす紐也、おなし心にとは、ひとつに心を

なさはや也、打とけたる中とはみるへからす、未逢

ぬ恋の類也

542 春たてはきゆる氷の

たとへて読り、氷はむすほわれぬれと、とけぬる時

は只一水となりて、更のこる所なし、其如く我に

とけよと也

543 明たては蟬のおりは

あくれは蟬の間断もなく鳴如く鳴くらし、夜は又蚩

のもゆる如く昼夜くるしきとはみるへからす、たゝ

夜昼くるしき思のたとへ也、蟬の鳴もくるしけなる

物也、折はへは、打はへなどの心なるへし、鳴くら

すやう也^云

544 夏虫の身をいたつらに

夏虫は火をとる虫の事也、我はそれよりもかなしき

心也、夏虫は火をとらむとするに、虫にも思の火あれは、ひとつなる思ひ也、我恋はたゞ我思はかりにて、人は思の同事もなし、かくて消なん事を思心也

545 夕されはいとゞひかたき
無義、哀ふかき哥云、つゝといふまで心有へし

546 いつとても恋しからずは

大かたの思なき人たに秋の夕はあちきなきを、まして恋侘たる人の秋夕^{*2}は、尤切なるへし、思の弥々くはゝるを、さても秋の夕はいかなる故ぞ、とあやしむ心也

547 秋のほにこそ人を

あらはれてこそ恋さらめ、心には何か忘れんと也、人はつれなくとも忘れしの心也

548 秋の田のほの上を照す

我や忘るゝといふに、人の思ひもしらぬ事を恨る心

あり

549 人めもる我かはあやな

下ニ思ふ心のくるしく限なき時、我とかく思ふ也、なとか色にも出ぬと思ふ也、人めを憚へき事もなしといふにはあらず、切に思侘たる時の心也、少述懐めきたる心也

550 あは雪のたまればかてに

たまればかつくたくたる様也、木の枝などにふりかゝる雪の気色なるへし

551 奥山のすかのねしのき

序哥也、すかの根しのきとは、打なひかしふる様也、霜雪をしのきて行なん、といふにかはれり、我身今は消ぬるとやいはん、若哀をもかくる事やあらんの心也、心中ニ打案したる躰なるへし、万葉には、すかの葉しのきとあり、よろしきにつきてすかのねと成て入たるにや、又、奥山の槇の葉しのき降雪のふりはしくとも土におちめや、とあり、しのきはなひく様也

^{*4}六日（巻廿六首

古今 十二 恋二 六十四首

552 思ひつゝぬれはや人の

つゝといふ詞は、少程をふる心あり、我心よりみつ
る夢なれば、さまざまも又心なるへき物を、と思ふ
心也、切なる心よりいへる也

553 うたゝねに恋しき人を

はかなき夢なから、人をみし故たのまるゝ心也、
夢てふ物はといへるに、はかなき物をと思ふ心あり

554 いとせめて恋しき時は

いとほ切に恋しき心也、衣をかへすは夢のため也、
春の哥に(一)感(二)を(三)顯注(四)にいと盛と釈して、最字を用た
る、其密勘*1此集に有へからすと注し給へり、其よ

りて、此哥のいとせめてをも最字也とは沙汰せず、

密勘の詞を憚故也、当流は万法度を守る事を肝要と

せりと云

555 妖風の身に寒ければ

身にさむければといふは、只風の寒き許にあらす、

物かなしき比なるへし、人のつれなきもこし方はさ

もこそあらめ、かゝる拆はさりともたのむ様、尤

あはれなるへし云、此哥、定家卿執せられけると

そ、此集の哥いつれかと御尋有し時、有明のつれな

くみえしを奏せられけるに、此妖風の哥をもくはへ

てまいらせはやとの給けりと*1なん

しもついつも寺に*2此寺説あり、六条有房は毗沙

門堂を号云、当流には下御靈*2、其跡也といへり、或

抄、いつくにて云、人のわさは追善の法事也、い

へること葉とは、衣裏宝珠の事を講しけるとみゆ、

玉を縁にして読る斗也

556 つゝめとも袖にたまらぬ

白玉のこほるゝ如くなるは、人を見ぬ思ひ故の涙也

けりと也、目といふにあたるへからす

557 をろかなる涙を袖に

明也

558 恋侘て打ぬる中に

恋侘とは、とにかくに人をたのみきぬれともかひもなき心也、人を待心もよはりて打ぬる様也、夢のたゝちとは端的也、夢のうつゝにてあれかしと也、うつゝのたのみ絶たる時の心なるへし、又はたゝ地と、にこる説もあり、直路とも直字をもよむと云々

559 住のえの岸による浪

序也、夢の中^さへ苦身^{*1}して忍ぶ様也、うるはしき躰の哥也と云々

560 我恋はみ山かくれの

序哥也、忍恋の類にはあらず、思のしけく成まさる心也、たとへたる心あり、あはれなる心あり

561 宵のまもはかなくみゆる

夏虫は蚩也、宵の程、蚩のはかなくもえてむすほゝれたる思ひをみつゝ、我思は猶まさりたりと読る也、猶はかなき思也と也、間もとは、何となくよめる字也

562 夕されは蚩よりけに

我^{*2}はかひなき思ひの物思^{*1}ふ折節、蚩のもえ侘たるを、いかなる思ひ故^{*2}かくまで身をこかすらん、と蚩の思ひを察するに、なれは、猶まさりてくるしき心也、人を恨みんたよりもなくあちきなき心あり

563 さゝの葉にをく霜よりも

草木の上よりも、さゝの葉にをける霜はさむけなる物也、哀なる心也云々

564 我宿の菊の垣ねに

菊の垣ねはませなとなるへし、消かへるとは、思きえて恋しさもなきやうに思へは、又立かへり恋しき心也、白菊の上にをける霜は消ぬるとみえて、又残る物なれば、それにたとへたる也、おもては序哥也

565 河の瀬になひく玉もの

序哥也、無義、かなしき恋也

566 かきくらしふる白雪の

した消とは、上は消ぬやうにみゆる雪の下のかつき

ゆるにたとへたり、かなしき思の様なるへし

567 君こふる涙の床に

床にみちぬるは海の心也、みおつくしは、深所のし
るしにたつる物也、珍しき作也云々

568 しぬる命いきもやすると

情はあさくとも、あはむといひていきもやすると心
みよと也、玉のをはかりとは、そとの心也、なさけ
なき人を思ふなるへし、かく人にいせまほしき心
よりいへる也

569 わひぬれはしめて忘れんと

人はつれなく思ひは切なる恋也、おもはずなる夢な
とに、ほのかにみて、又思のまさる心也

570 わりなくもねてもさめても

恋しきかとは、恋しき物かなと也、心をいつちやら
はとは、心をいかやうになしてかの心也、心の一す
ちなるをいかやうになしてかといへる、面白也*1

571 恋しきにわひて玉しる

むなしき物からの名にや残らんの心也、なき跡にも

名にや残らんと也、空蟬などのからの如く言にはあ
らす、をそろしげに成故也、からの心をは、そとお
もはせたる、優なるへし

572 君こふる涙しなくは

無義

573 よとよもになかれてそ行

よとよもには常住なるよし也、みなは、水の泡也、
水のしつかならぬ処に泡は生ずる也、我思のさはく
によそへたり

574 夢路にも露やをくらん

夢中にも露けき様也

575 はかなくて夢にも人を

初五字、尤切に心あり云々、つれなき人を夢にみは
や、と思心もはかなき心也、又夢もはかなくみえつ
、其朝の様也、朝の床そ云々、又はかなき心也、哥
の次第不逢恋なるへし

576 偽の涙なりせば

偽の涙ならば、^{*1}かくくるしくしのはしと也

577 ねに鳴てひちにしかとも

春の雨のしめやかにふる時分、我思の切なる心より
かく読る也、^{*1}春雨のさま涙に似たるによて也、一義
也

578 我ごとく物やかなしき

時そともなくとは常住なる也、よるく鳴を云り

579 五月山木すゑを高め

梢を高めといへる、鳴音空なると云にかなへり、心
は、むなしき事のかひなき物ゆへにと思心也、こと
から面白^云、又云、^{*2}我心いつくともなき由也

580 秋霧のはるゝ時なき

心もほれくとして、あやめもわかぬ様也、ある空
もなき心也

581 虫のこと声にたてゝは

明也、涙のみこそといへる、切なる躰也

582 秋なれば山とよむまで

無義、ひとりぬる夜はといへるは、少たのむ心ある
人のよめるにや^云、逢後の独ねには有へからず、不
逢恋の類也

583 秋のゝに乱てさける

千種にとは千々の思也、思の乱たるによそへたる也
^{*2}七日(巻)卅二首

584 ひとりして物を思へは

そよとは秋の田によそへたり、我思人のみならず、
さそといふ大方の人の哀を、かくるさへなき由也、
為明卿筆、夜とあり、秋の夜⁽²⁾のと書る本あり、心か
はるへし、秋の田、可然にや^{*3}

585 人を思ふ心はかりに

雲井にとは心空なる様也、一説、禁中なる人を恋
る也^云、又遠くへたゝれる人を思ふ也

586 秋風にかきなすことの

かきならすを中略したる也、秋風にとは秋風楽を引

心也、と云説は嫌道也、秋風物かなしく身にしむ
比、かきならす琴の音を聞て、いと、恋しさのまさ
る心也、たか琴の音とはなし、又秋風樂もをのつか
らよせは有へし、をよそ故事などを哥に読る事、其
事を其ま、読はよろしからず、下のにほひに成やう
には詠へし*2云、こと書などを大方に詠事あり

587まこもかるよとの沢水

序哥也、淀の沢水、もとより深き所也、常よりこと
に、切なる恋の心也、結句ふつゝか也、いたり
て古き哥の躰云、一説云、まこもかるはことわさ
也、恋も人のことわさなればよそへたりと云

588こえぬまは吉野の山の

こと書にみえたり、越ぬまとは思ひの未達の心也、
たけある哥也とそ
やよひはかりに物のたうひけるイ給*3

逢たりし人などをいふこともあれと、是は哥の次
第、未逢の人にせうそこなといひかはしたるなるへ

し

589露ならぬ心を花に*4をき初て

心を花にとは、人に心をかくる由也、風吹ことにと
は、又せうそくる人をいへり、はかなくうつるひ
やすき人に、心をかけそめて、折、物を思ふ様也

590我恋にくらふの山の

花の一えう、散にくらへても、猶我恋は*1まさるへ
しの心也、爰にてはくらふる心にて濁と云

591冬河の上は氷れる

上にはみさほつくる様也、人もしらぬ也、然而*5非忍
恋、部、下になかれてとは、下に思ひむすほ、れつ
、年をへたる心也

592滝つせに根さしと、めぬ

滝つせには、いと、萍は生かたき所也、うきたる心
のしつかならぬにたとへたる也

593宵、にぬきてわかぬる

かり衣は狩衣の事也、衣架などにかくる心をよせた

り

594 東路のさやの中山

中／＼になにしかとある内に、人のつれなさも、我

思のかなしき心もこもれり※1

595 敷妙の枕のしたに

思し事はつもり行とも、其しるしは更になき事を歎

心也

596 年をへてきえぬ思ひは

思ひを火によせたる也、涙も思ひもとしをへてつき

ぬ様也

597 我恋はしらぬ山路に

つれなき人に食したる心也

598 紅のふり出つゝなく

切なる思ひの涙なるへし、たもとのみこそとは、更

に思ひのしるしはなくて、袂のみ色まさるよし也、

人のつれなさはかはらぬ心也

599 白玉とみえし涙も

いたつらに思ひの切に成たる様也、白玉と見えし
も、大方のなみたならず

600 夏虫をなにかいひけん

何かいひけんとは、夏虫をはかなや、何故に身をこ

かすはかりは思ふらんなど、もとく様に思ひしか、

我思切に成ぬる時は、又かくのことくなれば何か云

けんと読り

601 風吹は嶺にわかるゝ

序哥也、此哥ことから限なしとぞ、すこし心とけぬ

へく見えつるなさけもたえて、跡もなく成たる也、

高山のうこかぬ様、つれなき人によそへたる也、心

かとは、心哉也、思入たる詞なるへしとなん

602 月影に我身をかふる

無義、月にむかひて感ある時の思ひ也、優に哀ふか

き哥也、月は愛ありてなつかしき心有と用也

603 恋しなはたか名はたゝし

我身いたつらに恋しなは、世上の無常のことはりに

そ君はいひなさむすらむ、さりともそなたの名はたつへき物をと也、此哥は及なき人を思ふ心あり云。

604 つの国のなにはの蘆の

めも春はるには、春の蘆のもえ出る心※1も有へきにや、

自面は目もはるかなる心也、春のあしへをはるくく
と見渡したる心にて、しけき思ひにたとへたり、人

しるらめや、ふるくは、しらしの心也、近代はしる

らんの心によめり、此哥にては、しるらんやといふ

心にもかよふといふへきにや云。

605 手もふれて月日へ※1にける

人になれちかつかぬ様也、おきふし夜るは、く思の

切なる也、手もふれてといふも、いこそと有も弓の※2

縁也

606 人しれぬ思ひのみこそ

人にしらるゝ程の思ひならば、せめてなるへきと也

607 ことに出ていはぬはかりそ

言に出ぬ也、水無瀬川下にかよふとは、小河の水の

様、うへにはなきやうにて、又かすかになかるゝを
いへり、人に心のかよふによせたる也

608 君をのみ思ひねにねし

思ひくくてねし我心からみえつる夢なれば、人の情
にもあらず、されは是にもなくさまぬ心也、※3なくさ
めかたき心なるへし

609 命にもまさりておしく

遙に思ひ絶※2たる中を思ふ比、ほのかに見たる夢は、
命にもまさりておしかるへし、思侘たる身の命はお
しからぬ心※3あり

610 あつさ弓ひけはもと末

序哥也、昼などはとやくやと、人めにもまきるゝ

事も有へし、夜る切なる心を思ふへし、無心なる物

も、ひけはよる心もあるにや云。

611 我恋は行衛もしらす

明也、思初しより身の行衛もしらすいつをはてとも
なき様也、はてもなしと読きりて、逢をかきりと思

ひつゞけたるやうに吟すへし云々、又あふをかきり

の心一にて行衛もしらす、心の落着もなき心と云々

612 我のみそかなしかりける

明也、ふひんなる哥様也

613 いまははや恋しなましを

少しほのかにたのめし事を命にして、猶いつまでの
思をかせむと思ふ心也、中々なる物思ひの様也

614 たのめつゝあはて年ふる

又は偽くして年をふるにも猶こりぬ心をしれかし
と也、伊勢かかたへをくる哥と云々、後撰に業平の

哥と入たり、あやまりなるへし云々

615 命やは何そは露の

命やとは有は、命をかく思ひたる詞とみるへし、
たとへ千年をふへき命なり共、切なる人にあふ事な
らは、かへんにおしからし、まして露の命なれば、
何か惜からんの心也、それさへ思ふにかなはずし
て、物を思ふ事を歎也

*1
八日(卷)卅二首

古今 十三 恋三 六十一首

やよひのついたちより 一日比の事なるへし、忍ひ

に物らいひてとは、物こしなどにことの葉とかは

したるなるへし、雨のそほソヲ(朱)ふりけるとは、春雨のか

すかにふるをいへり

616 おきもせずねもせて

此哥、伊勢物語には逢て後の哥也、此集にては不逢
恋の部也、おきもせず、ほのかに物なんといひて

後、思ひの切に成たるさま也、春の物とて、春は

花の色、鳥の音に付ても物哀なるに、物いひかはし

つる名残なれば、そなたのみ恋しくてなかくめくらす

様也、自面は雨の心なし、*1こと書に雨のふるよしあ

れは、雨の心をもすこしはにほはせたるなるへし、

伊勢物語にては、面に雨の事をよめりと也、事によ

り所によりて其心かはるへし

業平朝臣の家に、業平のいもうとの事也

617 つれつれのなかめにまさる

なかめ、雨の事也といふ説は、不用之、人を思わひつゝ逢事はなくて、つれ／＼と打なかめあつゝ、いとゝ泪もまさる様也、袖のぬゝるはかりを、ことわさにて、逢事はなき躰あはれ也云々、こと書にも返哥にも雨の事なし

618 あさみこそ袖はひつらめ

思の浅深に涙もよるへき心也、身さへなかるのとこと葉、幽玄也云々

619 よるへなみ身をこそとをく

見御抄、よるへなみはよる方なき也、人にさしはなれたる様也、されとも我心ひとつは、君か身をはなれぬと也

620 いたつらにゆきてはきぬる

誠に恋路のならひ、如此し

621 あはぬ夜のふる白雪と

人を尋行てあはぬ夜の心也、あはぬ夜のつもりぬるに、我身きえもやられて、思ふにくるしきを恨たる心也、雪のつもることくならば、きえぬる事ありあるへきをと也

此哥は、左に注する作者は、右の一首の事也、爰にては、右の三首ありいづれも人丸の哥也と口伝す、但可あり尋云々

622 焮のゝにさゝわけしあさの

此哥も人を尋てあはぬ帰さの心也、篠分し朝の袖とは、さゝは露もこほれやすく、朝の袖はいたうぬれたる様也、其よりも猶あはて帰る夜はぬれまされりと也

623 みるめなきわか身をうらと

此哥伊勢物語には人の返哥也、人の問来れるに、あはすしてかへしたる哥也、あはて降りたる哥の部に入り、みるめなきとは、問きたる人に女のあはぬ事也、かくあはぬは、其人につらき事なと有故なる

を、其我身を恨とはしらてや、たひくくるらんと
也

624 あはすして今夜あけなは

人のもとへ行てあはて帰心也、心さしをいたしてき
たれるにむなしくは、なかき恨となるへき由也

625 有明のつれなくみえし

あり明は久しく残る故つれなくとうけたるなり、
つれなくみえし別とは、あはて帰る別也、終夜心を
尽しつるに、むなしくて今ははや帰らてかなはぬ時
節の心也、折節残月などの空切なるへし、たとへ逢
ての別也とも、かなじかるへきに也、暁はかりと有
を、暁ほといふ心也とはいひ出へからず、哥の品
ことの外に成へし、理は暁ほと心の思ひてをくへ
き也、又定家卿かやうの哥一首、^{*1}此哥を、定家家
隆同心、此集にはこれなるへし、と申されけりと

そ

626 逢事のなきさにしよる

逢事なきとつらけたり、浪によそへて読る也、或

説、浪とは涙の心ありと云、必難用之となん、以上

七首は、行て不逢哥也、此内あはぬよのふる白雪の

哥も、あはぬよのといへるより、行て不逢さまとみ
えたり

627 かねてより風にさきたつ

逢事なきさきに名の立たる心也、浪に名をよせて読
り、浪の様にたとへ読る也

628 みちのくにありといふなる

序哥也、下句ことに哀なる哥也と云、逢みての名さ
へ、^{*2}なき名とは一向に心をもかけぬ人に名の立事
にはあらず、思へともいまた逢事なき人に名の立事
也、又云、ありといふなる、身のうちへに成ける事
といふ心もあり

629 あやなくてまたき無名の

またきたつとは未逢名の立をよめり、渡るとは、
人に逢事なるへし、やまむ物ならなくにとは、思ひ

やむへき物ならぬと也、休しかたき心也^{*1}

630 人はいさ我は無名の

此哥後撰集には作者かはれり、返哥也、人はいさと^{後*2}

は対したる人にいふ詞也、此集にては其心もかはれ

り、人はいさとは誰にても世の人はしらす、我は無

名のくるしければ、むかしも今も更にしらすといは

んと也、無名など立ても其まゝとかくある人もあれ

とも的心也

631 こりすまに又もなき名は

実事はなくて物なんといひかはしたるに、名の立た

る心なるへし、又かたらふ時などこし方の事を思た

る也、密勘にも此義也、人にくからぬとは人に着し

たる心也、我心を嗟したる心あり^{*3}

東の五条わたりに、伊勢物語には逢たる人の所也、

此こと書の様もあひたるやうにみゆ、しかれ共、此

集にては哥の次第未逢恋の部也、人をしりをきてと

は、人をたのめをきなしたるに、又物なといひか

はす程のことなるへし、えあはてともいひかはしか^{*4}

たき也、あるし聞付て、伊勢物語にはついひちのく

つれとあり、爰にはかきのくつれと書る、優に成た

りと云、くつれとあるに築地の事とはみえたり

632 人じれぬわかかよひ路の

明也

633 忍れど恋しき時は

忍ひくきぬれど、恋しさの切に成時はあらはるゝ

事^{*1}を、山の端にみえさりし月の、やうくあらはる

ゝによそへたり、いてこそくれとたとへていふ

也、前の哥夜恋の類也、^{*2}又云、うかれ出たる心も

有へきかと云

634 恋く稀に今夜そ

明也、此哥より逢恋部也、五文字より切に哀なる作

也

635 秋の夜も名のみ也けり

ことそともなくとは、たまさかにあひて、何事をい

ひいつ共なく、思つめたる事も其しるしもなくて明
行様也、密勘にみえたり、殊勝の理也、又云、こと
そともなくは取あへぬ也云々、同じ心にや

636 なかしとも思ひそはてぬ

あふ人から、片清、連々ひとりねに長夜を思侘て、
今逢夜に明易時、むかしより此理そと思也

637 しのもめのほからくと

次第明行様也、たまさかにあひそめたる夜の、や
うく鳥の声なともきこえたる時分を思へし、第二
句の様を思へし云々、或説、延喜御製一如何、其

心正直にしてしかも哀ふかし云々

^{(1)*2} 国経朝臣 公卿なるを朝臣と書る事、此集には丞相

の外は官をかす、しからは、朝臣は惣して四品に
かきらすいへるとみえたり、親王すら多分実名を書
たり

638 明ぬとて今はの心

今ははや別るへき由也、密勘云、いひしらぬとは云

もならばす思もならばぬ別の惜くかなしき心也云々、
初逢恋なるへし

639 明ぬとて帰るみちには

^{*1} かきくらし降雨にもとまるへきならねは今はとて
^{*4} 云々、こきたれてはかきたれての心也、いたくふる躰
なるへし二

寵一説、ウツク、
一説、チヨウ用之 此小書、こゝにいたりて有、如何

640 しのもめの別をおしめ

切なる心也

641 郭公夢かうつゝか

なすらへたとへたる哥也、朝露は枕詞也、されは末
に暁と読り、時鳥の一声をほのかに聞たるは、夢か
うつゝかとおほゆる也、玉さかなる人に逢て、あか
す別ぬる暁のさまは、一声きゝてあかぬ心に似たる
由也、ことの葉などを思ふへし、或云、郭公にとふ
心也云々

642 玉匣あけは君か名

玉匣は枕詞也、我のみならず人の名をも思へば、夜
ふかく帰りしを、猶いかゝと切に忍心也

643 今朝はしもおきけん方も^{*1}

しもは詞也、霜によそへたり、別路の夢うつゝとも
なくて立出たる様也、思いつるさへ失心する程かな
しき由也、きえては霜の縁也

644 ねぬる夜の夢をはかなみ

後朝恋也、ねぬる夜の夢とはほのかに人に逢たる事
也、其はかなさに、夢にもやみゆるとまどろめは、
いよ／＼はかなくなると也、夢にもやとまどろむ事
わさのはかなき心也、夜深く別て、ねて夢にもやと
思ふ也

業平朝臣の伊勢の国に 人やるすへなくて

とはたよりなき也

読人しらす 作者斎宮也

645 君やこし我やゆき釵、

夢ともうつゝともわかす、ほのかなる様也、下句は

上の注の如し、第一第二句、あらたに寄なる作也^{*2}
646 かきくらす心のやみに

世人さためよとは、女の哥に、夢かうつゝかと問や
うに読たれば、我も心のまとひに無分別なれば、世
人定めよといひ捨たる也、誰ともなくいへる也、世
人濁てよむ故実也^{*3}云、

裏説云、君やこし我やゆき釵は、一切此境界の様
也、我来て人をあらはすか、人来りて我に對する
歎、忙然たるはかり也、亡したる処は中道也、夢か
うつゝかとは、実か実ならざるかの心也、此界の生
は実か否歎也、即、空仮中三諦也、^{*4}夢は空諦、うつ
ゝは仮、^{*5}、兩篇亡したるは中道也

かきくらす心のやみに

裏説云、無分別なる処は中道也、世の人にまかせた
るは、何ともいへはいはるゝ理ある故也、無造作之
心也、放下したる也、をよそ哥人の心は、亡したる
をたうとひ、造作を嫌へり、^{*6}当一念^(マコ)なるへし、

花さけは開に對し、散はちるにうつる心なるへし

九日*1（卷）卅一首

647 烏羽玉のやみのうつゝは

夜ほのかに人にあひて、たとくしき心也、裏云、

一切世間はやみのうつゝ也、迷の衆生のさま也

648 さ夜深て天の戸渡る

天の戸は空也、月のかたふく影をみるか如く、あか

す君をあひみしと也、又云、月のやうく更ぬる

比、思ふ人にほのかに逢てあかす思心也、共用之説

也云

649 君か名も我名もたてし

なにはなるとは、みつといはん為也、深く忍ふ心也

650 名取河せゝの埋木

奥州にあり、名の立によそへたり、瀬々の埋木はが

くれぬれと、又あらはれてみゆる物也、さてもあら

はれはいかゝ、など切に思ふ心なるへし、密勤にく

はし、可見之

651 吉野川水の心は

水の心を人の心のはけしきにたとふる説は、不用

之、我思のたきりたる心也、されとも音には立しと

忍心也

652 恋しくは下にを思へ

ねすり、いねて紫の色の身にうつるを云をは不用

之、紫の根にて摺たる衣也、恋しくは、我心に恋

しく切也とも下に思へと也、夢とはゆめく也、

切云詞也

653 花すゝきほに出て恋は*2

ほ*3のあらはれての恋は名のおしきと也、下ゆふ紐*4の

とは、枕詞也、下に思ひむすほ*5れて打も解ぬ由

也、それもくるしき思ひなれとも名を思ふ也、恋わ

とよむ也

654 思ふとちひとり*6か

ひとりひとりかをくれさきたち恋しなは、藤衣きむ

事をいかゝと忍ひかたきよし也、偕老同穴と思へ共

の心也

655 なきこふる涙に袖の

涙は何故にも落る事あれば、それによそへて、夜^{*1}る

こそきかへめと也、藤衣はかくれなき物なれば、^{*1}き

む事を忍心也

656 うつゝにはさもこそあらめ

哀なる哥也^云

657 かきりなき思ひのまゝに

うつゝに忍事の切なるによてかく思ひよれる也、よ

るもこむとは、夜ゆかんと也

658 夢路には足もやすめす

見^{*2}しことは、夢中にはしけく逢みれとも、うつゝに

一たひ見たるにもをよはさると也、夢にもなくさま

ぬ事をおもへり

659 思へとも人目つゝみの

思ふあたりへゆかはやの心に人めをはゝかるよし

也、河と見なからは、堤の縁也、見渡しなるやうな

る心あり、裏説、一切人は名利を本として人めをつ

ゝむ也、名利の高き心也、思へともは、彼名利をは

なれん事を思へ共、難離は此界の様也、此理をしら

しめむか為也

660 滝津せのはやき心を

人めつゝみ、早き心とは、思のたきり早き也、物に

もさへらるましき思ひながら、人めにはせかるゝ事

を思也

661 紅の色には出し

かくれぬとは、草などしけき陰に沼は有を云、切に

忍心也、紅もかくれぬも皆序也、下にかよふ心はく

るしく共と也

662 冬の池にすむには鳥の

冬の池といへるは、鳩鳥のつれなく寒水にくくる心

にてよめり、我思の休すへきをも休せず、つれなく

かよふ心を人にしらすなど、我心をいさめたる也

663 さゝの葉にをく初霜の

氷のさま云々

さゝの葉に夜寒の比の霜の、しみつくにたとへて、
我思はふかく共色に出しと也、さゝの葉のみとり
は、色のかはらぬ心也

664 山科の音羽の滝山イの

音に人しるやうに恋ぬへき事かはと也、やゝもすれ
は、人知はかりになれるを、※1嘆し思返也、此哥は墨
をもて滅哥の中にあり、返しと云々

665 みつ塩の流ひるまを

塩のひるを昼によせたり、ひるは逢かたき故夜る
を待と也、塩みては、みるめによる事によせたり、

面白き迷立也*2

666 白河のしらすともいはし

人に逢たる事を人のいふ事あらは、我はしらすとは
いはしと也、世々になからへてすまむと思ふ故也、
すまむとは、人どかはらすと憑心也、底清みとは、

とゝこほる事なく契かはしたる中の心也

667 下にのみこふれはくるし

玉のを、命にはあらず、玉は糸につらぬく物なれ
は、緒たえぬれは玉のみたるよによそへたり、忍事
くるしければ打みたれんと也*3

668 我恋を忍ひかねては

※2山橋は冬もみとりにて実のあかき物也、忍はんと思
へとも色にもいつへきと也、かみそきの時用物云々

669 大方は我名もみなと

御抄委、世をうみへとは、世をうきと也、海辺は
みるめあるへき所たになしとは、人をみつへき所
てもみかたき心也、我名もみなと、大方はとは、

大略なんといふ心也、十の物に七八ほどの事也、大
方かく思ひなりたる也、我名もしられぬやうになき
になして、いつくへもゆかんの心※3にや云々、みなとは

船の出入の所なれは也

670 枕より又しる人も

無心なる枕のみしるとは、ふかく忍故也、もらしつ
る哉といふに、※4我おこたりに歎心あり、めてたき哥

也云

671 風吹は浪うつ岸の

序哥也、忍くこしかかくも成けるよといふ心也

672 池にすむ名を鴛どりの

序哥也、思の切に成たる心也、兼輔哥とそ

673 あふ事は玉のをはかり

玉のをはかりはその事也、滝つせのことく世に名のひくと也、恋のあちなき事也

674 むら鳥の立にしわか名

ことなしふとも、⁽¹⁾ことなしといふとももの心也、⁽²⁾こと

なしう共といふ様に読へし^{云々}、村鳥は立といはむ

為也、又は名のさはきたつ心也、⁽¹⁾過則勿憚改といふ

性なき人のあやまりをいふ、かくさむとする事をい

へり

675 君によりわか名は花に

我名は花にとは、はなくとあらたに色々敷名の立心也、世の人言かゝる物也、我名は花にと読きるや

うに吟すへし、春霞とをける句面白し^{*1}云々

676 しろといへは枕たにせて

枕のしろといふ事ありとみえたり、枕のみこそしらはしらめ、^{*2}枕より又しる人もなどの哥をうけて読る

にや^{*3}云々、心は、塵こそかく立やすき物なれ、我名の立やすき事を歎也、さしも忍し名のなとかくかる

く立やすかるらんと歎由也

十日^{*4}(朱) 卅首

古今 十四 恋四^{*5} 七十首

677 みちのくのあさかの沼の

序哥也、^{*6}花かつみは薦也、かつみるとは、ほのかに

逢見たる也、恋や渡らん、はかなくあひみし人ゆへ

に、かく恋や渡らんと観したる心あり

678 逢見すは恋しき事も

逢後に思のまさる故に、只音にのみ聞てあらは、か

ゝる思はせしとの心也

679 磯上ふるの中道

序哥也、見すはとは、逢みすはの心也、あひみはや
と思ひし事なともる也

680 君といへはみまれ見すまれ

初五字に心をつけてみるへし、肝心也云々、富士のね
の珎しけなくとは、常住煙の立心也、見まれ見すま
れは、みる時もみぬ時もの心也、我恋と終に読る、
よろしからさるへし、此哥にては詞のつゝきにより
てくるしくも聞えず云々

681 夢にたにみゆとはみえし

たとへ夢にみゆともわかみゆるとはみえしと也、我
面影にはつるとは、朝に鏡などにてみれば、思にお
とろへぬるをはち*1たる作意*2、女の哥にて殊面白し*3云々

682 いしまゆく水のしら浪

序也*4、ほのかに人にあひてあかす思心也、かくこそ
はみめとは、石まを行水の岩などにさはりて、立か
へりくするをみて、立かへり又みまくほしき心を

よそへたる也、立帰るといふも回頭してみるへき心
にはあらず

683 いせのあまの朝な夕なに

みるめをはしけくかつきする物なれば也、あくよし
もかなとは、満足したき心也、又云、我みるめはし
けからすと対していふと*5*6云々

684 春霞たなひく山の

恋の一に、山桜霞のまよりといふ哥は、未逢してみ
たる也、此哥はほのかに逢みてあかす思ふ也、たと
へたる様、殊面白し*7云々

685 心をそわりなき物と

此哥、未逢して人をみたるときこゆ、しかれ共部類
之次第、逢ての哥なるへし*1、ひとたひなどにてやみ
もせての心也、みる事有のみにて実のすくなき心と
みるへし

686 かれはてん後をはしらて

夏草のふかきをみる時は、かれん物共おほえぬこと

く、⁽¹⁾はなはたしきは必変する事あり、⁽²⁾人の変せん事
をもしらす、ふかく思ふさま也、少憑むへき心ある
中なるへし

687 あすか河洲は瀬になる

世間の變化はいかやうに有とも、思ふ人を忘れしと
也

688 おもふてふことの葉のみや

秋をへてとは、草木など秋は必色のかはる也、其縁
に秋と読り、心は世間の事何事もかはるならひなる
に、只我思ふといふことの葉のみかはらぬと也、人
のうつろふ心こもるへし、又云、人の心と詞との相
違をいふとも

689 さ庭に衣かたしき

はしひめ、橋姫の物語などあり、^{*1}此哥の心は、旧妻
などふかく契たるに立はなれて思やる心也、我妻を
橋姫によそへて読る也、橋姫は久しき人なれば便あ
り、^{*2}又さま／＼の説あり、定家卿無詮^云、又は玉姫

とあり、をとりたるにやと^{*1}
云々

690 君やこむ我やゆかむの

いさよひはやすらふ也、此哥には宵の心もすこしか
けたるにや、真木の板戸も^云、いたつらに夜の深た^{*2}
る也、かくしつゝ夜なくあかしたるさま也

691 今こむといひしはかりに

密勘^云、いまこむといひしを待程に、月比過て秋
さへ暮て、在明の月を待出たる心^云、いまやかてな
んとはかなくいひすてたるをたのみつゝ、^{*3}秋も暮ぬ
る様なるへし、此哥殊勝也となん、余情おほくこも
るへし^{*4}
云々

692 月夜よし夜よしと人に

万葉に、わか宿の梅さきたりと^{*5}、^{*6}の哥より読る、
月もさやかに夜も面白き折なるへし、こてふににた
り^云、^{*7}とにかくにあちきなく思わつらふ様也

693 君こすは闍へもいらし

こ紫はもとゆひを染る故也、霜はをくとも、定なき

人を憑みて夜の深行様也、霜はをくともと誓たる心也、こ紫とをける、殊勝也^{*2}云、

694 宮城の、本あらの小萩

本のあらし萩をいふ也、或説、萩の露の風を待如く^{*1}まつ心也^云、嫌道也、露をもき萩の風を待やうにみ^{*3}れは、君まつことによそへたる也^{*4}

695 あな恋し今もみてしか^{*5}

見てしかなの心也、今もとは切なる心也、逢ての後に思ふなるへし、なてしこを人によそへてよめり、山かつは垣ほといはむため斗也

696 津の国のなにはおもはず

あふといふ名はかりには思はず、常に合みむ事をこそ思へと也、とはに

697 敷嶋のやまとにはあらぬ^{*6}

序哥也、比もへすしてとは、逢みたる人を程もへたてす又逢事もかなと也

698 恋しとはたか名つけん

しぬとそたゝに^{*7}云、かくいひて哀をもかけ、とはれもやせん^{*8}の心也、誰いひをきけむ事そ、なといふか如し

699 みよし野、大河のへの、

序也、人に思おとされたる事なと有て、我身数ならぬを歎心也、なみくにも思はれは、かゝる悲き思ひをはせしと也、見初⁽¹⁾し時思ひし行衛のかく有けりと也

700 かく恋ん物とは我も⁽²⁾

兼て思しことかく恋侘ぬる事を思ふ也

701 天の原ふみとゝろかし

ふみとゝろかしといへるは、いかめしき物さへの心也、雷は威勢のいかめしくおそろしき物なれ共、それさへ思ふ中をさくる事はなしと也、さくる人ある事有て読るなるへし、此哥は、陽成院の御乳母、心^{*9}あためきたるにや、思ふ人など持たりけるに、陽成院の御気色あしかりけるを、うらめしく思奉りて読

る哥と云、可尋云

702 梓弓ひき野つら

梓弓は引といはん為也、ひき野は名所也、末つゐに

云^{*1}、見御抄、切に思ふ人に行すゑいかなる事か出来

て、さはる事もあらんなど思ひしか、末つゐに口舌

など出来たる中の事なるへし

此哥はあめの御門 天智天皇御事也

703 夏引のて引の糸を

絹の糸なと手にくりかくる物なれば、て引といふに

や、夏引は夏この心にや、又、麻の夏引にやと云

704 里人のことは夏野

世の人の詞なと口舌はしけく共也、かれ行君に云^{*2}、^{*3}

かれくなる中の心にや

藤原敏行、女を業^{*4}の妹也

705 数々におもひ思はず

初五字大やうにいへる也、さまくになどの心有に

や、思ひおもはずといはむため也、思ひも思はずも

はや間かたく成とみゆと也、身をしる雨とは、雨に

よて身をしる心也、涙の事にはあらず^{*1}

706 大ぬさの引てあまたに

大ぬさとは、或説、幣の手をあまたにきりかくるを

いふと云、幣帛は是かれの手にとり渡す物なれば、

引手あまたといふ也、用此義、心は哀とは思へ共、

たのみかたしと也、又、袖に麻の緒を付たるをも大

ぬさといへり

707 大ぬさと名にこそたてれ

つゐには君かかたへよるへしと也、ぬさのなかれよ

るにたとへたる也

708 須磨のあまの塩焼く煙

風をいたみとは、煙の風に不勤^{*5}様也、人の他人に心

のなひくをよめり、哥の姿たくひなしと云

709 玉かつらはふ木あまたに

玉かつらは草のかつらの事也、玉椿玉篠なんといふ

か如し、一木ならずはへる物也、心は、我方絶ぬ

も又うれしくもなきよし也

710 たか里に夜かれをしてか

あた人などの我※1にうらみたるか、ちかきあたりなどに声※1などするを聞て、たか方を夜かれをしてか※2と読る也、郭公によそへたる也、夜鳴物也

711 いて人はことのみそよき

いてその人はなといふ詞の如し、詞のみよき也、変安き人を恨也、色※3ことにはいひしるき也、巧言令色鮮矣仁之心あり

712 偽のなき世也せほ

人のことのは※4うれしけれ共、思へは又偽のみなれは、千方の事もかひなき心也、哀なる哥と云、又説、誰も偽にてこそあらめといふ心※5云々

713 偽と思ふ物から

たのまれぬ人と思つめても、さても其人をさしをきて誰をか我はたのまむと也、たとへまことある人ありともと思ふ也、尤哀なる心也、乍、秘伝也、当

*6
十一月(癸)卅七首

714 秋風に山の木の葉の

山の檜の昨日けふまで緑トナリなりしか、秋風にいっし、かうつるへるをみつゝ、人の心もかはる事もやなど思ふ由也、いかゝとそ思ふと読るに余情あり、ふかく思かはせる中などにはあらざるへくや、世の變化に思ふ也

715 蟬の声きけはかなしな

物思ふ身の、おほえす月日も過行に、蟬の声のあらたに鳴を聞て、時節に驚きもよほされて思ひよれる也、物思ふ時は物にふれてたのむ事もあり、又うたかふ心もある也、夏衣(1)はうすくといはむ序也、蟬の鳴比に縁有、心詞(2)やさしき哥云

716 うつせみの世の人こと

世の人言也、はかなくいふ詞※7のしけき也、空蟬の世とははかなき世の心也、されとも此哥には、たゝ世の人ことゝ許みるへし、人ことなんとにをのつから

我中もかれぬへき事を歎也

717 あかてこそ思はむ中は

そをたにとは、それを成どもの心也、心明也、夫婦
の中にかきらす世上の理にもあたるへし、十分なら
むと思ふましき教也

718 忘なむと思ふ心の

有しより^{*1}けに、有しよりまさりて也、人のつれなさ

よろつくるしき故に、よしや我も忘なむと思へは、
あやにくに猶恋しく成心也、先そ恋しきとは、忘れ
んと思へは恋しさのさきにたつ心也

719 忘なむ我をうらむな

時鳥は恠にあはぬ鳥也、それによそへたる也、人の
秋にあはぬさきに忘れなんと思ふ由也

720 たえず行あすかの河の

絶す人の方へ行かよひしを、自然さはる事などに、
とたゆる事もあらは、かはる心あるとや人の思はむ
と也、我か切に思ふ事なれはかく思ふなるへし

此哥は あつま人か哥也

アツマツト(朱)*2
又あつまとよむへきに

や云

721 淀川のとむと人は

すこしのとたえなと有とき、人のいかく思ふらん、
われはなからへて行末までふかき心ある物と也、又
云、人のため我ためこと^{*3}なくなとして、行末とをく
と心中には思がまふる物をと也

722 そこひなき^{*4}洩やはさはく

無底也、ひはそへたる字也、人をふかく思ふ性は言
語もなく徹したるにたとへたる也、浅せにあた浪の
立とは、思事をもあさく詞に云いてたる心也、我心
はさはなき由也、人の恨うたかふやうなる事ある時
云なるへし

723 紅の初花そめの

初花染は殊^ニふかき色のよそへ也、思ひし心^云、行
すとをく忘^レしの心也

724 みちのくの忍ふもちすり

誰故^{*1}にとは、君故にこそその心也、忍ふもちすりの事、元来は錦木の事よりおこれる也^云、ちかくは奥州忍にて、石に山藍して摺たるを云り、此作者名をあらはせるは、ことなる作者なるを賞したる儀にやと^云、多分は大家をはよみ人しらすとあり、或は左^ニ注するもあり、又一段執して名をあらはさゝるもあり

725 思ふよりいかにせよとか

思ふとは、人を切に思ふ心也、かく思ふより猶いかにせよとてか、人の心のなひくとみえしか、思の外思はすなる気色になるらんと也、浅茅のさまによそへたり、秋風になひく浅茅は色かはる比也

726 千々の色にうつろふらめと

人の心のうつろふらんをも我はしらすと也、紅葉ならねとは、我心は色くしからす定心にて、一篇に思ふ故にしらぬと也

727 あまのすむ里のしるへに

うらむるといふ縁也、我を人のうらむへき故もなき物をと也、里^{*3}のしるへにあらぬとは、うらみん故もなき心也

をむね^{ヲムネ}(朱)

728 くもり日の影としなれる

たとへてよめる也^{*4}、心はかりは、人の身^{*5}をはなれねともちかつく事なき心也、かく思ふを人はさもしらしの由也、くもり日は目にはみえねとも影はある也

729 色もなき心を人に

千々の色にうつろふらめとの哥と同心也、我心^{*6}は色々しくもなき故に、うつろはむとは思はずと也、又人もうつろはむ事とはおほえすと也

730 珠しき人をみむとや

人に逢へき時紐のとくるといふ事あり、めつらしき人とは、ほのかに逢みし人に又珠しくあはむとやの心也、しかもせぬとは、解ぬへくもむすはさりし紐のとくる由也、裏云、さたかにもなき事などを心に

憑みて、心をくるしむる事あり、吉凶の前相などの
事にあり、よろしからぬ事としるへしと也

731 かけるふのそれかあらぬか

かけるふは蜻蛉をいふ、又は草をいふ、又、陽炎
遊糸(1)ともいへり、袖ぬるゝは心つくせし人に逢て
也、それか(2)あらぬかとは、ふるくみし人などに又逢
てたとる心也、春雨は袖のぬるゝ縁也、ふるひとう
けむため也、ふる人なれはと読は優ならずや、ふる(降朱)
日となれはと読て、旧人の心をふくむへし

732 ほり江こくたなゝし小舟

難波堀江也、崩(つ)無小船は小舟也、心は、もとあひ
たりし人を忘かたく、立帰り恋渡よし也

733 わたつみと荒にし床を

わたつみ(3)と読へき歟(云)、此哥は、藤原仲平のかれ
ゝに成しか、思はずに今夜こむなといひをこせた
る時の哥也、荒にしとは、人のかはりし事をよめ
り、海と荒にし床をはらはらゝ、袖も泡と浮なむと読

り、たくみなる作也(云)、泡(4)とははかなき心也、深く

契りしたにかはりつる人の、又今夜などいふは憑み

かたき事也、それをたのみて床を拵(拵)ふさまは尤はか

なき心也、心詞殊勝也とそ、幽玄至極して哀深哥

也(6)

734 いたしへに猶立帰る

恋しきことに(1)、わするへき人を忘もやらずして、立
かへりゝ恋ふる心也

735 思いてゝ恋しき時は

あひなれたり人あたりに、せめてなど思ひて行
たる折なるへし、思出たとあるも忘たるにはあら
ず、其あたりに来たるをも人はしらしと也、此哥、
序には人はしらすやとあり、黒主の哥の様也、あら
ためて入たるなるへし、よろしくなるにや

736 たのめこしことの葉今は

我身ふるれはどは、我身ふるされぬれは也(7)
近院の右のおほいまうちきみ 能有、文徳源氏、右

大臣、右大將、近院は所の名也、春日東洞院也

也

737 今はとてかへすことの葉

閑院 延喜比人也、女房也、先祖不詳^云、末皇^{*4}

今はとてかへすは、女の心をよめり

740 逢坂のゆふ付鳥に

738 玉鉾の道は常にも

心はこと書にみえたり、逢坂は逢心にはあらず、近

玉ほこは道の枕詞也、我あたりの道をまよへかし、

江へつかはすに縁也、なくくもみめの心哀なる様

我を問かと思ひてもなくさまむと也、と絶たりし人^{*1}

也^云

などの、たまさかに思はずに立よりたる時よめるに

741 故郷にあらぬ物から

やと^云、今とふをも実と思はさる心也、又云、よ

あれてとは心のかはるをいへり、うらみたる心也

そをとふをみたる折なとにや^云

742 山かつの垣ほにはへる

739 までといはねてもゆかなむ

序哥也、其方^{カタ}の便^{*5}などあれとも思ふ人のこと伝もな

別をしたふ心也、ねてもゆけと思へとも、しゐて行

き由也、あちきなき恋の様也

人をしたふ心也、駒の足を折てもゆかしとせよかし

さかゐの入さね 酒井人真

の心也、此哥、詞姿よろしからず、此集に入かたき

743 大空は恋しき人の

姿也^{*2}、されとも恋の心切なるにて入たる也、恋

物思ふことに、物思ふ時は空にあふくより外の事な

哥は、無心なる物に心を付たる面白し^{*3}、又云、如

ければ也、我心をせめていふ心也

此哥入集事恵命也^云

744 あふまてのかたみも今は

のほる 昇、延喜八年二月中納言^云、昇は融公、息

人のとめけるかたみになくさむ事はなき心也

745 逢までのかた見とてこそ

思の妻となる心也、涙にうかふは海辺によそへたる
詞也、涙を浪によそへよめり

746 形見こそ今はあたなれ

根本は仇なるへし、密勘云、定家卿説、あたなれ
とよむを聞て仇とをしへん事いひかたしと云、あ
たと読て仇の心をふくむへしと云説あり、為氏卿
は、あたなれとよむのみならず、心をもあたなる心
に用へしと云

^{*1} 十二日(朱) 卅三首

古今 十五 恋五 此卷は哥の次第なし、雑

恋みゆ

^{*2} 八十二首

五条の、西のたいに住ける人、二条後の事なるへし
月の面白かりける夜

伊勢物語には此詞なし、貫之くはへ侍るなりし、こ
と書のさまをよく思やるへし、哥の幽遠なる心

もうかふへしとそ、切に思人にへたかりては大方も

思わひぬへきに、去年の其比に成て梅花さかりなる
時分など、せむかたもなく成ぬる心にて彼所に行た
る様を思やるへし

747 月やあらぬ春やむかしの

月も本の月、春ももとの春、我身も本の身なれ共、
此時この所にての心はいつれもさもあらぬ心ちする
也、此哥理をいふに及はず、たうち詠したるに優
に面白と云、是哥の妙処也、俊成卿云いたひもかの
月やあらぬとその給ひける

なかひら 仲平、枇杷左大臣 ^{*1}

748 花すゝき我こそ下に

ほに、仲平の伊勢に心かはし給しか、すこしかれ
くなる比、兄の時平公の通し給ける時の哥也と
云、我は忍つゝ心をかけて心のまゝにもなかりし
を、人はあらはれて契ありけりとうらみたる也

749 よ所にのみきかまし物を

よそにきかまし物を、みなれても逢事はなきよし
也、かなしき恋路の様也、音羽川はをとにのみきか
ましの心也、みなれは見馴也、水になるよによそへ
たり

750 我ごとく我を思はむ

我と我身を思ごとく思はむ人もかな、さても猶うき
物かと世を心みんと也、あまりにうき心より思よる
也、人を我思ごとくといふにあらず

751 久堅の天津空にも

天津空はとをくよ所なる物也、人にとをさかりぬる
事を思めくらす心にてよめる也

752 見ても又またもみまくの

人にあひみても又あかぬ也、さある故なるよを人
はいとふと也、世上の理如此とみるへし、さなけれ
は哀*1にきこゆる故也

753 雲もなくなきたるあさの

朝の空のうらくとはれたるを、なきたるといへ

り、我なれやとは思よそへたる也、はれたる心也、
しかれ共、いと晴てとよまむ事は聞よからすと
ん、いとはれてと読て晴たる心をふくむへし

754 花かたみめならふ人の

花かたみは籠也、めならふ人のとは、人の目にか
る人の事也、我ならぬ人の事也、我身を卑下したる
心よりいへる也

755 うきめのみおひてなかるよ

うきめ生る浦とは我身の方をいへり、卑下也、され
は、かりにのみくるもことほり也とよめり、かりに
とは、和布に縁あり、おひてなかるよとは、海草の
様也、なからへての心有へき歟云、つねにうき心也

756 あひにあひて物思ふ比の

月さへぬるよかほなるを、あひにあひたるとよめり

757 秋ならぬ時の露といふには非ず、秋故の大方の露に

はあらてをく露は、かゝる枕の雫也けり也、心よ

くねたるね覚などには有へからず、人のとたえたる比、ぬるともなくてめのさめたる折、枕の雫なるへし、其様をよく思入てみるへし、哀なる心也と云々

758 すまのあまの塩焼衣

序哥也、衣はおさのやうによりてあらしき物也、人の心のとをさかる比の事也、疎遠なる也、ま遠は人の心のをるそかなる也

759 山城の淀の若こも

序哥也、若こもはまたからぬ心也、みしかき心也、かりにたにこぬといへり、かりにたにこぬといはむため也

760 あひみねは恋こそまされ

水なき川なれは、何にふかめてといはむ為也、又は人の心の浅きを水無瀬川と読り、我は何にふかめて思ひけんとも也

761 暁の鳴のはねかき

鳴のはねかき、榻のはしかき、古来西義也、此事本

説有事也、百夜問たらはあはむと云しかは、来て榻にしるしをかき付たるか、百夜めにこさりしかは、

其夜は待人の書続たるとなん、鳴と読るには百夜を百羽とかへたる也、こぬ夜の数を我そかくと読りと

云々、五音相通する心にや云々、本説よらすして見る

義あり、物思侘つゝあかす暁かた、鳴の羽音のほろろとしけきをきくにひとりねの空にあちきなくかなしき様也、かゝる夜なくも君かくる夜は聞とも

なく過ぬるを、ひとりねにきけは鳴の羽かきを只我

ことわさそとよめり、定家卿、鳴のたつ山田のくる

の哥も此心より出たるとみゆ、此哥本説より出たり

とは心うへし、就御抄裏説あり、口伝也云々、裏説

云、暁は明闇の境也、鳴、小人にたとへたり、羽か

きは小人のことわさ也、君とは君子にたとふ、君子

の行跡をなさずして、小人のことわさのみをなす事

を思ふへき心也、右追聞

762 玉かつら今はたゆとや

玉かつら今はたゆとや、玉は玉の玉、かつらは玉の玉、今は玉の玉、たゆとや玉の玉

玉かつらは一説女の事也^云、又云、玉かつらはたゆ
るといふ枕詞也、末の句に人のとよめれは、上は序^{※1}
なるべきにや、契のとたえなどは常の習也、風のた
よりにさへきこえさるは、はやたえぬるにやと也

763 我袖にまたき侍雨の

時雨の時分ならぬにの心也、建立おもしろしと^云、

764 山の井の浅き心も

山井は浅香山など名所にも有、又は山にある井をも
いふ也、たまさかに来ても、ほのかにて帰る人を思
ふ心也、影さへみゆるの哥をとり用とみゆ、さりな
から此哥の山の井、名所には有へからす

765 忘草種とらましを

かく逢事のかたくは、せめては忘草を尋んする物を
と也

766 こふれとも逢夜のなきは

夢路にさへ忘草のおふる心珍しき作也^云、

767 夢にたにあふ事かたく

我や^云、我身もほれくとしたる心なる様也

768 もろこしも夢にみしかは

思はぬ中は夢にさへみえぬ心也

さたのゝほる 貞朝臣、備中守、登、仁明御子

769 ひとりのみなかめふるやの

只ひとり人もとはぬ古やにうちなかめくつ年月
をふれは、軒には忍草などの生るによそへて読り、
妻とは我身の末なる心、又は思の妻などいふ心あり
と^云、今案説云、只古屋のつまの事にてよるしきに
やと^云、なかめ、雨の心はなし、但なかめふる屋の
声はきよきやうに読へし

770 我宿は道もなきまで

人を待つゝ今やゝなど思ひ、又もしやなど憑て月
日かきなり行は、庭は蓬葎のかけに成ぬる様哀なる
心也^云、

771 今こむといひて別し

わかれし朝より毎夕の様なるへし、思ひくらしは日

くらしをそへたり

772 こめやとは思ふ物から

立出^{*1}つゝもしやなど待さま也、日晩は夕の時分の気

色也、つゝと読るに余情あり、ことわさを観する心也

^{*2}十三日(朱) 廿六首

773 今しはと侘にし物を

今はと也、しはやすめ字也、万葉には今しはよとも、今はと思きりたるに、さゝかにの猶人をまたする様なると恨たる心也

774 今はこしと思ふ物から

またもやまぬ哉の心也、我心をせめて読る哥也

775 月夜にはこぬ人またる

終の七もし此哥の肝心也、さても安かるましけれとも、侘^{*3}てもねんの心尤切なるへし、殊勝の哥と云

776 うへていにし秋田かるまで

月日うつりて待人も程へたる心也、秋^{*4}も半なる比鷹

の声におとるきて、思ひもすゝみねになきたる由

也、第一二の句契ありし心也、裁ていにしとは誰共

なし、うへし田の時節たかはぬ心歟云

777 こぬ人を待夕暮の秋風は

かゝる時、秋風の身にしみたへかたき故に、うたかふ心あり、侘しきといふは、一事にあらず、思ふ事なるへし

778 ひさしくも成にける哉

住の江の松の久じきをよそへて読る也、待はくるしき物にそ有けると読る心を能く吟味すへしとぞ、大方に人を待一夕などの事には有へからず、つれなき人を待きたる心を観したる心あるへし、哀ありと云

779 住の江の松ほど久に

首尾明なる哥也^{*5}、殊^{*}すくれたる作也となん

なかひらの朝臣、あひしりて、仲平は伊勢か初て

あひなれたりし人とみゆ、其かれかたなる比の哥也、伊勢集にみえたり

780 三わの山いかに待みむ

心詞殊勝作と云、こと書に思合へし、此哥は、我

庵は三わの山もと恋しくはの哥を本哥として読る也、とふらひきませとあるは、とふへき人のある心也、それをもていかに待みむと読り

781 吹まよふ野風をさむみ

吹まよふ風とは大なる風なとはみえず、漸あらくなる様なるへし、すこしあらく吹て、吹もやまぬ程の風にや、野風と読る此哥にては聞にくからす云、

序哥也、ゆくかは行哉の心也、歟とうたかひても云

也

782 今はとて我身時雨に

今はとては思極めたる心也、人の今はとて我をふるす也、我身ふりぬるとは人にふるされぬると也、両義あり、我を人の恨て我ことのはもかはるなといふにこたへたる心也、あらかひもせず古さるゝ故に、我ことのはもうつろふ由を讀る也、又云、人のこと

のはもうつろひて、あたなる情さへなき由也、此説

猶可然歟と云

783 人を思ふ心このはに

思ふ心は定心なれば、木の葉のことくなるへからすと也、かろく散もみたれしと也、此返しにてみれば、両説之中、後義に相当へきにや

なりひらの朝臣、此こと書、伊勢物語にはかはれり

784 天雲のよそにも人の

成行か、なり行哉の心也

785 行かへり空にのみして

初五字、伊勢物語の哥にかはれり、就五文字有沙汰事云、ゆきかへりとは、ひるはきて夕さりかへる様也、我ある山の風早みは、こと人の通する心也といへり、又云、そなたの心のはけしきをいふのみ也、此義を用云

786 衣はなるれは身にまつはるゝ物也、かけても、衣の

衣はなるれは身にまつはるゝ物也、かけても、衣の

縁也、人に大方なれぬるはかりにて、ちかつく事なき心也、たゞかけはなれぬのみにて、かくこひんとは思ひしと也

787 秋風は身を分てしも

心は身の内におさまる物也、秋風は身の内を分てもふかぬに、いかゞ心を空になすらんと也、秋風吹は心の空になる故也

788 つれもなく成行人の

さま／＼かけをきしことのはを思ふ也、秋よりさきとは、大方の秋の紅葉よりさきに、はやく色かはる事を読み、又云、人の心の秋といふよりもはや詞のかはると也

心ちそこなへる比 俄に病氣などしたる折にや

兵衛 藤原高経朝臣女

789 しての山ふもとをみてそ

麓をみて嶺はきこそなと思へる心也と云説あり、難用之、かゝる時人のとはさりしをふかく恨たる

心也、ふもとは山といふにて読む也、つらき人よりさきにこえしの心也、又、人をつらくは思へ共先たゞむもさすかになしくて帰心、あひしれりける人の、やけたるちの葉に、或説、此哥によてこと書を書あわせたるにやと、又焼たるにても有へし

790 時過て枯行をの

人と我相思し事の時過たる心也、小野は氏を思ふにやと

791 冬枯の野へとわか身を

我思ひは行末にたのみもなき心をよめり

792 水の泡のきえてうき身と

人にうとまれたる比、思きえ／＼するうき身なれば、はや思ひもたえぬへきに、猶だのまるゝ事を思ふ也、又云、はかなく消ならひのうき身と也

793 水無瀬川ありて行水

人の便も絶はてぬと思つめたる時、又思がへして

へり、みなせ河たえぬと見えぬれと、又行水のある
を思ふ也

794 よしの河よしや人こそ

芳野河はよしやといはむ為也、早くといふも縁也、
はやく云とはむかし*2の事をいへり、よしや人こそう
くとも、ありし情を忘れしと也、世間にも此理有
へし、こし方の芳恩を忘へからさる也

795 世中の人の心は

明也、我思人の事をいふに、世中の人と読る、面白
しと云、心には其人の事を思ふ也

796 心こそうたてにくけれ

うたてはうたへ也、あまりなるなどの心、又ははなは
たの心也、又常にいへるうたてしき心にもやと云、
うつろふ事のおしきも、我心をそめし故也とよめり

797 色みえてうつろふ物は

色にみえずしてうつろふ也、人の心の上は色にもみ
えすして、心中のうつろふを恨たる也、色にみえぬ

は、もしやくとたのむにうつろふ事あるをうらむ
るなるへし、世上の人心も如此

798 我のみや世をうくひすと

花と散なはとは、深く思ひし人のうつろひはてむの
こと也

799 思ふともかれなむ人を

花といふ物は未開より心を付て、咲ぬるにも心を尽
しつるに、思ひくまもなく散事を恨ても、さて恨は
つる事はなし、此理にて我思ひをなくさめたる也、
心をやすんすへきこと也、裏云、世上の理も、往不
答之心也

800 今ほとて君かかれなは

人の今ほとかれはてなは也、花にさへとはす成ぬる
比、此花を君もあひなれつ、もろともに見し事も
など思出てこそしのはめと也、猶人を忍ひ思ふ心な
るへし

*5
十四日(朱)廿八首

むねゆきのあをん あそんとよむへし、され共をん

と書るも誤にはあらざるへし、臣字ををんとよむ事

あれは其義などにやと云々、重可受説也^{※1}

801 忘草枯もやすると

趣向あたらしき哥也と云々

802 忘草何をか種と

つれなき人打なひく事もなく、年月をさへふれば、

様くおもひ侘て、さらは忘なむと思心也、我心に

忘草生ふへき事ならねとも、切なるあまりの心也

803 秋の田のいねてふ事も

秋の田によせてよめる也、此哥兩義有、一云、いね

と我いふ事もなきに何をうしとて人のかれぬらんと

也、一云、いねはいな也、五音通故也、いなと云々^{※1}

ふ事もなきにといふ心也、此義哥様宜かと云々^{※2}

804 初鴈の鳴こそ渡れ

鴈は序也、又は秋の時分の事也、世の人の心といひ

て、我思ふ人の事をふくめり

805 哀ともうしとも物を

いとなかるらん、頓注には最無也云々、密勘にはいと

まなかるらん也云々、あはれともうしとも物を思ふ

とは、いはくた、切なる思ひのさま也、哀とは愛す

る也、とにかくに涙のいとまもなくて猶思ひをそふ

るをなとかくあるらんと読り^{※2}

806 身をうしと思ふにきえぬ

かくてもへぬるとある肝心の句也、思わひくても

消やらねは、かくてもある様世間の自由ならざる理

也、かくいへるもうき人故の事なるへし^{※3}

807 あまのかるもにすむ虫の

此作者二条後の哥也、或伊勢物語注直子の哥也と

て、二条後の哥ならざる由みゆ、不審千万也、長良

卿女二条後の妹二人有にも直子みえず、文徳の孫惟

彦の女直子あり、然而それにては有へからざる也、

当流作名也、口決ありと云々、重受へし、二条後のう

へにさまくの心こもるへし、哥の心は殊勝の作^{※4}

也、只我からの理を思へる也、一切我からそと云
理住すれば人に恨もなし、人に和する道也、され
は此集の肝心也、此哥を眼目と用、裏説、重可受
之、非を知は聖のはしめ也云々

808 あひみぬもうきも我身*1

人にあはむとて紐のとくるといふ心也、我身のから
衣とは、我身からとつゝけたる心也、衣は紐に縁
也、又、我おこたりのある事をよめりと*2逢事な
きもうきも只我身からなればたのみもなきに、いか
て紐のとくらんと也、裏説、万自身よりの事なる
を、はかなきしるしなとをたのみてあしき事をいさ
むる也

たゝをん 忠臣

809 つれなきを今は恋しと*4

つれなきはかはりはてたる後なるへし、涙かは、な
みたかなの心也、やゝもすれば立かへりく恋しく
心よはき様也、裏、*1一定不可成事を不可思也

810 人しれず絶なましかは

人の絶はてぬるはかなしき事限なけれども、せめて
人にもしられぬ事ならはと也、切なる心也、侘つゝ
も、尤切なる詞也、女の哥にて殊哀也と云々

811 それをたに思ふ事とて

絶はてたる恋也、なさけと思ふへき事なれば、そ
れを成とも思ふ事にてもらしたにすなと也、人のか
はりはてゝの事也

812 逢事のもはら絶ぬる

もはらは専也、大方恋しき時もさる事なれとも、た
のむ心も有し程はなをさりなるにや

813 侘はつる時さへ物の

人もかはりはて我も思きりたるに、又物かなしく思
心の出来る事を思かへす様也、涙そと我心をせめた
る心也

814 恨てもなきてもいはむ

絶はてたる恋也、鏡にみゆる影ならては我にむかふ

人もなし、独身なる心也、それならては誰にてもいはんかたなしと也

815 夕されは人なき床を

殊^ニ哀なる哥なるへしとそ、絶はてたる中なるを、

我本心もなくほれたる様にて、夕になれば床打払つ

と思ふ心也、かゝる歎のみせむと成ける我身かと也

816 わたつ海の我身こす波

松山の浪の心也、我身こす波とは人の心の変しはて

たる由也、立かへりくうらむるより外の事なき

也、恨つるかなといふに恨てもかひあるましき物を

などいふ心あり、建立面白き哥也、わたつ海、海人

等縁也、^{*1}ありそ海は海の惣名也、^{（朱）}ありその浜わたり

などは越中の名所也

817 あら小田をあらすき返し

荒小田は人の心にたとへたると云説嫌道也、あら小

田はかへすといふ序也、絶はてたる人も猶かへして

もくかきりをみてこそ思もやまめと也

818 ありそ海のはまの真砂と

^{*1}浜の真砂^{*2}たとへて思心かとさまく人のたのめし

事はたゝわするゝ事の数也けりと也^{*3}

819 蘆へより雲るをさして

序哥也、雲井に行鴈はみるうちにとをさかりつゝつ

ゐに跡もなくなる也、めにもみえつる人の昨日けふ

に次第く遠さかりて終にへたゝりぬる心也^{*4}

820 時雨つゝもみつるよりも

紅葉する比の秋は殺の氣にて物かなしき物也、大方^{*5}

の秋のかなしみよりも、人のことのはの心の秋に逢

は侘しき也

821 秋風のふきと吹ぬる

人の心の我に変して秋風ふきぬれば、ゆかりの人の

心まで我にはかはる物也、紫の一本ゆへにの哥の理

の裏也、ふきと吹ぬる面白や、世上もかくの如し

822 秋風にあふたのみこそ

秋風にあへる田をよそへ読り、^{*6}哥の心は、人をさり^{*7}

ともくと思こしに秋風吹てたのむ方なき心也

823 秋風の吹うらかへす

序哥也、秋かせのしきりに吹て葛のはのかへるさまを思ふへし、恨ても猶、一切にいむため也

824 秋といへはよ所にそ聞し

世間の秋は大方よ所に聞しを身にある事也けると也
825 わすらるゝ身を宇治橋の

中絶したるそと思ひしを其まゝ人の変しはてたる心也、左注無義、又はと注たるはまさらざる故、左に注たるにやと云

826 逢事をなからの橋の

もしやくと恋渡る間に年をへて逢事なき物故、なからへていたつらに朽はてぬる由也、橋によそへたるなるへし

827 うきなからけぬる泡とも

うきなから也、水の泡はよる方なくてうきなから消る也、其ことくよる方もなくきえなはやと也、なか

れてとたに、たのみこしかひもなし、行末も又たのむへきにあらねは也

828 なかれてはいもせの山の

寄恋の哥也、なかれては此句末の五句にもよほす心也、なかに落るとはふたりの中のたえぬ理也、いもせ山は紀伊国あり、二の山の名也、吉野川をへたてたり、此哥、恋の哥としもみえず、然而深き心あり、此道より一身世界をひきて万物の根元となる也、一切陰陽之儀おなしといへとも、夫婦のかたらひは殊ふかき事也、其さま或は人の心の変するもあり、又は生死の別もあり、或は衰老なるも様々にして、会者定離をはなれぬ理なれば、よしや世中と云捨たる也、心ふかく尤感あり、恨捨たる心あり、則心を安する道也、恋の絶に入たる心甚深なるへし、仰は弥高く筆に尽しかたしと云、此哥古今の二字の心あり、なかれてはといふにこしかたの心あり、よしや世中といひ捨たるは今の心也、恋部にも郭公

鳴や五月といふ哥よりよしや世中とあるまで古今の
心也、又1此集一部の始末の事、口決あり

廿八首^{*1}

古今十五目(朱)卅四首(朱)十六 哀傷

卅四首

哀傷部には次第をも部類せず、人の高下をもわかた
すあつめたる也、是哀傷の理也、此卷を一日に伝
受也、哀傷の事なればなか／＼しきはよろしからぬ
心也、天子御相伝之時は此卷をは斟酌する也、別て
勅なれば申也とそ

829 なく涙雨とふらなむ

歎の切なる心より思よれる也

さきのおほきおほいまうちきみ

忠仁公、延喜比、

大政大臣只二人也、仍雖不辭官前卜書也、前後之由

也云

830 ちの涙落てそ滝つ

世になへておしみ思ふ心みえたり、素性殊に切に歎

けるにや、尤たくみなる作也云

ほり河のおほき、昭宣公、寛平三年正月薨、五十

六、太政大臣、関白始

831 空蟬はからをみつゝも

土葬なりし故にいとあへなき心也、但後にとあ

り、深くしたふ心にや、うつせみは玉しるはみえね

とも、からをとむるをもみるに、それよりもはかな

き心也

832 深草の野への桜し

此哥も昭宣公の別の哥也、みな人々服衣なる比なれ

は、花も有しにかはる色*3に咲といふ心也、花は不変

の色にさけるをみるはかなしき心あり、花も服衣を

きよといふ心とまては事過てよろしからすと云

833 ねてもみゆねてもみえけり

敏行か別は友則切なる朋友の思なるへし、ねてみる

夢もはかなく、又ねもせぬ別の夢もあたなる事を、

思入たる心也、道ある人などのむなしき折世間を觀

するに、いつれの物いつれの人も皆夢にあらすとい

ふ事なし、世は夢なりけりと観する心也

あひしれりける人の 親類などの別なるへし

834 夢とこそいふへかりけれ

明也、思けるかなと読る感ある詞也、一切の事を思

ふと見えたり

835 ぬるかうちにみるをのみやは

世上にかけて思へる也

836 瀬をせけは洩となりても

流水不帰也、殊^{*1}早き瀬はと^めかたきをそれさへ

せかるゝ事あり、別のと^めかたき事を深く思心也

藤原のたゝふさかむかしあひしりて侍ける人 妻女

の別なるへし、閑院の切に思ふへき人にて有けるに

や^{*1}

837 さきたゝぬくひのや千たひ

後悔不返流水不帰之心也、我身のさきたゝすして、

かゝる歎すると悔心也、後悔はたゝ流水の不帰如く

かひなき事也^{*3}

紀友則か身まかりにける 撰集の間にうせたり、四

人の内かくうせぬるを貫之深切に思ふへし、其時の

心さしを思ひやるへし^{*4}、殊^{*5}一性也、友則、延喜

四年大内記^云、逝年不詳、可勘之

838 あすしらぬ我身と思へと^{*6}

839 時しもあれ秋やは人の

同時の哥也、尤哀ふかく殊勝^{*7}、あるをみるたに

恋しきとは秋の心也、秋は我も人もすこしのへたて

などあるたに、恋しく物かなしき事なるにと也、哥

の様吟詠して殊哀限なしとそ

840 神無月時雨にぬるゝ

紅涙の様也、哀傷の哥はいつれも其人其時の心を思

やるへし、紅葉を打なかめたる時の作なるへし

841 藤衣はつるゝ糸は

藤衣はつるゝは、服中おとろへたる心也、建立面白

しと^云、或説、はつるゝいとほ^く玉をぬきとむ

る程に、それをなくさきと思ふ心也云、不用之、

只縁にてよそへたる也

思ひに侍ける秋、山寺へ 跡なととふらひに山寺に

ゆく折の心※1、こと書の様を思ふへし

842 朝露のをくつての山田

秋の田は種をうふるより種々の造作有物也、程もな

く刈田と成て、すこし残りたるをくつてなどに、朝露

のはかなくむすひたる様をみつゝ、世の人のほかな

きに思よそへたる也、種子といふ事も一切の生をう

けたる物のうへにあり

843 墨染の君かたもとは

とふらふ人もとはるゝも涙の雨ふる由也、思ひなる※1

人はいふに不及、とふ人もかゝる服衣の様などをみ

るに涙を催すへし

女のおやの思にて、おやの思にて女の山寺に侍る心

あはれふかし

844 足曳の山へに今は

此初の五字に感なり、枕詞なれともあし引の山へに

とよめれば、大方の山の心よりも山ふかき様もあ

り、女のならばぬすまるの様、其心のうちもしられ

侍るかし

諒闇の年

此諒闇の事、未詳、嵯峨御事歟、淳和の

845 水の面にしつく花の色

御抄委、花の枝の水にひたるか、ひたらさるかな

るにや、影の水にさやかにみえたるを、天子の御影

のわすれかたくみえ給へるによそへたる也、更にな

き影とおほえぬ心也

深草、御国忌※1、或おこきと読と云、当流みこき※2

とよむ

846 草ふかき霞の谷に

翌年の御国忌に読るにや、草ふかきとは、深草の心

也、物ふかき様也、霞の谷は帝の崩御を昇霞と申心

也、帝目※3、万侶※4、公雲落谷百官歎※5、文の心也※6

と云、てる日の暮は天子の御事を讀り、けふにて

はなきかと世人に歎へき事をおとろかす心也、又け

ふにやはあらぬとは、けふの御国忌にあたりたれと

も、猶其崩御の時をしたふ心也、けふにていかてな

かるらんと也、康秀は詠物巧也とみゆ、此哥殊其心

みえたりと云、或云、草ふかきことは小人にたと

ふ、万民百性まで歎心也と云

深草の御門の御時に、蔵人頭にて こと書の様にて

感を思へし*1

僧正遍昭 蔵人頭、右近少将良岑宗貞

847 皆人は花の衣に

明也、かはきたにといへる、切なるへし

河原のおほい、嗟峨源氏融、

近院、能有、文徳源氏、

848 うちつけにさひしくもあるか

ある哉也、紅葉の色ふかゝらぬとあり、なき人の家
のやかてさひしき心也、人のもてはやすにて、花

紅葉も色まさる事也

849 郭公けさ鳴こゑに

*2 月日のうつり行は、何となく打まきれきぬるに、去

年の其比に成て、郭公のこゑに驚て思ふ心也、高経

は長良卿の息也

850 花よりも人こそあたに

花をうへてはいく世の春をもかけつゝ契るならひな

るに、一春にたにあはすしてうせたる事尤哀なるへ

し、いつれをさきとは、かねては花とも人とも思

はさりしと也

851 色も香もむかしのこさに

影そとは面影の事也

352 君まさて煙たえにし

彼家に塩かまをうつしていかめしき事共ありし、其

跡もなきやうなる心を思やるへし、うらさひしきと

は何となくさひしき心也、又はいたらうさひしき心
と云

藤原としもと 利基、高藤公兄

さうし^{*1}のとしもとの室うせたる也^{*1}

853 君かうへし一村すき

むらすきにて心に句を切て心うへし、いつしか

荒たる所の様也

これたかのみこの 惟喬のもとより友則か父の哥を^{*2}

こひ給へる也

854 ことならはことの葉さへも

如此むなしく成ぬる人ならはと也、涙の滝、縁のこ

とはもなく読る面白しと云^{*3}

855 なき人の宿にかよは

無人の宿に郭公のかよはと也、則かく読る人の宿

の事也、かよはとはかよふとならはの心也、時鳥^{*2}

はしての山にかよふ鳥といふ事ある故也、かけてと

は此宿と無人の方とをかけてつたへよの心也

856 誰みよと花さけるらん

無人の跡に花のみ有しにかはらす咲たるをみて読る

也、白雲のたつ野とはいたく荒たる心也、葬の煙の

心も有にや云、但其期の哥にては有へからす^{*4}

式部卿のみこ 敦慶、閑院の五のみこ、閑院未詳、

可勘之

857 数々に我を忘ぬ

春の比うせたる人にや、数々にとは何事につけても

の心也、春の山のはの打かすみこめたる比の様を思

やるへし、限の煙をいへるなるへし、思のはれぬ心^{*5}

を霞と読ると云、いく程もなくてうせたる人の心

なれは思の晴ぬ心有へし^{*6}

858 声をたにきかけわかる^(た)付箋きかてけ¹

平生ふかく思かはして契たる中なるへし、こゑをた

にきかてとは男のかへるをもまたすしての心也、玉^{*4}

よりもは我よりもの心也、女の哥にて殊かなしき

心也

859 もみちはを風にまかせて

紅葉の微風にも散やすき様をみるに、命のはかなき

事を思入たる心なるへし、又は紅葉は又の秋もこそ

あれなどの余情も有へし

860 露をなとあたなる物と

平生は露などをも只大方はかなしとのみみに、期
に仰(ま)てふかく思合たる也

861 つゝに行道とはかねて

昨日はけふと思はさりし的心と云説は嫌道也、一切
人の命期は只如此也、又何事にも此理あり

かひの国に 人につげ ことつけたる也

862 かりそめの行かひちとそ

遥なる道の空にての心を思ひやるへし、行かひ、甲
斐にそへたり、母のもとへと有心を思やりて吟すへ

しと也

^{*2}十六日(朱)廿三首(朱)

古今 十七 雑ザツ哥カ上(朱)

ましへたる義なり

七十首

863 我うへに露そをくなる

伊勢物語にいへる心にはかはれり、俄にはからさる
思などある心也、思の露の大方ならぬ故に天川と渡
る船の雫かと読り、鳴渡る鴈の涙や落つらんのたく
ひ也、我上にとは我身に思の露のをきたる心也、裏
云、我といふも人我の対したるにあらず、禅主人
公といふことくの我也、起居動静あつからず、青
黄赤白をも請ぬものなるへし、其上に一気始ておこ
る時、一滴の露よりはしまる、是より喜怒愛樂の七
情も生し種々の造作をなす、天川※1とは本分の不動所
也、と渡る船※3とは造作の道也、かひの雫は一滴の露
をうくる処也、此哥雜の第一入※2たること心あるへ
しと云、重而可受其説也、一氣※4を請てより七情お
こり、さまざまにうつる処をしめして、此哥を雜の
第一をけり、いつれの哥もおなしことわさなれ共、
万の事をあつめたるを雜とする故也、次の哥も此心
をうけたり

864 思ふとちまとあせる夜は

思かはしたる朋友などの中なるへし、から錦はたつ
といはむ為斗也、錦を裁如く思ふといふ説、不可用
之

865 うれしきをなにつまむ

時にあたりて悦の身にあまる事を讀る也、大方の袖
にはつゝまれぬ由也

866 限なき君か為にと

伊勢物語には作枝に雉をそへたとあり、業平の哥
と云、此集には忠仁公の哥とみゆ、彼物語には禄
を給ふなどあり、忠仁公褒美の餘に詠草などに書加
給へる歟と云、此集にては忠仁公の哥と用也、爰
には雉の心も造花の事も有へからず、心は人を賞し
たる哥なるへし、花は散やすき物なれ共、君か為に
折つれば花も常磐也と也、此にては無雉之心也

867 紫の一本ゆへに

紫は武蔵野にあり、みなからは皆なから也、わか哀

と思人あれば其ゆかりまでを思心也、裏云、わか愛

する人ゆへにゆかりまであるましき寵ある事あしき
也、玄宗の貴妃故、姉妹兄弟皆列士、可伶光彩門戸
生、長恨哥云か如し

めのおとうとをもて侍けるか

868 紫の色こき時は

寵愛の心也、めもはるかにみゆる草木までわかす哀
と思ふ由也、前の哥の同心也、裏説又同

大納言藤原国経、寛平六年五月五日任中納言即従三

位、近院、于時大納言右大将

869 色なしと人や見るらん

そめぬ袍の綾にや、染ぬによそへて我思心さしをよ
めり

いそのかみのなんまつか、此名に説あり、或説、

なんまつは童名歟云、不審あり、次の詞にいその

かみといふ所にと書り、上の磯上は性にや、宮つか

へもせてこもり侍とあり、又爵を給ふ由みゆ、童と

はみえさるにや、名乗なるへし、^{※1}成松と書と云、

又浪松^云

870 日の光やふしわかねは

めくみのへたてなき心也、古にし里にとは、いたつらにこもりゐし身の爵にあつかりたる心也

二条の後の、高子、貞観八年二月女御、十年十二月

生第一皇子、十一月三日皇太子、^{※1}春宮母儀女御

也、第一皇子は陽成御事也^{※2}

大原野社 閑院左大臣冬嗣公勸請

871 おほ原やをしほの山も

^{※2}日神と天児屋根尊とは陰陽の神として神代合躰の約を思ふなるへし、二条后藤家也、皇太子は天子とな

らせ給ふへき事なれば、神代の御契のたゆましき心をよめり、御息所参詣あるに、をしほの山も思ふら^{※3}

んと也

よしみねのむねさた こと書にあはせて俗名に入たるなるへし、又俗の時の作にや^云

872 天つかせ雲のかよひ路

五節事、袖ふる山に天人くたりしよりおこれり、今の舞姫をさして天乙女とよめる也、心は乙女の姿をあかす思ふ心なるへし、此哥は心詞相對して殊^ニ遍昭詠の中にもすぐれたりとなむ、定家卿百人一首にも此哥を入られたり

五節の朝にかんさしの玉の かむさしのかさりの玉

也

873 ぬしや誰とへとしら玉

此ぬしを一向にしり給はぬはあらしなれ共、かく読たるなるへし、とへとこたへぬ程に、さらはなへてやと読たり、^{※3}あはれとは、すこし思をかくる心有^{※6}や、又は憐む心ともいへり

寛平の御時に きこしめしたる酒のおろしをと申ける也、蔵人どもの此小瓶の様をわらひたる也^{※4}

874 玉たれのかかめやいつら

御抄に委、風俗の外に玉たれのかかめとつゝけたる

哥みえず、玉たれのみすとよめる哥はあり、只風俗
につきてよめると心うへしと云、其心は未分明、
心は小瓶をおかしき物とわらひつるはいつら、既に
おまへに出たるうへはと読る也、おきはおまへに出
たる心也、本来は玉のたれたる瓶とつゝけたる心な
れども、此哥にて不当之故、定家卿其説つき給はぬ
にやと云、俊成玉たれの鉤と云

875 かたちこそみ山かくれの

明也、御注、作者の心に成て思へしと云、心は花
にとは、何事とは不可定也、誰も此理なる事あり

876 蟬のはのよるの衣は

こと書に合てすこし心得かたき歟、衣をうすきとい
ふにあらず、うすけれど、は、かたかへかりそめ
のうすき契なれども、あるしの心さしはかゝる折に
もふかき由也、たとへて読る也

877 をそく出る月にも有かな

月を待心の切なる我心より思よる也

878 我心なくさめかねつ

大和物語にをはを捨たりし故事を思ふ心は嫌道也、
此哥に両義あり、一云、此山の月をきてみるに心を
もなくさめ思をも忘れんと思ひしに、或は心有人と
見はやなど思、又こし方の思もすゝむ故にかなしき
心出来れはなくさめかねつと読りと云、一云、を
はずて山の月にさしむかふに所からたくひなく月は
すみ渡りて、さし深たるは更にことほもなく面白く
胸中感情みちくたれば、いかにともせぬ心にて
なくさめかねつと読る也、名山の月に対したる当位
の様なるへし、此義猶感あるにやと云

879 大かたは月をもめてし

是ぞ此とはおこたりを驚く心也、大かたは、おほよ
そなどの心つもりきたりて老となる事を月に対して
思えたる心也、よるつの事に此世後世思へき事はは
忘て、こし方貪しきたりし事をも思ふなるへし、此
哥をは理をいはずしてをくへしと云説あり、心中

観したる哥なれば也

880 かつみれとうとくも有哉

かつはかくみれともの心也、月によそへて躬恒かき
たりたる事をよめり、時鳥なか鳴里のあまたあれば
の心に同

881 ふたつなき物と思ひしを

新しき作也、二条家には此哥は心入すきたると云、
如此哥も撰入事又勅撰の様也云

882 天川雲のみおにて

雲のみおとは、みおとよまむとてあまの川なれば雲
によせたる也、水のみおといふは河なとふかき中程
などをいふ、月のはやくうつるをみてかく読る也

883 あかすして月のかくる*1 明也

884 あかなくにまたきも月の

此哥、山の端にさしむきて入すもあらなんと読ると
みれば誹諧になるへし、只月のかくるをあかすお
しむ心の切なるにて、ねかひ事にいふ心にてみれ

はよろしき也と云、みこの内へ入給ふによそへた
る也

田むらのみかと

あきらけいこ

慧子*2代始齋院、文

徳御宇

あま敬信*3 (朱)

よるかの朝臣母

885 大空を照行月し

元来咎なき心を月によそへてよめり

*3 十七日 廿四首 (朱)

886 磯の上ふるからをの

いそのかみはふると云枕言也、ふるから小野とは

勘*1 枯野を云歟と云、草木枯たる心にや、冬は草木*2

皆枯ぬれと、柏は散やられて春までもある物也、本の

心を忘れぬとは、ふるき由みなどある人を忘れぬ心なる

へし、柏によそへてよめり、恋の哥にはあらず*4

887 いにしへの野中のし水

もとむすひしし水などを忘れぬ心也、旧友のよしみ
を忘れざる事をよそへて読る也、願注野中清水と*5

は本妻の事也と云、勘に委敷みえたり、定家卿も

さもやとは思給ふよしみゆ

888 いにしへのしつのをたまき

しつのをた巻はいやしきといはむ為也、いやしき人

も又しかるへき人も一さかりはある事あり、おとろ

へなとある人の思ひをよめる也、しかれとも古のさ

かへも今にのこらす、今さかへてもむかしのおとろ

へはかへらぬ理也、只過しを思ひ残して詮なき心也

889 今こそあれわれもむかしは

勘云、遁世したる物の詠と聞しと云、此義をかな

らす用へしとはみえさるにや、男山は世に有し時の

心、心は今こそあれとおとろへたる時の心也、さ

かへしことも有し昔を思出て歎たる心也、男山はさ

か行といはむためのみ也、坂とつゝけたる也、昔は

男なりしと云説は感なくや侍らんと云、此兩首、

世上の不定を思へし

890 世中にふりぬるものは津の国の

明也、我身と橋とを比したる心也、此哥名たかき人

の世にもちひられすして古たる人読るなるへし、

甚深義也云、なからの橋の名たかきも古されて、

世間の用にもたゝぬによそへたる也、橋は人を渡す

を徳とす

891 さゝの葉にふりつむ雪の

くたち、さかりはも、くたちとはかたふく様也、我

さかりはもとは、我さかりはいかにと云心也、心に

歎也、くたつとは末になる心、斜なるなど同心也

892 大あらきの杜の下草

当流、おあらきとよむ、山城名所也、又おほあらき

と、五字によむと云、万葉におほあらきの野のさ

なくにと七字の句によめり、それはおほあらきと

読へし、下草の老たるを我身によそへよめり、裏

大荒城は先王の御事、恵ありしを思也、駒は心

なき物也、心のなき人にも心ある人にも捨られたる

よし也、桜麻のおふの下草、おふ心得かたしと云、

或説、桜麻は桜の比麻をうふる故に号云々

893 かそふれはとまらぬ物を

年月のうつり行をかそふれは、ととまる事なくかさなる事を思ふ也、としといひては年を速なるによそへたり、かくしはしもとまらぬ年をかそへて、今年はいたく老ぬと観したる也、此哥、をろかなる心を讀る也と云々、是身業をよめり

894 をしてのや難波のみつに

三津といふ所あり、みつとにこりてよむ也、をしてる難波とは、船をよしいたす心なる詞也、只枕言と心うへし、序哥、からくもとは辛字、くるしき心也、いたくもなと老にける哉と心にあちはふ也、此哥は、口業にあたり、大伴のみつは、つもしすむと云々

895 老らくのこむとしりせは

老のかなしみのあまりにあるましき事をはかなくよめる也、以上三首、身口意にあたり、此哥は、意

業也

此三の哥は 以上三首の作者説々あり、文武、人

丸、聖武と云々、又は、聖武、人丸、赤人と云々、或は人丸、黒主、行平云々、可有口伝乎〇此三首はいづれもをろかなる心なる哥也云々、一切衆生の様皆如此、愚する理をしるは哥の徳也とそ、はかなき一は哥道也、神明の衆生に同塵もをろかなるに同じ給ふ也

896 さかさまにとしもゆかなむ

年月うつり行て、よはひのつもる事を思ふあまりの心也

897 とりとむる物にしあらねは

とよめかたき年月なればあなうとのみ云て、年々歳々くらす事を思也

898 とよめあへすむもとしとは

むへもとは、ことほりにといふ心也、思とる道もなき心、としとははやき心にそへたり、しかもつれなくとは、かくもつれなく過る齡哉と也、つれなくと

まらず過る事を思ふ也、年も齡も同過也、又は上
を重_テ云

899 鏡山いさ立よりて

鏡といふ山なれはかくよめり、花の陰に休る心、此⁽²⁾

哥の事、序沙汰する事あり、第二句など俗にちか
きにや、心は哀なる哥也

なりひらの朝臣 母のみこ伊登内親王、こと書の

心哀ふかし、伊勢物語にすこしかはりたる詞あり、
とみの事は俄なる事也、病氣なりしにや

900 老ぬれはさらぬ別の

生老病死の理也、一子にへたゝりて時々もみすは、

我身老ならて憑む心ありとも、切に思ふへき事なる

をいよ／＼見まほしかるへし、可思とそ^{*1}

901 世中にさらぬ別の⁽¹⁾

さらぬ別とは不辭之別也、伊物には祈ると有、爰に⁽²⁾

は歎と書り、祈る心もこもるへし、業平の心より世

間にかけてよめる也、優也と^{*1}云

902 白雪のやへふりしける

帰山は北国なれは雪深由をよめり、かへる山はかへ⁽¹⁾

る／＼といはむ為也、年々かへり／＼つゝ老となる

事を思也、ゆきかへり／＼老ぬると^{*2}云、ふかく歎

心あり、白雪の八重ふりしけるは、歳霜のつもる心^{*3}

あり

おなし御時 おほみあそひ

御遊也^{*2}

903 老ぬとてなとか我身を

せめきけむ、責来也、平生は老ほとかなしき物はな

しと思ひしを、けふのあそひにあひて、老すはと思

ふ也、なくさめたる心也、世間にも此理ある事也^{*4}

904 千早振うちの橋守

橋もりは橋を^{道を}まもる神なれはちはやふると詠り、橋

守となりていく春秋をすくす覽とあはれふ心也、道

ある人のいたつらに身の老によりて思へる也、裏

云、橋守は道をまもる人の心也、其家ならてはたと

へ天性器用あるも信仰しかたき也、世をへて家をか

さねたるを信用すへき事也

905 我みてもひさしくなりぬ

老者の哥なるへし、心明也、ひめ松説くあり、小松を云説此哥にあたらさるにや、又、男松め松といふ心にて姫松はめ松也云、難用之、当流は松の惣名也、然而大木などの一本あるなどは似合さるにやと云、大小相交たる松のさまにや、住吉の松の気色なるへしとなむ、此哥作者重可受之

906 住吉の岸のひめ松

明也、垂跡の昔なとゆかしき事をも問へき物をと也

907 梓弓いそへの小松

あつさ弓はいそといはむ為也、あらいそなどにある松の大木となるまで有へしともおほえぬか、浪風にをかされすしてあるを読む也、海辺なる古木の松の面白きをなかめて読るなるへし、心詞殊勝也と云、生かたき所なるをみてかく思ひよれる也

908 かくしつゝ世をやつくさむ

我身を卑下したる心也、世を尽すとは世に久しくある也、何の用もなくつれなく世にふる由也、高砂

の松は名所の松なれば世をへてもかひある物也、さもあらぬ身の古ぬる事を歎する也※1

909 誰をかもしる人にせむ

こし方のとある事かゝる事をも、又今の思ひをも云へき故もなく※2独身なるを歎也、高砂の松にと思へとも、それも又しる人ならねはと也、高砂の松にやふるき事かたらふへきと思へとも也

※3 十八日 廿三首(朱)

910 わたつ海の奥津塩合に

わたつうみは海の惣名也、塩あひとは塩と水とのさかひをいへり、かゝる所に泡のたえす有也、身の上の述懐也、善悪にもつかすた※4よひ、よる方もなく又きえもやらぬさま也、裏※5大海は世界也、塩合は善悪の中身を※6く心也、よく分別してつるに身のよる方を工夫すへきをしへ也

911 わたつうみのかさしにさせる

此わたつうみとは海神の事也、浪をかさしによそへたる也、さすとはかさしの様也、遠望の心也、白妙なる浪の上に淡路嶋のうかひたるは、浪にてゆひたてたる如く見ゆるよし也

912 わたの原よせくる浪の

玉津嶋の眺望の心也、^{*1}しはくもとは、しけくみまほしき也、序哥なれとも其所の様也、かもは哉の心也、万葉にはかもと読る哥おほし、波のしはく^{*2}とは浪のしけきをうけたり

913 難波かたしほみちくらし

あま衣は雨の衣也、田蓑とつゝけむ為也、遠望の心也、田蓑嶋にたつの鳴渡るをみて塩満くらしと読り貫之かいつみの国にたゝふさ大和より和泉へ来る也

914 君を思ひおきつの浜に

おきつの浜、和泉国也、思ひをくとつゝけたるには

あらず、たつは尋るとつゝけん為也、聞といふも縁也、尋きつれはこそありともきけど、ををつれなともなかりし事をうらむる心也

915 奥津なみたかしの浜の

たかしの浜、和泉也、奥つ浪はたかしといはん為也、¹松の名にこそ君をどは、松は常磐なれはいつも待渡りつると也、さてこそきたりつれといふ心也、又云、たかしの浜松は名たかき松なれは聞えすや^{*1}は有らんと待渡りつる也、所からよてこそきたれと我身をは卑下の心也、此義可然と^云

916 難波かた生る玉もをかり^{*3}そめの

難波にいたりぬる事を海士となると読り、心に述懐ありてよめるなるへし、奉公の人のいたつらに中わたらひなどするは用られざる故也、其心を読り、臣非王命不越境^云、かりそめとはこゝにきたれる時を云り

917 住吉とあまはつくとも

あまは海辺なれはよめり、人といはむに同し、長^{*1}
居^{※1}なれゆかは人の心忘草も生るならひありとをし^{*2}
へたる也、人の心は始思ひしもかはるならひ也、世
上にも此理有

918 雨により田蓑の嶋を

一本に、きたれ共^{云々}、定家卿筆なるへし、雨に仍^{*3}
て也、名には、難波をよそへたり、心は明也^{※2}

法皇にし河に 宇多御事也、西河、大井御幸にや

919 蘆たつのたてる河辺を

たつのむれぬ^{*4}たる眺望の様也、此景をほめたる哥
也、花かあらぬかと読る類也

中務のみこ 敦慶、後式部卿、法皇は宇多御事也

920 水の上にかへる船の

君は船、臣は水といへる心にはあらず、只当座の心
也、或説、伊勢は宇多御門の御思人なれば少し其心
ありて読るにやと^{云々}

真せい法し

921 宮こまでひきかよへる

聞えのたかき名所の心也、浪のをすけてとは、琴と
いふ所なれはかくよめり

922 こきちらす滝の白玉

間断もなく落るさま也、我涙はこの滝の玉をかりた
るとおほゆる也、世のかなしみのおほき心也

923 ぬきみたる人こそ有らし

此哥伊勢物語には、我世をはけふかあすかとよみた
る哥を和したる詠也、前の哥の同時とはみえず、こ
と書^二前にも布引の滝にてとありて、次の哥に又布
引の滝の本にてとあり、別の時の哥にや、心は此滝
の様玉の緒をときてみたしたる如く成也、ちるかは
散哉也、袖のせはきにとは卑下の心也、身にあまり
ぬる心つゝみかたきよし也

924 誰ために引てさらせる

世をへてみれとは、常住同し様なると也

神たい法し^{※3} 神退

925 清滝の瀬のしら糸

滝の眺望也、面白くみる心より此作出来たり、山分^{※1}

衣など上下相合たりと云、くりためて衣を織なと

有かたき事を作たる、是哥の命也となん、龍門^{※1}にあり

龍門にまうて、伊勢集に此時のさまみえたり、仙^{※2}

の岩屋^{※3}などみたるよしあり

926 たちぬはぬ衣きし人も

龍門は仙人の住し旧跡となん、仙人はたちぬはぬ衣

をきると云、仙人も今はなし、何山姫のさらすら

んど也、此布もたちぬはぬものなれはかくよめり、

一云、世間はたちぬはぬきぬきし人もなき物を、何

かは山姫のはかなく布さらすらんと苦身^{※4}を思ふ心

也、又云、伊勢が仲平忘られて大和へゆきし比の事

也、されは人もとりもちるぬ事を思かへし、苦勞

したるは、此山姫の無用の布さらしたる様に似たる

とよそへ思ふ心也、伊勢常に物思ひけるに述懐の哥^{※5}

多し、惣して其人の一生の事を聞て哥をも心うへし

云

朱雀院、寛平御事也

橘のなかもり、長盛は直轄父也

927 ぬしなくてさらせる布を

滝の事也、我心とやとは、ぬしに成てやの心也

ひえの山なるをとほの滝、音羽といふ所西坂本^{※6}あ

りと云、当国に両所也と

928 おち滝つたきのみなかみ

重詞也、水土を髪によそへたり、滝の水上のしら

くと落^{※7}たるをみて思よれる也

929 風吹と所もさらぬ

滝のさま白雲のたなひきたることくなるをみる興也

三条の町、惟喬みこの母、名虎女紀静子也、勘^{※8}は

更衣とみゆ

930 思ひせく心のうちの

絵なる滝を思ひによそへたり、心中の思を御門へも

らし奉る心あり

931 さき初し時より後は

一*1絵(1)(2)(3)に書そめしよりにや、不断なる心也

932 かりてほす山田のいねの

絵に山田に鴈もありとみえたり、かりてと云て鴈の

心あり、こきたれてはかきたれて也、頻なる心也、

我思ひをよめる也

*2十九日 廿五首(朱)

*3雑歌下 十八

六十八首

933 世中は何か常なる

あすか河の湍瀬にかはり安きをみて、世上の何事い

かなるわさか常ならんと観したる心也

934 いく世しもあらし我身を

此哥はあまのかるもにと読る肝心也、あまのかるも

にとよめる、たけもありめてたし云、藻はみたる

物なれば也、殊ニ感あり、たくひなき哥也*4云

935 鴈のくる嶺の朝霧

上は序也、又は鴈のくる時分の景、秋の哀をふくめ*5

る心あり、思ふへし、此哥くるみといふ物を隠題に

よめるとなん、此集にては無用云

936 しかりとてそむかれなくに

しかりとてはさありとて也、世中のうき事あるたひ

には先歎かる也、さありとてそむかれはせずと

也、人々かくをろかなる也、篁身上の思ある心より

読るなるへし、此哥心詞つよく金石の如くにして、

尤心詞甚深にして、すぐれたる作也云

937 都人いかにとは

殊ニ悲き心みえたる哥也、もしほたれつとの類也、

甲斐のしらねなど大山の陰に住居して、なくさむか

たもなき遠国の様を思やるへし

文屋ノあかた見には*1

938 侘ぬれば身をうき草の

初五字尤切なる心也、おほくの心こもるへし、余情(1)

無限云、落(2)つく所もなき身の様を萍にたとへたり、

哀ふかしとなん

939 哀てふ事こそうたて

あはれてふ事とは、^{*1}実なければとも其事となく少憑事

あるやうなる事也、^{*2}さても世は捨かたきを、⁽¹⁾うた

て、うたゝ也、いよゝゝなどの心、⁽²⁾かくて世を打過

ゝする事を思かへす心也、表裏おなし心也

940 あはれてふことの葉ことに

何となくこしかたはとありし物を、かゝりしなとこ

ふる心也、かひなき事なるへし、涙なりけりこと

はりたる也

941 世中のうきもつらきも

涙に告る事はなきを、うき事にあたりてはさきたつ

やうなれは也、うきをしる人はなくて、たゝ涙のみ

なる心也

942 世中は夢かうつゝか

世のさまかくのことし、此哥は色即是空ゝ即是色の

心也と云

943 世中にいつら我身の

⁽¹⁾とかめたる心あり、⁽²⁾いつらとはありともなしとも難

分別之心也、あはれむへき我身とやせん、又ひたふ

るうきとやいはんの心也

944 山里は物の侘しき

物の侘しきとは一事にあらず、万つ事たらすき^わひし

さもかたゝ住かたき心也、物のぎひしきといふ本

難用之、世のうきになすらふれは猶住よきと也^{*3}

945 しら雲の絶すたなひく

心は明也、惟喬のみこの御詠にて殊感あり、小野

ゝ山里のかすかなる御すまゐの様思やるへし、伊物^{*4}

にもみえたり、位につき給へき御身の云^{*5}

946 しりにけむ聞てもいとへ

しくめるとはしきりなる也、見御抄、知にけんとは

世のうき事は人々心にあたりて知らんと也、又さも

おほえすは聞てもいとへと也、世上の風波ほとはけ

しき事^{*6}はなし、見ても聞ても心のとまるへきにあら

すと也

947 いくにか世をはいとはむ

世をそむきて脚、もいつくにこもりゐんともおほえず、*1

野にも山にも迷つへき事を思也、又云、世をいとひ
て、いつくにかとあらぬ野山を思やる、其心やかて*2

野山に迷らんと也

948 世中はむかしよりやは

むかしよりはやはうかるへき、只我身一の為に世は
うき物となれる歟と也、又云、1(朱)かくうき事はむかし
よりなれるか、又我身一の為になれる歟と也、やは
のはの字はやすめ字也*1

949 世中をいとふ山への

世をいとひてすむ山里などのあたりにさける卵の花
をみて、花もうき名ある色に咲けると也、花の心の
色3出けると也、草木とやと読る大やうにて感あり

950 み吉野の山のあなたに

深きより深きをもとめたる心也、世のうき事の切な

るを歎心也*2

951 世にふれはうきこそまされ

岩のかけ道、かけ道両説也、陰道は面白しと云、
かけ道も一説也、山ふかく入て岩の陰道の人しれぬ
処をも分入らんの心也、かけ道の心は、はけしき道*4
をもふみならしてんと也、世のうき心切也、ふみな
らしてんはふみなれんと也

952 いかならん岩ほの中に

心詞無限可工夫云、、巖中までもうき事はいたるへ*3
き心也、世のうき事はいつくに行てものかれぬ物そ
と思ふ心よりいへる也、世のいとはしき心の深きよ*4
り尋思ふ也、初五字殊感也とそ

953 あし引の山のまに

あるかひもなしは山のかひによせたり、山のまに
く思かへす、た山にまかせんと也、哀あり、世に*5
かひなき心也

954 世中のうけくにあきぬ

見御抄、うけくとはさむけくなといふ如く、けくは
そへたる詞也、うき事にあきはてぬ、^{*1}ゆきや消なま
しと也、雪を行にそへたり、素伝説云、木のは、か
ろき物也、雪もはかなき心有と云

955 よのうきめみえぬ山路へ

山路にと読へき哥なるを、同文字をさるに由て山
へと読也、但此集に此への字をあまた読り、えとへと
同こゑなれど、かなつかひのかはる故に読る也、^{*2}哥
の心又殊勝也、^云思ふ人とは何となく思ふ人有へし

956 世をすて、山に入人

我世のうき心より思やれる也、猶心のおく其人に有
べきを思心面白くや、^云
物思ひける時いときなき子をみて、躬恒か子なるへ

957 今更に何おひ出らん

明也、尤哀深哥、^云

^{*1}廿日 廿三首(卷)

958 世にふれはことの葉しけき

世中は人のことの葉しけき物也、又云、諺しけき心
也、我思を鶯によそへて読り

959 木にもあらず草にもあらぬ

御抄に、内親王入内の後、思ふやうにもなき時の詠
なるへしと見えたり、はしにとははした^{*2}なる心、つ
く方なき心也、或本^三ははしたに我身とありと^云
はしにはまさるへくやとそ

ある人のいはく高津のみこの哥也

桓武女

960 我身からうき世中と

両義あり、我身からとは、うき世の我とうき世と名
につきて、人の為さへかなしくなれると也、此義誹
諧なる説也、難用^云、又云、我^{*3}一身よりうき世と
名付て人のためさへかなしくなすと也、以上二首は
好へからざる躰の哥也とそ、此外山のはにけて、山
のはならて出る月、駒のあしおれ^{*4}なとも此類なるへ

し、但撰集の様なりと云々

961 思きやひなの別に

八十嶋かけてと読し時の哥なるへし、ひなの別は、ひなに別きたる也、なはたきとは、繩をたくる也、^{※1}

釣のことわさをのみ友とみる心也、奥の小嶋の様を

思ふへし、思きやと読る心様くなるへし、^{※1}篁は仁

明御時遺唐使のそへ使にさゝれたりしを、一人なら

はと申しによりて流されたる人也、才智すぐれたる

人なれば、高位高官にも思かけぬへきを、かゝる罪

にあたれる、思かけぬ心なるへし

田むらの御時ごとにあたりて 流罪なるへし

962 わくらはにとふ人あらは

わくらはとはたまさかなる心也、もし我を問人あら

はかくこたへよと也、殊ニあはれふかしと云々

左近将監とけて をのゝはる風 寛平二年任右少

将

963 あまひこのをとつれしとそ

天ひこのをとつるゝは、有かなきかはかりかたき物

也、我身の様をかれにたとへたり、今の身のさま有

かひもなく、有かなきかなる心也、昇進をこそ思ひ

しに官さへつけてかひなき時の心也、人のをとつれ

をあまひこになすらふるにや云

964 うき世には門させりとも

つかさとけて、此世に執心もあるましき身なるとい

ふ心也、門させりともといふ作珍しき心也、切にか

へり見たる也

965 ありはてぬ命待まの

明也、殊ニ哀なる心也と云々

みこの宮の 春宮也 たちはきに

みやちのきよき 小書〇 ^{※3}

966 つくはねの木のもとことに

つくはねを君によそふる也、木の本ことに、つか

さもとけぬれとも猶めくみをしたふ心也、東宮かた

の人のあたりに立寄心なるへし、春のみ山は春宮の

心也、君臣の道をたかへぬ心あり

時なりける人の、思て おもつてと読也

967 ひかりなき谷には春も

深谷の日月の光も不及心也、春もよそなるとは、めくみのよそなる也、をのつから愁もなき心也、此理を思ふへし、無事の境界也、徳は失のもと也^{*1}

桂に侍ける 伊勢は七条后宮に宮つかへしけり、御

門の御子をもち奉りて桂にをきまいらせたる時、后

宮の御哥のかへしに読ると家集にはみえたり、此こ

と書は伊勢も桂に有ける時の哥とみゆ

968 久かたの中におひたる

中宮を月にたとふ、焮の宮とも号す、中に生たるは

桂の事也、光をのみそ、中宮の恵をのみたのむと也^{*2}

紀のとしきた 阿波介

969 今そしるくるしき物と

人を待侘てくるしき時思ひしる心也^{*3}、人にまたる

、時は此心を忘るゝ也

これたかのみこのもとに 伊勢物語の詞にすこしか

はれり、此哥小野にて読とみえたり

970 忘ては夢かとそ思ふ

初の五字肝心也、此哥惟喬の一生の様を思合すへし、心詞殊勝^{云々}

971 年をへて住こし里を

女にをくる哥也、伊物にはあき方^{云々}なると有、立出て程をへは野とやならんと思やる也、女をあはれむ

心也

972 野とならば鶉となきて

物語には、鶉となりて鳴をらんとあり、あらためて^{*4} 殊^{云々}哀ありと云々、狩によそへたる心にはあらず、此^{*1} 哥不便なる様也^{云々}、此返しの心尤人の心にかくへ

き処也^{*5}

き処也

973 我を君なにはの浦に

みつの、すみてよむと^{*2}、我を何とも思はさりし

かはの心也、切にもあらぬ由也、なにはの事にも心

とむる様もみえさりしと也

此哥は ※1 みつの寺に

974 難波かたうらむへきまも

いつの程にかくうらむらん、さもおほえすと也、い
つこをみつの、我心をいかにみてか、かくなりけむ
と也

975 今更にとふへき人も

人に問捨られたる心也、てへとはといへ也、うらみ
たる心也、誰にいふとはなし

676 水の面に生る五月の

五月はうき草のしけくなる比也、うき事のしけき心
によめり、ねをたえてこぬとは、かきたえをとつれ
ぬ心也

977 身をすててゆきやしにけむ

※1 此哥こと書にかなへり、心すこし心得かたし、尤と
ふへき事なるをとほさりしかは、我心の身を捨て外
へや行けんと也、慮外なる由也

978 君か思ひ雪とつもらは

躬恒を思ふ心は、此雪の如くつもるといひしによて
読る也

979 君をのみ思ひこしちの

白山の雪の如く思心なれはつくすへからすと也、思
ひこしちのとは、こしにありしより思こし心の浅か
らぬといふ心あり

980 思ひやるこしの白山

人を思心の深き様也、優なる哥也とそ
※2 廿一日 廿首(朱)

題しらす 読人しらす 以前注之、※3 又此おひて

子細あり、義ある哥なれば題しらすと書り、よみ人
しらす、哥の数のおほく入事を憚て匿名事あり、又
神詠勅詠などにもあり、此題不知は神詠の故也。

981 いさこゝに我世はへなん

菅原の伏見は大和国也、名高き里の荒行をおしむ心
也、爰にしはらく世をへて里を荒さしと也、裏説

云、伏見里とは人の境界也、菅原は世澆季にして人の心のみたりかはしき様也、いさこゝに我世はへなんとは、日神和光同塵の心也、是神明の誓也、夫日本は神国也、神代より人の世とわかれ来り、神代は大道也、人の世となりて仁義五常出来り、大道廢て仁義興之理也、仁義も又すたれて人々失正成邪之故、日神此時和光同塵し給て避邪立正之徳をほとこします、神も和光に及へからず、是によりて罰あり、利生あり、大道之時は此義有へからず、いたりてはたゞ無事の境界に身をおさめよとの心を、神のめくみましますなるへし、日神の神詠也、人に託しなとありけるにや

982 我庵は三わの山もと

明神御詠也、明神此山本に垂跡して和光の恵をほとこす、こひねかひて仰奉らん人は尋よ、杉立門を知へにしてと也、杉立門口伝也、裏云、我庵とは垂跡のたちと也、三わの山本とは衆生の貪嗔癡の三

毒也、三毒あつくたかくして此輪を出る事かたし、此三の輪を越よとあはれみ給ふ明神の御心也、此境界に和光し給ふ心也、一切衆生をまねき給ふ由也、又人人此三毒のあつまる処は四大五蘊也、此中心地の和光を神とす、心地の和光とは慈悲と正直と是也、則三毒を破へし、此理は三輪明神の心を不借して即一心和光する也

983 我庵は都のたつみ

此哥は喜撰世をのかれて、身を安んじて此山に居住したる時なるへし、しかそすむと読る心になへり、住えたる心あり、人々世をうしとは云也、誰も身をおさめ心をやすんせは人々喜撰なるへし、裏云、我庵とは王舎城也、我とは心王也、天台に王即心王舎即五蘊と釈す、城は本覚法身のみやこ也、世を宇治山とは五蘊之中に六塵の山有を云也、迷悟の一心、有事をしめす也、故毘盧心土不超凡下一念と

984 荒にけりあはれいく世の

さるへき人の宿などの思の外荒はて、住こし人も
行衛しられす成て音信もなき心也、旧宅を打なかめ
て、いく世の宿なるらんとあはれむ也、裏云、世の
濁に成て、人心の欲にのみ成たるを荒にける宿と読
り、住けん人とは仁心※1のうせたる事也、自性の仁
を失したるを歎心なるへし

985 侘人のすむへき宿と※2

女の所へ読てつかはしたる哥なれば俗名入たりと
云、をのつから俗にての事にもや、世を侘人の住
らんとみる故に、ひく琴の音も歎のこゑにきこゆる
也、怨者は其吟悲なれば琴声もさも有へし、裏云、
生死におほれたる有待※3の穢身のあやうき様を荒たる
宿といへり、盈ては缺※4ふかる人生を侘人とよめり、
人々のことわさは皆歎なる事のみ也

986 人ふるす里をいとひて

物思事ある時の哥なるへし、ならの都も古郷なれば
人の古したる里也、されは爰もうき事のかはらぬ心

也、裏云、定心ならされは堪忍の心なくてこゝをさ
り、かしこに行ても同愁なるへし、富貴薄命も天然
之理也、此理を心得て心を安すへしと也、影※5イト
ヒテ走ルカ如シ云

987 世の中はいつれかさして

世間に我宿と定むへき事なし、古郷と思ふ処にも住
はてぬことあり、他郷にも又住つく事も有之※6、世界
は常住にして方処なし、○裏云、十界分々の住処
也、十界皆かりの境也、いつくか真の住処ならん、
生死の本末をしらせむの心也

988 逢坂の嵐のかせは

嵐のかせはさむくかなしけれども、爰をさりても行
すゑをもしらぬ故二侘三つゝ有心也、ぬるとはふる心
也、哥の様に読る也、殊勝也※8、又はね覚によめる
にや云、裏云、五行相合之境を相坂といへり、嵐の
かせは有為転変の心也、五行所成之此身は必有為の
転変※9あへる理也、此心行※10多しらぬはてもなし、落

着難知、たゞ侘つゝ送年也

989 風の上にかさためぬ

一身のはかなきさま也、行多しらす成つへき心也、

裏云、風の上の塵とは、風大地大也、塵は土也、水

火は風と地とに属す、人身の五大所成之様也、人身

は風にもたれて軽物也、五大所成に生して老病死に

うつる也、其理を行衛もしらすなるといへり、空大

也、但終に空^{*2}歸すとのみ見は二乗の見也、生死を

常住と見理ありとそ、是法住法位世間相常住也、此

哥も生死の本末をしらしめむの心也、以上三首蟬丸

の哥也、世中はいつれかさしての哥は身業也、相坂

の嵐風のは心業也、風の上の身心^{*1}のはてをあらはせ

り、御抄云、蟬丸哥也、後撰には名をあらはし、古

今には名をあらはさす、古今ならひし次^{*2}に聞し事な

れはと云、其心あるへし、蟬丸は化人也、仍此集に

名をあらはさざるは面白き理也、然を後撰にあらは

すは定家卿庶幾なき心にや、いさ爰に我世はといふ

哥より此^ニ至て九首也、今世後世共^ニ身上をはかる哥

也、尤肝心とそ、神道を仰^{*4}は王法全し、世間をなけ

ゝは仏法あらはる云、抑雜哥の始^ニ我上に露そをく

と読る、一滴の露より起る心を始として次第^ニ種々

の人事にうつる心みえたり、其中^ニ恋の心又は祝言

等さまあり、雪月花の興にいたるまでよくまし

へたる部也、もれたる事なしと也

990 あすか河瀨にもあらぬ

瀨になるを錢にそへたると云説かつて嫌道也、あす

か河の瀨瀨にかはるも自然之理也、家^{*5}をうりて瀨瀨

の如くなるさまも又自然の理也、されは歎かさる心

伊勢か心也、榮辱得失も又自然也、此哥伊勢か女の

中務伝受の哥也と云、風躰面白哥也、又身上の教

也、自然之理を知には人を恨る心も有へからず、是

則和する道也、仍肝心とす

991 古郷はみしこともあらす

見し如くもあらす也、碁を立入たると云、晋の王

質入仙家見碁たる事を思へる也、朽し所そ恋しかりけるとは、碁をうちし朋友のかたをこふる也、古郷のゆかりも不平なる事あればむつまじからず、他人なれ共むつまじき事ある理也

みちのく 橘のくすなをか女 葛直

992 あかさりし袖のなかにや

女は友たちをもふかく思ふ心あるに※1よてかく読る也、裏説云、此哥嫌へき心あり、友たちと物語なとして別ぬる事を、袖の中にや入にけん、玉しゐのなき心ちするとまてはあまりに過たる理也、人を思ふ事も過たるはかへりてうとくなる事あり、世上常に如此と云々

寛平御時 もろこしのはう官 遺唐使大使一人副※1

使二人判官四人云々

993 なよ竹のよなかきうへに

なよ竹はよのなかき竹也、にか竹にや、よなかきうへに、竹のさま也※2、夜ながきといはむため也、おき

るて物を思ふとは、今夜の別の悲き心也、よなかきといふに御門東宮をかけて祝する心あり

994 風吹は奥津白波

左の注、伊勢物語にすこしつゝかはれり、殊面白く哀也云、注を委く書たるにて心を思入へし、夜は、古くはよはと読、今はよわと用也※3、頭注奥津白波を盗人の心にあらすと会見せり※2、勘盗人の事と聞き、此今案可仰可興、やまとはあらぬから衣のたくひと云、心は立田山の深き道を越る事を思やる也、女のおとろへぬるに※4かれ行人はかなしけれ共力なし、さても猶男を思ふ心尤哀ありと云、此内に盗人のことなどもこもるへき歟云

995 たか御祓ゆふ付鳥か

から衣はたつたといはむ為也、立田は四境の祭に鶏を置所也、ゆふをつくると云々、たつたにてゆふ付鳥の鳴を聞たる心也、たか御祓のゆふ付鳥にてか、たつたの山におりはへて鳴と也、立田は御祓の在所

也、おりはへて、打はへて同し

996 忘れん時しのへどそ

たかともしらぬ文をとりて見たる時よめる心也云々、
こと書のほしき哥といへり、今案、友などの方へや
る文の事をよめるにやと云々

貞観御時 奈良御門 聖武御時と答奉る也、此時

分は万葉事うとかりしとみえたり、聖武より清和ま
ての間十二代也、順シテシ(朱)か次点云々より以前は不分明云々

997 神無月時雨ふりをける

あつめをきたる心あり、神な月は時雨といはむ為
也、又此時神な月にや云々

寛平御時 つゐてにとは※1、めさるゝ哥奉る次奉り

ける也

998 あしたつのひとりをくれて

きこえつか※2かなむ、鶴※2戻九臯声聞于天と云心あり、心
は千里官など成をくれたる心を申上はやの心也、誰
もきこえつけと也、鶴のさはに※2あるによそへたり

999 人しれす思ふ心は

同時の哥なるへし、官位などのそむ事ある心也、春
霞は立出てといはむ為也、又霞はみる人の愛する物
なれば、君にみらん心によそへたり、立出てとは立
身の事也、思心は是也とよめり

1000 山河のをとにのみきく

宇多おりみ給て後、伊勢七条后宮に候しか、其後宮
中にすまさりし時、哥めしけるに奉る也、山川は音
にきくといはむ為也、みをはやなからも縁也、水の
みおのはやき心也、身を昔のやうにして百敷※2をみる
よしもかなと也、たとへみる事ありとも、むかしの
如くならてはかひなき心あり、雑部※3哥※3躰は浅より
深※4入深より浅入か如しと云々

廿二日(朱)

古今 十九〇サツテイ(朱)雑躰

雑の哥に相似たり、此部は躰を交たる哥也、躰は長

哥、短哥、旋頭、混本等也、混本哥はみえされ共、
此中にをのつからある理あり、混本哥は三十一字の
哥に一句不足也、^{*1}長哥のさま混本ともいふへきによ
と云

短哥 ^{*1}長哥を短哥と号たる事古来の大事也、種々説
あり、万葉には長き哥をは長哥と書、其奥^ニ加たる
三十一字の哥をは短哥と号す、或は反哥共いへり、
長きを短哥と号事なし、但万葉の中に一首あり、七
夕哥のみ也と云説あり、未分明にや、一説云、此集
の長哥の中^ニ忠岑か長哥の奥にのみ短哥あり、其を
もて短哥と号と云、^{*2}難信用之説也、題短哥事、一
首^ニかきるとみえず、^{*2}俊頼、頭輔等説、又云、三十一
字とつゝきたる所なし、みしかく読切たる故也云、
此説俊成用にはあらねとも興ある説と云、又説、
最末卅一字の一首となる故^ニ号短哥云、^{*3}是も未詳事
也、又云、此部の初の一首を短哥と題す、次よりは
^{*4}長哥とあれば長哥なるへし云、^{*5}是又難用也、短哥

は惣^ニ題する号也、哥には各こと書あり、所詮難決
事なるへし、久安崇徳院時百首哥めしけるに、奥^ニ
短哥を奉るへき勅定なりしに皆奉長哥云、^{*6}此時俊
成卿も御人数也き、此仰は古今に准せし義にや、千
載集には短哥と題せり、俊成卿准古今之心也、定家
卿は此事を此集の遺恨也と云、^{*7}長哥と題せざるを
庶幾なきにや、尚以難決事也云、^{*7}当流には此事お
ほつかなきをもて心とす云、^{*8}定可有会见乎
題¹しらす ^(朱)此哥は恋の哥也

よみ人しらす 爰には有口伝云
1001 あふ事の稀なる色に

色は思そむる心也

もえつゝとはに^{*3}たゆる時なく、行水をうけてかく
なはをかけたる詞也、^{*3}かくなわとは油物也云、^{*3}緇
の如くにて乱たるさま也

思みたれて^{*4}かくなはをうけてふる雪によそへたり
えふの身なれば^{*5}えんふの身也、此界^ニ生たる身な

れは思はしと思ふ事も難休也、見御抄

山下水の 思ひはふかしといふより出たる詞也

せむすへなみに せんたよりもなき心也

思へともなをなけれぬ 又打かへし歎也、さても

あはすしてやはてんと思ふ心也

春霞 かすみは遠く立物なればよそにとつゝけた

り、天雲のよそにと云か如し、思へともと云詞にけ

なはけぬへくの心こもれり

1 1 ふる哥たてまつりし時のもくろくのそのなかうた^{※1}

此集を撰時、古来の旧哥等を奉し時の事也、真名

序^ニみえたり、もくろくとは、此集の部立の目録の

心也、序の長哥^{*1}とは、此長哥を部立の序のやうに読

て奉る由也

1002 ちはやふる神の御代より

和哥のはしまりより代々にたえぬよし也、伊弉諾

以来^{*2}妻盛鳥尊にいたり、人の世となりて此道の

さかりなる事をいへり

あまひこの音羽の山の 枕言也、此中に此たくひお

ほし、音羽^{*3}はの山の東なる山なれば、春のくるに縁^{*4}

あり

思みたれて 霞のみたるゝ心、撰集の事を思^{*5}心こも

れり、以上春の部也

五月雨の これより夏也

もみち葉を 秋の部也

神な月 以下冬なり

(1) 千世^{*6}にといはふ 賀也

世の人の 上の句をうけ下の句にかけたる詞也、此

たくひおほし

(2) 庭もはたれに うす雪のさまと^云、草木^{*2}のはのた

るゝ程なるを^{*7}云

もゆる思も 恋也、あかすしては不満足^云の思也、上

下をかけたる詞也

わかるゝ涙 雑別也、旅は是^{*8}属すへし

藤衣 哀傷也、をれる心も八千種のは哀傷^{*9}の心也、

これより雑部以下終までの心こもるへし

ことのはこと^{*1}

うらの塩貝ひろひあつめ 此集をえらふに古来の哥

等をあつむる心、しほかひをひろふ如くの心也

とれりとすれと玉のをのみしかき心 心^{*1}みしかくて

いがゝなんと思ひわつらふ由也、卑下の心也

なをあら玉の年をへて 撰集事延喜五年勅を奉り

て、奏覧は年をへて後の事也と云

大宮にのみ、此集仁寿殿にして撰之、勅にした

かひて撰様也

かへり見もせぬ 忍草生ふる、卑下の心也

ふる春雨のもりやしぬらん 下の心は如此さまく

撰あつむれ共、猶さるへき哥なともやもれぬらんと

也、諸人の心をかへりみおほふ心なるへし^{*2}

古哥¹にくはへて 諸人の旧哥を撰者として奉るに、

加て奉る長哥也

1003 吳竹の世々のふることなかりせは

旧哥共を奉る事也、神代より代々の事也、此道なら

てはいかてか我も人も思をのへんの心也

あはれ昔へありきてふ人丸こそは 人丸文武合躰の

臣として哥道興盛ありし事なれはうれしきと也^{*2}

身はしもなから 人丸は高官ならねともと也、正三

位^{*4}に⁽⁴⁾位⁽⁴⁾したるも哥の道によての事と云、此道の御師

たりし事也^{*5}

今もおほせのくたれるは 此集撰事也、人丸の跡を

つけとの仰なるにやの心也、真名序先師柿本人丸

と云、此心也

塵の身に 我身を卑下の詞也

つもれることをとほるらむ 撰者を承りて古いまの

哥をえらひ奉るへき由仰らるゝ心也

これを思へは獣の 家集には薬^{*6}けかせる獣のとあ

り^云、淮南王古事也、人丸の力にて我も如此承る心

薬^{*8}の力にたとふ^云、又心は数ならぬ身にして撰者^{*3}

承て、及なき禁中^入てえらふ事をたとへたり

千々のなさけもおもほえず云 君恩の千万なる事

もおほえず、身にとりては此一事のみ思出なる心也、撰者として万代に名をのこす事切なるへし

かくはあれとも照るひかり、レてるひかりちかきまもりなりとは、左近衛の番長にて、天子のちかきまもりなりしこと也

誰かは秋のくる方に、レ其後右衛門尉生任す、隨身

なれば随分の昇進なれとも、外衛なる事をかなしふ也、君に遠き心也、右衛門を秋のくる方といへり、

左は春に属し右は秋をつかさとる義也

あさむき出て、レとは、いつはりはかる心也、御抄一

蓮葉の哥の注に見えたり、一たれかはたはかるやうに

して、外衛の官になしつらんとおほめくよし也

おさレしくもおもほえず、おさレしくはおとな

しき心也、昇進をもおさレしくも思はずと也

九かさねの中にては、レ禁中にても殊君にちかき心

也、近衛なりし時の事也

今は野山しちかければ、君に遠くなる心也

春は霞にたなひかれ、野山ちかきといふ心よりかく

よめり、四時の様也、袖をかしせめらるゝなど君を

したひ奉る心也

つもれる年を

いつ々のむつ、一は、卅年奉公也、番長に成しよりこ

なたの事也

これにそはれる、奉公卅年の外の年を加ての事也

やよければ、よきり過る心也、云、はやき心也

なみのしはにや、ひたひの波の心也

おほほれん、一は、老はてなむ事也

老すしなすの薬もか、不老不死の薬もかな也

若えつゝみむ、我老身わかくなりたきよし也

1004 君か代に相坂山の

此集の撰者と成て、後代に跡をのこさむ事を悦心

也、我身のかなしみを兼て思ける事よと也

反哥ハシカ(朱)とは、前の長哥の心を一首に返してよむ心

也、又は反哥をへんかとよむ説ありと云々^{※1}

1(朱) 冬のなかうた この長哥殊面白しと云々、是は此集

を撰時の哥にはあらざるにや

1005 千はやふる神な月とや

くもりもあへす初時雨^{うち時雨イ}

玉のをとけて 霰のちる様也

白雪のつもりく 是より卅一字の一首となれ

り、長哥いつれも多分如此

年をあまたも過しつる哉 此詞一切の事、心の思

ひおほくこもるへし

1(朱) 七条の后うせ給 延喜七年六月八日崩卅六

1006 奥津なみあれのみまさる

奥つなみはあるととうけむため也、又は宮中もすさ

ましく成ぬる心、陰をたのみし身もより所なき様也

伊せのあまも 尼の心にあらす、伊勢といふ名をよ

そへたる也

涙の色の紅は 我らか中の時雨にて とは、伊せ

一人にかきらす、人人の様也

とまる物とは花すゝき 花薄のみ残るへしと也、薄

によそへて我身の様をいへり、むれたちても薄の様

也、人々の歎く様をよそへたり^{*1}

空をまねかは 天にあをく心にや、又打なかむるさ

まなるへし、薄によせてまねくとよめり、又つゐに

宮の中をわかれなは、空をあふきてよ所にこそみめ

の心あり

初鴈の鳴渡りつゝ 花薄などの比鴈の鳴に縁あり

よ所にこそみめ 宮の中をわかれなはの心也

旋頭哥 はしめにかへる心也、かみに帰る共、五句

の外二句あまる哥也、五字にても七字にても一句

あまる也、卅一字の如く次第にくたらすしてかさな

る句にてはしめにかへる心也

1007 1(朱) うち渡すをちかた人に物申われ

梅花をよめる哥也、打渡すとは行人の様也、梅花の

辺を行かふ人をみて問心也、梅花とはみつれ共、奇

妙思ふ故何の花そととふよし也

1008 春されは野へに先さくみれとあかぬ

此句は一字あまりて読る句也

まひなしにたゝ名のるへき、まひなしとは、花もい

ひなしにてこそあれ、やすらかにやは名のるへきと

いふ心也、たとへは物にそ有けるといふ詞を物にさ

りけるといふか如しと云、梅とみれとも何の花そ

ととへる返しなれば、花もいひなしにてこそあれ、

あさはかにたゝ名のるへき花の名にて有らむやと、

思はせてこたへたる心也、見御抄、頭昭はまひなひ

の事と云

1009 はつせ河ふる川のへに 題しらす 前の哥も題不知也、此又書る不審也

はつせ河ふる川のへに 云、ふた本ある杉

古河のへも初瀬川の名所なるへし、名木なれば

面白き心也、又もあひみんは杉をほめたる也、又恋

の心にもや

1010 君かさすみかさの山のもみち葉の色

うち時雨たる比、三笠の山の紅葉をみてよめる也、

雨は笠に縁あり、又はみかさ山なれとも雨のもりて

染たるとみる心と云

五十八首 廿三日 廿九首

誹諧哥

そしりてとゝのふる心也、正道にあらすし

て正道をみちひく理ある也、誹諧哥は、おもて

は利口にて、事過たる様にて、非正道、此躰は哥の

宜しからぬ躰也とするは則正道をみちひく理也、道

にいたりては毛詩の心あり、諸国の詩を采詩の官あ

つめて奉るをみて、政を直する類なるへし

史紀滑稽伝などの心也

後漢東方朔至て矮子也、禁庭にて雨の降時、矮子の

をそくぬる、由の利口を云しにて、余人雨にぬる

事御覧して、ぬれぬことありしも此類也

雑躰之中にも長哥五首、旋頭四首あり、誹諧哥五十

八首入たり、道のため用ある哥なる心みえたり

此部の哥に裏の説有哥多之、和国の仮名の字のみを

もて、身をおさめ政をあらたむる理をうる事肝心也、人々身上の本末をも知へしと云々

・誹^{*1}甫尾切・誹謗也・諧胡皆切・和也・合也・調也・偶也、偶^合也

1011 梅花みにこそきつれ

ひとくくとは、鶯のとひなきの声をきく^なしたる也、梅花をみにきたる人なるを、鶯のおとろきて人来といとふさまに鳴也、いとひしものしものは詞のたすけのみ也、裏説云、人はさもなき事を、とや思ふらんかくや思ふなど、疑心の深きはあしきこと也

1012 山ふきの花色衣

黄衣の事と云々、又は山吹花をさして云也云々、此説宜乎、くちなしにしてとはこたへぬ心也、山ふきは口なしの色なれは也、不多言を執する也

1013 いくはくの田をつくれはか

しての田おさは郭公の別名也、時鳥と我名を鳴事をしての田おさをよふとよめり、田をうふる時分鳴鳥

也、或云、過時不熟と鳴と^{*3}云々、あさなくよふは、

いくはくの田をつくるらんと也、裏云、道をおこなふ人の、成もたぬ事、我分^{*4}剂にあはぬ事などをなさむとするはあしき事也、不可成之時をは退へき也と云々

1014 いつしかとまたく心を

またく心は待心也、跨くる心をよそへて読り、脛にかきあけてさしまたけて渡らんと也、明日^{*5}まではそき心にてけふやと読り、裏云、成就すへき事の前なるをまたすして急^ニするはあしき事也、又成就の遠かるへき事は又急にすへからさる也

1015 むつこともまたつきなくに

秋の夜の長きといふはいつらといふ心也、此下句誹諸の躰也、裏云、恋は食欲也、熾盛なる人はいよ^く増長に貪して、少欲知足の心なき也、あしき事なるへしと云^{*6}

1016 爍の野になまめきたてる

なまめくは媚也、うつくしきさま也、うつくしくかさりたる花も一時の事にてこそあれと也、霜雪のおとろへのまさにちかき事を思ふ心あり、秋の野にとよめるも心あるへし云、あなかしかまし、あなことくしなと落したる心也、裏云、※1可然人も花麗をこのみ居をやすんずるをみれば、あなことくしとおほゆるなるへし、かへり見よの理也

1017 秋くれは野へにたはるゝ

たはれをなといふか如し、つむとはなれむつふる心也、人をつむ事によそへたる也、花なれはつむと読り、裏云、実人ならぬ人の女※1しく花やかなるに、世の人のなつさいついでせうする事あり、よからす思へともしたかひ賞する事あしき心也

1018 秋霧の晴てくもれは

花のすかたのみえかくれすると、女の様にたとへて読る誹諧躰也、世上にも実ならぬ様也

1019 花とみておらむとすれば

大方花とみておらむとすれば、女の姿にてあれば斟

酌の心也、うたゝ有とはあまりなるといふ心也、出家なる人の哥にやと云、小乗の機なるへし、裏云、可然人とみゆる程になれよらむとすれば、女くしき心などありてむつひかたきことあり、宜からぬ人なるへしと也、源氏物語に、なよひかに女しとみればあまりなさけに引こめられて、とりなせはあためく、これをほしめの難とすへし、なといへるか如し

1020 秋風にほころひぬらし

蘭ほころひてそ有らんと也、蜚の一名をつつりとも云、させともいふ也、それを縁にしてつゞりさせと云と読り、裏云、成就しかたき事、及かたき事などをなさむとすれば、苦身※2のみ身につもる事あり、其を風する哥也

1021 冬なから春の隣の

中かきよりそなと読る利口なる躰、誹諧也、裏云、一切の事は二事出で又※3こと事にうつるをよしとす、

いまた一事のおはらざるに又事を交ふるは悪し、政道にも此類有へし、人と交る時、言語も他にましふるは宜からず

1022 穢のかみふりにし恋の

恋のつもり来りて身にたゝるやうに成ぬる也、いそねかねつるとはをこたりをも申えぬ心也、いそねとは神などに身のおこたりを申事也、神のたゝりなのやうなる由也、裏云、道ならぬ事を思そめて、思惟もせずして其にしたかひ行は、我身にたゝるやうになる也、あらためむと思へともかなはずして、其事にて身を失ふ事あり、兼てよく思ふへき也

1023 枕より跡より恋の

切なる恋の様也、せめくる心ちする也、裏云、枕は上、跡は下也、善悪にとる、欲心に貪して善悪をおかぬ事を風する也、恋は欲也

1024 恋しきかかたも方こそ

か文字清てよむ時はやすめ字也、又濁て読義あり、

いづれも義理はおなし、にこりて可然にや云、恋しき事はなといふ心也、一切の事は方処あり、今恋に亡したる様は方角もなく忙然たると也、裏云、恋をは貪欲にとれり、欲にひかれて方角前後をも亡して、身をいたつらになす事あり、其を風する哥也

1025 ありぬやと心みかてら

あはずしてあらはさてもありぬなど思ひてゐたれは、又たはふれにくく恋しき心也、心みかてらあひみぬはたはふれなる心也、裏云、世をのかるゝ人の行末をも身軀をも思とゞけずして、山入ても悔る心などある事を風する也、源氏、思たつ時は心すめるやうになとある心也

1026 耳なしの山の口なし

耳無山、大和名所也、恋といふ事は、きく事とこといひかはす便よりはしまりて、様／＼の思と成也、耳にきかす、言云かはす事なき事を、心地に深く染たらは、恋のうくつらき事も有ましきと也、裏云、

大人は耳に聞と人の語を以て悪事となる事あり、聞にも言にも心をうこかさすは可然也

1027 足曳の山田のそほつ

そうつは玄賓のつくりそめける也、人形などの事も、此哥は、女などを数ならぬいやしき人などの思

ふといふ事有を嫌心にて読るなるへし、たとへは山田のそほつ^{*2}とか我思ふといはむはうかるへし、其

ことくうれはしきと読り、をのれさへとは、かゝるそほつさへ思事^{*4}うしとわれおほしてふ、うれはしき

こと、裏云、田をもる物は人のたくはへする心にたとふ、貧窮なる人のたくはへを苦身^{*5}するたとへ也、

家伝ことすみて読説あり、理はおなし、き^{*3}のめのと

1028 ふしのねのならぬ思に

成かたき思なれとももえはもえよと也、我とかく思ふ心也、神たにも思ひはけたぬならひ也と也、富士の烟は神もけたぬ煙を思へり、ふしのねのならぬ思

ひにとつゝきたるさま、誹諧也、恋の哥也、裏云、神たにもけたぬ事ありなむと云て、はゝからす悪事をなす事有、不可然也

1029 あひみまくほしは数なく

見まくほしき事は数もなくおほけれ共、人に便なき故に迷ふ心也、月なきをつきもなきによそへたり、裏云、道ある人などにあひたく思へとも、便もなくて打過る事あり、悪事にのみひかるゝ心をよめる也

1030 人にあはむ月のなきにははしりひに

人¹にたよりなきを月によそへ読り、思ひをきてとは、さりともと思ひ来れる心也、裏云、前の義に同じ、道ある人に逢事を思ふへしと也

1031 春霞たなひく野への若なにも

つむとはなつさふ心也、序哥也、裏云、他人の役をのそむ心を風する也、若菜は人につまるゝ物なるをうらやむ心也、富貴さかへをうらやむ事も失也

1032 思へとも猶うとまれぬ

春の霞の面白きをよめり、郭公なか鳴里のたくひ也、霞をかくまで思ふ由を読む誹諧なるへしと云、裏云、我にちかつく人の他の所へ行事を嫌心不可然也、他にもすゝめて学などをなさしむへし、我も心をのこさすをしふへき也

1033 春の野のしけき草葉の

雉のほろゝうつ事也、ほろゝといふ詞をよめる誹諧なるへし、ほろゝと鳴とは涙のほろゝとこほるゝ心也、恋の哥なるへし、草葉のつまとつゝけたり

1034 秋野に妻なき鹿の

かひよとなくとは鹿の声のかく聞ゆる也、つまこひもかひなき物をなそ年をへてかく鳴らん、たゝをのか恋のかひよと鳴にこそあれと也、裏云、妻をは従類に比す、あるへき人ゝを略するは宜からぬ事ある心也

1035 蟬の羽のひとへにうすき

人になれなはしたしくよるへきと思へは、さもなき

由也、衣によそへて読り、うすき衣はよる物なれは也、裏云、朋友の中の契のうすき事也、友なども善悪をよくみてなるへき也、さもあらねは知音も長からぬ事あり、いたつらになる事也

1036 かくれぬの下より生ふる

序也、くるといふ縁あり、人のかたへゆけども、逢事はなくて、くるをいとふ人に、かく読る也、君にあへると名をはたてし、くるはかりをはいとひそと也、ねもせぬ故名はたてしと也、裏云、友をとるへき事を教へたる心也、悪名などたつましき人をはしたしむへしと也

1037 ことならは思はずとやは

いひきらすしてかけたる心也、玉たすきなるとは、かけて苦と也、裏説同、世上にもいひ切へき事をかけてくるしき事あり

1038 思てふ人の心のくまことに

思ふとはいへとも心の奥を見はや、偽にてもや有ら

んと疑ふ心也、裏云、朋友なども思ふといは、其分にて打まかせて有へし、しゐて疑はあしき事也

1039 思へともおもはずとのみ

明也、人を思へとも猶思はずとのみ人のいふなれはかひなしと也、裏云、君臣之交に此心あらは賢なるへからず、^{*1}雖君不君臣以不可不臣之心也、又思ふかひなき人などをは思捨て、よき事有理も有

廿四日 廿九首 (朱)

1040 我をのみ思ふといは、

明也

1041 われを思ふ人を思はぬ

明也、表裏同、恋の哥也

一本¹(朱) ふかやふ 定家卿の本には此作者なくて、他

本²有をすてかたき心ありて、しはらく他本³つきて

如此あるにや、家本⁴なき故一本と云

1042 思けん人をそとも

我を思ふ人を思ふは即むくひ也

一本¹(朱) よみ人しらす 前におなし

1043 出てゆかむ人をとめむ

門出などに隣に人の鼻をひたるをとを聞ては、立降りてましなふ様なる事あり、さる事もあらは、人をとめむ便もあるへしと也、恋哥也、鼻ひるをは善^{*1}悪に用るにや

1044 紅にそめし心も

人をあく事を紅にさす^{*2}あくによせたり、此様誹諧也、人の心のうつろふ事を讀る也

1045 いとはるゝ我身は春の

野かひかてらとは打やりたる様也

1046 鶯のこそこのやとりの

去年のやとりのふるすとやなど利口なる躰也、人にふるさるゝを古巢によそへたり

1047 さかしらに夏は入まね

夏は誰もひとりゝぬる也、常にしたしくぬる人も別々になる心也、さかしらには、さかしかほに人

まねなると也、妻ある人も夏はひとりなとぬる如く、我も其人まねにて、冬※1の夜さゝの葉に霜のさやく比も又ひとりぬると也、さやく霜夜とは、そよ／＼と声※1のあるやうなる霜夜のさま也
平中興 なかきとよむ也

1048 逢事の今ははつかに

廿日の月によそへてよめり、逢事の稀に成たる人は、宵など来る事なくて、夜ふかくほのかに逢さま也、つきなきとは便なき心也、月のなきによそへたり

左の、) 枇杷、) 也

1049 もろこしの吉野、山に

両の心あり、遠くはもろこし、近くはよし野にこもるともをくれしと也、又云、もろこしの吉野成ともをくれし、まして此国のよし野などは尋もゆかむの心也、此義可然にや云、もろこしによし野といふ所有にはあらず、つくり出してよめり、いづれも誹

諧なる作也、此哥は伊勢※2、三輪の山いかに待みんと
読し時、仲平の返し也

1050 雲晴ぬ浅まの山の

あさまは高山にして雲もはるゝ事なし、又煙をいふ、我思の煙も浅まの如くなるを、あさましやと観して、されとも人の心をみてこそやまめ、只はやまし※3の心也、又云、世の人の思あれば此山もゆる心、人の順路なるをみてこそ、山もゝえやまめと也、詞の様も心も誹諧の心あり、吟味すへしとそ

1051 難波なるなからの橋も

つくる也、尽也、橋も尽てなければ、古ぬる我身を何にくつるなといはゝ宜かるへしと云、たとへんと也、つくと読る誹諧也、此哥作尽の両義あり、序相伝之時可聞之※2

1052 まめなれとなにそはよけく

苳萱はみたるゝ枕言也、よけくとはよくる心也、一説よけく、よき心也※3、まめなるは実なる事也、実也

とみえたる人のさもなき事あり、又実ならず乱たり
とみる人も、よくみればあしからぬ事あり、又云、^{※1}
まめなれとさもなき人として何かはよけむと也、難¹
定由也、まめなれと、いふうちに、さもあらぬ事あ¹
る心こもるにや^{※2}

1053 何かその名のたつ事の

名の立事ありて、憚る事も我のみの事ならねは、何
か名もおしからむと也、よからぬ事と知てまどふ事
也、裏云、無道なる人のよからぬ事と知なから、我
ひとりかはとて不改事あり、悪事也

いとこ也ける男によそへて いとこのかよふと人の
いふ事ある也

^{※1}
くそ 源つくるか女

1054 よ所なから我身にいと

いどのとはいとこの心也、いつはりに過るはかりと
也、針にすくるとつゝけたり、糸の縁あり^{※2}

1055 ねきことをさのみ聞けむ

思かくる人の、こと葉を尽す様をねきことと読り、
さのみとは、かなたこなたのこと葉を領掌などして
ききをきなは、はては難と成へしと也、あたしくし^{※3}
き人のうへなどをよめるにやと云^{※4}

1056 なけきこる山としたかく

思のつもりて歎こる山となれる心也、身のくるし
くなる故つら杖のみつかるゝ也、物思ふ人のさま
也

1057 なけきをはこりのみつみて

是も恋の哥也、歎をはこりのみつみてなどよめるわ
たり、誹諧なるにやと云

1058 人こふる事をゝもにと

荷持也、逢期をわうこによそへたり

1059 宵のまに出て入ぬる

序哥也、三日月はかたわれなる心也、われてとは、
人と我とのこなたかなたにうとく成たる心也、又わ
りなく物思ふ也^{※3}

1060 ぞへにとてとすれはかゝり

世上万事の様如此也、さにてあるよと思ひて、とす
れはかくたかひ、さらはと思ひて、かくすれは又変
する事あり、あないひしらすとは、何としたる心*1そ
と歎心也、言語道断也、あふさきるさは、あふさま
くるさま也、爰にては縦横にたかふ心也

1061 世中のうきたひことに

身上の事也、うき事のしけき也、裏云、世間の人の
かなしみ、時のうれへにあへる様を思ふ也、世の無
道の時を風する也*1

1062 世中はいかにくるしと

明也、裏云、世のひか事はなき物を、たゞ一心のも
ちやうによりて、うき事ある理也

1063 何をして身のいたつらに*2

やさしきははつかしき也

1064 身はすてつ心をたにも

はふらさし 放埒させし也、はうらと読*2、身をこそ

時にあたりてはつるとも、心をは放埒せし也、心さ*3

へはふらしてはつるの落着いかゝ也、身をはつると*4
はうき事などにあたる事也、おちふれたるさま也、
裏義、同心の放埒*5を制する也、五大分散すとも心は
金剛正躰の所を思ふへし

1065 白雪のともに我身は

白雪はふりぬるときえぬとの縁也、雪とゝもに身も
ふりぬる也、裏云、五大の身は仮に古行とも心は不
消之由也、此理は心に落たる説也、只当一念々々花
に對し月に向ふも、心境ともに亡したるは虚无自然
之心也、是即金剛不壞ノ身也と云*6

1066 梅花さきての後の

すき物と酸*6によせたり、好色の心也、身を梅の実に
たとへたる也*3、裏、人は花実相兼たるをよしと
す、実のみなるをは人のはゝかる事あり

法皇にしかはに 前鶴立洲といふ哥の同時なるへ

し 山のかひ 峽字也

1067 侘しらにましらな鳴そ

けふの御幸のめてたき時を山のかひ有とよめり、猿のこゑもわひしらにな鳴そと也、裏云、世に侘しく思ある人もおほき物を、と歎く心を下にこめたる也、此説は憚あり、かゝる御幸の時の哥に此心をよまむ事いかゝ也と云、師説如此、但此哥に其心ありとは見えたり、故に此裏説を秘すと云

1068 世をいとひ木のもとことに

世をいとひて樹下石上に居住し、墨衣*1の麻衣のみなる躰也、ふしかねそめの心也、うつふしたる心もあり、又云、誹諧部のはしめに、梅花見にこそきつれの哥より種々様々にうつりて、つるに此哥にて終ぬ、心は、世にあひ時をえたらん人も、終には身退て麻衣の躰、樹下山居によろつ放下なる事肝心也、人のはてをよめる哥也、師説、此集は世上の理を知へき簡要也云

うつふしそめ、又はふしそめをおもてに云て、うつ

ふしを下にもつへき歟云

従恋一以上廿二度*2

古今和哥集卷第二十*2

卅二首*3(巻)

此巻は一段有子細也、十九卷雜躰も余集にはかはれり、殊此巻は王道神道を兼てあみたる也、此巻を天真用也

一京極黃門云、姫公(キ)之籍(セキ)孔父之書は与日月俱懸鬼神争*4

奥、文選短慮非所及云、文選注曰明如日月深如鬼神云、此巻の心也

一上賀部あれともまさしく君を祝ふ心は此巻也、其

故は、天照御神より天の日つきをうけ給て御即位之

後、新年之米穀をもて手つからみつから天神地祇を

まつらせ給大嘗会の事あり、君の祝言不可過之也、

神楽事は天照御神岩戸をしまし、し時の神楽是

也、神楽は天下安全を祈給し事也、是又王道の肝心

也、仍王道神道は天真独朗也、是をしるは又和哥之

徳也

大哥所御哥フウタトコロノイ(朱)

此所は大内にあり、御字は貫之うやま*1

ふ義にて加たる也、大哥所は立少路は西の壬生の東*2

也、南は皇嘉門、北は安嘉門のとほり也、横小路は*3

西の土御門の南、東は上東門、西は上西門のとをり

也、凶書寮の東丈あたりて方一町也、南北門あり*4

云、大哥所別当は親王以下納言等補之、大嘗会新

嘗会等舞妓のまいる時大哥之人発物音、此処は*1

諸国之風俗神楽催馬楽一切哥曲をつかさとる所也

云、又大哥所は大和国の心あり、大哥は大和也、

所は国也、諸国の風俗等の事此卷*2あれば也

おほなほひのうた 大直日也

一説、節会之時群臣内裏祇候の日をいふと云、宿

直の心*5なるへし、又云、大直日は直なる心也、又神

の御名大直フナライの神と申あり、其心同、天照太神の御*6

心をまなひうつす天子の御心も直を本とす、是をお

ほなほひと云也、群臣の君をあかめ奉るも又君の直

をうつす心也、即我が国治世之本也

1069 あたらしき年のはしめに

一説、此哥は聖武天皇天平十四年正月十六日、女踏*7

哥出御大安殿舞妓御覧之時、大哥人弹琴歌此哥也*8

云、故号大直日哥云、あたらしき年とは御代始を

いへり、新年踏哥の哥にや、しかれ共御代の始と

用、けふより千年のはしめといふ心也、されは聖武

御即位より天平十四年までは治世十九年なれ共はし

めと読る也、一説、たのしきをつめとは、正月十五

日百官宮内殿へ御薪*9を奉る事をよそへたのしみ*10

をつむ事をよめりと云、かくしこそとは今を云詞

也、かくこそその心也、千年をかねてとは今より行末

の千とせを兼て也、群臣君の直心をうけて私なき心

也、日本記*11は、続日本記ありと云、可分見

ふるきやまと舞のうた 大和国より出たる舞也、国

の風欲也、延喜以前のなれは古きといふ也、和州の

なれはかつらきを讀り、たとへは駿河より出たるを

するか舞といふか如し、大嘗会春日祭諸社祭等ニ用

云

1070 しもとゆふかつらき山に

しもとゆふはかつらきといふ枕言也、しもとは木枝
薪など也、恋哥也、裏説云、まなく時なく、群臣思
君之心也、君も又如此有へきやうに徳を思召へきよ
し也

あふみふり 近江国よりうたひ出たる哥也、ふりは

曲也、哥の事也、国の風欲民の口つからうたひ出す
也

1071 あふみより朝たちくれは

旅人などの夜深く出たる時のさま也、朝立と云も夜
ふかき時分なるへし、驕中眺望もあり、裏云、前の
哥は、百性^{*3}の君を思ふ心也、此哥は、百性^{*4}の君に足
手をはこふ心也、又民性^{*5}にかきらす臣下等もおなし
かるへし、たつのこゑは鶏人の唱をかたとる也
みつつきふり 前は一国の風也、是は一郷の風也

1072 みつুকきの岡のやかたに

ふりはも 不里波毛¹私^(朱) 或説フリワモ 片伝^(朱)

夫婦ねたる朝に霜の面白きをあはれむ心也、おりに
よりて物ことに感ある也、ふりはとはふりさまはい
かになといふ心あり、わかさかりはもと読る類に
や、裏云、君を思へは必^レ徳を蒙る故^ニ我もとめり、
夫婦のかたらひの道もたかはす、さていもせのかた
らひふかき人も朝におきて、寒夜にもおこたらぬ民
のくるしみをいかにと上より思やるへき道也、富貴
にして貧賤を忘へからさる風也

しはつ山^{ワ(朱)}ふり しはつ山、近江名所云、一説、豊¹
前云、しはつ山とも、はの字清濁両説云、是も一²
郷の風也

1073 しはつ山打出てみれば

万葉に入にや、彼眺望面白きさま也、笠ゆひといふ
によせてかくるゝとよめり、たなゝし小舟はちいさ
き舟也、裏云、打出てみればといふに観心の心あ

り、笠は身をかくすへき心也、小船は徳のすくなき
たとへ也、君に仕る身も波のしはをたむはかり老
ぬれは、徳すくなく用なき時必退て身をかくすへき
事也、さてみをかくすにつきても猶恩波にうかふ理
を思へし、深山の巖の中も同かるへし、是仕君之人
の道也、君恩無不到之故也、此理をそむかは道にた
かふへし、以上四首身軀一期之間の事也、君に仕る
より身退までの事を風する也、諸国の風俗を都にし
てうたふ心、王道の肝心也、民の口つから出たるを
大哥所^{*3}にうたふ事、是君子の御心也、異朝に采詩之
官国風をあつむる、同じ心也、うたひあくる事、又
殊勝之理也、音律をもて其国の治故^{*4(マ)}をしる、世を治
るはかりこと也、肝要事なる故大哥所哥を此巻^ニ為
最初也

神あそひのうた 神樂の哥也、神遊は神の自在なる
といふ心也、又有口決之^{*5}
とりものゝ哥 神樂の中のとりの物の哥也、神に手向

る物を、神樂男の手にとりて舞事ありし也

1074 神かきのむろの山の 付箋 みむろ^{*6}

神、とり物也、みむろの山、大和国の名所^ニあらす、
みむろとは社頭事也、社頭の山の心也、和州のみむ
ろ山にも神社あり、それを神かきのみむろの山とも
読るあり、哥心は社頭のさま神木物ふかき軀也、感
ありと云、神社の山森^{*7}たる也

1075 霜やたひをけとかれせぬ

八度は数多也、しけく置心也、たちさかふるとは、
神の霜にいたますさかふる心、きねを祝ふ也、きね
とは神につかふる人也、かもとは哉の心也、神徳を
思ふ心也、裏云、神の霜雪にたへたる、喩る也、人
の物に勘忍の性は出身のはし也、短慮なればよろこ
ひをもいたつらになす也

1076 まきもくのあなしの山の

此事未分明^云、葛、とり物也、此山の社頭の神事
の時、一説^{*1}、あなし山は風はけしき所なれば、山人

頭を葛にて巻てかせをふせく事あり、興ある躰なれは、^{※1}神楽の時のひかけ、冠にかけたる躰を、その山人のさまとみえぬへしと也、^{※2(1)}又暁の雲を山かつらといふ事あり、⁽²⁾ひかけはこけの事也、かつらのたくひ也、清き物也

1077 深山には霰ふるらし

面白く殊勝なる哥とそ、公任卿九品の中上品中生入之也、裏云、人の心奥^{※2}悪心あるは必外^{※1}其色あらはるゝ也、はつへき事也^云、天道の鑑のみならず、人の間にも如此也、又、天子治世の心遼遠までをもはかりしろしめすへき義也

1078 みちのくのあたちのまゆみ

あたちのまゆみは樹なるへし、然而弓によめる也、恋哥也、すゑさへとは後さへより来よと也、行末かけて也、裏云、一切の事始終あり、思立処堅固ならては成就しかたき也、又中道にしてやむも不成就也、いつれをもかたくすへき也、忍々には勘忍の心

也、すゑさへより来とは学る道の身にいたるへき心也

1079 吾門の板井の清水

枚、とり物也、水を汲とよめる枚の心也、心はさひしき様也、裏云、水は人にくまるゝはをたやかならぬ也、^{※3}我門とは浮生の境界を放たる処也、里遠みとは去紫陌紅塵之心也、水を心中^たたとへたり、隠遁して無事なる様也、人しくまぬとは善悪にあつからぬ心也、水草生とは徳のあらはれぬさま也、徳とみゆるは不徳の理也、無事の境をよめり、^{私(朱)}莊子曰、才^朱全而徳不形、^{※4}停水にたとへたり

ひるめのうた 日神の御名也、神楽哥也、大ひるめ

とも申

1080 さゝのくまひのくま川に

神楽に日神を勧請し奉りて、あかり給をしたふ心のうた也、駒は神のめす物也、万葉にはさいのくまとあり、恋の哥にや、⁽¹⁾此卷にては此心に用、^{※3*5(2)}面に聞え

ねは題す^{*1}、又神楽の本哥に、いかはかりよきわさし
てか天照やひるめの神をしはしと、めむ^云、同心
也、日神をしたふとは正直をしたふ心也、我心を御
神の御心とひとしくとしたふ心あるへし

か⁽¹⁾へしものゝ哥 呂の律にうつる時の哥^云、未分
明、おりかへしうたふ事あり、其事にやと^云

以上四種^{*2*3}のとり物、櫛は色不変也、不変なるへき
かたとり也、葛は物に託す、託して可然事あり、弓
は人にしたかふ物也、したかふ道あるへき也、杓は
たもつ物也、心に隠持^{*4}する事のかたとり也、此四を
まもるへしとぞ

1081 青柳をかた糸によりて

春哥に鶯の笠にぬふてふの哥の心同、梅柳辺鶯の
鳴さま面白く作也

1082 まかねふくきひの中山

吉備国鉄を堀て吹処也、帯にせるとは細き川の帯
に似たる也、音のさやけさとは清字也、心は、深谷

までも君恩のいたらぬ方なき心也、代をほめたる哥
也、万葉にさやけきと読る哥、みな物をほむる心
也、多之

この哥は承和の、仁明天皇大嘗会主基哥也、御へと
はにへ也、其国よりにへを奉る時の哥也、きひの国
とは備中也、もとは号吉備也、後に分て為前中後也

1083 みまさかやくめのさら山

恋^{*6}にあらず、万代悪名をたてしとたしなむ心也、君
臣おなしかるへし、一云、善悪共に名をたてしと
也、老子経曰、名の名たるへきは常の名にあらず^{*1}
云、無事を真とする義也

これは水尾の 清和大嘗会主基国美作也、昔は其国
不定也

1084 みのゝ国関の藤かは

心明也、陽成、悠紀方哥也

1085 君か代は限もあらし

明也、長浜、伊勢名所也、光孝 悠紀方哥也

1086 あふみのや鏡の山を

のやはやすめ字也、たてたれはとは哥のよせ也、つきたてたるやうの心也、今たつるには非す^{※1}

これは今上の 延喜御時悠紀方哥也、当代の事なれば賞して作者をあらはせり、此廿卷にも部立は必なしとみえたり

あつま哥 東国の惣名也、あつまふりの心也、神楽哥、国ふり等相交り、此卷のさま也

みちのく哥 一国の風也

1087 あふくまに霧たちくもり

霧立^{*1}わたりとも、恋哥也、あふくまは逢心也、明かたに霧のふる様也、まではすへなしとは、いつともなき人を待はかなしきにしたふ心也

1088 みちのくはいつくはあれと

此国にも名所おほしといへともと此浦を愛する心也、かなしもは愛したる也、露をかなしふといへる詞に同、万葉此詞多之

1089 我せこを都にやりて

まつそ恋しきとは、まちとをなれば猶恋しき由也、松によせたり

1090 をぐろさきみつのこしまの

面白き所也、人ならはさそはんする物をと也

1091 みさふらひみかさとまうせ

宮木野は陰ふかき所にて露ふかき心也、みさふらひは侍臣也、宮城野は宮禁の心にてよめり、此卷にては名所勿論也

1092 もかみかはのほれはくたる

出羽名所也、昔は陸奥なりし也、水のはやき川にて、のほる舟の浪にさへられて船のかしらをふるやうなるを、いなといふに似たればかくいふ也、序哥也、恋哥也、いなにはあらず、此月とはいつにてもいかさま行すゑにはなといふ心也

1093 君をくきてあたし心を

こえかたき浪もこえむとちかふ心也、松山浪の事は

此哥よりはしまるにや云、或説云、以上七首は、

融公の家ちかの浦うつされし時、其名所くを詠也云、いかさまにも風俗にてうたふ哥なるへし

さかみ哥 哥とはふりといふに同*1

1094 ころきの磯立ならし

めさしは和布などを入る器也*1、又海人のをとめの事云、爰には用之、めさしをもつ故号するとも

いへり、哥の心はいやしき人のわさをも思ひやる心也、あはれむ性也、使民以時といへる心も通すへし

1095 つくはねのこのもかのも

明也、此方彼方也、木の陰しけき山也

1096 つくはねの嶺のもみち葉

木しけき山のさま也、落葉の名をしるもしらぬもみな愛する心也、裏云、君子の心は怨親平等成へき也*2

1097 かひかねをさやにもみしか

みてしかなの心也、かひかねの面白きをさやかにみむの心也、けれなく、心なく也、五音也、よこほ

りふせる、横り臥也、見御抄

1098 かひかねをねこし山こし

嶺をこし山を越と重たる也、人にもかもや、風を人にもあれかしことつてやらんと也、思人などのかたへことつてしたき心也、裏云、君恩のありかたき事を遠く告度由也、をのつからいたるへけれともはやくつけはやの心也

伊勢うた 是も東海道なれば東哥に入にや

1099 おふの浦にかたえさしおほひ

恋哥也、実なくともまつねてかたらはむ也、裏云、ねてかたらはむとは和する心也、其事成も不成も人には先可和也、和するに不和事ありとももの心也、又和光同塵の心も如此なるへしとそ

此廿卷は王道神道也、然而、恋旅眺望名所等表裏様

く也、其心一途ならず、是天真にして難測之理也
冬のかものまつりの哥 臨時祭哥也、宇多御門御時

はしめて被行し時敏行朝臣よめる也、臨時祭事、

宇多御門いまた王侍従と申時陽成、御宇、賀茂遊ましく

けるに神託の事あり、後に東宮に立給へり、奇瑞奇

特也、仍寛平元年十一月廿一日己酉日始臨時祭を行

はる、使は左近中将藤時平也、舞人十人東遊有き

1100 ちはやふるかもの社の

此哥を軸入事、王道之徳此奇瑞にすくへからさる

故也、又延喜御時の集なれば父御門の嘉瑞事を軸と

する也、此集の巻頭の如く軸の哥も又大道なるへ

し、安らかなる躰也、敏行名をあらはすも一段之義

也、此哥剩殊勝之作也云々、貫之所為又奇特也とそ、

万代ふとも、松によせて君徳をほめ奉る也

家々称証本之本、

難捨之心にて奥に書をかるゝ也、書入てけす事黄門

の心にあはさる故にや

1101 杣人は宮木ひくらし

杣人の声に山彦のこたふる心也

1102 かけりても何をか玉の

たとへよみかへりても何をかみんの心也

くれのをも 草の名也云々、未分別*1

1103 こし時と恋つゝをれは

いつも此夕来し人と待さま也

をきの井 都嶋 名所也

1104 をきのゐて身をやくよりも

都嶋辺のとよめれば、物名にかくれたる所なし、都

を別しと今又此嶋辺を立別るゝとのかなしき心也、

句を切て読と云々

そめとの あはた 左の注みゆ

1105 うきめをはよ所めとのみそ

雲の泡のことくなる也

1106 けふ人をこふる心は

切に恋しく思ふ心は大井川の水のたきりたるにもお

とらさるよし也

1107 わきもこ*2に逢坂山の

忍恋の心也

1108 犬上のとこの山なる

此哥の外には近江名とり川みえすと云々、万葉には
いさや河、いさら河とあり、あめのみかと、天智天

皇御事也

1109 山返ししなの音羽の滝の

此哥恋部あり、爰にては御返し返しの哥の心をあらは
さむために入たるにや

1110 我せ子か

前あり、御門を怨奉るとは允恭一御事也

1111 道しらは 無義

真名序は無宣下云々、故不必用之、然而又難捨にや、貞
応本被書入之、追可受之二

奥書(朱)
此集家々、本々不同之事也

且任師説又加了見 難計之故且任師説也、師説は基
俊俊成兩人説也、加了見とは春霞たゝるやいつこを

たてるやと改らる、僧聖宝正字をかゝるゝ等の事也

為備後学、七十歳斗にして書給へるにや

近代僻案、世ある本の事也、書損之事なくてかな

はぬ事也、いさ桜、ひとさかりをいとさかりと書た
るに付て種々説を設く事等也

但如此之用捨、此辞肝心也、古今一部之心也、和し
て不爭之性なるへし、此集の眼目之理一

志同者、若又世人志同者也

貞応二年、伝テ于嫡孫、伝為氏也、是為二条家支

証規模也、為氏は此年誕生也、祝言の心ありしにや、

但又嫡々に伝へし云の心にや

古今和歌集序以上六度歟 以宗祇本写之三

夫、發言の詞也、其事を云出さむと云心也

和哥、和は国也、此国の心也、哥とはことわざ也

託其根於心地 根とは根元也、心地とは心底、心の
はたへ也、云心は眼耳鼻舌身知所を心のはたへに

付る也、心地と云地によく本付へし、其根とは元來の無也、無は是さへて自性也、自性の源はあらはれず、これを物に託する所を哥とはいふ也

發其華於詞林 顯かたき自性の心をもあらはす也、是哥の大底を云也

人之在世不能無為思慮易遷哀樂相變 是は世間の人の様也、此五大をうくる物皆以其ことわさなきにあらざる物也、其ことわさとは二六時中のわさ也、枕をとり夢をみるもみなことわさ也、いたつらにあるといふもことわさ也、されは思慮うつりやすくして、たのしみかなしひ変して、人みな心をくるしめて安からず、安からねは又現当いたつら也、されは人のことわさ悪にひかるゝ所をさくるは此哥也、いかなるをかさくるといはゝ、哥人は心空虚にして念々相續する所なし、花をみて花を愛し、月にむかひては月をあはれむ、只当意即妙の外他所^{*1}なし、仍此道に住すれば世界の是非^{*2}をのかる、是のかるれば又

二世の安樂也

感生於志詠形於言 感とは心に興する事也、詠とは

はや思ふ事の詞にいへるを云也

是以逸者其声楽怨者其吟悲 逸とは無事なる儀又安

きをいふ、されは其声もたのしみのこゑある也、悲^{*3}

はうらむる也、うらみ有人は其吟にかなしみあり、

只心よりおこりて云所に其かなしみもあり、心は元

來はかれず、たゝ物にひかれてにこり行ならひなれ

は、心のたゝしからん事を思ふへし、されは哥をよ

む人も心のたゝしからむをもとゝし侍へきにこそ、

天地は心也、心たかへは天地たかふ也、されは哥の

風流^{*4}たかはゝ天地の風流たかふへし、天地たかはゝ

一切の人の為宜からし、其人は天下の神物たりとい

ふ詞をよくくまもるへし

可以述懷可以發憤 只此哥をもて思をもなくさめ、

いきとをりをもやすむへき也、されは只念々相續を

嫌ふ也

動天地感鬼神化人倫和夫婦莫宜於和歌 是は哥の徳

をあけて云也、事理の二有へし、事と云は能因か苗
代水こときの事也、理は又心は即天地なれば也、感
鬼神とは目にみえぬ所を云也、色に見えぬ所をもあ
らはす、是哥也、鬼神二には心うへからず、是又
心無事なれば鬼神やはらく心也、化人倫と云も心や
はらげば敵する人もなし、化とは昨日まではなひか
ぬ人もけふはしたかふ心也、されは万性^{*1}を治る道是
也、夫婦は云に及はず、皆以和哥の心によくなひき
したかふ、疑なし

和哥有六義一曰風、一曰假名序、書之、^{*2}又は若詩云歟

若夫春鶯之囀花中秋蟬、一是は此哥をよむ事人にかき
らすといふ事也、假名序には蛙と云、其は春來りて
始て其氣をしれば也、是は春^ニ對する義也、心は蛙^ニ
同し、志を述るを哥といふ也、自然之理也とは、つゝ
に春の鶯の春をしらむともせず、秋蟬の秋を待事も
なし、春來は花さき秋來は葉の落る、皆自然の理也、

されは哥人の心も自然の理に住すへし、他家には曲
折をもとめ、当流には自然をもとむる也、是大なるか
はり也、くれくれは是を守へきや哥人とはいふへから
む、鶯蟬の声を曲折とは見侍へからず、哥に曲あらむ
とするを嫌也、古人の哥に自然の理なる哥

ささの葉はみ山もそよにみたるめり我はいも思ふ別
きぬれば

山高み夕日かくれぬあさち原後みんためにしめゆは
ましを

然而神世七代時質人涼情欲無分和哥未作^{*3}、神代自

然^ニ時すなほに欲情なかりしかは、哥といふまてに
て、躰をわかち心をかさりて和哥をつくらぬと也

逮于素盞烏尊到出雲国始有三十一字之詠、神代の哥
はたゞ長短をわかす、いかほともつゞけ、なか／＼
といひもて行、又一句二句も哥とて侍り、是大道
也、すさのおのみことよりはや心みじかく世くたり
て、なかき心をしらぬ故より、此反哥おこれり、今

も長哥の奥に入事此故也、長哥¹(朱)の心を短哥にてあらはす也

其後雖天神之孫^{*1}海童之女莫不以和哥通情者也 天神

之孫^{*2}とは孫にはあらず、只子孫と云心也、彦火と出

見尊の御事也、天照太神より四代にあたり、わたつ

海の女とは豊玉姫の事也、此御ふたりにも哥侍り^{*3}

彦火と出見尊(朱) おきつ鳥かもつく嶋にわかいねしいもは忘しよのこ

とくくに

豊玉姫返し(朱) あか玉の光はありと人はいへと君かよそひしたふと

く有けり

是は只和朝に此道を用へき其ためにいへる也

爰及人代此風大興長哥短哥、此風とは惣の哥の事

也、神代の事はいつれもすたれたるといへとも、此

風は残りて大に興よし也、読之哥と云斗の儀也、長

短旋頭混本になるは大道すたれて仁義興之儀也、又

云、人の世には反哥をのみ用て、此四はいにしへ有

けると云義もあり、然而下文句不叶、た、神代に

はかく自然の儀斗なりしかともかくおこる儀也、下の高木巨海のたとへにて可知、寸苗の煙とは、すこしもえ出たるはほのかに、それともなきを煙とはいふ也、下文又同之

至難波津之什献天皇、とは王仁か太さゝきの御門に

奉し哥也

富緒川、達磨の聖徳太子に奉る哥事也

或事関神異或興入幽玄、如此事ひろく成しより神異

にもあつかりける也、神異とは奇特之事など也、興

入幽玄とは次第哥のうつくしくなり、色々に心の

いたらぬかたなく、ほのかなるやうの所なと有也、

神異にあつかるも世のくたれる也、されと又これも

上世の通なるへし^{*5}

但見上古哥、かやうにくたるといへとも、猶上古哥

はまことなる道を思ひて、耳に面白く目によるこふ^{*6}

やうにはあらざりき、た、教誡のはしとする也、教

誡のはしとは教いさむる道也、されは哥は和国の正

道なれば、理世撫民の嫌疑なき者也

古天子每良辰美景、古の天子と云に貫之かかけける所
さす所在之、是万葉の時分也、定家卿是を勘合て只
大底いへる也、文武天皇を下にふくむ心也、其儀口
伝有へし、良辰美景とは四時花月の折節也、仮名序
にはさかしをろかなりとしろしめしとかけり、それ
は君のしらせ給也、爰には君臣共にいへり、若賢な
らずはよき哥を奉るとも詮なし、臣かしこからずは
道ある哥をも奉らし、ともに大切なれば二をいふ也
所以隨民之欲扱士之才也 民とは当時云民にあら
ず、たゞ人の事也、心は、よめる所の心々をみて、
世のためにかしこくをろかならん人を思ひわきて、
其分々に人をもめしつかひ給へき故也

自大津皇子之初作詩賦

大津皇子とは天武第三、御

子也、此御時詩の道を好み給ひしかば、人皆其事を
ねかひ好むより哥の道すたれたる也、此国は神国
也、神代のことわざを捨たる事、世の零落也

然猶有先師柿本大夫者、先師とは、貫之は人丸の道

をつたへたる由をもて先師とはかけり、古今の間に
独歩するとは、いにしへより今にかたはらに人なし
といふ心也、いかはかりのきはといはむ事は筆端
及へからすとそ

有山辺赤人者、ならひにとあれはひとしきなるへ
し、然而人丸は勝けるとそ、此心は位正三位にて天
子の御師なれば也、おひては等同也

其
某余業和歌者綿々不絶 綿々とは、わたをひきの
るにたえざるをたとへたり

及彼時變澆漓人貴奢淫、彼時は大津皇子の時にて、
此御時詩賦を好み給へり、諸臣それに隨て哥を
そかにし、心さしのまことたかひて、才学以下、心

うつりて、うきたる詞えんなる泉わきて、実なる所
を失て花にのみなれるなるへし、されは好色の人は
是を花鳥の便とするといへり、花鳥の便とは花鳥を
愛する心のたよりとのみして、理世の心を忘る也、

乞食之客は只世をわたる中たちとして、撫民の道を
忘れたるなるへし、此たくひはされはたゝ婦人の右
として、人丸の前にはすゝみかたき也、^{※1}婦人の右、^{タスケ}
大夫之前、^{マウチキミ}長短不同、^{※2}長短は善悪の心也

近代存古風者纔二三人然、^{※3}二三人といへとも六人
也、是文筆のならひ也

花山僧正尤得哥躰然其詞花而実少、以前云所、其実

皆落其花孤榮といふは花を嫌ふ也、此僧正の哥も、

さこそは花なれと、以前云花にはあらず、是は又よ

きにこそ、去なから又少はあかぬ事有にや、定家卿

は此僧正をよしと思給けるとそ、此六人の程別記

する也、在原中将か云、かの字いつれも有へし、又

喜撰か哥に花麗とあるはうつくしき姿也、^{※4}又は大な

る躰也、停滞は首尾せぬ所あるよし也、猿丸大夫之

次也、^{※5}逸興とは花麗には不及、しかもよきになるへ

し、人を興かる様なといふかことき歎

此外氏性流聞者、^{※7}皆世にある哥人の事也、しかれ共

艶なる所をもとゝして実なる趣をしらぬ也、艶なる
所にも実侍らばあしかるましきにや

俗人争事栄利不用詠和哥、俗人とは世の人也、さか

へ利なる所にあらそふ事のみして、哥のまことある

所を用ぬ心也

悲哉々々雖貴兼相将、官位高くして、あるは君にち

かくつかへて政をなす宰相、又は世を刑罰する將軍

等之事也

富余金錢而、位は高からねとゆたかにとみたる人の

上也、心は、たゝ貴と富たると此ふたつもはかなき

物也、露命限あれば土中埋れ、むなしき昔の下に

なりては、骨はいまた朽はてぬまに、名は先消はて

ゝいひつたふる人なし、仍哥のみななき世には名を

残す物也と也

語近人耳、漢字をもちからず、和語にてよくそのこと

はりをしらす事也、是和するの道也

義慣神明、神明にかなふとはすなほなる儀也、すな

ほは直也、直なれば又和もしたかふ也

平城天子詔侍臣令撰万葉集 平城をはならの天子と

よむ也、就之其故侍へし、奈良^ニまします故の号也^{※1}

自爾以来時曆^{※1}十代数過百年、万葉集より此かたの事

也、時十代百年、又可尋之、すたるといへとも悉す

たるにはあらず、只花鳥風月のもてあそひとする斗

也、是を貫之すたれたりと書り

風流如野相公輕情如在納言、風流とはしわざ也、色

々かざるを云也、輕情とはうきやかにかにうつくしきや

う也、たとへはうすやうなとをみるか如し、此篁行

平は哥の上手なれば、其ふりをあけて、このことき

なる人世におほけれど、只此道をは次にして他才

心をかくる也、こゝを貫之嫌也、是和国の風にたか

ふをかなしむ故也、只此道にてあらはしたき心也

陛下^{アノノシノクシロシメス}御宇今九載 九年也

仁流秋津洲之外、皆以君の仁徳をほむる義也

渙變為瀨之声寂令閉口^{※2} 変化する人のうらみもなき

よし也

砂長為巖之頌、是は君の徳いたりて、小は大にな

り、浅きは深くなり、事のとゝのほりたる義也、是

も世以^テほむる心也、洋々とはつらなるよし也

思繼既絶之風、万葉以来たえたる道をあらはし、此

集撰^ト給事也、撰者、

少目^{スナイサクワシ}

家集 撰者家集又は古人の也

古来旧哥 いにしへよりの事也、ちかけれと無人を

は古人といふ也

続万葉集 うちきとて先集^ニ名をつくる也、かく

て猶部類して、くはしく撰^トて後に古今集と云り、

是皆代々集のならひ也

臣等詞少春花之艶、貫之卑下の詞也、なかきをぬす

めるとは、あやしの名はかりなかくてといふ也、然

者進退の二にはつる心也、時俗とは時の人也、中興

とは万葉をかみにして当時を中興といふ也^{※2}

人丸既没和哥不在斯哉　こゝにとは、うへには和哥

の事、当時の義也、下の心は貫之か我身也、文王既

没文不在于茲乎といふをもて書る詞也

延喜五年歲次乙丑四月十八日臣貫之等謹序^{*1}

初作詩賦　七言之志

天紙風筆画雲龍、山機雲杼織葉錦^云

奢淫　毛詩正義云、淫者過也

花鳥使　唐書云、天宝未有密採艷色者、當時号花鳥

使、故昌高猷美人賦以諷之^{品イ*4}

輕情　注文選云、高情也、文之風情、商謂之輕情^{*5}

文琳　文屋康秀之字也、刑部中判事縫殿助也^{*6}

統万葉　古今也^{*7}

聖人之魂曰神、賢人之魂曰鬼

難波津之什　王仁之哥也

富緒川之篇　文殊飢人^ト讀給^ル哥也、河内国イカル

カト云所、富緒川と云河ノ辺、飢人ノフシタルヲ太

子哀給哥、贈答二首拾遺ニアリ、太子ハ救世観音ニテ

イマス也、飢タルトハ法機ニウヘタル也

衣通姫事　日本記云、稚渟毛ニ流皇子九世也、允恭^{*8}

天皇八年春二月、藤原ニオマシノケテ、ヒツカニソ

トホリ姫ノフミヲ見給フ、此故ニ衣通姫ミカトヲ恋

奉^{ツテ}一人イタリ、御門ノミマスル事ヲシラス^テヨム

哥、我セコカクヘキ宵也

玉津嶋明神トアラハレ給事、彼所ヲ昔メテ給ユヘ也^{*9}

天神之孫事　彦火^ニ出見尊也、日本記云、ヒコホ、^{天神之御孫ニ当也}

テミノ尊ワタツミノムスメ豊玉姫ヲメトシ給テ、子

ウマントシ給時、豊玉姫ノ給^{ハク}、ヤツコ子ウマン^{*10}

時オミマシソ、尊シノフル事ナクシテ行テウカ、ヒ

給^フ、サカリニ子ウミ給時龍ニナリス、ハチテフ給^{ハク}

我ニハチミセサラマシカハ、海陸アヒカヨヒテ、ヘ

タ、リタユル事ナカラマシ、ステニハチミツ、イカニ^{*12}

シテカムツマシキ心ヲムスハムト云テ、草ヲモテミ

コヲツ、ミテ、海ノホトリニヲキテ、海ノミチヲトチ

テサリヌ、トキニ尊ヨミ給ヘル哥

オキツ鳥カモツクシマニワカイネシイモハワスレシ

ヨノコトノニ

カモツクトハ船ツクト云心也、イネシハ万ニハ卒宿

ト書リ^{*1}

海童之女事 豊玉姫也、日本記云、トヨ玉姫ノミコ

トキラノシキ事ヲキハテ、アハレト思テ、又カヘ

リテヤシナハント思ヘト、ヨカラシトオホシテ、弟

玉依姫^ヲヤリテヤシナハセ給トキニ、^{*2}豊玉姫ノミコ

ト玉ヨリヒメニヨセテ、ヨミ給ヘル報哥、オキツト

リノ哥ノ返哥也

アカタマノヒカリハアリト人ハイヘト君カヨソヒシ

タフトクアリケリ

アカ玉ハ子也、子ヲ玉ニ喩ル也、イロトハ弟也

日本記^{ニハ}此贈答二首^{ハ号シテ}曰拳哥ト、コノミコト人ト

成テヲハ玉依姫ヲ為妃ト、^{*3}此ミコハ神武天皇ノ父彦

波瀲武鸕鷀草葺不合尊也、此ミコウミ給^ヲヤニウノ羽

ヲフケリ、此ヨリ産所ヲウフヤト云也 ※1

存分無相違者也

文明十四曆三月日

宗祇判

同十九未夏之上中下之間重聞此集訖加筆早

夢庵判

延徳式^{庚戌}年三月又聞序十廿卷訖

文龜三^{癸亥}仲春仲旬以祇公聞書^{素伝}粗書加之

源頼則伝授之時也

全部四十三ヶ度伝授之

哥数千百一首

此冊依竹田治房懇望所許書

写也必可禁外見者乎

天文十五年二月八日

宗訊(花押)

(補一)

京都大学 附属図書館 蔵「古聞序」 院中 VI.69

文明十三^{*1}

九月廿六日 (以上朱)

やまとうたは人の心をたねとしてよろつこのことはとそなれりける

此一段和哥の大意也

和¹此国の名也、哥は此国の風也、此国をやまとうと名

つくる義、伊奘諾伊奘冉国土山海草木人倫等を生出

給し後、猶此国あらひて水土未乾しかは、人は山にの

み住て山を道とする事あり、故²山の迹といふ心にて

号する也、やま³あとのあ文字を略したる也、まの字⁴

あのひ⁵きあり、をのつからこもるへし、又山止とも

書り、山にと⁶まる心也、山迹の義通すへし、又云、

山は至誠の義也、志の厚く高きを一切成就之根元と

す、哥は志のゆく所をのふる也、よろつこのことわざの

根元也、^{*3}二神の御哥是也、又云、やまと哥といふに大

に和く義あり、大¹小²対する大にはあらず、又三国に

およふ大也、其故は天竺の梵字漢字³うつり、漢字の

心を和字にてのふる也、和字の哥をもて、陀羅尼の心

漢字の詩をもしる也、和字は今四十七字⁴過ぎざれとも、

其心をのへしる事此道の奥意也、^{*5}古より今¹及和也、神代の和

又云、自古及今之和を大と称す、遠く及ふ心也、^{*6}二

神陰陽和⁷始として尽乾坤⁸。一切万物⁹及ふ和也、和哥

是也、やまとの説、山迹の義を本とす、大和の義も通

すへし、并用事当流説也

人の心をたねとして、詩¹言かことし、在心為志²

云、心にあるとは心に動也、世界に弥³淪したる事心^{*10}

にうこく也、世界と我身と我身と相対す、世界の事を

心にうこかすなれば、哥は世界にある理也、たとへは、
寒温を身にうくるかことく也、心にうこく所を言にい
へるを哥といふ也、又云、天地陰陽のの起る処は一切万物一氣起て如葦芽
之根元也(ミセケチ)*2といへる所也、天神七代以前を云り、一切万物之根元
也、これをさして、人の心をたねとすといふ也、*3二神
陰陽之和をおこなひしよりの心也、又根本最初の一念
より哥も出来也、されは元始より今日にいたり、又終
劫にいたるへき也、是人の心也、よろつこのことのはと
そ、物*5に託してなる心也

世中にある人、いひ出せる也 一段也

真名序に、人之在世不能無為思慮易遷、云、此心
也、無為とは大道の処也、人の世となりて、味をな
め、黑白分別あるより、君臣父子朋友の道まで、等(ミセケチ)*6こと
わさならずといふ事なし、君二つかへ民をめぐみなと(ミセケチ)*7行住坐臥みなことわさ也、
ことわさあれば心に思ふ事あり、思ふ事あるによて、
見聞につけていひ出す也、*8是大道廢て仁義興之理也
花になく鶯水にすむ蛙の、よまさりける 一段也

一切に託して、哥を詠する事、人のみにあらず、花中
の鶯、水底の蛙も如此之理也、詩正義曰、哀樂之起、
宜於自然、喜怒哀之端非由人事、故燕雀表啁噍之感、鸞
鳳在哥舞之客容*9云、此心也
喜怒哀樂の性ある物は悉如此、応天地之氣故春花鶯鳴
春水蛙声するも自然の理也、鶯蛙は春来て先感其時之
類也、一切の禽獸も如此なるへし、又花も水も詠哥の
理ありと云へし、花の心は色に出、水の心はこゑにあ
らるゝ也、鶯蛙をとり分て云出す事は、春色をえて
其心をしる事、此二をさきとする故也

ちからをもいれずして、なくさむるは哥也

一段也、此段は哥の徳也、此心に事理の両義あり、天
地をうこかすといへる、能因法し、*11苗代にせきくたせ
とよみて、雨のくたりし事などは事の義也、天地1対
してあり、地、天よてあり、人は天地対す、同根の
理なり、天地、我を開き、我、天地をひらく、天地人の
三は別にあらず、故心に動く処、すなはち天地をう

こかす也、一首の哥を詠るも、天地を胸中うこかす也、是理之義也

めにみえぬ鬼神をも、)

鬼神とは賢聖のたましる也、惣ては人々のたましる

也、神は心也、それをあはれと思はする也、哥を詠するに心の感動する、すなはち鬼神をあはれと思はする

也、此道入て、邪をすて正に帰し、仁をもつはらと

する所をさへへて、思神を哀と思はすると云也、是理

の義也、又天照御神住吉玉津嶋等の擁護ある道なれ

は、感応あるへき事勿論也、両神日神の化現也、又諸

神も心の外に出へからず、畢竟一心之上をはなるへか

らず、伊賀国鬼の人を損する事ありし時、土も木も

わか夫君の国なれはいつくか鬼のすみかなるへき、と

よみて、其事やみたと云事もあり

おとこをんなの中をも、)

此理勿論也、其ためし不可勝計、たけきものふの心

をも、)

たけきものふの心をも、)

かつらぎの王のいかりを、うねめの一首にてやはらけ

たるなど此理也、是事也、ものふとは兵革を帯する

ものにかきらす、心の強情なるをいへり、和哥は胸中

のものふをやはらくる也、笑裏蔵力といふ類、みな

心のものふなるへし

以上哥の徳也

この哥あめつちのひらけ、)いてぎにけり 一段也

天地開闢より二神之和よりはしまる事也、其哥末注

す

あまのうきはしのしたにて、)

天浮橋、道の通する処をいへり、此古注つきて説く

あり、二条家ニハ貫之注之と用る也、貫之巨細を注し

てくはしくいはん為也、女の内侍あたへたと云、

これにつきて六義注、山桜あくまで色をみつる哉の

哥、時代相違するといふ説あり、此哥平兼盛か哥也、

後撰、貫之は承平までありし人也、此時兼盛若年なる

へけれとも、道ニかなふ哥なる故に用之也云、又云、

山桜の哥は清慎公之詠也と云説あり、但兼盛哥也、清

慎公の家にて兼盛よめる也、続古今ニみゆ、古注は公

任卿筆云、此事実なるにや、但、二条家のをしへは

貫之を別て仰くゆへに、公任の書加といふ事をはカか

りて、貫之注すと用也、為家卿明疑抄ニ、貫之古注也、

山桜哥兼盛云、此分に用來なるへし、此注を古注と

号する事、是よりさきには古今注なかりし故にや云、

又小注ともいへり、

め神をかみと、

二神はしめてよみまします哥也

意哉遇ニ可美少男ニ焉云、陽神先唱曰、意哉遇ニ可美

少女ニ焉云、日本紀ニ朱ニ *2

しかあれとも世につたはる、おこりける 一段也

しかはあれとは、二神の御哥はあれとも大道にして

人の心及かたければ、下てる姫の哥をのせたる也、

したてる姫の哥、あもなるやをと織女のうなかせる玉

のみすまるのあなたたまはやみだにふたわたらすあちす

きたかひこね日本紀ニ朱ニ *3

天にしてはといひて下照姫の哥を出す心は、これより

さきに二神の哥ありといへとも、大道ニして其心おほ

つかなき故に、神代の事なれとも、すこしちかきをも

て下照の哥を出也

したてるひめとはスヘミヤコ *5

天照御神の皇孫を下して此国の主とせんとて、天稚彦

を使として下し給しに、下照姫と契をなして天ニ帰給

はす、つゐに矢にあたりてうせ給ぬ、其後下照姫と味

相高ヒコネと兄弟也夫婦となりて *6、あめわかみこの喪の時、天ニの

ほりての哥也、味相ニのかたちをほめ給ふ也、天ニ

稚ニ下照ニ味相ニみな素戔嗚ノ御孫大己貴尊御 *7

子也

をかたにニうつりて、

そのかたち丘谷にうつりてかニやく也、丘谷にとは高

下也、陰陽也、谷は陰、丘は陽也、みめかたちのよき

心也

えひす哥

夷曲也、日神の天の宮に対すれば、^{*1}此界はえひすとよ

める也、天上にての哥なれとも、地祇神なれば夷曲と

なつてたり、ひなうたと云心也

これらはもしのかすも定まらず、¹

下照姫の哥も猶以文字も不定、哥のやうにもなしと也

あらかねのつちにしては、¹

地祇神の哥のはしめをいふ、八雲たつの哥事也

ちはやふる神世には、^{*1}一もしはよみける、すなほにし

て

神世に文字のさたまらぬ事、古注にみえたりといへと

も、重説にはあらず、注、後に書る故也

人の世となりて、¹

人の世となりてと書てすさのをのみことといへるは、

素戔嗚尊の卅一字の詠をはしめとして、人の世の哥は

これにもとつくと云心也、¹又人の世の哥此集一部を云

へしと云、¹八雲たつの哥よりさきにも卅一字の哥あ

りし、と云説あり、但不分明にや

すさのをのみこと、¹

二女三男にてすさのをは弟にてまませとも、男を上

とし女を次とする義也、系図にも女を後にする也

又云素戔嗚尊つゝに天照御神にしたかひ給て後、^{御神も(ミセケチ)*2}素盞

ノ日神ヲ思給ふ心、兄のことくおほしめしける心也

云、

女とすみ給はんとて

此国をたいらけて後、出雲国にして稲田姫と住給はん

とて宮つくりし給へる也、此国に鎮座ありし時をいへ

り

時にその所に八色の

此時瑞雲のたつを御覽しての詠也、¹出雲国とは、此雲

のいつもたつ故に号する也、いつも雲の立にては、時

にその所にとあるに相違せるやう也、此雲は元来此国

に立たる也、されは世のことわざに出雲と号たり、素

浅烏尊の此処に住給はんとする時も、又此瑞雲のたちけるなるへし、其人感して瑞雲のたつことあるならひ也

八雲たついつもやへかきつまこめにやへかきつくるそのやへかきを

やくもたつ出雲やへかきとは、此処のさまを大やうにいひいたす也、重詞也、郭公なくや五月などのことし、つまこめは稲田姫をすへんために宮を經營の心也、やへかきつくる、ねんころにする心也、重詞なり、そのやへかきをとよめるは、ねんころにいへる心也、をろそかにすなとをしへたるやうなる心あり、八色の雲は八識にたとふる也、五句は五行也、八識五行成就したるは、世を興隆する義也、出雲国蛇の人を損する事ありて、人も住かたかりしをみことたいらけ給て、人民やすき事をえたり、八識五行相具するは、一身をととのふる心也、八雲たつの哥に清濁の口伝あり、いつもやへかきをはすみてよむ也、下のやへかき二をはに

こりてよむ也、すめるは上て天となり、濁は地となる理也、素戔嗚尊は地神なりといへとも、日神の御弟なれば、天地かけたる神にてまします也、此国配し奉給也、日神と和し給て後の事なれば、よろこひの哥なるへし、卅一字を用るも此義也、此哥に風脉の切替ありと云、又神道口伝アリ、此哥斗を出す事は神世の哥、分かたき故也、日本紀の説、此哥に四妙をたてたり、字妙、句妙、意妙、始終妙、是也、字妙とは三十一字にして、末代までの根元となる妙也、句妙は神代の哥ながら五句にして五行かなへる也、意妙は上古の哥といへとも其心もあきらかなる也、始終妙は此哥を始として万代不窮に不可断絶之義也、かくてそ花をめて、なりける一段也、すさのをのみことの卅一字詠より、哥道万端さまになれるよし也、又は天地開しよりをいふと云、鳥をうらやむとは愛したる心也、霞をあはれひ興したる也

露をかなしふ、感したる也、露はことにあはれなる物

也、人の心のさま／＼なる情也

とをき所も、なるへし、一段也、ちりいんちとよむ

也

千里の行も足下よりはしまり、高山も微塵よりおこる

心也、塵土也、塵も土也、ちりは六塵之義也、一氣を

うけて人身となる心あり、二神より人世にいたりて哥

の道ひろまれる心也、最初よりおこるよしをいへり

なにはつの哥は、さくやこの花の哥の事也

御門のおほんはしめ也、仁徳の御代のはしめの事也、

王道のたすけとなる徳みえたり

おほさゝきの御門の

仁徳の御事也、さゝきとは小鳥の名也、此御門御たけ

ちいさくおはしましけるにや云

東宮をたかひにゆつりて

応神天皇宇治のわかいつらこと申みこに御世をゆつり

給けるに、仁徳、兄にてまし／＼ければ、それをそ

りて宇治のみこ辞し給、仁徳は又御ゆつりにあらねは

辞し給て、三年まで位につき給はず、国のさゝけ物も

くちうせて民のうれへたり、こゝに宇治みこ神変をも

てかくれ給ぬ、其後仁徳猶即位なかりき、時に王仁と

いふ高麗人、仁徳をいさめたてまつる哥也、王仁、日

本の文道の師のためにわたれり、応神御時来朝せしに

や、仁徳の御師たるへき歟、異国の入哥をもていさめ

申事殊勝之理也、此国にしたかひたる心也、此国に来

りときたるもの国の風にしたかふ儀也、かた岡山の詞

も此類なるへし

いふかり思て、心もとなく思ふ也、かくてはいがな

との心なるへし

この花は

此花也、木の花といふ説あり、異説なり、明疑抄にも

此説あり、如何、此時哥云、なにはつに、なには

とは一切の事也、津はあつまる処也、仁徳、万民のあ

つまる処をしらしめすへきよし也、なにはつにさくや

此花とは、まつ大やうに云出す句也、此時のさま也、冬こもりとは、仁徳の難波にこもりす心也、又今は春へと、冬去は春の主となる理也、宇治宮のさり給へれば、仁徳の世をしり給ふへき心也、梅花によそへて、仁徳をたもち給て民の心のきさしをふくむをめぐみ給へと也

あさか山のごとは、よみてよんでとよむへしかつらきのおほきみを、

陸奥に国司ありけれど、猶おたやかならぬゆへに、かさねておほきみをくたされけるに、国司をろそかにありければ、王のすさまじかりける時、うねめのかはらけとり銚子水を入れて、おほきみのひさをたきて、此哥をよみてなためける也、万葉のこと書にみえたり、あさか山かけさへ、此哥をよみける也、陰さへみゆるとは、高山の陰もうつる心也、深水也、あさか山の山井は深き水也、よろつの木の陰うつりてうちみるには、あさくみゆるやう也、そのことく国司の心も君を

をろそかには思はねとも、何となく都遠きさかひのならひなれば、自然にさもなき、となためたる心也

此哥を嘉禄^{冷泉家}本二ハこゝに云入たり、貞応^{二条}本二

ハ無之、あさか山の哥を書たる心は、難波津の哥は六

義の処にみえたり、此哥あらはれざる故に書入也、二

条家之心は、難波津の哥は六義の哥に出たり、此二哥

をはいつれもあらはさず、世人あまねくしれる故也、

あさか山のはかりを書入事如何と也、難波津の哥、六

義に出せるをこゝに用ん事無其理、此哥嘉禄本に

もはしめは無之、為相卿被書加と、或定家卿書入

給、又は彼筆ヲ似セタリト云

このふた哥は、

哥の父母とさたまれる事ならねは、やうにてと書り、

昔は手ならひなどにも此二哥を書てならはせけるとみ

ゆ、徳ある哥をもて此二首を出せり、難波津哥は仁徳

猶未即位天下難義なりし時、此哥にて王道をたすけたる、尤大徳なれば是を出なり、あさか山の哥も此一首

にて、心を和たる徳あり、¹兩首徳の至りたる哥也、¹兩首男女の詠也、父母にあたる理あり、又云、¹父母の子を思心に相当す、父の子を思ふ心は尤深し、其子の身をたて家を保へき事を思也、母は子を思ふ事不深之理あり、時にあたりて思心はふかけれども、甚深の理に及はず、仍王仁の哥は天下のためとなる、采女のはかりのいかりをやはらく、¹是も一国の事には其徳ありき、¹人の心を種としてと云より、次第道ひろく徳のいたる事をいへる也

*1
廿七日(巻)

そも、哥のさま六也、からの哥にもかくそあるへき

六義をいたして毛詩を類にひける也、毛詩を借ていふにはあらず、天然日本に六義の理あるよし也、是義勢也

そのむくさのひとつにはそへうた

一云風也、風也教也、風以動之、教以化之、²詩序曰、上以風化、下以風刺上、²注云、風化風刺皆謂

譬諭不付言也、³譬諭とは諷する事をあらはにいはぬ心也、そへ哥はおもてにあらはれぬ也、風は物にふれされは見えざるかごとく、物にそへて風化風刺の道をよめる也、風化風刺共、風に草木のなひくたとへあり

神武紀 能以諷歌 倒語 掃蕩妖 件本此詞押昏也

おほさよきのみかたとをそへたてまつれる哥

*5
此哥は下より上をいさめ奉るなれば、風刺の義なるへし、此哥によりて仁徳世をたもち給、万民安事となる、是王仁之徳也、此難波津の哥、風の哥によく当り、

故注にも子細なきなるへし

なにはつにさくやこの花 前に注せり

ふたつにはかそへうた

*6
賦也、量也、称也、しきのふる政のよきとあしきとをたうちにかそへいふ也、たとへいふにあらず、称とははからひかまふる心也、とちむる心也、又草木禽獸

*7
の事をかそへいふ事もあり、⁸金殿当頭紫閣重、⁸此

詩なと賦の躰也云

さく花に思つく身の 花と我身とをかそへあけたる也
身にいたつきのいるもしらすて

いたましき事の身にいるをもしらすと也、花に貪して
時日をうつして、身にいたつかはしき事のあるを、亡
したるをかへり見たる心也、^{*1}又花に限へからず、はか
らひかまへたる心也、称の心也、此哥事をすくめにい
ふ也

これはたゞ事にいひて物にたとへなともせぬ物也

此注の詞はかそへ哥のやうを注せり

このうたいかにいへるにかあらん、その心えかたし

さく花の哥、賦十分あたらぬ歎のよし也、注者の心
はかりかたし、さく花の哥も賦にあたるとみえたりと

いつにたゞことうたといへるなん、

雅にいたせる、いつはりのなき世なりせはの哥、此賦
にかなふへしと也、此哥人の事我か心をいへる、^{*3}又人

のことはのいつはりをかそへ云。也、^{思ふ(ミセケチ)*4}是量字の心也、

いかはかり人のことのはうれしからましといへるも、

^{*5}こちむるはかる心、すなはち称の字の理也、此兩首を

相ならふるに、哥のさまにおひては、花の哥はにほひ
ありて、偽の哥よりはまさるへしとそ、¹又つくみとい

ふ鳥をたち入てよめりともいへり

みつにはなすらへうた

比也、類を取て失を言、似有所懼云也、あやまりを

さしていはすして比類をとりていふ也、是なすらへ哥

也、方也、并也、類也

君にけさあしたの霜の

比のをもむきさまくなるへし、此哥は取類言失には

あらず、なすらふる心は相当へし、霜のをくと起ると

をなすらへ、消ると云も相兼たり

これは物にもなすらへてそれかやうになんあるとやうに

いふ也

比の注也、なすらへてと声をにこりて、君にけさの哥

の注也と用る説あり、如何、此哥は取類言失といふ心
にかなはぬゆへに此義をいへるにや、不用之、此注は
比の心を注せる也、其故はそれかやうにあるといふ也
と云、是比の心也、さるにとりて物にもなすらへて
とある、もの字不審あるやう也、これは前の賦の哥の
注の詞に、物にたとへなともせぬ物也、とかきたるを
うけて、物にもなすらふるよしを書る也、これはとあ
る詞五段あり、同賦比興等の注也

この哥よくかなへりともみえず
たらちめのおやのかふこの

たらちめのおやとはかふこといはんため也、皆序のや
う也、まゆにこもりたるこのさまは、中のゆかしく心
もとなき心あり、そのことくいもにあはすして、心の
中のおほつ^{*1}かなかく心もとなきよし也、又養在深窓など
いへる時の人にたとふる也、類を取によくあたれり、
君にけさの哥も比にはあたれり云
よつにはたとへうた

興也、ほむへき事をあらはにいはずして、たとへをと
りていふ也、嫌^{ウツカハシ}於媚諛^ニ也と云、人を直^ニほむるは、
へつらへるにたたる事をはかる心也、比はあらは
に、興はかくると云、興は風にいたり、然而風は風
化^{*2}風刺をもつはらとす、興は其心なし、又興にも政を
ほめそしる心もあるへけれども、まつおもてにたてた
る所如此

わか恋はよむともつきし、
此哥たとへたる心はあたれり、興に乗する躰はなきに
や、興にあたらすと云

これはよろつの草木鳥獸につけて心をみする也
興の注也
此哥はかくれたる所なんなき
興はかくるゝ所あり、然而此哥無隠処と也
されとはしめのそへ哥と、
我恋の哥を出たる心の注也、風と興との差別大事なる
によて、さまをかへて我恋の哥をのせたりと也

すこしさまをかへたるなるへし

すこしといへるは、此我恋はの哥もあたれり、猶未十分之心也

すまのあまの塩やく煙

風をいたみとは風ふかれてなひくさま也、我思ふ人の外へなるさまをたとへたり、あらはになきはかくれたる心也、そへ哥よりは又あらはに心えらるゝ哥也、よ

くかなへるにやと云、杜子美作ニ、風驟動依將木、春鷗懶避船、杜陵か身上の喩也、又興あり(以上ミセケチ)

興は風景に乗する心あり、此哥其興あり。

風は外物ニ託す、比、比類を取、興も託外物也、故難

弁、然而風は至て深き心也、興は風よりは浅し、比よりは興はかくるゝ也、此差別猶可思惟云

いつゝにはたゝこと哥

雅、正也、素也、正はたゝしき也、政をたたくいふ

也、素はあきらかなる也、淳素の心もあり、賦と雅と相似たり、賦は政の心にある事をかそへいふ也、雅は政の正しきをいふ心ならねは不相当也、六義いつれも

政の為也

いつはりのなき世なりせば、雅に此哥あたらずと云

これは事のとのほり、雅の心を注する詞也

とめ哥とやいふへからん

正にあらぬよし也、文字などを認たることきの心也、

まことはそれにあらぬよし也、異説あり、不用之

山桜あくまで色を

雅の哥の正中也、此哥作者事前ニ注す、貫之承平御宇

までありて兼盛か哥を注すと用也、此詞本押帟也

むつにはいはひうた

頌は誦也、容也、誦、うたひあぐる也、王者の徳をひ

ろめてほむる也、容は盛徳をかたとりてあらはす也、

頌の詩は宗廟にて誦しあくる也、哥は(ミセケチ)*3世をほめて神につ

くると云

このとはむへもとみけり

さきくさは檜木の異名也、又云、家の惣名と云説あ

り、三は四とは棟などのおほきさま也、さきくさと

いふ縁にて三は四はとよめり

これは世をほめて、頌の心を注せり

詩正義曰、美盛徳之容貞、以其盛徳告神也、云

かすか野に若菜つみつゝ

此哥よく相当也、又此殿はの哥も頌にはかなふへし、

祝心つよきあひた、神に告る心もをのつからあるへ

し、此かすか野にの哥は頌の心勿論也

^{*1}これらやすこし、注者の卑下用心也

おほよそむくさにわかれん事はえあるましき事になん

いつれの哥も六義にはなるへからすといふ心也、当流

用此義、又説、六義によく分別する事はえあるましき

と也、此義は貫之か六義に分事をかくいはん事は、か

りあり、仍不用之、此詞は注者の卑下なるへし、小注

を貫之作と用る心は、ひとへに貫之を仰きたとふる義

也、本の六義も貫之かあやまりたるにはあるへから

す、聖人作して賢人述すといふかことく、大躰を出す

のみなるへし、しかるをもし後人の注^{*2}相当する哥を

しるさは、貫之か心にもそむくへからざる理也、政の

正しきをほむる心よくあたれり

^{*3}六義之中風雅頌、政の名也、君化下者名政臣述之、於

詩則名風雅頌、取政之名為詩之目、而事積漸クスル

コトアリ、教化ノ道ハ必ス先風動^テ後^ニ物ノ情ステニ

サトリテ教化ト、ノホリタ、シクシテ其後ニ徳ヨク物

ヲイレテ功成也、故風動ノ初ヲ云ハ名之風、齊正之

時ヲサセハ名之雅、成功之後ヲイサナヘハ名之頌^云

六義いつれも政のためならずといふことなし、哥の道

上古は教誡の端たり、花鳥風月の耳目におつるのみに

はあらず、世を治め身をたつへき道也、六義は品をわ

かち法度を定る義也、是殊勝之理也、風雅頌之中特

雅一を執する事あり、正しき道を本とする故也、周詩

の思无邪に同じ、此義肝心なるへし、当流説也

^詩六義次第をたつる事あり、和哥に異なり

詩六義説別聞之、可通用之事在之、可看也

いまの世中色につき、なりたり

なりんたりとよむ也、^{*1}まめなる、ほに

此段の詞は古の事をいはんために、いまの世の事をいふ也、¹哥の道は此国の風俗として代々にたえず、殊に持統文武の御時、人丸合躰として此道盛なりしより以来、用きたれるやうは、今の世のことくならずといふ心也、今の世は色につき花にのみ成て世をおさめ身をたつる道には用ざるよし也、巧言令色鮮矣仁の心也、当代は古の道をおこし給といふ心あるへし

あたなる哥 とは実ならぬ也

はかなき事のみいてくれは 思慮もなき心也、しかれ

は哥もはかなき也

色このみの家に埋木の人しれぬこととなりて

埋木は人しれぬといはん為也、好色の家には、為教誠之端事をしらぬ事となると也

まめなる所には、

実なる人も又実のみにて花なる事なしと也、是も人の失也、^{*2}花すゝきはほにいたすへきといはむため也、¹実

のみにて和せざるをいへり、花実いづれもかけては政

によるしからず、質勝文則野^云、といふかことし、

¹又説、まめなる所には、¹実なる人あれども、此時は

いひても用にたちかたき心にて、巻て懐にする義也、

^{*3}又了見あるへき歟

そのはしめを思へは、¹奉らしめ給ふ

¹上古以来此道を用給ふ、むかしの代々御門は今の世の

ことくはなかりしと也、¹又古の御門といふうちに、当

時延喜の御時のさまをこめたる心あり、今の御代は又^{*4}

むかしのことくと也

¹又かゝるへくなんあらぬ、と句をよみきるともいへり

云

秋の月の夜ことに、殊に也、当流用之、但をき字のや

うに心うへし、読やう^云故実ありと^云、毎夜と用る説

ありと^云、不用之

あるは花をそふとて、¹しろしめしけん

哥をたてまつる人々のさまをいへり、よろつさしむき

たる心なるをよしとすへし、諸人又かくのことくなるへし、花をそふとはたつぬる心也、世くたりては(ミセケチ)君臣の道作意なとをもて、賢愚邪正を分別あるよし也、花をたつぬるとても思よらぬ処を思ひり、月を賞するにも明石さらしなの外をとのみ思よれるは、よこ入たる性なり、道の心になはず、哥をよまんにも此理あるへし、これをもて人の賢愚をしらしめすと也、をよそ君につかふる人は私をかへりみざるを道とす、しかるに花月を愛するさまにも身軀を亡する事あしき事也、もろこしにも国々より学士のほりて詩賦を作て試る事あり、かくて官職にあつかるならひ也、哥人の心は情欲を放て執をとめず、花月*4に対しても当一念の景を愛すへき也

しかあるのみにあらず、なくさめけるしかあるのみにあらずとは、君の臣に哥を奉らしめ給ふのみならず、臣も又かくのことしと也、物々にこと心の心をわきまへしるよし也、つくは山、は文字の声清

てよむ也、此処にかきると云

さゝれ石にたとへつくは山にかけて

以下みな此集の哥に此心あり、必其哥の事をいふには

あらず

君をねかひとは千年万代をねかふ心也*5

たのしひ、たのしみとよむ也

よろこひ身にすぎ、君の千とせをねかふ徳にて、悦身

にあまる理あり*6

ふしの煙によそへて、

恋の心也、人をこふるには、をよひなき高山にかそへ

てもこふる事をいへり

松むしのねに、

富士の煙に松むしのねは大小を対していへり、友をし

のふ心には松むしのたえなるねにも思をそふる

也、あれたる宿などのさま也

高砂すみの江の松も、

山海の名所を対したり、あひをひとは相逐さま也、た

かひにをひすかひなるやうにおほゆる也、¹哥人の心を
いへり、名木なる松を愛する心なり、物によせて思を
のふるよし也

おとこ山のむかしを、

¹男山の女郎花墓上より生るなど云説あり、¹嫌道也、¹我
もむかしはとよみ、あなこと¹しなどの哥をもて書
り、但自面は哥によらず、¹男山のむかしを思とは、男
は人也、昔を思出れは何事も昨日の夢になりはてぬ、
此理を思ふ也、¹女郎花の一時をくねるとは、をみなへ
しを弄したる心也、あなかしがまし花も一時とよめる
も、弄したる心也、くねるとは違心あり、弄するもた
かふ心也、¹花も一時の事にてこそあれと思ふ事をくね
るといへり、¹心はおとこ山と女郎とは文章の句也、¹男
女の心也、¹むかしを思出てとは、夫婦のかたらひも一
時のさかり過ぬれはむかしとなりぬれは、²いたつらな
るよしを觀し思ふ心也、¹古哥をもひき新哥をもよみて
此理をなくさむる也、是哥人の徳なるへし

哥をいひてぞ、

古哥を吟し新哥を詠して万の事をなくさむるよし也、
上にいへる条々も、みな哥人のなくさむさま也

³廿九日 廿八日無之(朱)

又春のあしたに、

又といふ詞は上にしかあるのみにあらず、さくれ石に
たとへたとあるに對して也、世のごとわさを巨細にい
へり、花のちるを見といふより、吉野川をひきてとあ
るまでは、みな此集の中の哥をもてかけり、しかも序
の自面は哥の心によらざる也、¹心は、飛花落葉をみて
は誰か常住の思をなさんと觀する心也
としことに鏡のかけに、
花やかなりしかたちもおとろへ行は、たのむべき方な
き身を觀する也
草の露水の、⁴きえをまつ間の程なき事をよそへ思也
あるは昨日はさかへを⁴こりて時をうしなひ世に⁵わひした
しかりしもうとく成

盛者必衰の理を思には、したしかりしかうとくなくなるを
も必歎へきにもあらぬ心也

あるは松山の、此世後世と契れる中も、はやくうつろ

ひはつる事を思也

野中の水をくみ、うとかりし人の、又むつましくなる^{*1}

事も世間のならひ也、もとの心をしる人そくむの心

也、世の中のさまなり

秋萩の下はを、うつろふ草はにつけてひとりある人の

物思あるなどを、さこそと思やりてあはれをかくる心

也

暁のしきの、こぬ夜のかすのつもりゆくも、只我から

の事と思て、人をうらむへき世もなき心也

くれ竹のうきふしを、世のうきふしをしる人などにか

たりて、思をのふる心也

よしの川をひきて、

はねをならへ枝をかはす契といふも、みなおとろふる

はてを、よしや世中とうらみすて、なくさみきつる心^{（ミセケチ）}

^{*2}

也、うらみきつるといふもなくさめきつる心也

恨るもなくさむる心也

いまはふしの山も、

たすとは不断也、つくるとは作也、当流説

富士煙むかしは人の思ある時はたち、思のなき時は不

立也、いまは其煙の不断、あれは思にくらへんさまな

らすと也、人の思は不断なる事ならねは也、されはな

くさめかたきよし也、思の支証になりかたき心也^{*3}

なからの橋も、

作也、古ぬる橋もいまは又作るなれば、ふりぬる身の

たとへにもならぬ心也、¹誹諧部にては尽也、先注了

哥にのみそ

いつれも思をなくさめかたき故に哥をもて心をなくさ

むるよし也、吟古哥詠新哥なるへし、¹哥はさらになき

物を胸中、²作出す物なれば、よろつの思をなくさむる

便也、¹前に恨きつるとはなくさめぬる也、しかれとも

煙不断、橋も作故に、世中の思なくさめかたきには哥

をいひてなくさむると也、¹不立不断両説、二条冷泉家各別也、冷泉ニハ不立を用、煙不立は思をなくさめかたき心也、橋作之義は冷家も同にや、¹富士煙のたえたとよめる哥はみえざるにや、万葉にも絶たる哥はなしと云、¹不立不断の事つきて口伝等あり

¹一説当流の義、上詞恨きつるとはうらむる心也、煙不断なるとは、彼山の煙の面白き興あり、なからの橋の古ぬと思しも、又作るなれはうらみきつる心も今はなくさむへき也、¹おもしろき説也と云、¹哥にのみそといへるも煙橋を翫ふ心也。

いにしへよりかくつたはるうちにもならの御時よりそ¹文武天皇云、京極黄門註也、¹ならの御門の事古来難義とす、¹或は平城天皇と云、¹醍醐まで十代と勘るよる説なるへし、¹顯昭等用此説とみゆ、¹真名序平城天子とあるをは当流はならの御門とよむ也、²此御門院にて奈良にましましける故也、¹陵も和州あり、¹或云、³ならの御門とは聖武也、³万葉集えらひ給へる事にまき

れたるにや、大方は聖武とのみ心えたり、¹聖武をならの御門と申は、奈良七代の中にも他ことなる御門にて、¹仏法をも興隆ましまし、東大寺等御建立ありしに、⁴とりわき如此称し奉り来る也、¹哥道又盛也、⁴万葉撰此御時也、¹奈良七代は元明より至光仁和銅三年和州平城にうつり給て桓武御時に至也、¹当流文武をならと号する事、元明之前一代なれば准して用る也、¹是一義也、¹又文武をならと用事、ふりにし事をならと号する理也、¹遠き事をは神代ならねとも神世といふたくひ也、¹当流用之、¹ならの御時ひろまりけるとあれば、¹聖武御時万葉撰られし時の事とみゆ、¹しかれとも当流不用之、¹此事口伝あり、⁶為家卿此事了見事、¹不用之、¹かのおほん時におほきみつの位、¹正三位也、¹柿本は姓也、¹人丸は文武の御師範として君臣合躰の哥聖也、¹非聖武時、¹故定家卿文武天皇と被記之也、¹龍田川の行幸の時、¹同心の哥つかうまつりし事等あり、¹人丸は持統より五代聖武御時までつかへし

と云、しかれとも為帝師、尤哥道盛にありし事は文武御宇也、¹ならの御門事を俊成卿古来風躰抄、聖武御事とあり、大仏つくり給御門と云、此事定家の心に相違せり、仍俊成卿作にてなきよし被申云、定家卿所存あるへし、およそ父子の心かはる事あり、俊は大やう定はねんころなる事ありき、¹猿沢池にて、わきもこかねくたれかみの哥を人丸のよみ給し事、万葉みえず、如何云

秋の夕龍田川に 文武の龍田川行幸時御哥也

春のあしたよしの

同行幸の時、人丸みむろの山に時雨ふるらしの哥を詠す、しかれとも、其哥の事をはいはずして吉野桜をかけり、其故は秋の夕立田川とかけるに對して、吉野山桜と出せり、文躰のかさり也、人丸哥にはなき事也、¹此哥の事切替ありと云、¹猶以文躰の對にかきたる心面白と云

又山のへの赤人、

ならの御門人丸赤人三人の事をいへり、¹赤人丸同時也、赤人はすこし末の人にや、¹万葉集の末人丸の哥なし、赤人の哥は末までみゆあやしくたへなるとは奇妙也、¹赤人の哥自然にしてしかも珍しく妙也、¹赤の作は自然にしてしかもめつらしき所あり、人丸のは環のはしなきかことしとそ

人丸はあか人かかみに

等同のよし也、当流用之、或説、人丸は赤人よりすこしうへなる心歎云、然而等同の義也、此批判を重いへるは文章のかさり也
たつた川 秋哥に注す
梅花 冬部にみえたり
ほのくくと 旅哥にあり
赤人春のくにすみれつみにと 野遊の心也、春のを愛する心にて、不慮何となく一夜ねたるよし也、²奇妙の作也

わかのうちらにしほみちくれは

方と瀉との兩説也

かたをなみ、瀉也、又方と用る説あり、当流方字を

用、(ミセケチ)*1其中に瀉の心もあるへし、方をなみとは、いつく

ともなくあしへへ鳴ゆくさま也、作意によるしと云

瀉をなみと云は、*2塩満て瀉のなくなる心也

此人々ををきて

ならの御門の御事にはあらず、人丸赤人兩人の外にも

といへり

これよりさきの哥を

さき不審、未決、定注云、さきとは古今集よりさき

といふ心也、万葉は撰集のはしめなる義也

此説口伝也

こゝにいにしへの事をも、ひとりふたり也き

*3遍昭黒主等六人の事也、人丸赤人などの比の人をい

ふにや云

しかあれとこれかれ、各すこしの徳失ある也

かの御時よりこのかた、

かの御時よりとあれば、万葉撰られし聖武御時よりと

いふにいたり、*1聖武よりは至延喜十六代百七十年也、

平城天皇よりと云説は十代百年にはあたれり、顕昭説

也、此時人丸あるへからず、*1当流は自文武至醍醐延木

五年十九代二百余年也、文躰大数をいへる斗也、*4序

の詞六人を批判するにわつかにひとりふたり也と書、*5

真名序にも纔二三人と書るかことし、又文躰のきよを

いたはるなるへし、冷泉家には継躰の次第を勘て十代

と用也、注別帯、

為家卿此事若失錯歟、定家卿の心と相違せり、貫

之は此道の聖人也、不可有失錯之義也、貫之か心文武

天皇御事を書くなるへし、*1尚有口伝云、

いにしへの事をも、

今此事をいふに

つかさ位たかき人をは、高位等の人の哥を批判斟酌あ

る心、殊勝之義也云

其外にちかき世に、万葉以後の人々也

僧正遍昭は哥のさまはえたれとも

すこし実なる処なしといへども、詞心とくのほりある

へきやうなる哥なるへし、後鳥羽院・定家に此六人の

事を御尋ありし中に、遍昭を挙し申されき、まことの

なからんにはと仰られしに、定家卿それを哥と申侍

る、と奏せられけりと云々、哥道の口実シツなるへしと云々

あさみとり はちすはの 前に注す

さが野にて馬よりおちて

哥心は秋部ニみえたり、こと書をみるに、かゝる時も

哥道を忘さる心、殊勝之理なり、哥には落馬の心はあ

るへからず

アリ羽ラ 在原のなりひらは

哥を深く案し給□□に、詞のたらぬ所ある也、つねの

余情よりもふかゝるへし、しほめる花と詞ニのすこした

らぬたとへ也、句残は心の余あるよし也、智者のたま

たまいふ事の心ふかくいひきらすして、残おほかるか

ことくなるへし

月やあらぬ、哥は前に聞、大かたはの哥も業平の

詠に殊執する哥也云々

文屋のやすひては、

詞のたくみに面白を、よききぬにたとへたり、心にす

こしいやしき処あるを、あき人にたとふる也

吹からに野への草木の 秋部ニハ秋の草木とあり、本

は野へとよめるなるへし

草深き霞の谷に 此哥詞ニたくみにして又余情ありと

云、此序に出したる哥は、ことく批判のことく

ならさるもあるへき也

うち山の僧ぎせんは

我菴はみやこのたつみ

人はいへともとあるへきを、いふ也とよめる、すこし

物のたかへるやうなり、はしめをはりたしかならぬ処

也、晴天之月、暁かた一点の雲のさへきるにたとへた

り、又云、此哥のさま、かすかにおほつかなき心を、

あかつき、月を雲まにみたるにたとふる也、両説其心

かよふへし

よめる哥おほく、一首なれともおほくきこえずと書る

文躰也

をのこまちは流也

なかれとはよむへからず、其流といふ心也、流とよむ

説あり、六人の中に小町は難なし、つよからぬは女の

哥なれはといへり

思つ、哥心前に注之

そとほりひめの哥 わかせこか

明也、哥のさまの支証に出せり

大伴のくるぬしは 姿はいやししく、心□□□しき也

思出て恋しき時は

人はしらすやといへる処、さまのいやしき也、恋部ニ

八人しるらめやとあらためて入たり

かみ山いさたちよりて

心は面白し、いさ立よりて見てゆかんといへる処、姿

のいやしき也、六人の失をいふに、何の哥を本として

いふとならば、人丸のを本として失を定也、人丸哥は

第一其心无限景気又殊勝也、詞つゝきとゝのほり建立

又たくみ也、環のことくにしてはしなし、故に本とす

るなるへし

この外の人々その名きこゆる野へに

前にいへる六人の比より以来の人也、六人の外も哥人

おほしといへとも、哥をよむとのみ思て教誡たる心を

しらぬ也、前にいまの世中色につき、といへるに当

れり

かゝるにいますへらきの

きの字、こゝにてすむへし、常はにこりても、御

門受禪より至延喜五年九ヶ年也寛平九年受禪ましく

き、前の詞古の代々の御門春の、其中に延喜

御時の心こもると注す、此段のさまにみえたり、かゝ

るにいまといへるは、当朝道をおこし給ふ心也

あまねきおほんうつくしみの波 つくは山

よろつの政をきこしめすいとま

1(1) こと(1)にいへるは此集を撰はるへきことをいふ記也、¹難

云、万機之余暇諸事のあまりとあり、然は哥は教誡の

はしにあらすや、如何、答云、哥道を必政とのみいふ

にあらす、政の助業也、政道無為の時にいたりては、

哥を教誡のはしとするに及へからざる也、行有余力則

以学文といふかことし、此問答一往之理也、序の心は、

君の万の事を捨ましまさぬ故に、歌道をも興給ふ義な

りと云。又云、哥は政の名也、哥と政と別□□□へ

からざる理也、哥は諸道の源也、詩は政の名也と

云かことし、さしあたりて行ふ政のみ政といふへき

にあらす、仁徳の心を政を行と云へし

古の事をも忘し 神代以来文武人丸等の道を忘しの心

也

ふりにし事をも 万葉をうけて撰集ある心也

いまもみそなはし 当代御覧のみならず後代までの義

也

延喜五年、奏覧の時ニハあらす、事のはしめをいへり

御書の所のあつかり

さきのかひのさうくはん、さつくわんとよむ也

万葉集いらぬ古き哥

此集万葉の哥の入たるあり、其故は家集をもて撰入

たるなるへし、其集の内万葉にも入たるあるなるへ

し、延喜比までは万葉にくはしからさりしにや、村上

御時、源順点を加しより世にも学けると云

みつからのをも

撰者四人の自哥事也、貫之哥はみつから撰入あらす、

みな勅定也

それか中に梅をかさすよりはしめて 以下此集の部立

のやう也

雪をみるにいたるまで 以上四季也

又つるかめにつけて 賀也

秋萩夏草をみて 恋なり

あふさか山に 離別、旅也

あるは春夏秋冬にもいらぬ 雑哥雑躰等種々部類事也

くさくさの

すへて千うた、千首、廿巻也

古今和歌集といふ

真名序曰統万葉集云、撰集の時は先集の号をかりな

つくる事あり、其義にや云、首尾して古今和云と

号せしなるへし、古今二字の心巻第一記す

^{*1}かくこのたひ、

次第云につもりて行末不絶のよし也、濫觴よりなれ

る心也

はまのまさこの、此集の千余首云のほれるよし也

いまはあすか川の、

世間の変化はあれとも、此集不変なるへき心也、聖

代貫之哥聖として合躰撰集のゆへなるへし、

さゝれ石の、

転変もなく次第増長して万代不窮之理也

それまぐら、臣等也、貫之か我等といへる詞也

ことは春花句少くして

詞句すくなきよしの卑下也、春花は詞縁也

むなしき名のみ秋のよのなかきを

はかなき名を行す多長くとめん事を難く也歎歎*3

かつは人のみよに

哥の心にとは、未練の身を卑下し、又此集を撰をく事

を道の心にはちたるよし也

たなひく雲の、

起居動静此事をよろこぶ也、聖代生合て撰此集事也

人丸なくなりたれと

なりんたれとよむ也、文王已没文不在于茲の心をも

て書り、

心は当代をほめたる心也、それも人丸の余慶余風なる

へし、人丸をなをさりにいふ心にあらず、すてに先師

柿本云

たとひ時うつり、

世の哀楽変化ありとも此哥の文字たえすあるへしと

也きしたふへき也(ミセケチ)*5

とくまればは

たのしひ悲行かふとも、此哥風とくまりなはの心也、

鳥の跡とは、此集にしるしをく処也

哥のさまをしり

哥道の花実等相具し、正風なる事等をしる人の事也

ことの心を、哥道意教のためなる理をえん人はと也

大空の月をみるかことくに

哥道は人の心のやみをてらす也、大空の月をみるたと

へ也、人よしたひみて和の道ある故也

古をあふきて、

天地未分以来^{*1}神^{*1}淺鳴尊等文武人丸よりの道をあふ

くへし、今と^{*2}□□□をいへり、延喜貫之の時を^{*3}こひさ

ら□やとなるへし、帝の師として^{*4}撰置処の集なればな

るへし、此詞古今の二字をもて書終る也

(補二)

九州大学文学部
国語学国文学研究室

蔵「古今和歌集聞書」

御師説抄出 | 文別 79

483頁上段9行 日本^テ天笠^ヲみれは^{フシ}葉^ニ似たる故^イ葦^ト芽^ト

云、芦^ノきささす心也、やまと哥と云^{コト}の葉とそ

なれりけるまては序^ノ中^ノ序也

492頁下段10行 そへ哥^トおなし

493頁下段1行 御師説素^ッ しるき心也

495頁上段8行 御師説なりんたり にはね也、一人丸集^ニ

も丹波をたにはとあり、難波^ト書てなんはトヨム

同いにしへの世々の 代々^ノ王、延喜のみかと程に

なきゆへ也

497頁上段13行 御師説くねる 弄、もてあそふ心也

497 頁下段 3 行 私是迄一度ノ分也

502 頁下段 2 行 御師説大かたは月をも 心も詞もたりた

るやうなれと、つもれはの詞夜とも年ともしれぬ也

8 御師説文屋ヤ 常ならは文屋オクといはんすれとも、ふみ

をみはねいへは也、文室ヤとも書也、いへの心也

(作)

11 御師説初春ソトヨム、初シヨ漢音也、初ソ吳音也

12 御師説近院コン、吳音也、キンハ漢音也、私まさすみ

有能ノ子也、文徳の孫也 (作)

御師説老子ラウ谷ヤやしなふトヨム

13 御師説爰許ニ不審アリ、鶯の哥ノあるに谷風の哥斗へ

たよりたるは、谷ニ鶯あるへ故歟、重(ヤ)而尋ぬへし

18 御師説こゝに春日の哥へたよりたるは、都は野への

哥、此野、春日野なるへし

20 「以上初日 廿首」 私古今集ヨリこゝまで廿首一

日分也、以上三日分也

21 御師説まとはと相通故也 (詞)

23 御師説春のきると当世タウセイよむ事いかゝ、躰なきゆへ也

25 私女房ヲせこと云

29 御師説遠近の哥、猿丸か哥也

30 私凡ヲウシトモヲウシトモ 二条家ニハヲウシトヨム (作)

31 私カヘルカリ帰雁トキ (詞)

32 御師説にはへト句をきりて、梅の花のあると思ひて

鶯の鳴と也

33 御師説あはれ これはあつはれ也

35 御師説兼輔哥ノみえたり、不審

43 御師説河を花と見てはなかるゝ陰をなと、今世はよ

ますはいかゝと也

49 御師説春しりそむるは、御代はしめの事也、長久の

心也

52 御師説心さしふかくそめてしの哥をは忠仁公のなれ

とも、よみ人しらすありてこゝに又あらはすは、題

しらすにたいして也、又前書にそめとのゝなとゝの

かれぬゆへ也、花をし見れば、そめとのを祝して也

- 53 御師説なききの院 山なきの事也 (詞)
- 57 御師説さくらめとに桜をもたせて也
- 60 御師説山への辺心なし
- 61 御師説暮春の哥にあらす、末のうるふをよめり、又末／＼の春もあくましきと也、人の心にあかれやはたとせぬと云心也
- 64 御師説おりてめのは、やすめ字也、おらめ也
- 74 御師説此奥の、山吹はあやなな咲その哥似たり
- 75 御師説そうく法し 元慶ケンケイの比ヒの人ヒト也 (作)
- 77 御師説残りなく散そは花をみたてゝの哥也、これはまたちらぬ花也、我もちりなんは花をわか方よりさそふ躰也、当世はよまれました風躰也
- 80 御師説典侍テンシよるかの朝臣ともあり、御つほねかたにもかみすけあり、尚侍シヤウ、内侍ナイシ、よる女房也かの朝臣、朝臣よるかとあらん事也、名の下の朝臣いかゝ (作)
- 81 御師説すかのは氏也、高世タカ (作)
- 83 御師説とく散と思ひもあへぬはやく散たると也
- 87 御師説風は心に任すへらなり、風は心にまかすらん也、任すへからすの心なれとも任すらんよき也、我はかへる程風か心任にちらさん也、わかこしは帰る心也、往来帰る心ある類也
- 89 御師説桜ちる木のしたの類也、桜ちるの哥此集になきは此哥有故歟
- 92 御師説春たては立春の心にてもくるしからす、立春には人の心かはる故也
- 100 御師説但鶯の残りおほき心も少はあらん歟
- 102 御師説前のちくさにはかはりたり、是は色／＼にみゆる也
- 104 御師説心さへにそうつりけるは、心さへの心也、けふそへになとあるも、けふさへに也、人もこそしれ、しらふすれ也
- 107 御師説典侍 春澄ハルズミノむすめ也、此前にあるも同名也、天子のわたなとの御座ある所歟 (作)

- 108 御師説わひしき 常のわひしき也、
- 115 御師説おんなのおほくとある故、道もさりあへぬと
よめり
- 116 御師説わかなと花と時分いかゝなれとも、こし物を
にていはれたり、山てら、いつれともなし
- 119 御師説枝は下枝の心也
- 121 御師説万やとにある桜のはなは今もかも松風はやし
土におつらん、ひつきやうは今もや咲匂らんの心也
- 122 御師説にほふは花の色のはへのあるをいへり、香さ
へとあれとも山吹の香いかゝ、これほと色はへあ
る間句はんと、こちよりすいしての心也、又にはほ
ぬはえもいはぬと云心也、色香を賞翫シヤウクワンしての哥な
るへし
- 124 御師説さへの字用立也
- 126 御師説はての[。]かもしにこる也、かなの心也
- 129 御師説水のまに／＼は、花をとめて来ての心も可然
也、さしつめていふはいかゝ
- 132 御師説いぬる女ことにやれ／＼と思ふ心也
- 135 御師説人丸正三位也、文武比人（左注）
- 139 御師説五月まつ山郭公は、四月、五月まつ山橋は五
月の事たるへし、口伝あるへし、但五月まつは五月
にまつと、に文字を入れて見て可然歟
- 143 御師説両説のうちはしめまされり、又はつ声とあれ
は、あみやう次第不同とみえたり
- 151 御師説惣別サウベツは今あらたまるを云也、今から山へかへ
るな也
- 152 御師説みくには性也、町ヲシナ女名也、慥シしれす（作）
御師説やよはやれ也、やゝの心也、よやのかへしや
也、私卜御意也、しかすかの、異音イコワン、さすかにかへ
る
- 155 御師説かれなくはかはらぬにと云也、かるゝはかは
る故也
- 156 御師説てにはの物に、のゝ字やかよふ也、やの心
なるへし

- 158 御師説時鳥の人を恋る事いかゞ、わか心に恋しく思ふ人を郭公のさつしなく歎と也
- 161 御師説またなかぬ心あるへし、待心也、前書あつる所これよき也
- 165 御師説人をたふらかす心也
- 169 御師説敏行は、富士丸か子也 (作)
- 173 御師説古来より七夕ノ事わか事よみならわしたり
- 174 御師説わかれをおしみての哥なるへし、此哥に舟なし、いかゞ
- 175 御師説七月の比紅葉あらん事不審也、唐楓橋ト云事アリ、紅葉橋しれぬ也
- 178 御師説よく聞て面白也、七夕ノ事をそはよりせうしに思て也
- 179 御師説七夕のことく一年二度つゝあひて、我は成ましき心あるへし
- 180 御師説願糸は糸のことくにねかひのすくあれかなの心歎、又七夕のことくに長く恋わたらん歎、迷
- 181 御師説待もこそすれ 待もこそしやうすれ也
- 184 御師説嫉は心をいたましむる故也、嫉の字下心を書てうれへとよむも心アリ
- 185 御師説わか身ひとつの嫉にはあらねとの心也、これも秋の下心を書てうれへとよむ旨用
- 188 御師説草葉のうへにねぬに露けきと也
- 189 御師説時はわかねと四時よくあひたり
- 190 御師説かんなりのつほなしつほ也、私ふしん (詞)
- 192 御師説良夜ヲ愛スト古文眞宝アリ、ねてあかすらんは、ねてあかす人があらんするかの心也
- 194 御師説昔の哥には鴈かね鴈斗の事なるを、これは音の聞ゆる也
- 195 御師説月のかつらはもみちせぬものなれとも、光のてりまさるは紅葉すらん也
- 195 御師説くらふすむ也

- 198 御師説色つくは花のことにあるましき也、花おちて
下葉もやう／＼色つく心なるへし
- 202 御師説訊トフラウ尋タツる心也、われをまつ歟といひてとふ
らはん也
- 207 御師説人のたよりを聞度トおもふ時分はめつらしか
らん也
- 213 御師説わかなくを鴈のなくにもたせて可然也
- 216 御師説右之説いかゝ、秋はきに対してゐて物思ひに
くたひれたる時に、鹿まで鳴たる也、此はねやう今
はならぬ也、なくらんは鹿のなくらんふの心なるへ
し、是故はねられたる歟、又鹿のなくらんは鹿や鳴
らんの心なるへき歟、やといへはいやしき故のとい
ひたるへし、秋はきにうらひれたる時分、鹿も山し
たにてなきこそするらめと推量スイリヤウしての心、一段珠チシ
重歟、萩のうらとうけたる也
- 217 御師説鹿かあちこちへ行故、殊を鹿かふみしたきて
しからみのやうにしたる也
- 218 御師説うらひれをれはの哥に同
- 222 御師説君子治ノハ國如烹ニルガ鮮魚ギョロ、ちいさきうをよきよ
くせんと思ひて、はらわたをとりてにれば、くたく
ることく也、ちいさきうををも其まゝにればくたけ
ぬ也、萩の露によそへて、天子の万民をよらせんと
おほしめせば、其内にあしき者有也
- 223 御師説わとよませんとてわを書たり
- 230 御師説朱雀院トヨムスザク(詞)
- 231 左のおほいまうちきみ。時平のおとこの事也 (作)
- 234 御師説あふことかたきをいはんとて天川トイいへり
御師説香はをみなへしになけれ歟。とも女メもたせてか
うはしき心也
- 235 御師説女の物はちする心也
- 238 御師説平貞文ノサダフミ好風ヨシカゼ子也 (作)
- 243 御師説袂ト袖トアリ、下句は上句を再尺サイしたれば、
袂ト袖トアリテくるしからず、少はいかゝ
- 246 御師説たはれん れんほの心

- 248 御師説次而なからに、わか述懐を申したる也
- 249 御師説山風を嵐と云説用ても可然歟、あし引の山と云かへに、あし曳ヒキのあらしとよみたるは山トもたせて也、九品ノ時下品ニ入、上品は詞ののひやかなるをいゝ故也
- 252 御師説しぬらんとあるは、霧たちてとアル故思ひやりてはねられたる歟、第五面白し
- 253 御師説かねてうつるふと云にて焮ヒキ入たる歟
- 255 御師説綾綺殿リツキデン 夫内裏タイダイリニアル御殿也（詞） 勝臣カチラン 朝臣をあをんトモヨム、人の名の時如此シ、（作）
- 256 御師説をとほ、清水寺のにてはあほす、石山と前書ニあれば也、今ならば木葉とよむへき遠き所を見てなれば梢面白シ、風の音とうけたると云説不用之
- 258 御師説露をは露のまゝにて置いて鴈の涙か野へをそめたる歟也
- 261 御師説笠とうけて也
- 262 御師説不ズ敢アヘあらず、堪タユルの字なり、萩ト葛トハ青ヲ賞シヤウウク翫ハ
- 263 御師説笠をとるとうけたり
- 267 御師説は、そはよく紅葉せぬ故也、うすき深きを対して也
- 269 御師説雲客ウンカクへ我は入たる間、星と対坐タイザする心なるへし、左の小書にてしるし、菊のあまたの心也
- 271 御師説かやうの哥、哥合にはまけニなる也、同字三ツあれば也
- 273 御師説仙宮センキウ 仙郷センキヤウ 仙室センシツなと、同なるへし（詞）
- 御師説へにけんは、露の間に千とせをも経たらん間行末猶々久しからんの心なるへし
- 282 御師説関雄セキヲ 真元サネモトの子也（作）
- 289 御師説山へは紅葉ニ心付て也
- 291 御師説かつちるは、糸のよはく成故ほころふる心也、山のにしきと斗いひて紅葉をもたせたる、当世はいかゝ、にしきをとあらん所をにしきのとある、

- 面白自然の心也
- 292 御師説 今ならば此哥冬にならん也
- 295 御師説 くらふ山
- 297 御師説 朱買臣シユバイジンか古事より也
- 298 御師説 此哥ニちるニあるはへいハクモフレチルヤウミ
ユル故なるへし、ぬさはへいハクノコトクニあさい
となとを五色ニそめてする也、大麻ヌサ書
- 299 御師説 心ちきらふ事いか
- 300 御師説 紅葉をふくみて也
- 302 御師説 是則延喜比人ノ也（作）
- 305 御師説 吹風と谷の水の哥の類也
- 307 御師説 見てをのをはやすめ字也、御屏風
御師説 藤衣これはいやしき衣也、田夫デシツブの哥ニなして
よければわか事ニしてよめるはあしき也
- 313 御師説 風のやとりはたれがしるの類也
- 314 御師説 惣サウジテ而マヘ前書ヘガキト云はあしき也、詞書と云へし、但
ませでいひて可然也（ハカシメテ）
- 316 御師説 映ネ アキラカ、ウツルトモヨム
- 317 御師説 此哥大和国中にて思ひやりたるへし
- 319 御師説 当時ならば春ニならん也
- 320 御師説 十月わたり水がさます事いか、春ニ成へけれ
とも紅葉ニなかるニひかれて也、右両首当時いか
- 321 御師説 ひとひも雪のとよまん事也、ふかき雪のふる
とはいか
- 324 御師説 必とすることなかれの引事いか
- 325 御師説 ふるさとならとアレ共、あなちならにてよ
めると見へからず、前書ニあててはならの京と見へ
し、此哥は霜月末つかたの哥なるへし
- 326 御師説 興風哥也
- 328 御師説 忠岑哥ニ取てもよき哥也、迷惑メイワクしてすむニあら
す、山の感カンを面白おもひてすむ也
- 329 御師説 なれやはなるや也、わか事になして、はねて
はいか、雪のふれるをみてと詞書ニあれば、人の
事をさつしてよめるなるへし、歌の自面ジメンにて見へし

- 333 御師説ふりしけふりつけ也、しく布の字をも書、
又鋪シツの字も書也、深雪なれとも春は見ましき故也
334 御師説梅花さくなとあらは親句シツクなるへし、あなきり
あひは、霧の事也、是はうすくもりてふる也
335 御師説花の色は霞にこめてみせすとも類也、香を
たに、このをの字にて哥のからよき也、梅花に生れ
つきたる香をたに匂へ也
336 御師説此の文字、かにかよふ、君か代の類也
338 御師説ものへ物もうての事也、いつくにても(詞)
339 御師説つゝの字よくたちたり、なることに
340 御師説我身クハシ観して也、わかみ不変フヘンへんくくらす
すを也、貞松テイセウハアラハル彰シウ年寒ニ、此引事可然也
341 御師説親句シツク也、過去クワコ、現在ゲンザイ、未来ミライアリ、歳暮の哥に
心かなふ也、夏の時をよまれぬ歌也
342 御師説行年のおしくもあるかとあらんを、かなと置ツキ
たるは歎ナゲキたるゆへ也
343 御師説やちよのやはいよくなるへき歎、わが君は
344 わが朝などの心なるへし
344 御師説千とせはかきりもなき心に、こゝにては用て
可然と也、わたつうみは四海を君子シおさめ給ふに
よそへて也
345 御師説八千代となくは万世マンシよはふ心也、此やちよ、
八千世也、さして
346 御師説わかよはひといいひて、思ひ出にせよと下知し
て、いかゝ、但よはひよくきけなと下知なるへ
し、わかよはひよひかけて也
347 御師説遍昭を祝して被遊たる也、天子御身にて君、
被遊たるは、在位サイキノクシニウツクノ君臣有徳、君臣と云事アリ、その
心なるへし、俗の時も僧に成ても、遍昭はよきもの
なれば也
348 御師説御をはうは也(詞)
350 御師説をは、是は常のをは、めいのをは也(詞)
351 御師説日をおほえすくらすは祝義ナル故、賀の哥な
るへし

- 354 御師説 行住座臥ノ心なり
- 355 御師説 しけはる 業平ノ子也、しけはるゝときはる、
同哥よみたるへし (作)
- 357 御師説 是ヨリ賀のうち四季を分たり、そせい俗の時
なるへし
- 358 御師説 此哥賀入はいうくとしたる故なるへし
- 360 御師説 松風ニ千代をもたせて也
- 361 御師説 霧も物をそむる故也、色まさるにて賀の哥歟
- 362 枝かはす与所の紅葉の埋れて秋はまれなる山の時
は木
- 363 御師説 此内ニ賀あはぬ哥ともあるは、賀の時は屏風
を給はる物ゆへ屏風の絵あはせて斗よめる歟
- 374 御師説 あふ坂にて人をわかれ あちよりわかるゝ故
人とアリ (詞)
- 376 御師説 寵 女房の名なり (作)
- 377 御師説 今心みよ 試の心なるへし、心見あるまし
き也
- 378 御師説 心をつけてやると也、五躰はかりわかると人
のみん也
- 384 御師説 あふ坂のきは音羽なれば也
- 385 御師説 帰朝の舟へ行わかれおしみてなり
- 388 御師説 山さきより神なひのつきよく尋ぬへし、山
さきのしもに神なひある歟 (詞)
- 392 御師説 みえなゝんはみえよなり、惣別旅には川をは
はやく渡り、山をは分残す物なり
- 393 御師説 散のまかひに家路わすれてなどの心なるへし
- 394 御師説 みたれなんは下知なり
- 395 御師説 これもなんは下知也
- 397 御師説 都の内にて別るをも、座中にて別るをも、離
別の心ニ用也
- 398 御師説 かねみ 王孫也
- 404 御師説 あか 水の心もアリ
- 408 御師説 けふみるとうけて也、いつみ川、きつ川也
- 415 御師説 心ほそきなと貫之似あはぬ也、下輩ノ人も

- よまん也
- 416 御師説旅の字ニあらず、度の字也
- 418 御師説いひけらくいへらく也 (詞)
- 421 御師説衲衣ノウエは出家ノ衣の事也、あけるは十まんの心也、紅葉アヅコウの結構ケツコウなるに十まんの神なれば、わか袖をきりて手向テムカしたりとも神のかへさん也、あける、愛する心もアリ、あけるをあくとばかり心得てはあし、
- 426 御師説むめムメうめとあるは、むうとひく故也
- 430 御師説雲出クモ腸中チヤウチウアキラカナル明ノ心也、やとりきたためぬといはんとての序哥也
- 435 御師説くたんをくたに、にはね也 (詞)
- 441 御師説しをに にはね也 (詞)
- 442 御師説野はなければやは、野かなきやらん也、花をふむ鳥を打はらはん也 したく
- 444 御師説にはね (詞)
- 448 御師説仏法也、人間ニ此ありさまと也
- 451 御師説わひしらに わひしさに也、らのかへし、さ也
- 453 御師説物名ニ此哥入、ふしん也、わらひと躰ある故也
- 454 御師説人にみえつゝ みえなから也、つゝとまり大事也、きのめのととは紀伊キイト云人のめのと歟
- 455 御師説わか心ニわれときやうくんの心也、物からは物なから也
- 456 御師説今朝からこと 別ニ也
- 457 私かねみ 名也
- 458 私あほ 氏也 (作)
- 463 御師説一鏡晴飛玉イツキヤウハレトシテタマアリヒカリ有華、実やはなるへし
- 464 御師説幾斗書イツト書いていくそはくトヨム、いくそはくわかうしとかは思ひつらふ也
- 468 私聖宝シヤウホウ (作)
- 御師説鼻中ハナノナカと云説いかゝ
- 469 御師説上古は序哥也、当世はまれ也

- 470 御師説 暁のなからましかはの哥にもおき、書て、よし是は序哥なから当世もよむべき也、序の分やくにたつ所あれば也
- 471 御師説 波のさはくに心のさはくをもたせ也
- 474 御師説 心を置にあらす
- 476 御師説 北野の馬場にてはあはぬ也 (詞)
- 478 御師説 今は中の申の日也 (詞)
- 480 御師説 君はさてもと云心なるへし
御師説 思ひに火をもたせたるも可然歎、つくるあれは也
- 486 御師説 ぬとはぬる也 妬 ネタク
- 488 御師説 行かたもなきは空に思ひのみちくたる故、思ひのさきへとゝかぬ心也
- 496 御師説 わか思ひのふかきを紅によそへて也
- 499 御師説 君には、君をの心也 わかことや
- 505 御師説 自然にあらはれん也、忍恋也、又らめやト云詞 ベシギンミス
可吟味
- 508 御師説 いてわれを、いてさらはたと云心也、ゆたのたゆた、たゆたふ也、ゆたはゆり也、ゆらるゝ也、たゆたはたゆたふ也
- 520 御師説 今の世をそのまゝ置て、末の世になれかなの心也、昔人恋たりしと思はん也、来世にあらす
- 529 御師説 鶉のなき事いかゝ
- 530 御師説 かゝり火は、かけといはん枕詞也
- 532 御師説 おきへにも沖のほどり也
- 533 御師説 しらすやは、あちかしらすや也、又しらなんだの心也
- 534 御師説 煙のたえぬを恋のたえぬによそへて也
- 540 御師説 心かへ物にもかは哉也、かをすむ説いかゝ、我人の心かへ也、がたおもひなればくるしきと也
- 549 御師説 ひとめもる人目をまもりて忍ぶわれにてはなき程に恋ん也
- 550 御師説 かてには、やかて也

- 551 御師説しのきは、下までしたひてふる心也、恋ふる
と云事をいひてみん、人のなひく事あらん也
- 552 御師説心より夢をさますましきと云説いかゝ、たゝ
ほかなきをいはんとて歎、尚御尋ナラあらんと也
- 554 御師説引古事面白シ、いと尤の心もあり
- 556 御師説しもつつも寺。(詞)
- 557 御師説哀傷アインヤウの哥カながら、其次而ニ小町か所への恋慕レンボ
なるへし、みぬめはちかひめの心也、人をみぬため
の心也
- 558 御師説法事を聞て、われは滝のごとくなる涙なる
に、そなたのはをろかなると也、下心、恋の心也
- 558 御師説夢ニ六夢あり、夢の一字のさんよくあたれり
- 561 御師説火をとる虫になしても相違なき也
- 563 御師説しらぬひのつくしの綿はきたれ共妹としねゝ
はさむくそ有ける、此哥かなへり
- 569 御師説仏道ニいらんと思へとも、子などあれば捨ぬ
心あるへし、観念カンネン也
- 571 御師説たましゐあちこちへありけは、いきかひなき
心也、此見やう可然也
- 572 御師説涙にてもゆるをけす心也、少いひたらす
- 573 御師説さはく所は氷らぬ故也
- 574 御師説夢にかよはゝ露あるましきか、夢路にも露あ
りと也
- 576 御師説しほら
- 577 御師説忍恋の心也、五月雨なとゝあらはいかゝ
- 578 御師説時そともなく、とつけもなくなどの心也、夜
たゝはよるゝの心也、何をうしとか夜たゝなくら
んは、さはかしき心ニ用、是は別也
- 579 御師説序哥也
- 581 御師説よもすから思ひにもゆる蜚ヒこぞ鳴虫よりも哀
也けれ、此心面白、後ノ哥也
- 584 御師説すけてもなく我斗の心也、ひとりしてと云
詞いかゝ、二人して物おもふ事なければ也、今なら
はたゝ独とよまん也

- 585 御師説初ノ説よき也
- 586 御師説 焮風楽の心ニ用さる可然也、但かきなす琴を
焮風楽ニ引なすといはよかるへし、かるらんある
は、人の事のやうにていか、本来恋慕レシホの心ニ今一
きはさそはれて恋しき心なるへし
- 589 私物のたうひ。の給也 (詞)
- 591 御師説 冬川
- 592 私根さし
- 593 御師説 かけてといはんとての序哥也
- 594 御師説 なか／＼といはんとて中山トいへり
- 610 御師説 もとすゑは、ひつきやうと云心也
- 612 御師説 佗ぬれは常にゆゆしきの心也
- 614 御師説 なんは下知也
- 616 御師説 物らいひては、物なと也、物こしの説いか
(詞)
- 619 御師説 あかさりし袖の中にや入にけんの哥、こゝに
叶へり
- 620 御師説 見まくほしきと思ふ心にいさなはれたる也
- 628 御師説 あひ見ての名さへあらんに、なき名と也、人
の名をとると云は聞たるか、なき名とると云事はき
かぬと也
- 630 御師説 無しつをいひはるけんと也
- 637 御師説 朗ヲウ 又廓ホガラカ
ホガラカ クハク
- 638 御師説 朝臣とは四品まで書、それよりうへをは卿と
書
- 640 御師説 寵 女房也 (作)
- 641 御師説 不如帰と鳴ゆへ歟、かへらんにはしかしとい
さめたる心あらん也
- 642 御師説 此来しは帰る心也、往來に同し
- 645 御師説 せんかたなき也 (詞)
- 662 御師説 前書にもたせて也 (作)
- 662 御師説 水鳥の寒き池のそこをくゝるに、わか恋をよ
そへてなり
- 665 御師説 寄ヨルを夜にかねてなり

- 669 御師説 わか名もみなとは、湊に舟をかけたる間はあらはれぬ心也、はやうちあらはれんの心なるへし、又一説、みる事もなき間湊ミナトを引きりていつくへもゆかんなり、此説面白
- 674 御師説 事なしふ、む両説事なし也、事なしにいふともしるしあらし也
- 676 御師説 ねし物をすむ也
- 677 御師説 らん、面白也、向後の心也
- 678 御師説 相と逢の字也
- 680 御師説 君といへは、わか思ふ人の事をきけは也
- 681 御師説 まほにみゆるやうには夢中にはみえましき也
- 683 御師説 みるめといはんための序也、あくの心なれとも、それにてはいか、チウマン充満の心也
- 684 御師説 一日見されは三月のことしの心もあるへし
- 685 御師説 みる物からや、みぬ物故こひしき、見てゐるにも恋しきト也
- 694 御師説 風つらきもとあらの小萩、右を本哥として歟
- 695 御師説 若女を見ての哥なるへし
- 696 御師説 何事もおもはぬ也、こそととまるは跡に残る詞也、こそ思へ也
- 698 御師説 こひしとはたか名付たる、しぬるとはかりいはん物をと也、又一説、こひしといはずにしぬると斗いはん也
- 700 御師説 一目見て近チカまさりするゆへの哥也
- 701 御師説 さけられましきの心也
- 704 御師説 里人は国民など云心世の人と云心也
- 706 御師説 ありきす、ありきする也 (詞)
- 御師説 おほぬさは、へいはくとちかひたり、ぬさはちいさき也、神前にたてゝをく物也
- 710 御師説 夜離ヨカレ
- 711 御師説 色ことは、別して也
- 713 御師説 貞心テイシンなる心也、おとこなどをよく思ひつめたる哥也
- 724 御師説 左大臣 ヒタリノオホイマウチキミ (作)

- 726 御師説らめと。心し焔は、わか心也
- 727 御師説うらみんはあまのよせ也、われほとかなき
間、恨られましき也
- 729 御師説心色ばなき故也
- 731 御師説是は草なるへし、雨のふる時はいとゆふなき
也
- 733 御師説わたつみとあれにし 海中は波あらき故、如
此つくる也
- 735 御師説思ひ出て 別而おもひ出て也、序哥也、鳴て
わたるはその人のあたりへ行ての心也
- 736 よるか (作)
- 737 御師説名哥なれば、作者をあらはす
- 739 御師説たなはし
- 740 御師説あふみのすけとある故、あふ坂とをけり
- 743 御師説かたみかはは、かたみにてなき物をと也
- 748 御師説おもひしか。かもか也
- 749 御師説わたるとなしはあわぬ心也
- 750 御師説わかみをわれと思ふ人ほしき也、同腹中なら
はうき事を思ひしらん也
- 754 御師説同じやうなる人あれば忘れんひけ也
- 756 御師説人に逢たるあるましき也、相応したる也
- 761 御師説われそかすかくは、われかかきつきたる也
百羽かき
- 764 御師説あさきをいはんとて山の井を取出せり
- 768 私けんけい (作)
- 769 御師説軒のつまの事也、あそひつまなど云は草にか
よふ也
- 770 御師説桐の葉もふみわけは、これをとりてか
- 773 御師説我さかにの頼をかけさする也、我をたの
まする也
- 776 御師説住よしのきしを田にほり、此哥叶へり
- 780 御師説とふらひきませとアレトモ、こましき間待ま
しき也
- 781 御師説のとまりは、かみへかへるやうよめはくる

- しからすと也、人のこゝろのうつりも行歟とかへる也、又上五文字へもかへる事ことによりてあり
- 785 御師説 雨なくてふるとはいかゝなれ共、空はむなしき也、むなしく程を^ワ経るなるへし
- 790 御師説 やけたるちは、たゝかれたる心也 (詞)
- 793 御師説 なくはこそは、ときくは音信^{インシン}アルト也
- 795 御師説 青花の事也
- 799 御師説 人のかるゝトモ、又花の咲ことく、時分^ワ以またん也
- 805 御師説 いとなかるらんは尤也、又いとまなきをも
- 808 私いなは (作)
- 御師説 人恋らるゝ事なきに、ひものしらてとくると也
- 811 御師説 きかくはきかう也、くはうにかよへは也、絶果^{タク}たる中也、そちはよく我宿を見知たる間、せめてそれをたにおほしめす事と人のきくに、な被仰そ也
- 815 御師説 かはうたかひ也
- 816 御師説 わか身こす涙とうけたり、涙を持て也
- 818 御師説 はしめはまさこをかそへてなりともなかくと思ひしか、今は忘^{ワス}らるゝと也、わするゝは、わすらるゝ也
- 820 御師説 もみつる
- 821 御師説 秋風の吹とふきぬるは、人のわれあきたる也
- 822 御師説 たのみに田をもたせ、みに身をもたせて也、但身の字如何、実の字歟
- 824 御師説 よそにそきしと句をきりて見へし、焮といへは焮なれとも、秋と斗と思ひしと也
- 827 御師説 なかれては長くなり
- 828 御師説 名所によする恋などの心也、夫婦のかたらひは万物生するはしめなれば、恋のはてに此哥^{ツキ}を置たる也、大海も山の一滴^{イツテキ}よりおこり、夫婦のかたらひより万物おこれは也、二冊の注よし

- 831 御師説これは土葬^ニしたる人也、それゆへ煙たてといへり、煙を見てなくさめん^ニ也、一説、おもひ出るおりたく柴の心にかたみ^ニ見度の心も有
- 833 御師説うつせみの世は、天地の間の事空虚^{ナレハ}なれば也
- 834 御師説空^{クウ}仮^ケ中^{チュウ}すかたをあらはすはかりものなれば、仮^ケあたれり、中は法生^{ホツシヤウ}の所をさして也、本来は皆夢也、あらはれたるもの皆夢也
- 837 御師説閑院女房也 (作)
- 839 御師説一冊ノ注よし
- 842 御師説うき世中をはふかく心を付て見へし、人のしぬるを見て観念也
- 843 御師説これとはふらひたる人の涙也、とひたる人の袖が雲やらん、わか袖雨とふると也、とふ人の心也
- 845 御師説しつくはしつみうかふ也、又ひたる心も有、花の水にしつみたるやうに、たしかに君をみぬ故也
- 847 御師説かうふりたまはるは叙^{チヨシヤク}爵^ノの事なるへし
- 854 御師説これたかのおほせにて、ちゝのある時によめ
- 857 御師説いくはく久しき也 (詞)
- 858 御師説二冊ノ注よし
- 859 御師説やまひにわつらふは、やまひは躰^{タイ}、わつらふは用也 (詞)
- 862 御師説なく涙雨とは愁傷^{シウシヤウ}の哥也、輪廻^{リンエ}也、是は哀傷^{アハシ}の巻軸^{マキヂク}をくは、人間のありさまかりそめの行かひのことくと也、こゝは皆辞^ジ世^セ也
- 863 御師説雜^{ソウ}哥^カ上^ノ主人と云は五躰^{ソウカトモ}のうちにても心也、一滴の露にて万物生する故、巻頭に置たる也、わかうへは、身上の事也
- 864 御師説序哥也
- 865 御師説袂^{タビ}ゆたかには、袂を大キ^ニたゝんを也
- 866 御師説限^{カギリ}なきは賞^{シヤウ}翫^{クワン}の心也
- 869 御師説袍^{ハコ}は、あやをよる時はそめぬ也、官^{クワン}のあかる程^{ハジメ}こき紫になる物也、そめぬとてもやかて紫にならんト也 近^{キン}院

- 874 御師説 きこえに おろしといひける也 (詞)
- 御師説 すたれに玉をさける故也
- 876 御師説 かしたる人をうつり香になして也、又蟬のは
のうすきよき衣なるへし
- 877 御師説 ある哉は、待くたひれての哉也
- 880 御師説 朋友ホウユウの事也、そちか方々へありく故、こちへ
うときと也
- 881 御師説 貫之哥にはいかく、古今のうちにも、よきは
よく見、あしきをはあしくみる事、秘説也
- 882 御師説 みおは、歩兵ホヘイの歩也 水歩ミツボ
- 885 御師説 あやまちは、あしき事有とてうへよりたより
あるへし 齋院サイエン (詞)
- 御師説 前書にあはせては、母は勅チヨクかなれとも齋
院はくるしからぬ事也
- 886 御師説 かれ山をから山と云心也
- 888 御師説 四河ガニツ入海カイ同一カン甘味、唐カラ名川メイセンあり、又
にこりたる川モアアレトモ、それ海へ入ては同ト也
- 891 御師説 夜くたちも、夜の更てかたふく心也
- 892 御師説 おほあらぎの 又すみでも
- 898 御師説 年は敏也、はやき心也、としの名をとしと付
たるは、とまらぬ物ゆへと也、われはつれなくなか
らへたるなり
- 901 御師説 おやのいのちをちよもとなくく人の子のため
にと云心なり
- 902 御師説 廻カエル字ノ心也、雪をかへすと云も雪をめくら
す心なり
- 904 御師説 うらの心、橋ハシは人をわたす物なれば也、物の
先達センダツなるものは年よりてよき故也
- 910 御師説 わたつりみ
- 911 御師説 海童子カイトウシ
- 912 御師説 しはく、数ノ字をも書
- 913 御師説 あま衣を雨とつけたると云説いかく、但あま
衣は養シヨウとつゞけんため也
- 917 御師説 長居のはまと云あるゆへ歟

- 921 御師説 波のをすけては、波を緒ツにして也
- 923 御師説 詞たらぬ哥也
- 924 御師説 なれや 捨スや也
- 930 御師説 女房のさふらひ たいはん所ノかみニアリ
(作)
- 932 御師説 音の聞えぬは絵なれば也
- 932 御師説 いねをこくと云説あれともいかム
- 936 御師説 よき事なければうけれども、さありとてもそ
むかれぬ世ト也、事しあれば先なけかれぬ、あなう
世中なれ共、そむかれぬとかへして見へし、心をか
へす也、事しあれば、事わさ也
- 937 御師説 思ひの晴ぬ心也
- 939 御師説 あはれば、わか心ニあひたる愛アイする心也
- 944 御師説 閑カン居レ食シ不ズ足ラ官ニ居ル危キ心也
- 949 御師説 わか心中を卯花のあらはす也
- 952 御師説 はかほとにこる時は下ノは捨スて見へし
- 957 御師説 ふしも世も竹のえん也
- 958 御師説 葉は竹にすかりて也
- 960 御師説 とゝめあへすむへもとはいはれけりの類
也、うき事をは世と名付たると也、宗ソウ砌セノ秘説ニ、
るらんはうたかひにも又儀キ定テしたるにも用ト也、御
師説、私ワタシ、るらんは、むはるニかよふ故、たトかな
しきかるの心なるへし
- 961 御師説 真使副使シンスフス
- 963 御師説 とけて、官をはかるト事也 (詞)
- 966 御師説 つくはねのは、天子ニよそへて也、つくは山
のかけよりもしけしの心也
- 967 御師説 時めきし人のおとるへたる也、友は時に一度
あひしか、我はつるニよるこひもなかりしと也
(詞)
- 972 御師説 狩の心も少はあるへし
- 973 御師説 おうなニおんなニ同ニ (左注)
- 975 御師説 てへのとまりの哥、大和物語にもアリ、今と
句をきりてさらにと心得へし

978 御師説雪のことくつもるノ詞は、むねをか詞也

983 御師説しか 専也 モツハラ

984 御師説なれやは捨や也、宿なれはなどの心也

985 御師説見るなへに、みるから也、見るゆへ也、有待 ウタイ

無待 ムタイ

989 御師説風はいき也、いきは風にも火にもなる也

990 御師説有為ウキ転変ノ心アリ アヘン

991 御師説わか所はあれたる間、友のもと床敷心也

992 御師説君子ノ交淡マシハラアハフ如シ水、小人ノ交アマフ甘シテ如シ

酣 アマサケノ

993 御師説はう官 クワン 公家よりの遣唐ゲンタクは大使ダイシと云、禅家 ゼンケ

よりノヲ真使シンスと云、はう官は四人遣唐使ケンタクウシニそふなり

(詞)

994 御師説おきつしら波は、心のさはく心ニ用歟、左書

にて注しるゝ也

995 御師説ゆふをつけたるをも、又尾ヲのなかきをゆふの

ことくに見ても可然也

998 御師説かねてあけんと思ひし哥に又そへて也 (詞)

御師説つかなん つけよ也

1000 御師説身をはやは、昔のやうにはやくなしたき也、

はやは早也

「古今 十九 雜躰」 御師説伊駒山とふひかくま

に、混本也、雜躰は雜の哥ニ交心アリ、長哥は、と

め所ニ五文字あらん所ニ七文字を置也

1001 「かくなわに」 御師説かくなわ ねぬなはのたく

ひ也

「人しりぬへみ」 御師説へし也

「すみそめの」 御師説すみそめの夕といへり

「せんすへなみに」 御師説又せんかたなき心にも

用

「よそにも人に」 御師説よ所にも人にあはんと思

へはにて恋成也

1002 御師説此哥は神ヨリはしめて、四季キをよみ、次第キを

をわけて、古今集の部分ブツのことく貫之よめり (詞)

「思みたれて」 御師説 またら はんくにかすみ

のたちたる也

「やちくさの」 御師説 やちくさ かすをあけてさ

まくの事也

1003 「ほこらしき」 御師説 ほこらしき 心よき也

「とのへもる身の」 御師説 とのへもる身 天子を

北面にしてなればひたりあたれり

「おさくしくも」 御師説 おさくしくも おと

なしくはなき也、下官なれば也、わらは天上して後

は外衛に成たれば也、それをこゝのかさねいへり

「やよければ」 御師説 いやよくの心もあり、いつ

ゝのむつ 宮つかへする事、卅年と心得て可然也

1006 「われらか中の」 御師説 われらか中 つかへ申人

に皆時雨ふるト也、主人はてたる故也 ひとく

「初鴈の」 御師説 又鴈のたつにもえんあり

「旋頭歌」 御師説 旋

1007 御師説 われそのそをのけてもいはるゝを、かしら

にならふといへり、それをかへるといへり

「誹諧歌」 御師説 誹といふは、よき人のうへも

あしき人のうへも、先わる口云心也、真正に物を

いはぬをそしるいへり、先ひほうして後に、よき

事に成ことく、誹諧はされ事のやういひて、まこ

との道に引いるゝ也

1014 御師説 勿論七夕ノ事也

1018 御師説 詞は誹諧めかねと、躰はいかい也

1024 御師説 たてれをれともは、かくしてをれとも也

1027 御師説 おほしてふは、われをおほしめすといふ也、

此哥の心は、中臈なる者か上臈思ひをかくるをう

れはしく思ふことく、又そうつ下らうなる者か思

ひかくるを、そうつもうれはしくおもはん也

1028 御師説 ふしのねのならぬは、をよひなき心也、わか

心をわれと下知したる也

1030 御師説 いかなり共あはんと思ひ置て也

1033 御師説 唯

- 1034 御師説なそといひてそと又ある、ふしん、なそわか
恋のかひよとそは、鹿の如此なきてとをりたるは
かり見へし
- 1037 御師説ことならば 如此ならば、はしめよりいやと
いはて、玉たすきのことくかけて置也
- 1040 御師説我はかりを思ふとあらは、さやうあらんを、
大ぬさのことくあちこちへ人の手にふるト也
- 1044 御師説あくをさせは花おつる也
- 1045 御師説いとまなとをやりて、打捨たる心也
- 1047 御師説一間にぬる、よき也、夏は一人ねてもくるし
からぬか、冬さゝのさやくにひとりねかねての哥
也、やもめの哥なるへし
- 1050 御師説みてこそ
- 1051 御師説序にては、作、こゝにては、尽也
- 1052 御師説よけくは、よくはなき也
- 1054 御師説くそ(作)
- 1056 御師説つえをつきて山をありくたとへての恋哥也
- 1060 御師説いひしらすは、いはれぬ心也
- 1062 御師説わか事なる間、らんトはいかゝ、人の事歟
- 1065 私心はきえぬは金剛ノ正躰也
- 1068 御師説世上の落着はあさきぬのことく也、又木の
もとことは終行、心もあるへし
- 「大哥所御哥」 私オホンウタ
- 「おほなほひのうた」 御師説おほなほひを、うや
まふ故、御ノ字入たるへし、おほなほひ、神の名と
心得たるよし
- 1075 御師説霜は暁の一天の陽気をうけてふる物也、きね
か神徳にてさかへんとこちより云也
- 1077 私遼遠は、はるかに遠き心也
- 1079 私紅塵 あつきちり也
- 1082 御師説悠基かたの哥、主紀かたの哥とてあり、悠基
は左、主紀は右也、大嘗会ノ時、国々、左つく右
つくといひて、其国よりけきやうする也(左注)
- 1086 私今上(左注)

1100 御師説賀茂は山城なれば如此歟

「墨滅哥」 私以テ墨ヲ 墨ニテケンタル分ヲコ、ニ

アツメテ書たる也

1101 御師説時鳥の下ニアリ、空蟬のカミニアリといへる

は、物名の所ニ時鳥とうつせみの哥の間ニ此哥けして

ありし也、墨けしは定家の筆也

1105 私あはたつ あをくたつ心

付

掲出本文ノ許ニ付シタ(詞)・(作)・(左注)ハ当該

歌注ノ詞書・作者・左注ノ注文ヲ示スモノデアル。